

児王

内ヶ磯窯跡 2

福智山ダム建設に伴う福岡県直方市大字頓野所在近世窯跡の調査

福岡県文化財調査報告書 第170集

2002

福岡県教育委員会

うちがそかまと

内ヶ磯窯跡 2

福智山ダム建設に伴う福岡県直方市大字頓野所在近世窯跡の調査

福岡県文化財調査報告書 第170集



内ヶ磯窯跡から福智山を望む



内ヶ磯窯跡全景



西物原土壤 5 の粘土堆積状況



西物原土壤 9 の粘土堆積状況



西物原出土遺物（瓶）



西物原出土遺物（結文形鉢）

序

本書は県営福智山ダム建設に係り福岡県教育委員会が発掘調査を実施した直方市大字頓野字二ノ瀬所在の内ヶ磯窯跡の報告書です。発掘調査は平成7年度から11年度にかけて実施しましたが、出土した遺物の量が膨大なこともあります、報告書は3ヵ年に分けて発行することとなりました。本書はその第2冊目にあたります。

内ヶ磯窯は江戸時代の初頭、慶長19年（1614年）から寛永元年（1624年）にかけて操業されたと伝わる高取焼の登り窯です。高取焼は福岡県を代表する陶器の一つであります。中でも内ヶ磯窯で焼かれた陶器は古高取と呼ばれ、初期の作風を顕著に表すものであり、高取焼の歴史を語る上でなくてはならない存在とされています。

今回報告するのは内ヶ磯窯の西側物原部分に当たります。作業場をはじめとする遺構が検出され、当時どのような環境で製陶がなされていたかを考える多くの資料が提供されました。出土した陶器は多種多様であり、当時の文化を反映した特長が色濃く現れているものであります。今後これらの成果は歴史学・考古学・美術史学など多くの方面への貴重な資料になると思われます。

内ヶ磯窯は福智山ダムの湖底に水没する運命にありますが、今回の発掘調査によって得られた成果は永く活用されることを願うものであり、この報告書を通して生涯学習への活用、学術的侧面の深化、文化財愛護思想の普及に寄与することとなれば幸いに存じます。

最後に、発掘調査及び報告書作成の過程で、地元の方々を始めとする関係各位の皆様の御協力が得られましたことに心から感謝申し上げます。

平成14年3月29日

福岡県教育委員会

教育長 光 安 常 喜

例　言

1. 本書は1995年度（平成7年度）から1999年度（平成11年度）にかけて、福岡県教育委員会が福岡県土木部河川開発課から委任を受けて、県営福智山ダム建設に伴い破壊され、或いは盛土保存される埋蔵文化財の発掘調査を実施した報告書である。
2. 本書に収録した遺跡は、福岡県直方市大字頓野字二ノ瀬所在の内ヶ磯窓跡西物原であり、平成10年度に発掘調査を実施した範囲である。昨年度の工房部（平成7～9年度調査）の報告に続く2冊目の報告書であり、次年度は東物原（平成11年度調査）に関する報告書を刊行する予定である。
3. 遺構の実測図は調査担当者と調査補助員が主として作成した。遺物の整理・復元、金属器の処理は九州歴史資料館において行った。遺物の実測・製図をはじめとした報告書作成作業は、福岡県教育庁総務部文化財保護課太宰府事務所において行った。
4. 出土した遺物は福岡県教育庁総務部文化財保護課太宰府調査事務所にて所蔵・管理される予定である。
5. 遺構写真は調査担当者が撮影した。空中写真は（有）空中写真企画に委託し気球による撮影を行った。遺物写真は九州歴史資料館において撮影した。
6. 本書に用いた遺跡周辺地形図は、建設省国土地理院発行の1/50,000地形図、及び直方市作成の1/2,500国土基本図を改変したものである。
7. 本書で使用する方位は国土座標II系による座標北を用いる。
8. 本書の執筆はV-1を大庭が、その他を岸本が担当した。編集は岸本が行った。

目 次

I 調査の経過	1
1 はじめに	1
2 調査に至るまでの経緯	2
3 平成7年度（第4次）の調査	4
4 平成8年度（第5次）の調査	5
5 平成9年度（第6次）の調査	6
6 平成10年度（第7次）の調査	7
7 平成11年度（第8次）の調査	8
8 平成12年度（報告書作成）	9
9 平成13年度（報告書作成）	10
II 位置と環境	12
1 地理的環境	12
2 歴史的環境	14
III 内ヶ磯窯の概要と既往の調査	16
IV 西物原の調査	20
1 調査の概要	20
2 グリッド調査の成果	23
3 土手状遺構の調査	27
4 テラス部の調査	28
5 検出された遺構	30
6 包含層の出土遺物	57
V 「内ヶ磯窯跡1」の補遺	126
1 K区の補遺	126
2 出土遺物の補遺	127
VI 西物原落込部（Ⅲ区）の調査	170
1 はじめに	170
2 検出された遺構	172
VII 炭窯の調査	178
1 はじめに	178
2 炭窯の調査	179
3 炭窯前面の遺構	185
VIII おわりに	187

図版目次

- 卷頭図版 1-1 内ヶ磯窯跡から福智山を望む 1-2 内ヶ磯窯跡全景
卷頭図版 2-1 西物原土壠5の粘土堆積状況 2-2 西物原土壠9の粘土堆積状況
卷頭図版 3-1 西物原出土遺物（瓶） 3-2 西物原出土遺物（結文形鉢）

- 図版 1 茶入①
図版 2 茶入②
図版 3 水指①
図版 4 水指②
図版 5 水指③
図版 6 結文形鉢
図版 7 有孔鉢・胎土精良椀
図版 8 鉄絵陶器
図版 9 梆①
図版10 梆②
図版11 梆③
図版12 盆①
図版13 盆②
図版14 盆③
図版15 盆④・筆立・花生
図版16 瓶①
図版17 瓶②・壺
図版18 壺・片口
図版19 土製品①
図版20 土製品②・道具類
図版21 西物原土壤出土遺物①
図版22 西物原土壤出土遺物②
図版23 西物原土壤③・包含層①出土遺物
図版24 西物原包含層出土遺物②
図版25 西物原包含層出土遺物③
図版26 西物原包含層出土遺物④
図版27 西物原包含層出土遺物⑤
図版28 西物原包含層出土遺物⑥
図版29 西物原包含層出土遺物⑦
図版30 西物原包含層出土遺物⑧
図版31 西物原包含層出土遺物⑨
図版32 西物原包含層出土遺物⑩
図版33 西物原包含層出土遺物⑪
図版34 西物原包含層出土遺物⑫
図版35 西物原包含層出土遺物⑬
図版36 西物原包含層出土遺物⑭
図版37 西物原包含層出土遺物⑮
図版38 西物原包含層出土遺物⑯
図版39 西物原包含層出土遺物⑰
図版40 西物原包含層出土遺物⑱
図版41 西物原包含層出土遺物⑲
図版42 西物原包含層出土遺物⑳
図版43 西物原包含層出土遺物㉑
図版44 西物原包含層出土遺物㉒
図版45 西物原包含層出土遺物㉓
図版46 西物原包含層出土遺物㉔
図版47 西物原包含層出土遺物㉕
図版48 西物原包含層出土遺物㉖
図版49 西物原包含層出土遺物㉗
図版50 西物原包含層出土遺物㉘
図版51 西物原包含層出土遺物㉙
図版52 西物原包含層出土遺物㉚
図版53 西物原包含層出土遺物㉛
図版54 T.房部土壤・包含層出土遺物①
図版55 工房部包含層出土遺物②
図版56 工房部包含層出土遺物③
図版57 工房部包含層出土遺物④
図版58 工房部包含層出土遺物⑤
図版59 工房部包含層出土遺物⑥
図版60 工房部包含層出土遺物⑦
図版61 工房部包含層出土遺物⑧
図版62 工房部包含層出土遺物⑨
図版63 工房部包含層出土遺物⑩
図版64 工房部包含層出土遺物⑪
図版65 工房部包含層出土遺物⑫
図版66 工房部包含層出土遺物⑬
図版67 工房部包含層出土遺物⑭
図版68 工房部包含層出土遺物⑮
図版69 工房部包含層出土遺物⑯
図版70 工房部包含層出土遺物⑰
図版71 工房部包含層出土遺物⑱
図版72 工房部包含層出土遺物⑲
図版73 工房部包含層出土遺物㉑
図版74 工房部包含層出土遺物㉒
図版75 工房部包含層出土遺物㉓
図版76 工房部包含層出土遺物㉔
図版77 工房部土壤・包含層出土遺物①
図版78 工房部包含層出土遺物②

挿図目次

第1図 発掘調査前の状況 (平成7年度)	1
第2図 第2次調査空中写真	2
第3図 福智山ダムと内ヶ磯窓跡の位置 (1/5,000)	3
第4図 K区の遺構検出状況 (1号建物)	4
第5図 工房部の空中写真	5
第6図 CD区の遺物出土状況 (土壌5)	5
第7図 現地説明会風景	6
第8図 E区の遺物出土状況 (土壌1)	6
第9図 西物原の発掘作業風景	7
第10図 東物原の発掘作業風景	8
第11図 工房部出土遺物	9
第12図 遺物整理・報告書作成作業	11
第13図 直方市の位置	12
第14図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)	13
第15図 内ヶ磯窓跡から福智山を望む	14
第16図 内ヶ磯窓跡全景 (昭和55年度)	16
第17図 内ヶ磯窓跡実測図 (1/300)	18
第18図 内ヶ磯窓跡周辺地形測量図 (1/1,000)	19
第19図 内ヶ磯窓跡全景 (7次調査時・工房部から)	20
第20図 内ヶ磯窓跡西物原地形測量図 (1/300)	20-21
第21図 内ヶ磯窓跡全景 (7次調査時)	21
第22図 グリッド配置図 (1/300)	22
第23図 内ヶ磯窓跡西物原遺構配置図 (1/150)	22-23
第24図 西物原の堆積状況 (西2-3グリッド間)	23
第25図 西3・6グリッド東壁土層図 (1/60)	23
第26図 西物原の作業場・通路状遺構	24
第27図 西物原作業場・通路の復元 (1/250)	25
第28図 西2-3グリッド間の石垣状遺構実測図 (1/40)	26
第29図 西2-3グリッド間の石垣状遺構 (北から)	26
第30図 土手状遺構縦断面土層図 (1/40)	27
第31図 土手状遺構縦断面堆積状況 (北西から)	27
第32図 西物原テラス1・2南北トレンチ土層図 (1/60)	28
第33図 西物原テラス1・2	29
第34図 西物原土壠1実測図 (1/20)	30
第35図 西物原土壠1半裁状況 (東から)	30
第36図 西物原土壠2・3実測図 (1/20)	31
第37図 西物原土壠2・3出土遺物実測図 (1/3)	31

第38図	西物原土壤 2・3	32
第39図	西物原土壤 4 実測図 (1/30)	33
第40図	西物原土壤 4 出土遺物実測図 (1/3)	34
第41図	西物原土壤 4	35
第42図	西物原土壤 5 実測図 (1/20)	36
第43図	西物原土壤 5	37
第44図	西物原土壤 5 出土遺物実測図 (1/3)	38
第45図	西物原土壤 6 実測図 (1/20)	39
第46図	西物原土壤 6 出土遺物実測図① (1/3)	40
第47図	西物原土壤 6 遺物出土状況 (東から)	41
第48図	西物原土壤 6 出土遺物実測図② (1/3)	41
第49図	西物原土壤 7 実測図 (1/20)	42
第50図	西物原土壤 7 完掘状況 (北東から)	42
第51図	西物原土壤 8 実測図 (1/20)	43
第52図	西物原土壤 8 検出状況 (北から)	44
第53図	西物原土壤 8 出土遺物実測図 (1/3)	44
第54図	西物原土壤 9 実測図 (1/20)	45
第55図	西物原土壤 9	46
第56図	西物原土壤 9 出土遺物実測図 (1/3)	47
第57図	西物原土壤11 実測図 (1/20)	48
第58図	西物原土壤11 出土遺物実測図① (1/3)	49
第59図	西物原土壤11	50
第60図	西物原土壤11 出土遺物実測図② (1/3)	50
第61図	西物原土壤12 実測図 (1/20)	51
第62図	西物原土壤12 粘土面検出状況 (南から)	51
第63図	西物原土壤12 出土遺物実測図 (1/3)	51
第64図	西物原土壤14 実測図 (1/20)	52
第65図	西物原土壤14 出土遺物実測図 (1/3)	53
第66図	空中写真撮影作業風景	53
第67図	西物原土壤15 実測図 (1/20)	54
第68図	西物原土壤15 出土遺物実測図 (1/3)	54
第69図	西物原土壤15 半裁状況 (北から)	54
第70図	西物原土壤16 実測図 (1/20)	55
第71図	西物原土壤16 出土遺物実測図 (1/3)	55
第72図	西物原土壤16 粘土面検出状況 (北西から)	55
第73図	西物原ビット出土遺物実測図 (1/3)	56
第74図	西物原出土遺物 (茶入) 実測図① (1/3)	58
第75図	西物原出土遺物 (茶入) 実測図② (1/3)	59

第76図	西物原出土遺物（水指）実測図①（1/3）	60
第77図	西物原出土遺物（水指）実測図②（1/3）	61
第78図	西物原出土遺物（水指）実測図③（1/3）	62
第79図	西物原出土遺物（水指）実測図④（1/3）	63
第80図	西物原出土遺物（水指）実測図⑤（1/3）	64
第81図	西物原出土遺物（蓋）実測図（1/3）	65
第82図	西物原出土遺物（花生）実測図（1/3）	66
第83図	西物原出土遺物（有孔鉢）実測図①（1/3）	67
第84図	西物原出土遺物（有孔鉢）実測図②（1/3）	68
第85図	西物原出土遺物（有孔鉢）実測図③（1/3）	69
第86図	西物原出土遺物（結文形鉢）実測図（1/3）	70
第87図	西物原出土遺物（筆立）実測図①（1/3）	72
第88図	西物原出土遺物（筆立②・香炉）実測図（1/3）	73
第89図	西物原出土遺物（椀）実測図①（1/3）	75
第90図	西物原出土遺物（椀）実測図②（1/3）	76
第91図	西物原出土遺物（椀）実測図③（1/3）	77
第92図	西物原出土遺物（椀）実測図④（1/3）	78
第93図	西物原出土遺物（椀）実測図⑤（1/3）	79
第94図	西物原出土遺物（椀）実測図⑥（1/3）	80
第95図	西物原出土遺物（鉄絵陶器）実測図（1/3）	81
第96図	西物原出土遺物（皿）実測図①（1/3）	83
第97図	西物原出土遺物（皿）実測図②（1/3）	84
第98図	西物原出土遺物（皿）実測図③（1/3）	85
第99図	西物原出土遺物（皿）実測図④（1/3）	86
第100図	西物原出土遺物（皿）実測図⑤（1/3）	87
第101図	西物原出土遺物（皿）実測図⑥（1/3）	88
第102図	西物原出土遺物（皿）実測図⑦（1/3）	89
第103図	西物原出土遺物（皿）実測図⑧（1/3）	90
第104図	西物原出土遺物（皿）実測図⑨（1/3）	91
第105図	西物原出土遺物（皿）実測図⑩（1/3）	92
第106図	西物原出土遺物（皿）実測図⑪（1/3）	93
第107図	西物原出土遺物（皿）実測図⑫（1/3）	94
第108図	西物原出土遺物（皿）実測図⑬（1/3）	95
第109図	西物原出土遺物（皿）実測図⑭（1/3）	96
第110図	西物原出土遺物（皿）実測図⑮（1/3）	97
第111図	西物原出土遺物（皿）実測図⑯（1/3）	98
第112図	西物原出土遺物（皿）実測図⑰（1/3）	99
第113図	西物原出土遺物（皿）実測図⑱（1/3）	100

第114図	西物原出土遺物（皿）実測図⑩（1/3）	101
第115図	西物原出土遺物（皿）実測図⑪（1/3）	102
第116図	西物原出土遺物（皿）実測図⑫（1/3）	103
第117図	西物原出土遺物（鉢）実測図（1/3）	105
第118図	西物原出土遺物（甕）実測図①（1/3）	107
第119図	西物原出土遺物（甕）実測図②（1/3）	108
第120図	西物原出土遺物（甕）実測図③（1/3）	109
第121図	西物原出土遺物（甕）実測図④（1/3）	110
第122図	西物原出土遺物（壺）実測図①（1/3）	111
第123図	西物原出土遺物（壺）実測図②（1/3）	112
第124図	西物原出土遺物（瓶）実測図①（1/3）	113
第125図	西物原出土遺物（瓶）実測図②（1/3）	114
第126図	西物原出土遺物（片口）実測図①（1/3）	115
第127図	西物原出土遺物（片口）実測図②（1/3）	116
第128図	西物原出土遺物（片口）実測図③（1/3）	117
第129図	西物原出土遺物（擂鉢）実測図①（1/3）	119
第130図	西物原出土遺物（擂鉢）実測図②（1/3）	120
第131図	西物原出土遺物（擂鉢）実測図③（1/3）	121
第132図	西物原出土遺物（擂鉢）実測図④（1/3）	122
第133図	西物原出土遺物（特殊品）実測図①（1/3）	123
第134図	西物原出土遺物（特殊品）実測図②（1/3）	124
第135図	西物原出土遺物（金属器）実測図（1/3）	125
第136図	K区土壤出土遺物実測図（1/3）	126
第137図	CD区土壤3遺物出土状況	127
第138図	工房部土壤出土遺物実測図（1/3）	127
第139図	工房部出土遺物（茶入）実測図（1/3）	128
第140図	工房部出土遺物（手指）実測図①（1/3）	129
第141図	工房部出土遺物（手指）実測図②（1/3）	130
第142図	工房部出土遺物（手指）実測図③（1/3）	131
第143図	工房部出土遺物（手指）実測図④（1/3）	132
第144図	CD区落込み土壤群	132
第145図	工房部出土遺物（手指）実測図⑤（1/3）	133
第146図	工房部出土遺物（蓋）実測図（1/3）	134
第147図	工房部出土遺物（花生）実測図（1/3）	135
第148図	工房部出土遺物（筆立・香炉）実測図（1/3）	136
第149図	工房部出土遺物（把手）実測図①（1/3）	137
第150図	工房部出土遺物（把手）実測図②（1/3）	138
第151図	工房部出土遺物（椀）実測図①（1/3）	139

第152図	工房部出土遺物（椀）実測図②（1/3）	140
第153図	工房部出土遺物（椀）実測図③（1/3）	141
第154図	工房部出土遺物（椀）実測図④（1/3）	142
第155図	T.房部出土遺物（特殊椀・鉢）実測図（1/3）	143
第156図	工房部出土遺物（鉄絵陶器）実測図（1/3）	145
第157図	工房部出土遺物（皿）実測図①（1/3）	146
第158図	工房部出土遺物（皿）実測図②（1/3）	147
第159図	工房部出土遺物（皿）実測図③（1/3）	148
第160図	工房部出土遺物（皿）実測図④（1/3）	149
第161図	工房部出土遺物（皿）実測図⑤（1/3）	150
第162図	工房部出土遺物（皿）実測図⑥（1/3）	151
第163図	工房部出土遺物（皿）実測図⑦（1/3）	152
第164図	工房部出土遺物（皿）実測図⑧（1/3）	153
第165図	工房部出土遺物（皿）実測図⑨（1/3）	154
第166図	工房部出土遺物（皿）実測図⑩（1/3）	155
第167図	工房部出土遺物（皿）実測図⑪（1/3）	156
第168図	工房部出土遺物（鉢）実測図①（1/3）	157
第169図	工房部出土遺物（鉢）実測図②（1/3）	158
第170図	工房部出土遺物（甕）実測図①（1/3）	159
第171図	工房部出土遺物（甕）実測図②（1/3）	160
第172図	工房部出土遺物（甕③・壺・瓶）実測図（1/3）	161
第173図	工房部出土遺物（瓶）実測図（1/3）	163
第174図	工房部出土遺物（縹状突帯）実測図（1/3）	164
第175図	工房部出土遺物（片口）実測図（1/3）	165
第176図	工房部出土遺物（櫛鉢）実測図①（1/3）	166
第177図	工房部出土遺物（櫛鉢）実測図②（1/3）	167
第178図	工房部出土遺物（特殊品）実測図（1/3）	168
第179図	工房部出土遺物（道具類）実測図（1/3）	169
第180図	Ⅲ区全景	170
第181図	Ⅲ区構造配置図（1/90）	171
第182図	Ⅲ区落込み土層図（1/40）	172
第183図	Ⅲ区土壤2・5実測図（1/40）	172
第184図	Ⅲ区土壤5（南から）	173
第185図	Ⅲ区土壤3実測図（1/40）	173
第186図	Ⅲ区土壤6・7	174
第187図	Ⅲ区土壤6～8実測図（1/40）	175
第188図	Ⅲ区土壤8完掘状況（北から）	176
第189図	Ⅲ区集石遺構実測図（1/40）	177

第190図	Ⅲ区集石造構（南西から）	177
第191図	炭窯調査前（西から）	178
第192図	炭窯地区地形測量図（1/200）	179
第193図	炭窯検出状況	180
第194図	炭窯（検出状況）実測図（1/60）	180-181
第195図	炭窯（床面・排水溝）実測図（1/60）	181
第196図	炭窯（床面・排水溝）	182
第197図	炭窯（煙道）	183
第198図	炭窯前面土壤配置図（1/60）	184
第199図	炭窯前面土壤完掘状況（南から）	184
第200図	炭窯前面土壤 1 実測図（1/40）	185
第201図	炭窯前面土壤 2 実測図（1/40）	186
第202図	炭窯前面土壤 3 実測図（1/40）	186

I 調査の経過

1 はじめに

福智山ダムは福地川総合開発事業の一環をなすものとして福岡県が福地川に建設を進めている多目的ダムである。重力式コンクリートダムの型式を採り、堤高65m、堤頂長255m、総貯水量2,710,000m³、有効貯水容量は2,560,000m³の規模を誇る。福地川は一級河川遠賀川水系彦山川の支川であり、過去にしばしば洪水による氾濫被害をもたらした歴史を持つ。このため抜本的な治水対策が望まれていたが、本川流域は既に宅地化が進み全面的な河川改修は困難な状況であった。そこでダムによる洪水調整によって災害被害の軽減が図られたのである。

また本川流域は交通網の整備や宅地開発が進み、水資源開発が重要な課題となっていた。そこで、水道容量を確保し上水道用水を供給するという役割も果たすことが求められた。

福智山ダムの建設が内ヶ磯渓谷に計画されたのは昭和50年のことである。ダム建設に伴って水没する地区には福岡県の代表的な焼き物である高取焼の古窯跡、内ヶ磯窯が存在することは早い段階から知られていた。ダム建設設計画当初から直方市民を中心として保存の声が高まり、直方市教育委員会は内ヶ磯窯の実態把握のために発掘調査を実施した。次に今回の調査に至るまでの経緯を中心にまとめてみたい。



第1図 発掘調査前の状況（平成7年度）

2 調査に至るまでの経緯

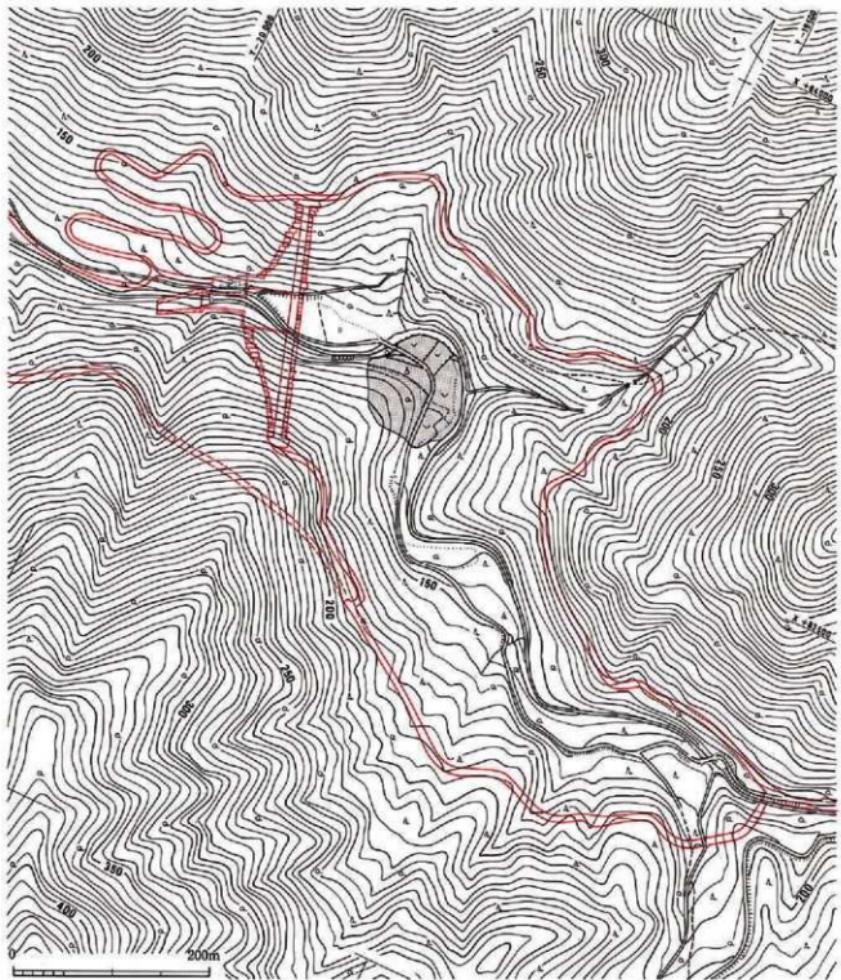
窯本体の発掘調査は昭和54年から二ヵ年に渡り直方市教育委員会が主体となって実施された。第1次調査（昭和54年9月17日～12月7日）では周辺地形図の作成と窯本体の約1/3が調査され、続く第2次調査（昭和55年9月10日～11月20日）によって窯本体全体が調査された。また昭和56年度第3次調査（昭和56年5月19日～6月23日）では周辺水田部において工房跡が検出された。これらの発掘調査成果の概略は後述するが、近世陶磁研究に大きな影響を及ぼしたものといえる。しかし、用地未買収等の関連からそれ以上の調査は実施することができず、陶片堆積地域である物原や工房・屋敷部分全体の解明は将来の課題として残された。

土地問題が解決に向かい、再びダム建設の動きが具体化してきたのは平成4年度のことである。福岡県教育庁北九州教育事務所は福岡県福智山ダム建設事務所から埋蔵文化財の有無について照会があったことをうけて、用地買収が済んだ地区の試掘調査を実施した。その結果、内ヶ磯窯関連の遺跡以外にも炭窯の存在を確認し、調査が必要であるとの回答を行った。

協議の結果、発掘調査は平成7年度から実施し、工事関連施設が設置される工房部から始められることとなった。物原まで含めると調査面積はかなりの広さとなり、また出土する陶片は膨大なものになると予想されたため、調査・整理期間は十分とられるように求められた。



第2回 第2次調査空中写真



第3図 福智山ダムと内ヶ磯窓跡の位置 (1/5,000)

3 平成7年度（第4次）の調査

調査対象地は内ヶ磯窓跡の西物原の裾部にあたる地点であり、調査前は梅林として植樹がなされていた。この地点はダム本体建設のための工事用道路がつくられる予定地であり、調査の優先順位としては高いものであった。調査区は西物原に接するK区と西に一段下がったL区に分けられ、その面積は合わせて600m²であり、窓にごく近い平坦面ということで、工房・屋敷跡の存在が予想された。調査は平成7年8月24日から重機を用いて表土を除去することからはじめたが、L区は既に削平されており、遺構は確認されず、表面採集により若干の遺物を採取したに止まった。K区もまた梅林造成時に地形の改変が加わっていると思われ、物原の裾が削られて、50cm程度の高さの石垣が組まれている。表土除去の結果、柱穴及び土壤が検出された。遺物はK・L区で合わせてパンケース150箱分の陶器片が出土した。調査は同年10月30日に終了した。

平成7年度の調査関係者は次の通りである。

福岡県土木部河川開発課

課長 北島祥光
課長補佐 吉田栄治
課長技術補佐 水流秀直
建設係長 新免直樹
主任技師 山本 潔

福智山ダム建設事務所

所長 西木千敏
工務課長 諸 英治
技術主査 森 忍

福岡県教育委員会

総括 光安常喜
教育次長 松枝 功
指導第二部長 丸林茂夫
文化課長 松尾正俊
参事兼文化財保護室長 柳田康雄
課長補佐 元永浩士
参事補佐兼保護室長補佐 井上裕弘
調査班参事補佐兼調査班総括 橋口達也
調査班参事補佐 木下 修
調査班参事補佐 中間研志
調査班参事補佐 小池史哲
庶務
管理係長 柴田恭郎
管理係主任主事 高田裕康

教育庁北九州教育事務所

所長 十時栄一
副所長 国武康友
生涯学習課長 宮尾敏彦
参事補佐兼文化班主任 高橋 章（調査担当）



第4図 K区の遺構検出状況（1号建物）

4 平成8年度（第5次）の調査

平成8年度は、前年度に引き続き工房部分の調査が予定された。この部分、すなわち旧水田面である平坦部はバッチャーブラント等ダム本体工事に欠かせないプラントが予定される地点であり、事前の発掘調査が急がれた。しかし、この年度は筑紫野インターチェンジ建設に伴う貝元遺跡の発掘調査が困難を極めており、職員総動員に近い体制がとられていた。したがって技師の配置には苦慮を強いられ、内ヶ磯窯の調査体制が整ったのは既に年度も押し迫った2月であった。そのため平成8年度に関してはいくらかでも調査を進展させ、残った部分に関しては次年度に継続することとした。調査はまず調査対象地について重機を用いて表土を除去する作業から入った。幾分表土の除去作業が進んだ時点で作業員を入れて調査を開始した。調査は上流部のA区から入り徐々に下流に進めることとした。C及びD区では広い落ち込み部に多量の陶片が含まれる地点を確認し、深くなると予想されたためにこの部分については早めに作業に取り掛かった。

平成8年度の調査関係者は次の通りである。

福岡県土木部河川開発課

課長	村上 治
課長補佐	吉田栄治
課長技術補佐	田村延行
建設係長	日野勝弘
主任技師	山本 潔

福智山ダム建設事務所

所長	阴田知明
工務課長	林田数也
技術主査	高田 勇

福岡県教育委員会

総括

教育長	光安常喜
教育次長	松枝 功
指導第二部長	竹若幸二
文化課長	松尾正俊
参事兼文化財保護室長	石松好雄
課長技術補佐	柳田康雄
参事補佐兼調査班総括	井上裕弘
調査班参事補佐	橋口達也
調査班参事補佐	木下 修（調査担当）
調査班参事補佐	中間研志
庶務	小池史哲
管理係長	黒田一治
管理係事務主査	東 健二

調査

調査班技師	岸本 圭（調査担当）
-------	------------



第5図 工房部の空中写真



第6図 CD区の遺物出土状況（土壤5）

5 平成9年度（第6次）の調査

平成9年度は前年度に引き続き工房部の発掘調査を実施した。調査は五月の連休明けである5月6日から開始した。C・D区の落ち込み部に関しては遺構面近くまで下げていたが、その後の遺構検出を中心に実施した。さらにE区、F区、H区へと調査地点を移した。またダム建設の工事用道路の関係で、西物原の一部が削られる可能性がでてきた。西物原は平成10年度に発掘調査を予定していたが、工事用道路予定地部分を早急に終了させる必要が生じたために、工房部の調査を終了した時点で、当該部分について発掘調査を実施した。また窯の対岸にある炭窯跡についても工事用道路建設により破壊するために事前に発掘調査を実施し記録保存することとした。当年度に実施した西物原部分及び炭窯の調査成果については本書に収録している。工房部の調査成果については10月18日に現地説明会を開催し、約100名の参加者があった。

福岡県土木部河川開発課

課長	村上 治
課長補佐	的野正男
課長技術補佐	田村延行
建設係長	目野勝弘
主任技師	山本 潔

福岡県教育委員会

総括

教育長	光安常喜
教育次長	松枝 功
指導第二部長	竹若幸二
文化課長	石松好雄
参事兼文化財保護室長	柳田康雄
課長技術補佐	井上裕弘
参事補佐兼調査班総括	橋口達也
調査班参事補佐	木下 修（調査担当）
調査班参事補佐	新原正典
調査班参事補佐	中間研志

庶務

管理係長	黒田一治
管理係事務主査	鶴我哲夫

調査

調査班技師	岸本 壽（調査担当）
-------	------------

福智山ダム建設事務所

所長	白谷勇夫
工務課長	黒瀬正昭
副長	高田 勇



第7図 現地説明会風景



第8図 E区の遺物出土状況（土壤1）

6 平成10年度（第7次）の調査

平成10年度は西物原の発掘調査を実施する予定であったが、工事用道路として林道を拡幅したいとの連絡があり、そのために東物原の裾部分が削られる可能性が生じた。拡幅の幅は広くはないが多量の陶片が確認されるために、西物原の調査に先立って発掘調査を実施することとした。その間に西物原部分の樹木伐開作業を地元の造園会社に委託して実施した。東物原の調査終了後は西物原に調査対象を移した。当該地は昭和54年からの第1次調査においては土地問題が解決しておらず、地形測量も終了していなかった。そこでまず西物原部分について地形測量を行い、1/100の地形測量図を作成した。発掘調査は裾部から順にグリッドを設定しつつ進行させた。11月4日には地元の小学校である上頓野小学校の六年生76名による体験発掘が実施された。また窯本体の保存に備えて佐賀大学林重徳教授・九州大学牛島恵輔教授を招き今後の方針についての協議を実施した。調査は平成11年3月19日まで実施した。調査成果については本書に収録したが、東物原の裾部については平成14年度に報告予定である。

平成10年度の調査関係者は次の通りである。

福岡県土木部河川開発課

課長	原 俊樹
課長補佐	的野正男
課長技術補佐	齊藤和之
建設係長	小林 彰
主任技師	山本 潔

福智山ダム建設事務所

所長	波折紀文
工務課長	黒瀬正昭
副長	高田 勇
技師	角 康二

福岡県教育委員会

総括

教育長	光安常喜
教育次長	藤吉純一郎
総務部長	富永 煉

文化財保護課長 石松好雄

参事 柳田康雄

参事兼課長技術補佐 井上裕弘

参事補佐兼調査第一係長 橋口達也

調査第一係参事補佐 中間研志

庶務

課長補佐兼管理係長 角 信幸

管理係事務主査 鶴我哲夫

調査

調査第一係技師 岸本 主 (調査担当)



第9図 西物原の発掘作業風景

7 平成11年度（第8次）の調査

平成11年度は発掘調査の最終年度であり、調査対象地は東物原である。調査は平成11年6月18日から開始した。調査前は低い灌木に覆われており、まずその伐開作業から開始した。この調査区は既に第1次調査時に地形測量が実施されており、今回は再びそれをすることはなかったが、乱掘によって改めて地形が変化している部分が多く見られた。また次年度以降に予定された窯保存処置に対し、第1・2次調査で発掘された窯本体を再び露出させる作業を行った。さらに次年度以降に備え、窯保存の方針が文化財保護課と福智山ダム事務所との間で協議が為された。調査は平成12年3月13日に終了した。発掘調査の成果、及び保存対策の経緯については平成14年度に報告を予定している。

平成11年度における調査関係者は以下の通りである。

福岡県土木部河川開発課

課長	隅田知明
課長補佐	的野正男
課長技術補佐	齊藤和之
建設係長	大場 優
主任技師	住吉正浩

福智山ダム建設事務所

所長	波折紀文
工務課長	近藤伸幸
副長	中島邦雅
技師	角 康二

福岡県教育委員会

総括

教育長	光安常喜
教育次長	藤吉純一郎
総務部長	岩本 誠
文化財保護課長	柳田康雄
参事	井上裕弘
課長補佐兼管理係長	角 信幸
参事兼課長技術補佐	橋口達也
参事補佐兼調査第一係長	児玉真一
調査第一係参事補佐	中間研志

庶務

管理係事務主査	吉武祐二
管理係主任主事	田中利幸

調査

調査第一係主任技師	岸本 主（調査担当）
調査第一係技師	岡寺 良（調査担当）
調査第一係技師	大庭孝夫（調査担当）



第10図 東物原の発掘作業風景

8 平成12年度（報告書作成）

本年度からは調査成果についての整理・報告書作成期間が充てられた。初年度である平成12年度には、平成7～9年度に発掘調査を実施した工房部を対象とした。福岡県教育委員会は例年数多く発掘調査を実施し、遺物量も膨大なものに上る。内ヶ磯窯跡はの中でも特に多く、遺物の箱数はパンケースにて4,000箱程度にも及んでおり、全体の調整の中で十分な整理期間を確保するのが困難な状況であった。包含層出土遺物に関して、整理・実測が間に合わなかった分については本書に補遺として収録している。

平成12年度における報告書作成の関係者は以下の通りである。

福岡県土木部河川開発課

課長	田村延行
課長補佐	大草邦雄
課長技術補佐	小林 彰
建設係長	西田直人
主任技師	住吉正浩

福智山ダム建設事務所

所長	植原陸男
工務課長	近藤伸幸
副長	中島邦雅
技師	角 康二

福岡県教育委員会

総括

教育長	光安常喜
教育次長	柳原英夫
総務部長	岩本 誠
文化財保護課長	柳田康雄
参事	井上裕弘
参事兼課長技術補佐	橋口達也
	川述昭人
課長補佐兼管理係長	平野義峰
参事補佐兼調査第一係長	佐々木隆彦

庶務

管理係事務主査	吉武祐二
管理係主任主事	鎮守俊明

報告書作成

調査第一係主任技師	岸本 圭（整理担当・原稿執筆）
調査第一係技師	岡寺 良（原稿執筆）
調査第二係技師	大庭孝夫（整理担当・原稿執筆）



第11図 工房部出土遺物

9 平成13年度（報告書作成）

昨年度に続き、調査成果についての整理・報告書作成期間が充てられたが、本年度はその対象が平成10年度に調査を実施した西側の物原部分である。遺物量は膨大であり、パンケースで1,500箱に及ぶ。しかし整理のスケジュールは込み合っており十分な期間を確保することができなかつた。整理時期が遅かったこともあり、一部の調査区及び器種については来年度に報告を予定している。

平成13年度における報告書作成の関係者は以下の通りである。

福岡県土木部河川開発課

課長	江口友弘
課長補佐	大草邦雄
課長技術補佐	小林 彩
建設係長	西田直人
主任技師	住吉正浩

福智山ダム建設事務所

所長	谷口正弘
工務課長	小柳康夫
副長	中島邦雅
技師	角 康二
技師	津間正進

福岡県教育委員会

総括

教育長	光安常喜
教育次長	森山良一
総務部長	三瓶寧夫
文化財保護課長	井上裕弘
参事兼課長技術補佐	橋口達也 川述昭人
課長補佐	平野義峰
参事補佐兼調査第一係長	佐々木隆彦

庶務

管理係長	三笠ひとみ
管理係主任主事	鎮守俊明

報告書作成

調査第一係主任技師	岸木 主（整理担当・原稿執筆）
調査第二係主任技師	進村真之（整理担当）
調査第二係技師	大庭孝夫（原稿執筆）

現場作業においては地元の内ヶ磯集落を始めとして多くの協力があって円滑に進めることができた。磯や竹の根が多く困難な作業条件であり、また冬は地形的にも極めて冷え込むといった環境の中で熱心に作業にあたられた皆様に感謝申し上げます。直方市教育委員会からは多くのご支援を頂いたが、特に文化財担当である田村悟氏には現場作業員の手配等、終始手を煩わせた。

調査及び整理・報告書作成に期間においては、近隣市町村文化財担当者、北九州教育事務所、九州歴史資料館、文化財保護指導委員、直方郷土史研究会等の多くの方々からのご支援、ご教示を頂けたことに対し、感謝申し上げます。



第12図 遺物整理・報告書作成作業

II 位置と環境

1 地理的環境

内ヶ磯塚跡は福岡県直方市大字頓野字二ノ瀬・下久保・白髪淵に位置する。直方市の東部、福智山山麓の内ヶ磯渓谷にあり、標高は135~150mである。緯度でいえば北緯33度45分・東経130度47分にあたる。直方市は福岡県の北部、南北に貫流する遠賀川に沿って開ける筑豊平野のほぼ中央に位置する。東西11.56km、南北9.45km、面積は61.78km²である。明治22(1889)年に町政を施行し、大正15(1926)年に新人・福地・下境・頓野の四村を合併、昭和6(1931)年に市制を施行、昭和30(1955)年に植木町を編入し現在に至る。

直方市の東には福智山(900.8m)を最高峰とする福智山系が南北に走る。この山系によって旧国は分けられ、直方市を含む西は筑前、東は豊前となっている。市域の西には六ヶ岳(339.0m)があり、それから派生する丘陵地が広い面積を占めている。

遠賀川は嘉穂・朝倉の郡境付近に源を発する河川であり、多くの支流を集めつつ北流し、遠賀郡芦屋町にて灘灘に注ぐ。流路延長は57.7kmを測り、これは筑後川に次いで県内第二位の規模である。直方市においては英彦山山系に源を発する彦山川と合流する。福智山ダムはこの彦山川の支流、福地川に建設されるダムである。直方市は遠賀川の河口からは18km上流となるが、かつては海が入り込んでおり、扇崎貝塚(大字植木)・光田貝塚(同)・天神橋貝塚(大字下新入)のように市内には縄文時代の貝塚が散見される。

地質的には遠賀川に沿う形で約6500~約2400万年前に形成されたという古第三紀層の小丘陵が広く分布している点が最も大きな特色である。これは古墳時代に盛んに横穴墓が造営される基盤となる。直方市内に關しても例外ではなく、特に水町遺跡(大字上境)は公園として整備され、市民の学習と憩いの場として活用されている。また古第三紀層は石炭層を包含している。遠賀川流域のいわゆる筑豊地域は明治以降石炭採掘が盛んに行われ、筑豊炭田の名で知られる。およそ100年の間に約8億トンの石炭を産出したとされ、日本の近代化へ大きく貢献してきた。直方市域においても三菱新入・三井本洞等の炭鉱が次々に開山し、筑豊炭田の中心地となった。しかし昭和30年頃から始まったエネルギー革命に伴い炭鉱開運工業は衰退の一途をたどる。炭田開発・鉱害復旧関連の事業では調査を経ずして破壊された遺跡が多く、埋蔵文化財にとっては受難の時期といえる。このように古第三紀層に代表される地質的特質は、筑豊地域の文化・産業を特徴付け



第13図 直方市の位置



第14図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

- | | | | | |
|------------|------------|----------|------------|------------|
| 1 内ヶ磯窯跡 | 2 雲取城跡 | 3 鹿取城跡 | 4 烏野神社 | 5 上頓野宮ノ前遺跡 |
| 6 感田城跡 | 7 感田栗林横穴 | 8 感田堀跡 | 9 直方城下町遺跡 | 10 額野横道遺跡 |
| 11 舟長谷池西遺跡 | 12 片山遺跡 | 13 間牟田遺跡 | 14 木町遺跡群 | 15 国境石 |
| 16 永満寺経塚 | 27 永満寺宅間窯跡 | 18 皿山窯跡 | 19 笠ノ口窯跡 | 20 岩屋高麗窯跡 |
| 21 興國寺 | 22 木原漁宿 | 23 長崎街道 | 24 筑前・豊前国境 | |

大きな要因となっている。

直方市は遠賀川流域に広がる豊かな農村地帯から始まり、炭田の開発・衰退を経て、現在は土地の再開発が進む。米作のほか梨や葡萄の果樹栽培が盛んであり、各地域で工業団地の造成も進んでいる。福岡市・北九州市への通勤者も多く、平成13（2000）年には筑豊の大動脈である筑豊本線が電化された（福北ゆたか線）ことによって発展に拍車がかかるものとして期待される。

2 歴史的環境

内ヶ磯窯跡周辺の歴史的な歴史的環境は「内ヶ磯窯跡1」を参照していただくことにし、ここでは内ヶ磯窯が操業された江戸時代についてみてみたい。内ヶ磯窯が位置する直方市は旧国で言えば筑前国にある。関ヶ原の合戦（慶長5（1600）年）後に小早川氏にかわって筑前国を領有したのは黒田長政である。筑前国は福岡県北部の大部分を占めるが、黒田長政は国境警備のために筑前六端城を置いた。筑前六端城とは若松城（北九州市若松区）・黒崎城（北九州市八幡西区）・益富城（嘉穂郡嘉穂町）・松尾城（朝倉郡小石原村）・麻底良城（朝倉郡朝倉町）と直方市の鷹取城である。麻底良城を除き豊前国との境に設けられており、豊前国との緊張が窺い知れる。鷹取城は、戦国時代の山城であったものを修築したもので、黒田節で名高い母里太兵衛信友を城主として配置した。太兵衛が益富城へ転城した後は手塚孫太夫水雪が居城する。しかし、元和元（1615）年に幕府による一国一城令により、鷹取城は廃城となった。鷹取城については昭和61（1986）年から継続して発掘調査が実施されている。江戸時代の修築については、主郭部の石垣や外郭形の城門に見いだすことができる。

黒田長政は元和9（1623）年に京都で客死し、黒田忠之が第二代の福岡藩主となる。長政の遺言によりこの地には支藩が開かれることとなり、黒田高政に四万石を分地される。支藩は鷹取城やその城下ではなく、現在の直方の市街地、東蓮寺に開かれた。東蓮寺には館が営まれ（現・双林院）、東蓮寺藩として城下町が形成される。その後東蓮寺は、延宝3（1675）年第三代東蓮寺藩主長寛のときにその名を直方と改めた。元禄5（1692）年、第五代藩主長清の時には一万石が加増され、五万石となる。しかし、正徳4（1714）年に長清の長男菊千代（継高）が福岡藩第五代藩主宣政の養子となり、享保5（1720）年の長清の死去により直方藩は廃藩となり、直方藩は約100年の歴史を閉じる。

現在の直方市街地の街路は江戸時代の旧状を保つ部分も多い。さらに元禄年間の状態を記した「直方惣郭図」が残されており、それと現在の町並みとの比較対照が可能となって



第15図 内ヶ磯窯跡から福智山を望む

いる。浄土真宗西法寺の山門（市指定文化財）は居館の山倉門を直方藩廃絶の際に移築したものであり、城下町の一端を知ることができる。近年、開発や公園整備によってこの城下町遺跡の一部に対し発掘調査が実施された。特に須崎町公園遺跡は城下町の北西隅に当たり、井戸・土壙・水路・墓が検出され、城下町を考える上で多くの資料が提供された。

直方市関連文化財調査報告書一覧

- 直方古代文化財研究会編 1969 「感田上原遺跡発掘調査概報」 直方市文化財調査報告書第1集
木下修編 1980 「内ヶ磯窯跡」 I 直方市文化財調査報告書第2集
木下修編 1981 「内ヶ磯窯跡」 II 直方市文化財調査報告書第3集
副島邦弘・木下修編 1982 「内ヶ磯窯跡」 直方市文化財調査報告書第4集
副島邦弘編 1983 「永満寺宅間窯跡」 直方市文化財調査報告書第5集
副島邦弘編 1984 「小野半田横穴」 直方市文化財調査報告書第6集
副島邦弘編 1984 「蘭半田遺跡」 直方市文化財調査報告書第7集
副島邦弘編 1987 「筑前鷹取城跡」 直方市文化財調査報告書第8集
馬田弘稔編 1988 「筑前鷹取城跡」 II 直方市文化財調査報告書第9集
馬田弘稔編 1989 「筑前鷹取城跡」 III 直方市文化財調査報告書第10集
田村悟編 1990 「筑前鷹取城跡」 IV 直方市文化財調査報告書第11集
田村悟編 1991 「筑前鷹取城跡」 V 直方市文化財調査報告書第12集
田村悟編 1992 「帶田遺跡」 直方市文化財調査報告書第13集
田村悟編 1993 「黍田遺跡」 直方市文化財調査報告書第14集
田村悟編 1993 「上頓野宮ノ前遺跡」 直方市文化財調査報告書第15集
田村悟編 1994 「広江窯跡」 直方市文化財調査報告書第16集
片野博編 1995 「西日本銀行直方支店」 直方市文化財調査報告書第17集
田村悟編 1995 「須崎町公園遺跡」 直方市文化財調査報告書第18集
田村悟編 1995 「直方市内遺跡詳細分布調査報告書」 直方市文化財調査報告書第19集
田村悟編 1997 「水町遺跡群」 直方市文化財調査報告書第20集
田村悟編 2000 「直方市内遺跡群」 I 直方市文化財調査報告書第21集
高山長士編 2000 「西光寺遺跡」 直方市文化財調査報告書第22集
田村悟編 2001 「水町遺跡群整備事業報告書」 直方市文化財調査報告書第23集
田村悟・高山長士編 2001 「片山遺跡」 直方市文化財調査報告書第24集
木下修編 1993 「辻の上遺跡」 福岡県文化財調査報告書第112集
馬田弘稔編 2000 「頓野横道遺跡・浦田池南遺跡」 福岡県文化財調査報告書第149集
岸本圭編 2001 「内ヶ磯窯跡」 I 福岡県文化財調査報告書第163集

III 内ヶ磯窯の概要と既往の調査

内ヶ磯窯は慶長19（1614）年から寛永元（1624）年に操業されたと伝わる高取焼の登窯である。高取焼については「高取歴代記録」や「高取家文書」、「筑前国統風土記拾遺」といった史料が残されており、そこから変遷を窺い知ることができる。開祖である高取八山は豊臣秀吉の朝鮮侵攻の際、黒田長政に従って渡米した陶工である。高取焼は筑前国黒田藩の御用窯として慶長12（1607）年内ヶ磯より南に3km離れたところに位置する永満寺宅間窯（直方市大字永満寺）で焼き始められた。その後、今回報告する内ヶ磯窯に窯を移すことになる。内ヶ磯窯の終焉時期については、藩主の怒りに触れ八山が浪人となり嘉麻郡上山田唐人谷の山田窯（現山田市唐人谷）に窯を移した寛永元（1624）年頃と考えられる。これら永満寺宅間・内ヶ磯・山田の各窯で焼かれた高取焼は「古高取」と称され、古田織部の影響を強く受けた作風として知られる。中でも内ヶ磯窯は製品の多様性や生産規模から考えて古高取を代表する窯といっても過言ではなかろう。

内ヶ磯窯の発見は、九州における考古学の先駆者である中山平次郎博士による。博士は貝原益軒の「筑前国統風土記拾遺」をもとに現地踏査を行い、窯の場所を突き止めた。この経過及び遺物の観察については「考古学雑誌」第5巻第6号に「高取焼最古の二窯址と其遺物」と題して発



第16図 内ヶ磯窯跡全景（昭和55年度）

表されている。中山平次郎博士により採取された陶片は、現在九州大学考古学研究室において「中山コレクション」として保管されている。

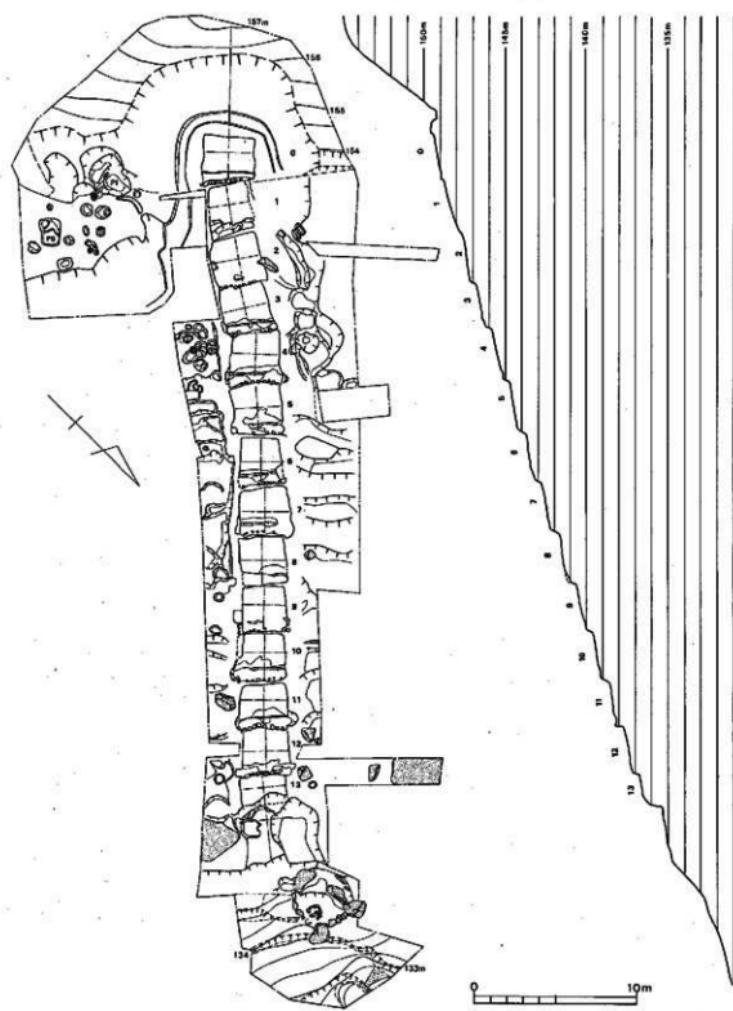
内ヶ磯窯跡の本格的な調査にメスが入ったのはダム建設計画が動き出した昭和54年からである。調査は3カ年にわたって実施され、その成果は1980・81年の概報、1982年の本報告としてまとめられている。初年度である昭和54年度（第1次調査）では窯尻を含めた9室が、更に翌年度（第2次調査）には6室が調査され、焼成室14・焚口1の15室からなる連房式登窯の全容が明らかとなつた。その規模は全長46.5m、焚口から窯尻までの比高差15mという長大なものである。焚口前面の平坦面では石組み遺構が確認された。これはその位置から考えて窯祭祀に関する遺構かと想定される。また窯本体の1・2室の東側にあるテラス面が調査され、その遺物の出土状況等から焼成品の選別場としての機能が想定された。昭和56年は窯正面にある工房推定地の発掘調査が実施された（第3次調査）。その結果、建物跡や土壌群が検出された。土壌には粘土や釉の原料とみられる炭化物を貯蔵したものと考えられるものがあり、工房としての性格が検証された。

ダム建設が本格的に動き出すと内ヶ磯窯跡の調査は再開された。平成7年度からの調査（第4～6次調査）では工房部の精査が実施された。第3次調査では調査区の関係で全容が確認できなかった建物群について、その続きを確認することができ、粘土土壌をはじめとする土壌群も検出され、より工房部の実態が明らかとなった。工房部は福地川の氾濫や水田造成により削平が加わっているものの、乱掘から免れることにより良好な資料を得ることができた。これらの成果は、昨年度刊行の報告書にまとめられているが、報告が間に合わなかった遺物について今回の報告書に収録している。

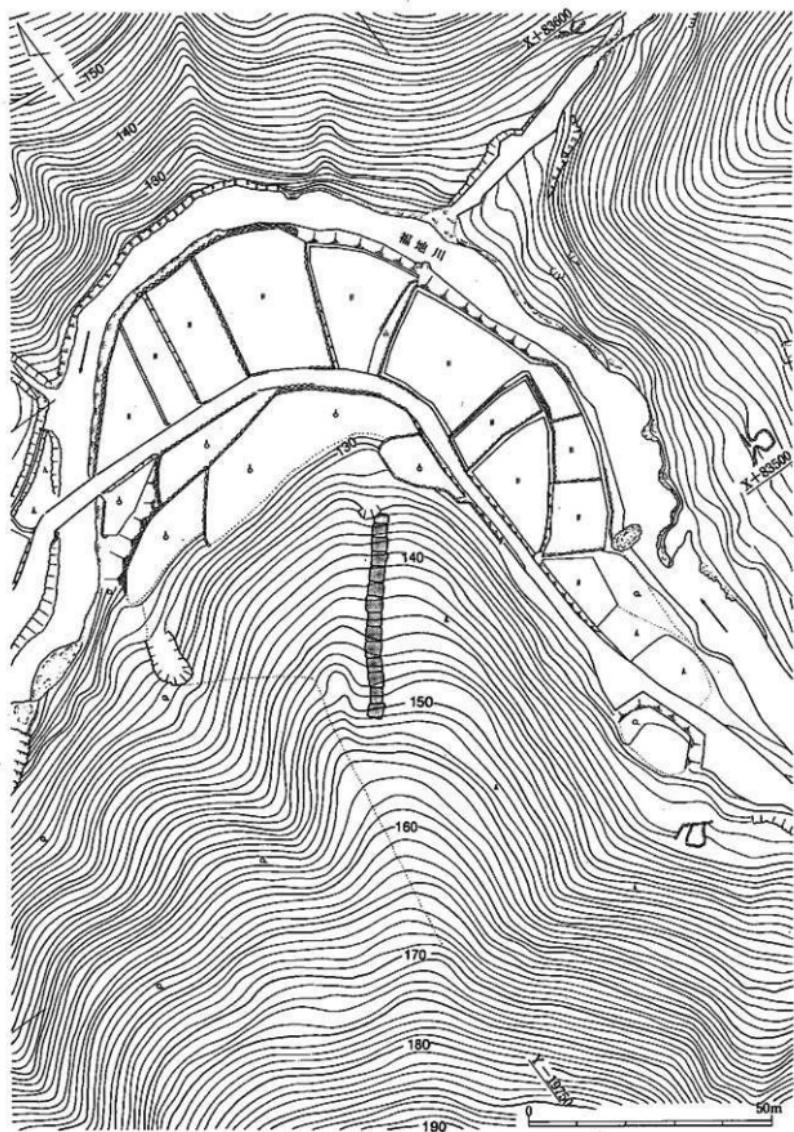
今回報告する調査区は平成10年度に実施した窯の西側物原（陶片堆積地域）であり、昭和54年からの第1・2次調査時にはごく一部にトレンチ調査が実施されている。窯周辺での作業場や物原の堆積状況の把握が確認され、来年度報告予定の東側物原の調査成果を含めると、窯本体-工房-物原といった窯を構成する全ての要素が把握できることになり、大変貴重な成果がもたらされるものと期待される。

古高取関連主要文献

- 岸本主編 2001 「内ヶ磯窯跡」Ⅰ 福岡県文化財調査報告書第163集
木下修編 1980 「内ヶ磯窯跡」Ⅰ 直方市文化財調査報告書第2集
木下修編 1981 「内ヶ磯窯跡」Ⅱ 直方市文化財調査報告書第3集
柄内禮次 1935 「古高取山窯」
副島邦弘・木下修編 1982 「内ヶ磯窯跡」 直方市文化財調査報告書第4集
副島邦弘編 1983 「永満寺宅間窯跡」 直方市文化財調査報告書第5集
高取静山編 1979 「高取家文書」 雄山閣
中山平次郎 1915 「高取焼最古の二窯址と其の遺物」『考古学雑誌』第5巻第6号
西田宏子・尾崎直人編 1992 「筑前高取焼」 福岡県史文化史料編



第17図 内ヶ磯塚跡実測図 (1/300)
副島邦弘・木下修編 1982 「内ヶ磯塚跡」直方市文化財調査報告書第4集を改変



第18図 内ヶ磯跡周辺地形測量図 (1/1,000)

IV 西物原の調査

1 調査の概要

平成10年度の調査は、先に調査の経緯でも記した通り、工事用道路拡幅の関係で東物原の裾部から開始した。東物原裾は陶片の散布が認められる東端から発掘調査を行い、地形に沿って西へと進めた。調査は窯の前面裾を経て7月22日には西物原部分へ至ったが、ここから先は西物原の調査としてグリッド調査へと切り替えた。東物原裾及び窯正面部裾の調査区に関しては東物原として平成14年度に調査成果を報告する予定である。

西物原のグリッドの設定は、平面的に規則正しく組むのではなく、地形に沿って一辺約4mを目処に設定した(第22図)。調査を行った順番にグリッド番号を付し、「西1グリッド」というように名付けた。調査が裾部から横へ進みつつ山のほうへ上るという経過を辿るために番号も下から上へという順番になっているが、一部不規則になっている箇所もある。最終的には33グリッドの調査を実施することとなった。

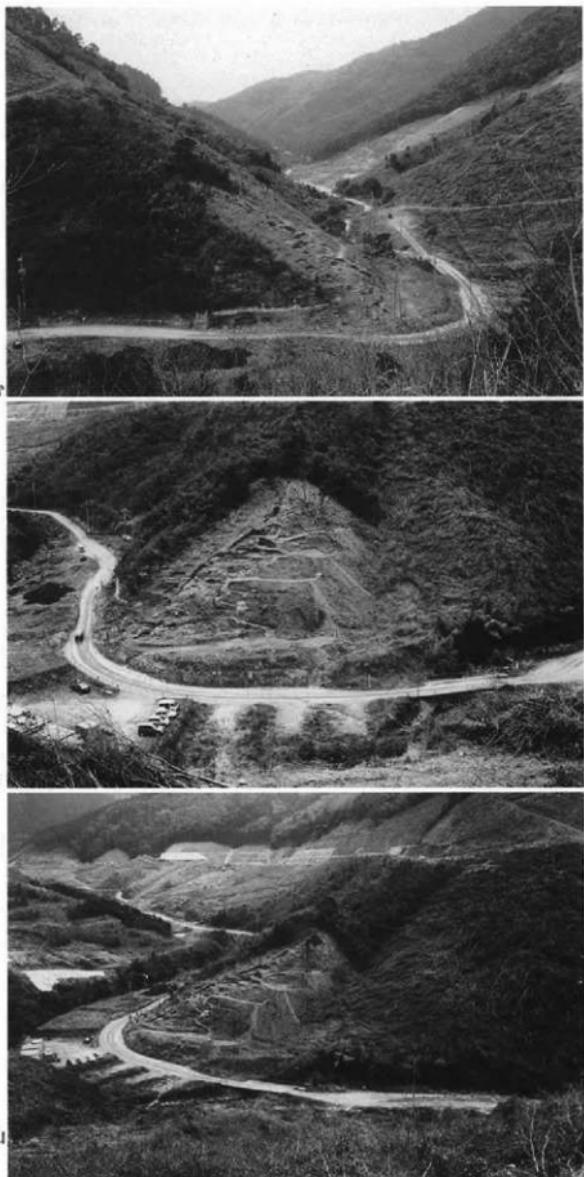
遺物は極めて多量に出土し、一日で45箱分もの陶片が出土したときもあった。最終的には東物原裾部と合わせて約2,000箱の遺物が出土した。遺物の出土状況は、昨年度報告の工房部と比較すると非常に悪い状況であった。というのも、工房部は水田として近年まで土地が利用されていたために盗掘から免れていたのである。それに対して物原部分は随所に大規模な盗掘が行われており、盗掘を受けていない部分は皆無であった。また盗掘を受けていない小部分があったとしても周囲が盗掘によって荒らされているために遺構検出は困難を極めた。更に条件の悪いことに、竹の根が縦横に走り、堆積中には転落してきた巨石が含まれているなど掘削作業自体も厳しいものであった。しかし現場作業においては大きな事故もなく無事に終了できたことは喜ぶべきことである。



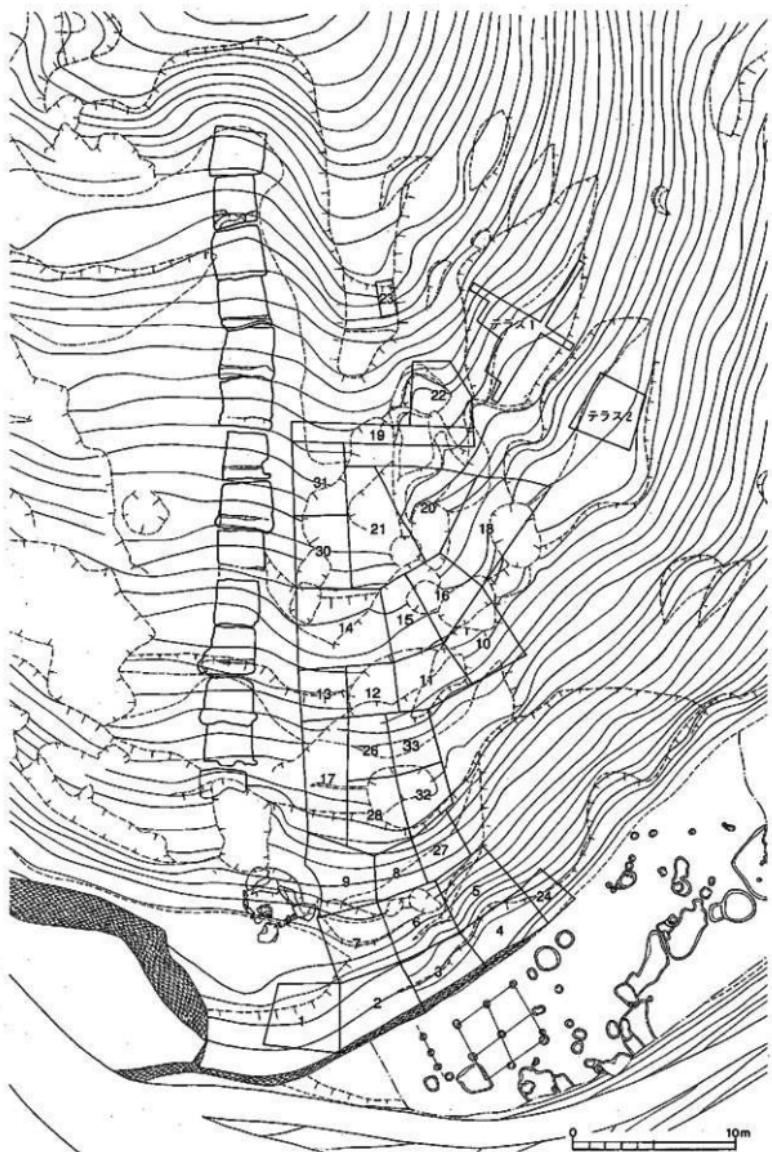
第19図 内ヶ磯窯跡全景（7次調査時・工房部から）



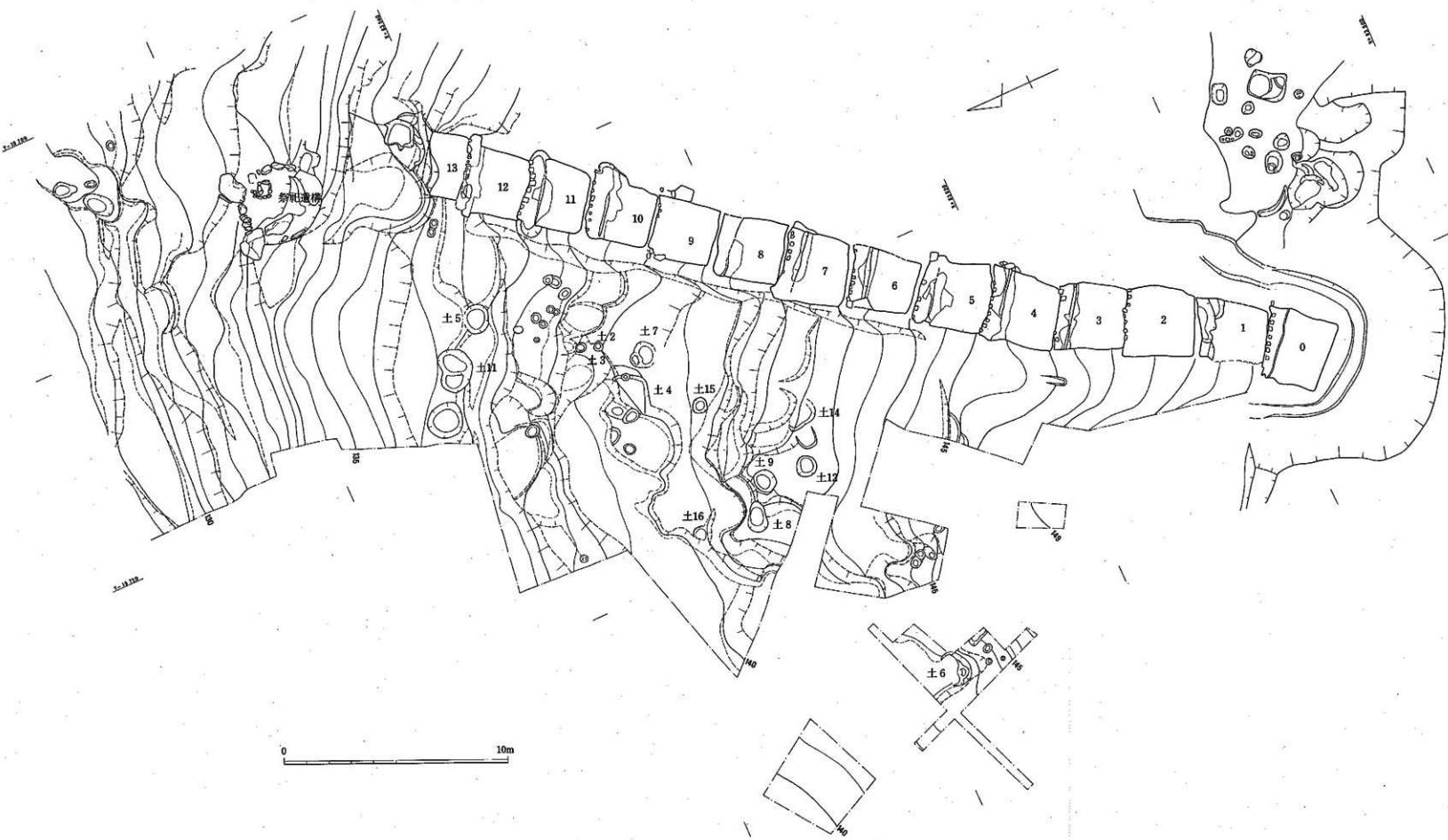
第20図 内ヶ磯窓跡 西物原地形測量図 (1/300)



第21図 内ヶ磯窓跡全景（7次調査時）



第22図 グリッド配置図 (1/300)



第23図 内ヶ磯窓跡 西物原遺構配置図 (1/150)

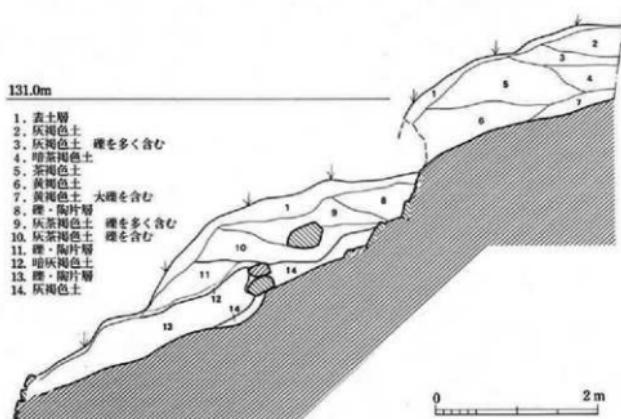
2 グリッド調査の成果

内ヶ磯窯は急斜面に築かれているために、操業当時から陶片の堆積の崩落・転落は常にあったとみられ、現在の堆積の順番がそのまま新旧を示しているとは考えがたい。またそれに盗掘の擾乱土の堆積・自然崩壊が加わっているために更に複雑な堆積になっている。したがって層位的な取り上げは、一部を除いては断念した。

操業当時の堆積は、西14グリッドの一部で認められた。西14グリッドの下層はよく締まった黄褐色土であり、色調は地山に近いものである。調査の際にも地山と考え掘削を止めていた部分であるが、更に下層に旧表土らしい灰褐色土が盗掘の断面に確認できることと、ごく一部に陶片が



第24図 西物原の堆積状況（西2-3グリッド間）



第25図 西3-6グリッド東壁土層図 (1/60)

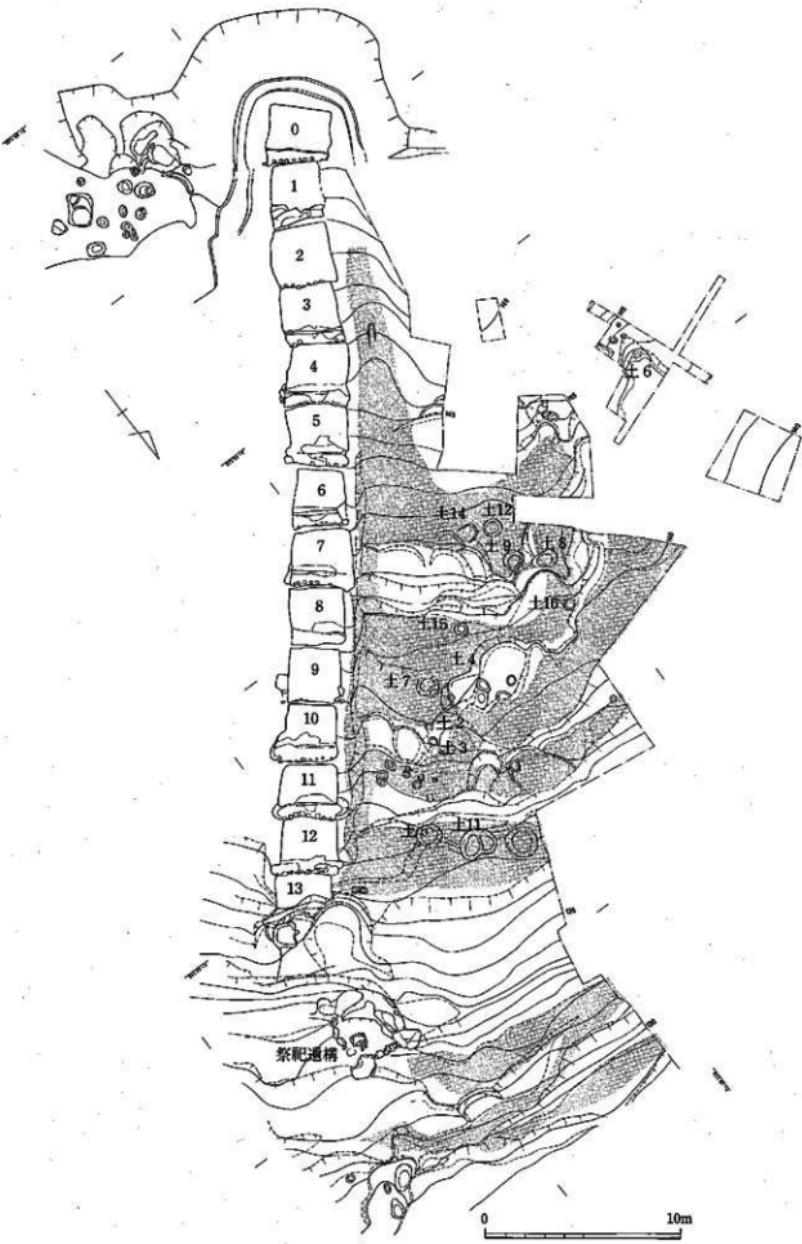


西3～7グリッド付近
(東から)

西10～16グリッド付近
(東から)

西13・14グリッド付近
(北西から)

第26図 西物原の作業場・通路状遺構



第27図 西物原作業場・通路の復元 (1/250)

を観かせていていたことで、包含層と判断し調査を行った。その結果、パンケース6箱分程度の陶片が出土した。陶片は小皿が多く、片口・擂鉢等が含まれる。特徴的なのは使用される釉が土灰釉が大勢を占める点である。これは小皿に限ったことではなく、片口や擂鉢にも言えることである。片口・擂鉢は他の調査区で出土するものの大半が鉄釉・胎釉であるのに対し、対照的な状況を呈している。西14グリッドの遺物は、復元作業が中途になったために、細かな検討は来年度報告時に行いたいと考えている。

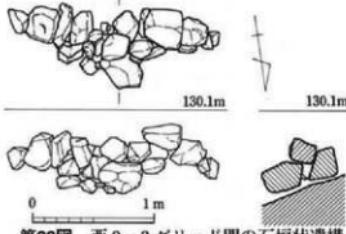
また堆積状況は本来のものとは考えがたかったが、西1グリッドでは、一部茶褐色に発色する艶のある墓灰釉の製品が多く出土し、他のグリッドでは出土しない状況とは対照をなすものであった。その他にも茶入や茶壺は窯の裾部近くでしか出土しない傾向がある。こうした器種別の出土の傾向についても来年度に検討したい課題である。

内ヶ磯窯跡物原の調査に対しては、「この急斜面に築かれた窯に対して、どのようにアクセスしたのか」という疑問にも答える必要があった。調査前には木にぶら下がるような感じで登る部分もあったが、この斜面に製品を運び込むのには何らかのルートがないと無理である。そのルートをみつけることが課題であった。その結果、

急斜面部においては、斜面を削り出して作られた九十九折りの道が確認でき（第27図）、階段状の施設は見出せなかった。

西2-3グリッド付近においては石垣状の遺構が確認できた。これはその前後に通路状の遺構が統一しているために、崖状になった部分に対して通路を平坦にするために組まれた石垣であると考えられる。

窯本体の周辺においてはある程度の平坦地をつ



第28図 西2-3グリッド間の石垣状遺構
実測図 (1/40)

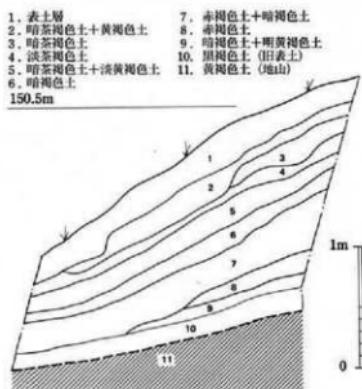


第29図 西2-3グリッド間の石垣状遺構（北から）

くり出し、作業場のスペースとしており、土壤の存在も確認できた。土壤は大部分が粘土土壤である。表土層の掘削中にも随所で粘土ブロックが出土したが、おそらく検出されたもの以外に盗掘等により壊された粘土土壤が多くあったものと推測される。

3 土手状造構の調査

土手状造構とは窯尻付近の西側にある高まりで、背後にある丘陵から伸びてくる尾根状を呈するものである。これについては第2次調査時にトレンチ調査が為され、人為的なものであることが確認された。今回はこれまでの調査成果を深める意味で、土手状造構の先端部に小トレンチを設定し（西23グリッド）、調査を実施した。調査の結果、堆積は地形に沿う形で形成される盛土が確認された。すなわち土手状造構はその先端まで盛土であることが確認された。盛土は地山を削りだしたような褐色土が基本をなす。出土する遺物は少なく、そのほとんどが表土層もしくはそれよりやや下層からのものであり、旧表土付近では皆無である。このことから、この土手状造構は窯築造段階に築かれたものであることが確認され、窯尻付近の掘削時にでた土を盛ったものかとみられる。つまり今回の調査は第2次調査の成果を追認するものとなった。その機能については、窯の火の回り方等に影響を及ぼすことが考えられるが、窯業技術の観点や他地域の窯との比較が求められる。



第30図 土手状造構縦断面土層図 (1/40)



第31図 土手状造構縦断面堆積状況 (北西から)

4 テラス部の調査

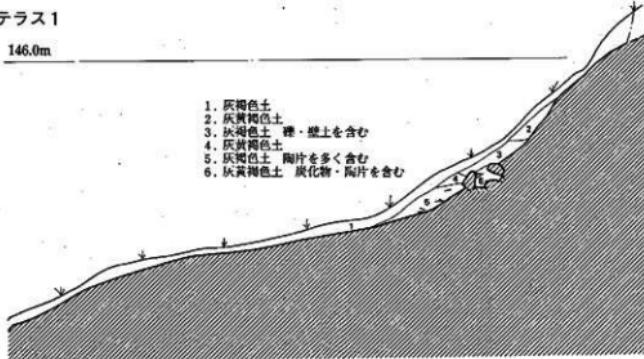
グリッドの設定に際しては窓本体を中心として規則的に西物原部分に設定したが、西物原には自然地形とするにはやや不自然なテラス状の地形が認められたために、その部分にはトレンチを設定して調査を実施した。第1次調査時には窓戸の東側に展開するテラス部が調査され、製品選別場の性格が考えられる遺物の出土状況が確認された。今回も同様の成果が期待されたが、調査の結果特異な状況は認められず、遺物は後述する包含層のものと一括して報告を行っている。

テラス1 (第32・33図)

西物原の標高143.7m付近、窓本体から約14m離れた地点に広がる12×5m程度の比較的斜面が緩やかになった部分。南北及び東西にトレンチを設定した。南北トレンチは背後の斜面を含む7mのもの、東西トレンチは地形に並行するテラス状部の中央に設定した。その結果、斜面から緩斜面への変換点部分付近に遺物が集中して出土し、その部分を拡張して遺構確認を行った。遺物は、パンケース13箱程度出土した。器種には甕・鉢・瓶・大皿・片口が含まれ、その特徴として胎釉を施すものが多いこと・大形器種が多いこと・焼成温度が上がり過ぎたせいか膨れたり爛れたりするものが多いこと等があげられる。比較的遺物及び疊が集中する部分を確認し土壌とみなしたが（土壌6）、遺構の肩が不明瞭であることや、出土遺物がトレンチ出土遺物と多く接合する

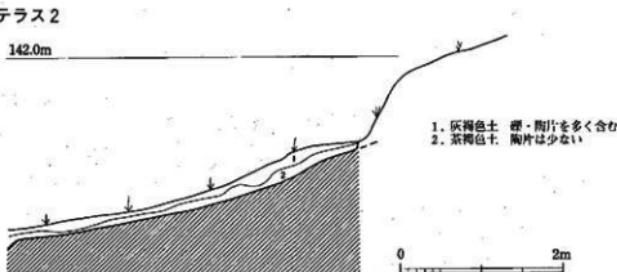
テラス1

146.0m



テラス2

142.0m



第32図 西物原テラス1・2南北トレンチ土層図 (1/60)

こと、遺物の特徴としてテラス全体で出土するものと傾向が近似することなどから、単なる遺物溜まりの可能性がある。

テラス2（第32・33図）

テラス1よりも北側に下った地点、すなわち標高140.2m付近、窯本体から約20m離れた地点にある。8×4m程度の比較的斜面が緩やかになった部分。ほぼ中央に3×4mのグリッドを設定した。調査の結果、15cm程度の表土の下は地山が広がり、遺構は確認されなかった。遺物も多くなくパンケース1箱に留まる。したがって、テラス2は人為的な可能性は低く、また遺物量からみてもこの部分に関しては物原の堆積は延びていないものと判断された。



西物原テラス1
(北から)



西物原テラス2
(南から)

第33図 西物原テラス1・2

5 検出された遺構

西物原で検出された遺構は合計14基である。浅い落ち込み・盗掘坑の可能性が高いものと判断された土壙10・13は欠番としている。

西物原土壙1 (第34-35図)

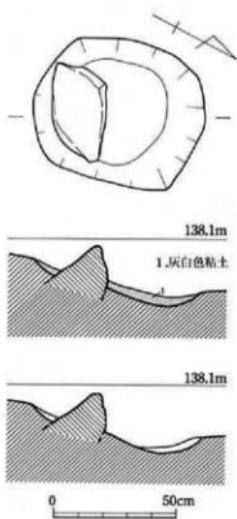
西11グリッドに位置し、窓本体11室から約9m離れた地点にある。地山を削りだした狭い平坦部にあり、70×60cmの円形をなす。深さは5cm程度とごく浅い。灰白色のシルト質土が堆積しているが、粘性は弱い。中央付近には地山の石が露出する。遺物は出土しなかった。

西物原土壙2 (第36-38図)

西14グリッドに位置し、窓本体10室から約4.5m離れた地点にある。西側の盗掘坑を清掃している際にその断面に確認されたものである。包含層に切り込む粘土土壙であり、径40cmの小さい円形をなす。粘土は灰白色で、赤褐色粘土を小量含む。遺物は小ビニール袋1程度で少ない。擂鉢や皿・水指の小片が出土した。

出土遺物 (第37図)

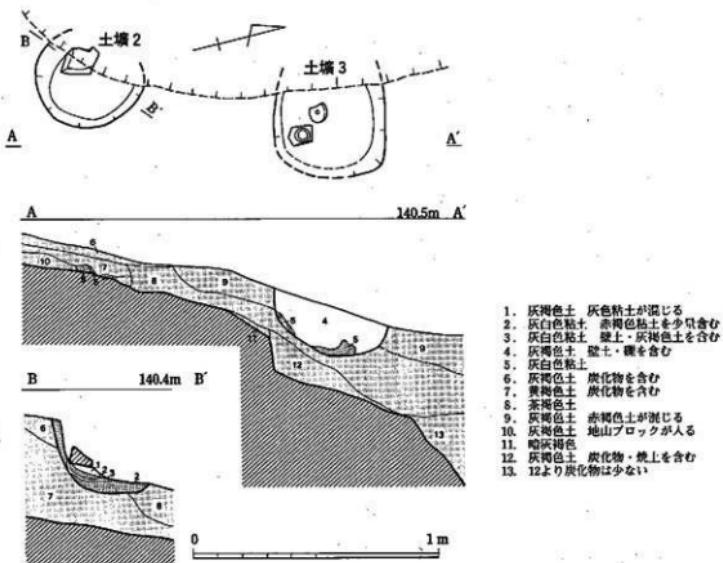
1は壺形の水指。口縁端部内面には溝みをつけて蓋受とする。外面には壁土が多量に付着する。薬灰釉が掛けられる。2は素焼の小皿。



第34図 西物原土壙1実測図 (1/20)



第35図 西物原土壙1半裁状況 (東から)



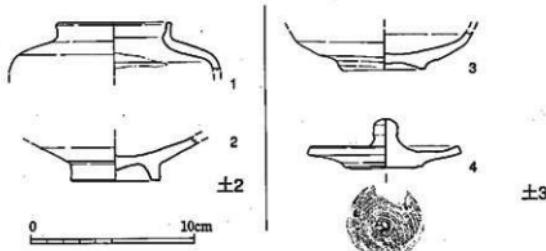
第36図 西物原土壤2・3実測図 (1/20)

西物原土壤3 (第36・38図)

土壤2の60cm北側で検出されたもの。径45cm程度の円形と見られる。土壤2と同じく、包含層に切り込む土壤である。底面付近に灰白色粘土が残っており、堆積土には壁土や礫が多く含まれる。粘土土壤使用後に壁土などを放り込んだものであろう。遺物は中ビニル袋1程度で少ない。皿・擂鉢の小片と蓋・胎土目が出土した。

出土遺物 (第37図)

3・4はいずれも土壤底面にて出土した。3は素焼の小皿。4は蓋で底面に糸切痕を残す。体部上面にごくわずかに点々と釉がイッチン掛け状に付くが発色しない。



第37図 西物原土壤2・3出土遺物実測図 (1/3)

西物原土壤 2

検出状況

(西から)



西物原土壤 2

完掘状況

(西から)



西物原土壤 3

遺物出土状況

(西から)



第38図 西物原土壤 2・3

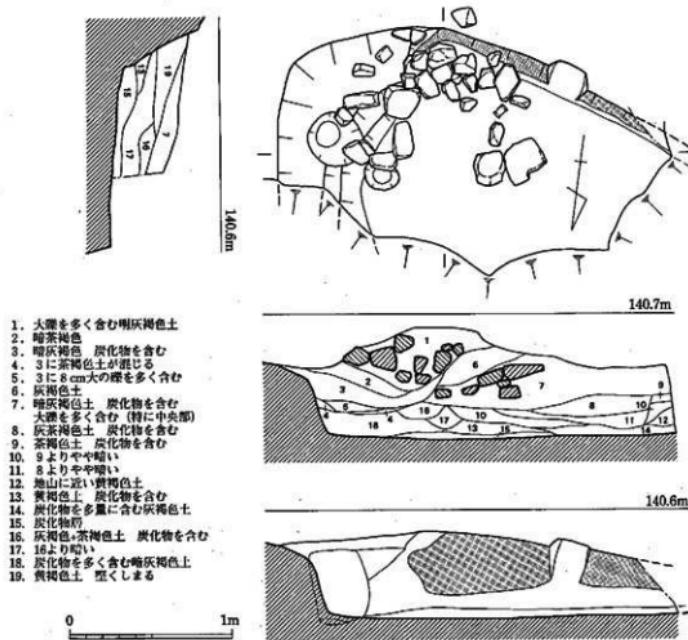
西物原土壤4（第39・41図）

西14グリッドに位置し、窯本体9室から約5m離れた地点にある。長方形の土壌であり、北から西側へかけては盗掘坑により壊されているが、 $2 \times 1.5\text{m}$ 程度の規模になるものとみられる。壁面の上位は火を受けて焼け縮まっているが、底面近くは焼けていない。また長辺の一部に一段広がる部分があり、この部分に関しては火を受けていない。底面はほぼ平坦であり、焼土は見られるものの焼き縮まる部分は認められない。堆積は上層が砾を多く含む灰褐色土層、その下層には炭化物を含む茶褐色土層、そして最下層に炭化物層がある。遺物は上層の砾を多く含む層からのみ出土し、下層からは全く出土しない。したがって土壌4は内ヶ崎窯操業以前の土壌の可能性がある。

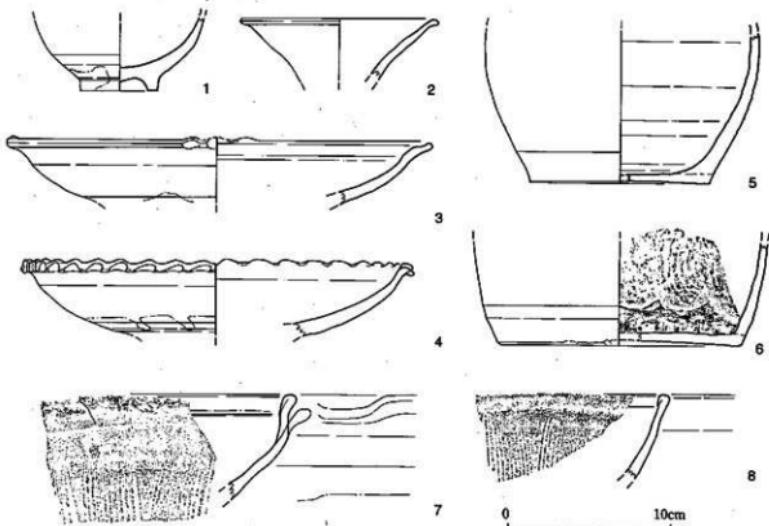
出土遺物（第40図）

上層砾層からパンケースに約半分埋まる破片が出土した。器種はやや小振りの瓶が目立ち、実測に絶えないものを含め最低でも5個体ある。その他には楕・皿・擂鉢・片口が出土した。

1は丸形の碗。葉灰釉が掛けられる。2は細い頸部から大きく開く口縁部を有するもので、瓶であろうか。天地が逆で高杯の脚となるかもしれない。土灰釉を掛け浅緑～乳白色の発色。3・4はともに葉灰釉を掛ける中皿である。3は口縁部の四方向を数ヶ所摘み上げる。4は全周にわたりて線なぶりを施す。5・6は瓶或いは甕の底部であるが、瓶の口頭部の小片が出土している



第39図 西物原土壤4実測図（1/30）



第40図 西物原土壤4出土遺物実測図 (1/3)

ので概の可能性が高いと考える。両者とも素焼であり、5は内面に比較的強い輪轍目が走り、6はタカキ当て具痕である青海波文を残す。7は擂鉢で片口部を含む破片である。鉛釉と見られる釉を施すが発色は悪い。8も擂鉢であるが、口縁端部を内側へ短く折り込んで丸く仕上げ、内面は口縁部際まで擂目をいれるもので、珍しい形態である。

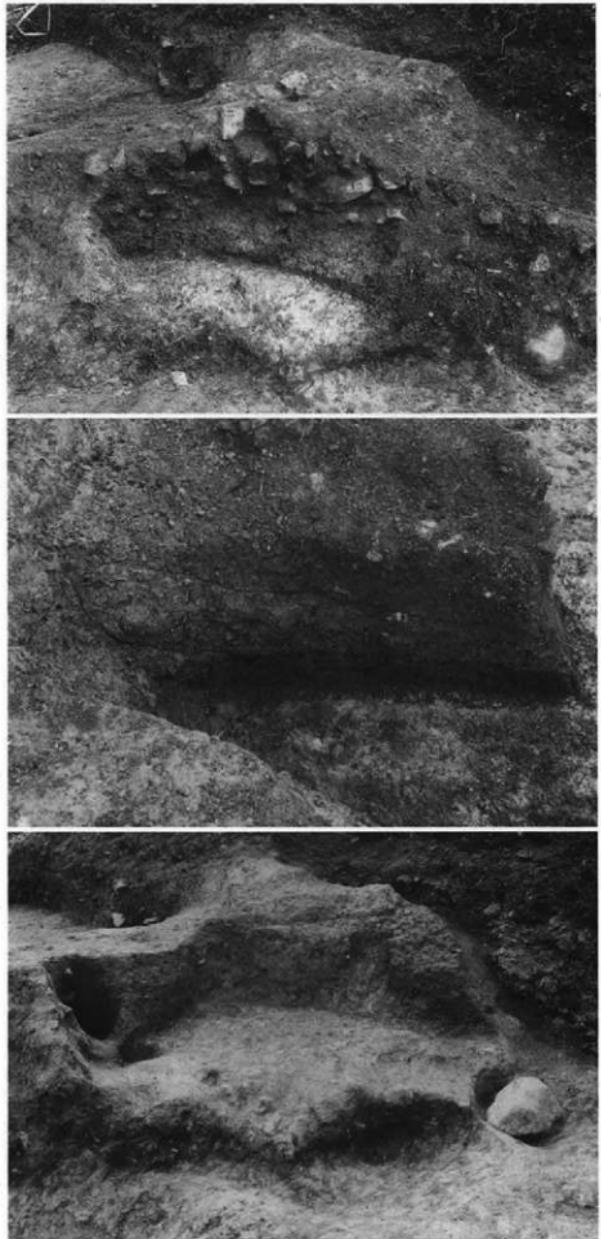
西物原土壤5（第42・43図）

西17グリッドに位置し、窯本体12室から約4m離れた地点にある。径1.45mの円形で堆積は約30cmある。北側の一部が盗掘坑によって壊されている。また土壇内の南端に上から切り込んだ小ピットがあり、これには焼土・胎土目が詰まっていた。土壇の堆積は上層の若干の灰褐色土を除き、厚い灰白色粘土層であり、上層のほうが黄褐色を帯びる。

土壇の下層には灰褐色の包含層があり、この層の資料は土壇5より古いと判断できる。

出土遺物（第44図）

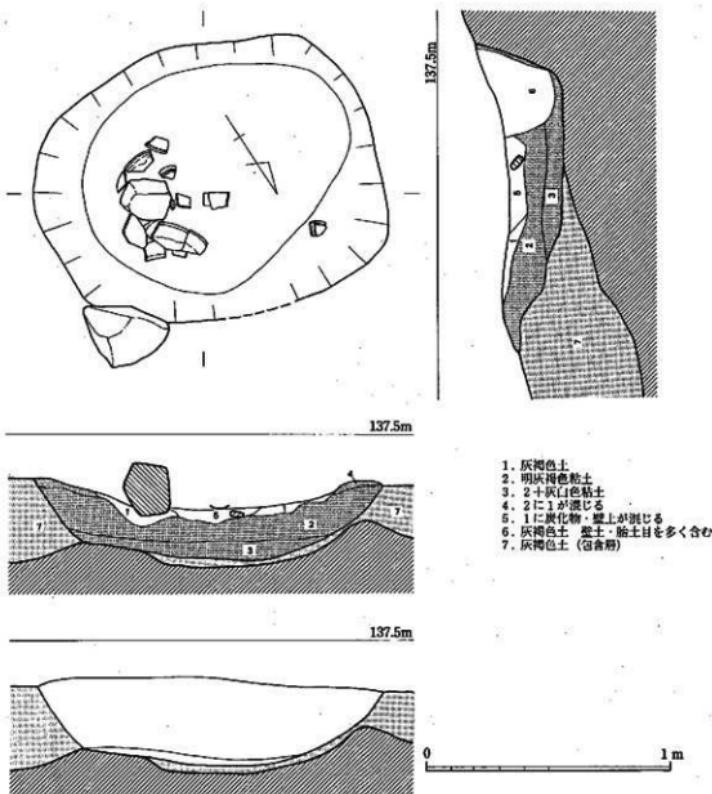
上層の灰褐色土からはパンケース1箱程度の遺物が出土した。器種には椀・皿・甕・擂鉢がある。1・2は小皿。1は鉛釉を掛ける縁付形、2は土灰釉を掛ける縁反形のもので、両者とも端部をわずかに内湾させる。3は深い体部を有する椀。上灰釉で浅緑～乳濁色となる。4は中皿で縁付形の形態。口縁部は断面匙状に内湾させる。釉は鉄釉で、茶入に良く見られる茶褐色を呈する。5は擂鉢で口縁部を折り返して肥厚させた口縁部には強く2条の凹帯を巡らせる。6は大皿で口縁部は直立する縁付形で端部を強く外反させる。鉄釉が掛けられ、濃青色の海鼠釉となる。7は大型の口縁部であるが歪みが大きく怪は出し得ない。口縁部は内面に折り込んで密着させる形状。



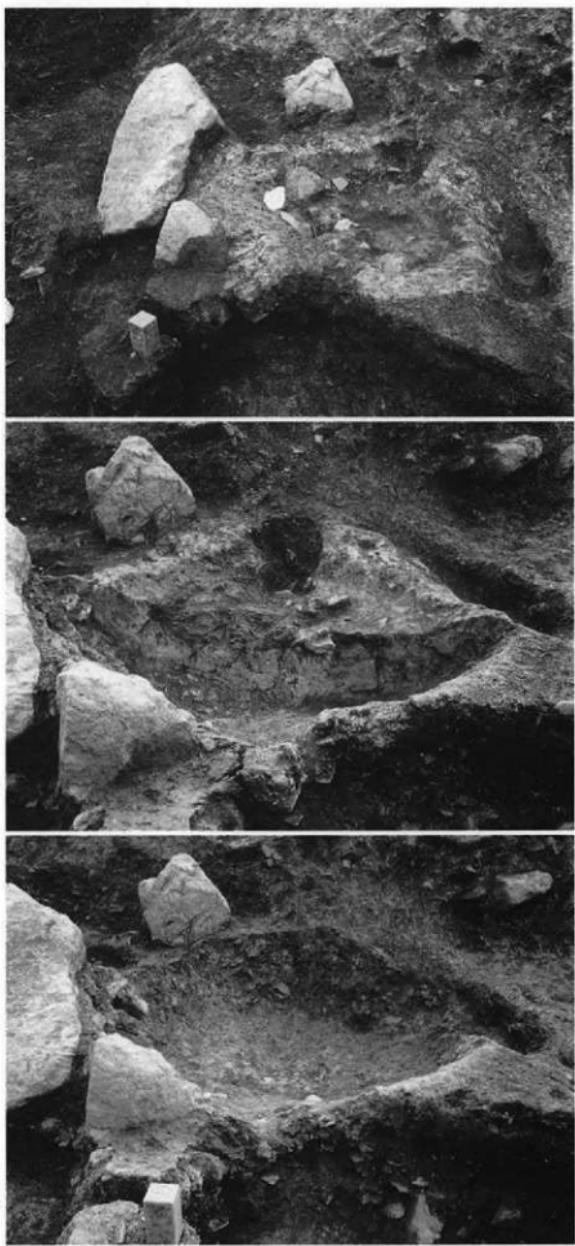
第41図 西物原土壤 4

粘土層中からも皿・瓶が30点ほど出土したが、1点の皿を除きごく小片である。8は大きく外反させる口縁部を持つ擂鉢。藁灰釉を掛け乳濁色を呈する。9は口縁部を直線的に立ち上げる小皿。口縁端部内面はわずかに窪ませる。土灰釉を掛ける。10は土灰釉を掛ける楕の小片。3に類似するが接合はしない。

土壤5の下層に広がる包含層から出土した遺物はパンケース2箱である。器種は楕・皿・甕・擂鉢がある。11は深い体部を有する大振りの楕。土灰釉を掛けオリーブ緑色を呈する。他に出土した楕の小片は全て藁灰釉であった。12は小形の筒形楕。体部には沈線を巡らせる。13~16・17は皿である。小皿・大皿とともに藁灰釉がかけられ、乳濁色に発色するものである。土灰釉のものも認められたが2点にとどまる(15)。形状は丸形のものが大部分であり、ごくわずかに縁反形の小片が認められた。丸形のもので細かく縁なぶりするものが2点認められた。18は大皿の底部。



第42図 西物原土壤5実測図 (1/20)

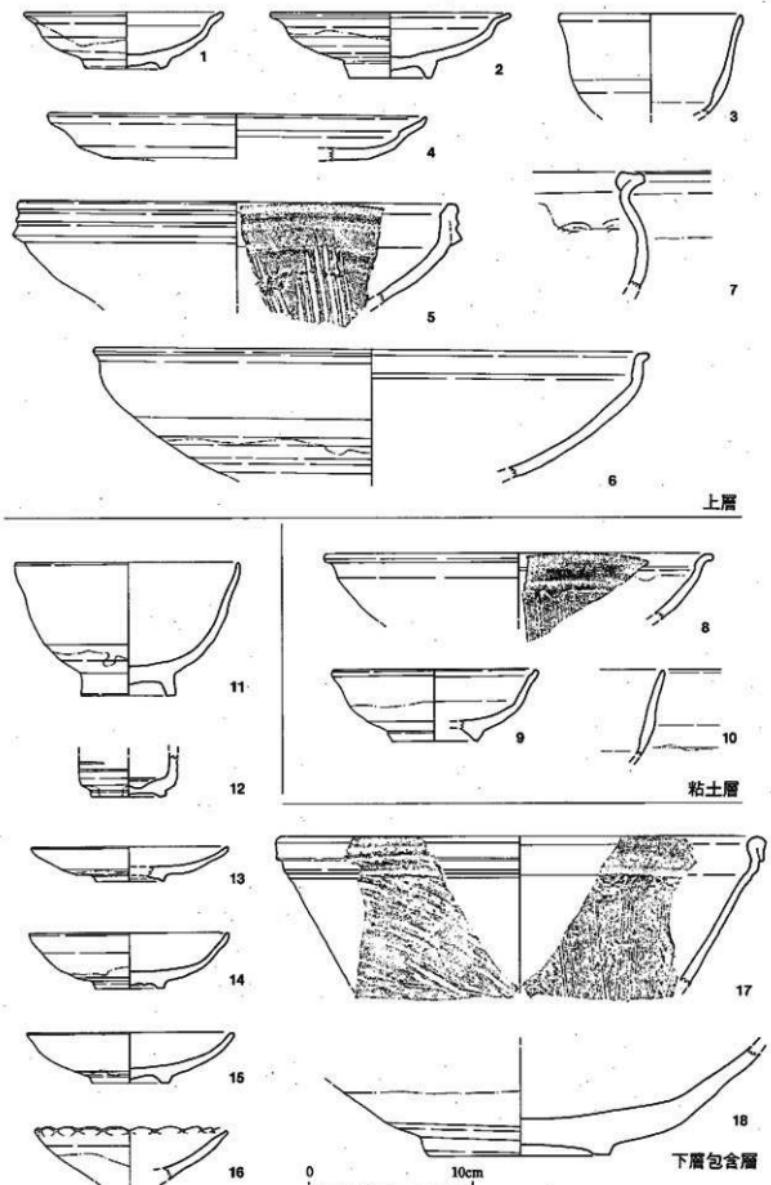


検出状況
(北から)

半裁状況
(北から)

完掘状況
(北から)

第43図 西物原土壤 5



第44図 西平原土壤5出土遺物実測図 (1/3)

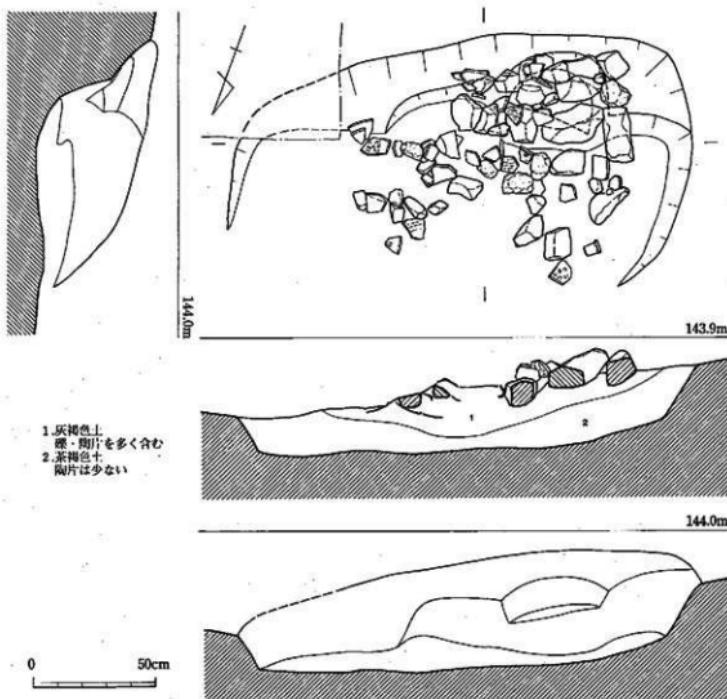
藁灰釉を掛ける。見込には4個の方形釉剥ぎを施す。17は擂鉢。直線的に開く体部をもち、口縁端部は内傾させて外側へ折り返し密着させる。タタキ成形であり、外面には平行タタキ痕、内面には当て具度である青海波文を顯著に残す。

西物原土壤 6 (第45・47図)

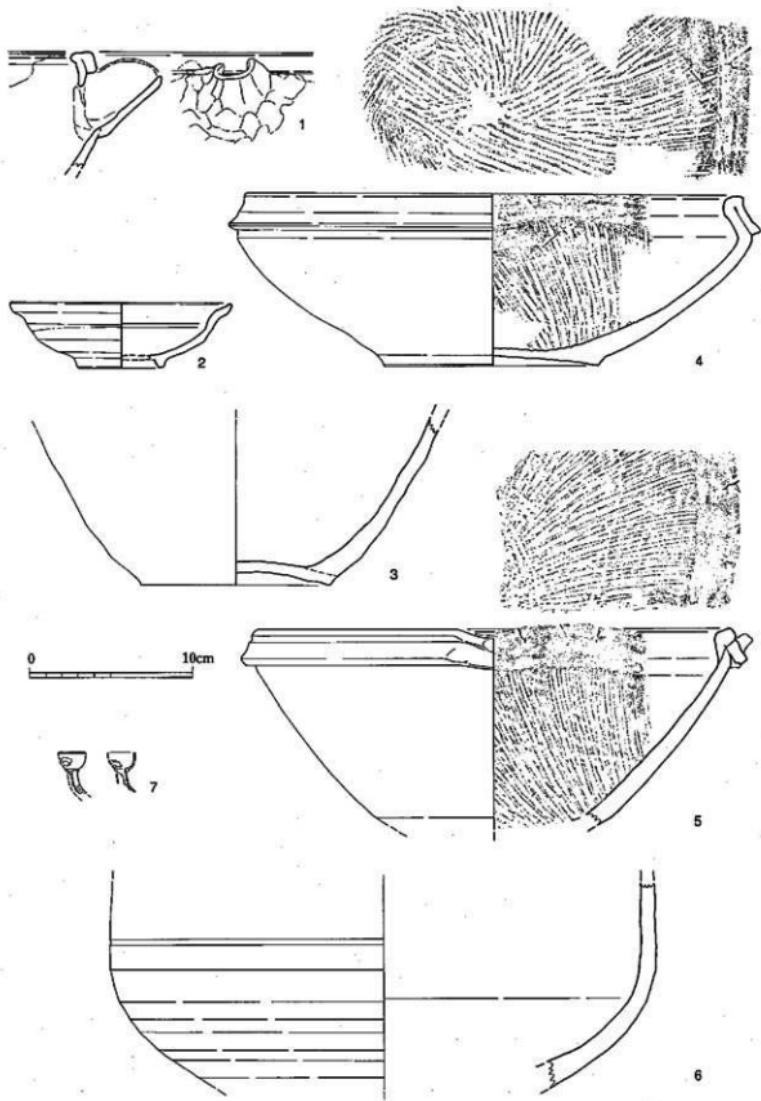
テラス1にて検出された土壌である。斜面からテラスにかけて地形が変換する地点にある。北側の肩は不明瞭である。東西1.8mを測る。遺物はパンケース1箱分が出土した。船軸が掛かる甕と擂鉢、瓶・片口等が含まれる。小物は少なく、椀の底部と小皿がわずかに出土するに過ぎない。青銅製のキセルも出土した。船軸の陶器が多い点や焼け歪みのあるものが多い点など出土遺物の諸特徴はテラス1に共通する。単なる土器溜まりの可能性もある。

出土遺物 (第46・48図)

1は片口であり、歪みが大きく径は出し得ない。口縁端部を外面に折り返し密着させるもので、端部内面を内側へ突出させる。2は縁付形の小皿で端部は内湾させる。3は甕の底部。歪みが大きく、気泡も多い。底面には焼成時に敷かれていたおがくずが残り、日への転用と見られる擂鉢



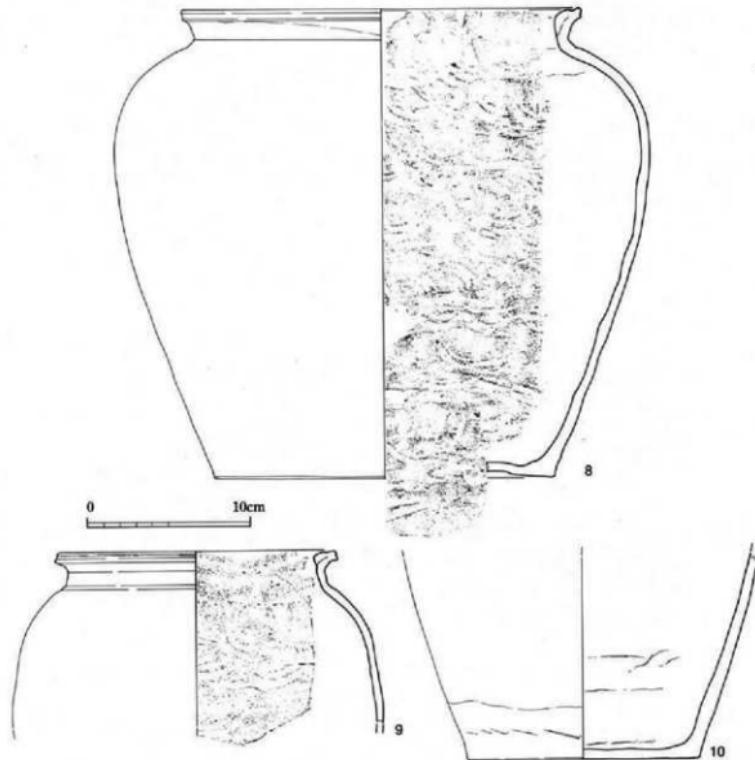
第45図 西物原土壤 6 実測図 (1/20)



第46図 西物原土壤 6 出土遺物実測図① (1/3)



第47図 西物原土壤 6 遺物出土状況（東から）



第48図 西物原土壤 6 出土遺物実測図② (1/3)

小片が付着する。4・5は擂鉢。内傾させる口縁部をもち、端部を外側に折り返し密着させた側面はシンプルであり、5は1条の沈線を巡らせる。タタキによる成形であり、内面には当て具痕である青海波文を残す。6は直立する体部を有する鉢。体部下位に沈線を巡らせる。釉は全て剥落する。7は青銅製のキセル雁首で、薄くて脆い。半球形の火皿をもち、屈曲する体部には縫合線が走る。8~10は甕。8は大形の部類に入る。

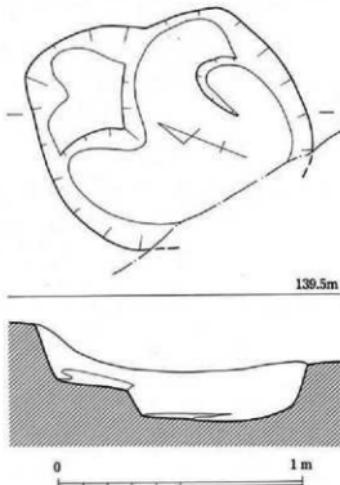
口縁端部は8・9とも内側へ折り込んで密着させるものである。

西物原土壙7（第49・50図）

西14グリッドで検出されたもので、窯本体9室から約4mの地点に位置する。南西側には隣接して土壙4が位置する。径約1.1mを測り、北側は二段掘りとなる。深さは25cm程度である。遺物は出土していない。土壙4に近く、両者共に遺物が出土しないといった共通の特色をもつことから、これらの土壙同士は性格が類するものとみられる。

西物原土壙8（第51・52図）

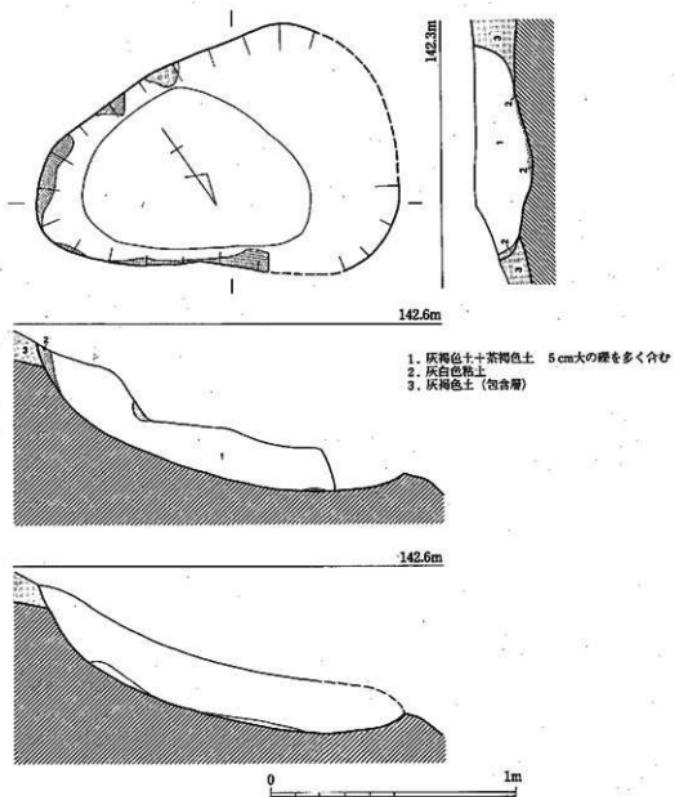
西20グリッドで検出されたもので、窯本体6室から約10m離れた地点に位置する。包含層に切り込んでいる粘土土壙で、壁・床に粘土がはりついているような状況である。したがって遺



第49図 西物原土壙7実測図 (1/20)



第50図 西物原土壙7完掘状況（北東から）



第51図 西物原土壤 8 実測図 (1/20)

構検出は困難であり、壁の粘土を頼りに線引きをしている。1.5×1m程度の楕円形土壤で、深さは20cmを測る。遺物は検出面出土のものとあわせてパンケース1箱程度である。接合しない小片がほとんどである。器種は大皿が目立ち、他に指輪・擂鉢・甕・瓶・皿・胎土目がみられる。

出土遺物 (第53図)

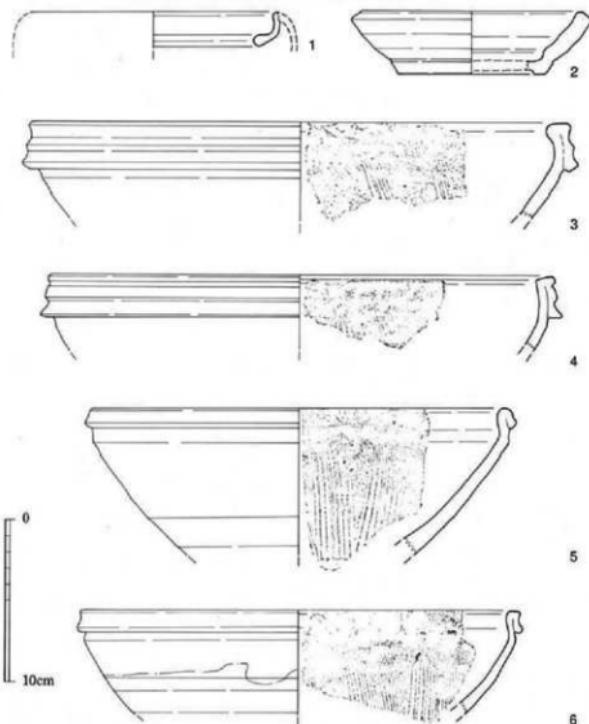
1は指輪の蓋受の小片。口縁部から大きく落としこむ形態である。2は皿状を呈するが、厚い口縁部を有し、窯道具の一種かとも思われる。内面は輪軸目が強く残る。底部は基盤底。3～6は擂鉢。いずれも口縁端部を外側へ折り返すが、3・4は口縁帶の幅が広く、2条の凹線を巡らせる。5・6は短く折り返すもの。6は胎軸を掛けるものである。

西物原土壤 9 (第54・55図)

西20グリッドで検出されたもので、窯本体6室から約9m離れた地点に位置し、北側は盗掘坑



第52図 西物原土壤 8 検出状況（北から）

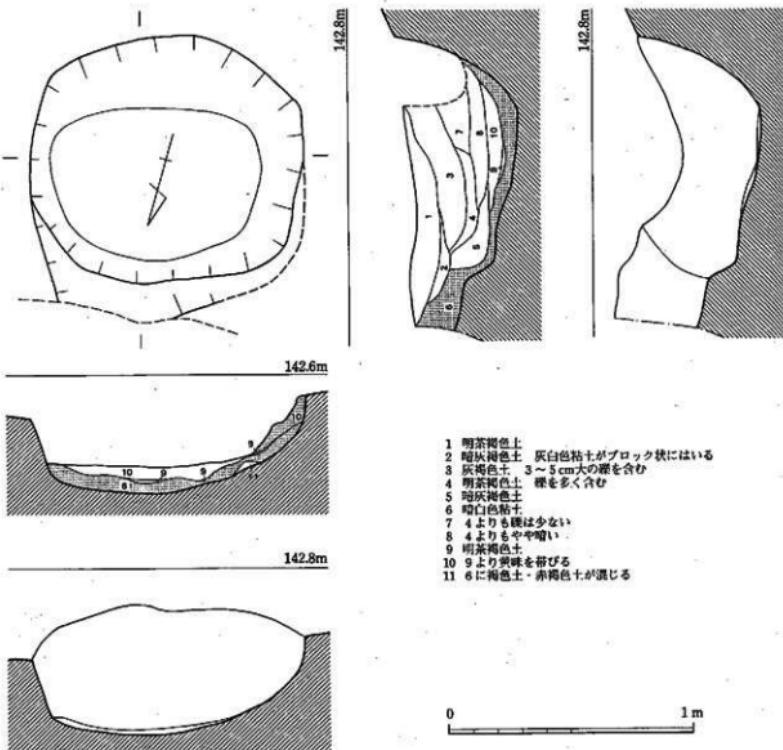


第53図 西物原土壤 8 出土遺物実測図 (1/3)

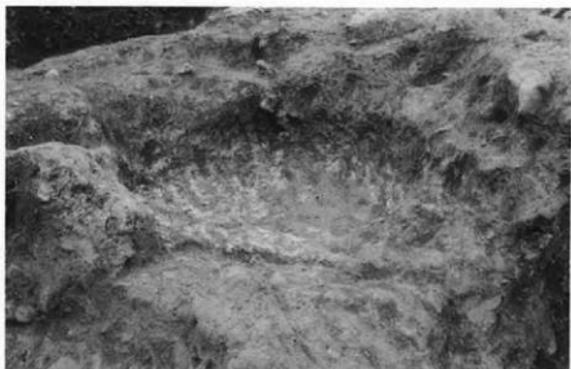
により若干削られている。径1.1mの粘土土壤である。粘土は抜かれた状態であったが、北側の壁際ではまとまった量の粘土が検出された。粘土は灰白色を呈し、混じりは比較的少ない。遺物はパンケースで1箱程度出土しているが、接合しない小片が大部分を占める。器種には水指・皿・擂鉢・甕・片口・トチン・胎土目が見られる。粘土層からは皿・甕の小片と蓋の計8点が出土した。

出土遺物（第56図）

1は盃形の水指であり、肩部には明瞭な稜をもつ。肩部に沈線を巡らせるようであるが、釉が厚く観察し難い。鉄釉が掛けられ、黒褐色を呈する。2は浅い体部を持つ中皿。緩やかに内溝する体部は口縁部にそのまま続き、端部を丸く収める。焼成台に転用されており、体部内面に焼成あるいは小皿を置いていた痕跡を残す。3・4は擂鉢。3は広い口縁帯をもつもので、側面に強い凹線を2条巡らせる。内面には蓋受状の突出をつくりだす。4は幅の狭い口縁帯をつくるもの。5は粘土層から出土した素焼の蓋である。底面には糸切痕を残すが、摩滅して観察し難い。



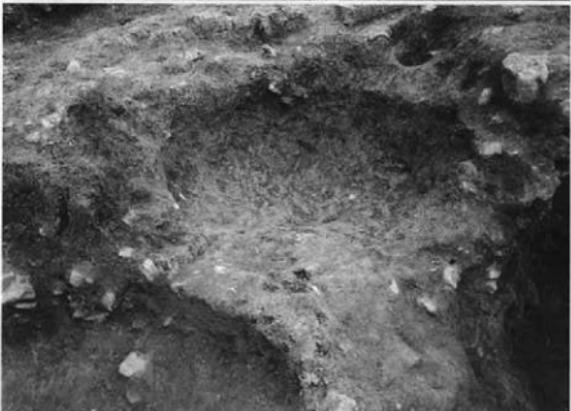
第54図 西物原土壤9実測図(1/20)



検出状況
(北西から)

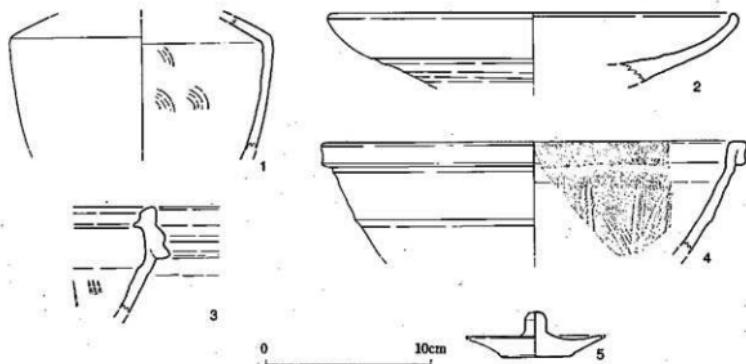


半斂状況
(北西から)



完掘状況
(北西から)

第55図 西物原土壤 9



第56図 西物原土壤9出土遺物実測図(1/3)

西物原土壤11(第57・59図)

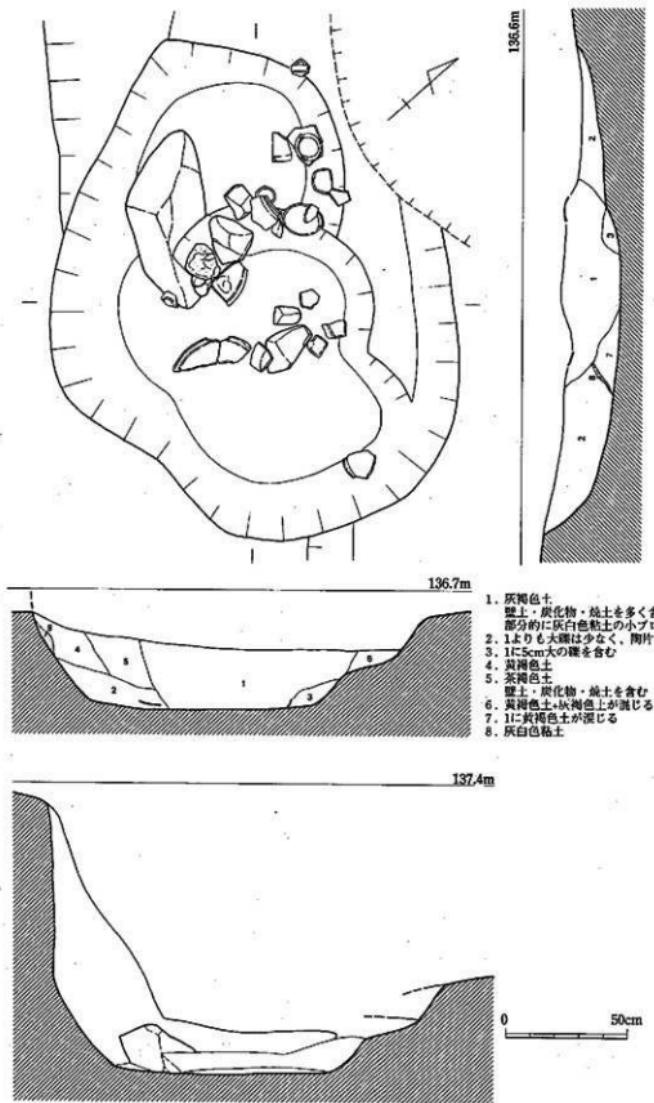
西26グリッドで検出されたもので、窯本体12室からは約7m離れた地点に位置する。南東側1mの地点には土壤5が存在する。長軸で2m強を測る土壤で、浅い二段掘りとなる。南側は崖状で高くなり、1m程度の比高差がある。西側は造構の肩が不明瞭である。北側は若干盜掘により削られる。堆積は灰褐色土であり、部分的に粘土ブロックが含まれる。遺物はパンケースで約2箱出土している。土壤としては遺物量が多い。器種には皿・椀・甕・瓶・水指・蓋・トチンがあり、比較的形になるものが多い。

出土遺物(第58・60図)

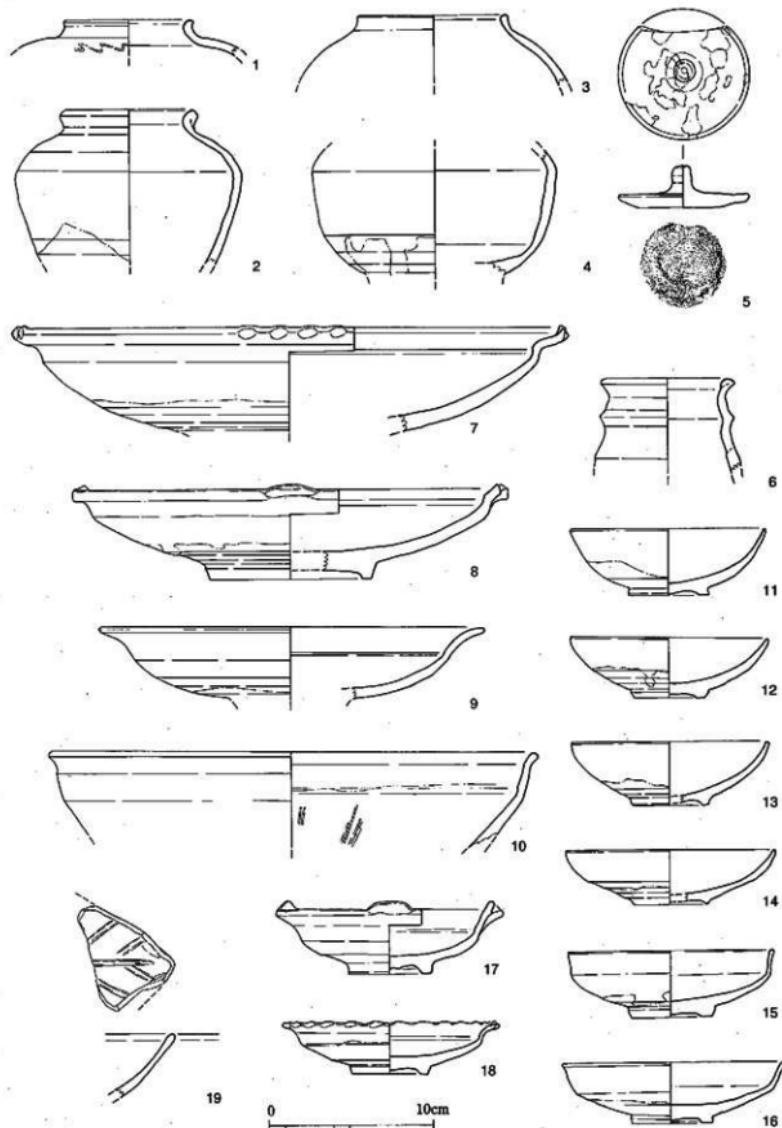
1～4は壺形の水指。口縁端部に蓋受をもたないために単に蓋とすべきか。1は肩部に波状文を巡らせる。3はなだらかな肩部を有する。5は蓋。底面に糸切痕を残すもので、上面に胎軸をイッチン掛けする。6は花生。内傾する体部をもち、突端状に屈曲を作り出す。外反する口縁部は内側へ短く折り込んで丸く仕上げる。7～9は中皿でいずれも縁付形である。7は口縁部を内湾させ、四方に4個づつ口縁端部を摘み上げる。8は広く口縁端部を押し上げるもので、1ヶ所のみ残るが、全体では4ヶ所あったものであろう。9は縁の幅が広い特徴を持つ。10は施有される擂鉢。口縁部は縁を付け外反させる。11～18は小皿。丸形が多く、15・16は縁立形である。17は縁付形で、口縁端部の四方を摘み上げる。18は縁付形で縁なぶりを施す。19は木の葉形の向付。沈線により葉脈を表現する。20は變形をなすが、法量からみて片口となろうか。口縁部は内側へ折り込む。体部はタタキ成形で、内面には当て具底である青海波文を残し、外面にもわずかであるがタタキ痕を残す。21は小振りの片口で、口縁部は20と同じく内側に折り込む。底面には綱状の圧痕を残すが、作業台にあったものなのかどうかは検討の余地がある。

西物原土壤12(第61・62図)

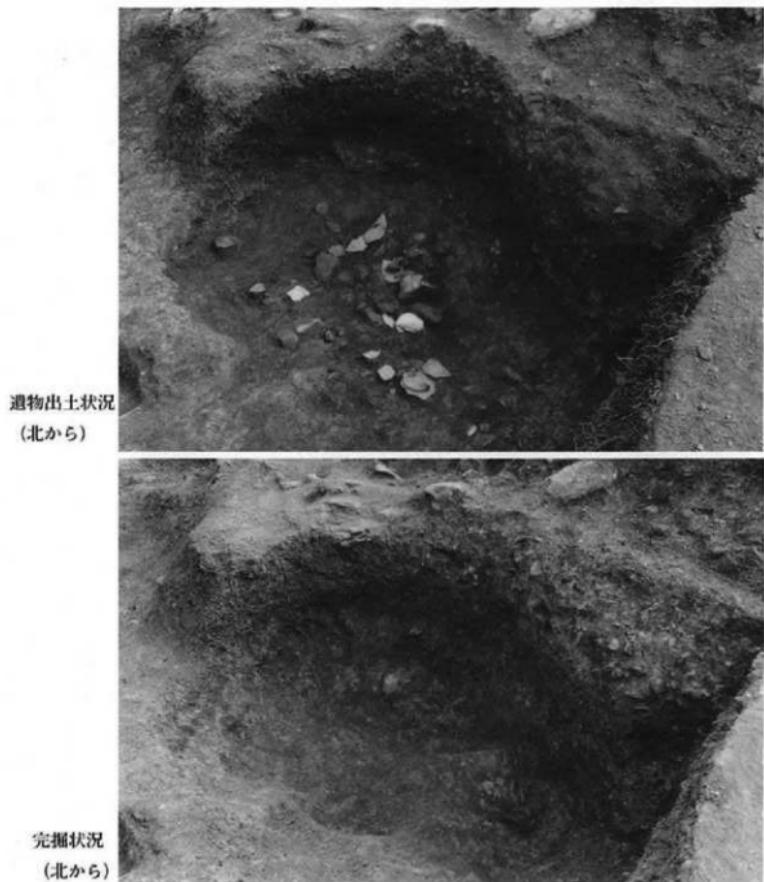
西20グリッドで検出されたもので、窯本体7室から約7m離れた地点に位置する。径90cmの円形をなし、深さは20cmを測る。堆積は、上層に灰褐色土があり、底面に貼り付形で赤褐色土を少量含む灰白色粘土がある。遺物は少なく、皿の小片が出土しているのみである。



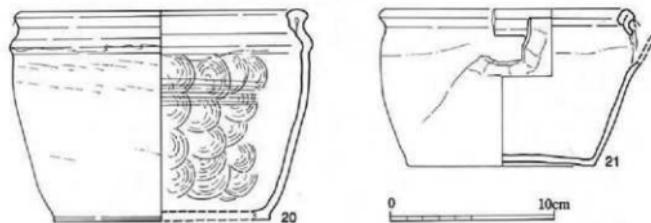
第57図 西物原土壤11実測図 (1/20)



第58圖 西周原土壤11出土遺物実測図① (1/3)



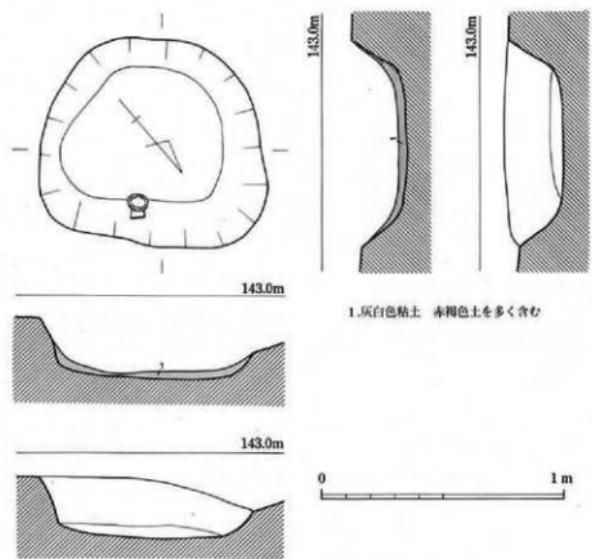
第59図 西物原土壤11



第60図 西物原土壤11出土遺物実測図② (1/3)

出土遺物（第63図）

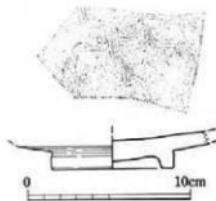
中皿の底部を一点掲載する。見込に波状文を中心から放射状に描く。焼締により硬質に焼成される。貼付高台であり、体部と高台部の断面色調が異なる。



第61図 西物原土壤12実測図（1/20）



第62図 西物原土壤12粘土面検出状況（南から）



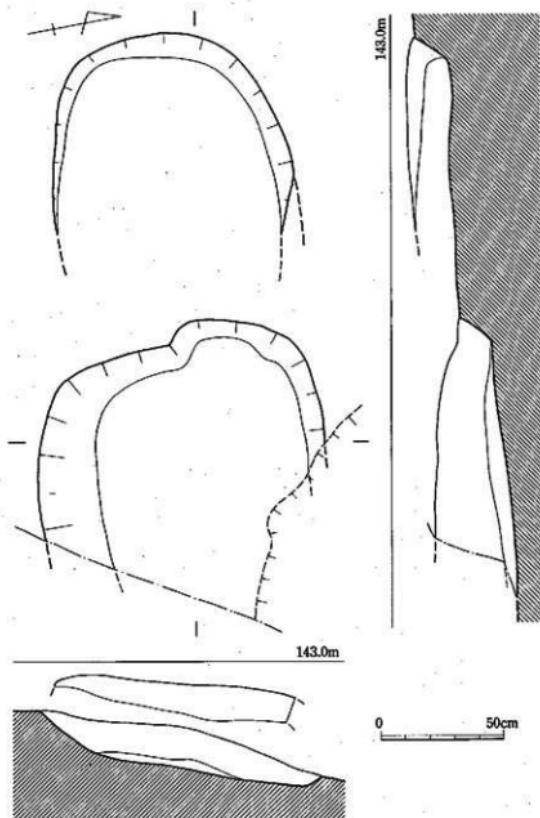
第63図 西物原土壤12
出土遺物実測図（1/3）

西物原土壤14 (第64図)

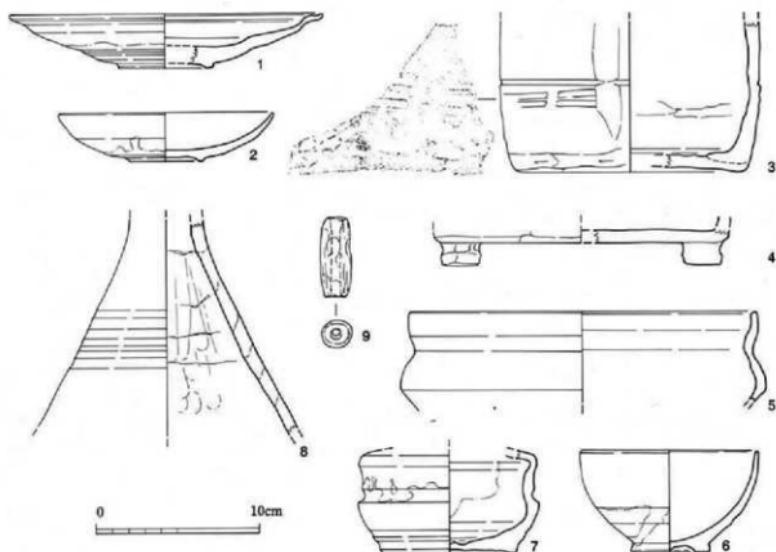
西21グリッドで検出されたもので、窯本体7室から約5m離れた地点に位置する。北西側には土壤12が隣接して存在し、土壤9も同一平坦面に含まれる。深い不整形の上部が連続するもので長軸で2.5m程度となるものとみられる。深さは深いところで30cmを測る。遺物は大形ビニール袋で1程度であり、皿・瓶・擂鉢・椀・トチン・土錐が含まれる。

出土遺物 (第60図)

1・2は浅い体部をもつ小皿。1は体部下位で一旦屈曲し、更に口縁部において縁をつくり、口縁端部は摘まみ上げる。2は丸形の皿。3・4は水指の底部。いずれも素焼で色調が類似するために同一個体の可能性が高いが接合しない。3は底部付近外面にタタキ痕である格子文が入る。また縦方向に面取りを行い形に変化を加える。4は短い円柱形の脚を有する。もう一点、同様の



第64図 西物原土壤14実測図 (1/20)



第65図 西物原土塚14出土遺物実測図 (1/3)

形態の脚が出土しているが、接合しない。5は鉢とすべきか。直立する口縁部は一旦くびれて頭部をつくり、横に張る体部に続く。6は丸形の椀。7は瓶であろうか。体部には強い凹線があり、体部上位で内側に強く屈曲させて口頭部に続くようである。藁灰釉を掛け、乳濁色に発色する。8は瓶の肩部。高頭部と体部との境は不明瞭で、強い輪轍目を巡らせることにより沈線状としている。素焼である。9は土錘。硬質に焼成される。片方の小口は粗く切られ、もう一方はまっすぐ切り取られる。



第66図 空中写真撮影作業風景

西物原土壤15 (第67・69図)

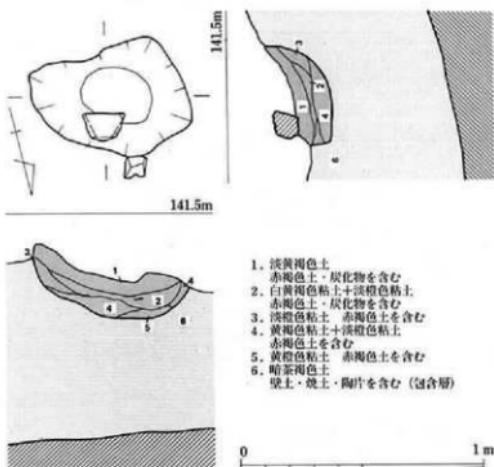
西21グリッドで検出されたもので、窓本体から約5.5m離れた地点に位置する。包含層に切りこむ径60cmを測る小形の粘土土壤である。粘土は黄褐色粘土・赤褐色粘土であり、混じりが多い。

遺物は検出面で出土したものと含め小ビニール袋1程度である。器種には皿・擂鉢・胎土目があり、1点の薬灰釉の皿を除きすべて素焼である。いずれも小片となっている。地山までは約70cmの堆積の包含層がある。

出土遺物 (第68図)

実測に耐えうる遺物は少なく、擂鉢の口縁部片を2点図化した。

1は幅広い口縁帶に2条の凹線を巡らせるもの。2は折り返した口縁を断面三角形になるように内面を強くなるもの。側面の口縁帶には1条の沈線を巡らせる。



第67図 西物原土壤15実測図 (1/20)



第68図 西物原土壤15出土遺物実測図 (1/3)



第69図 西物原土壤15半裁状況 (北から)

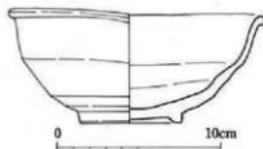
西物原土壤16 (第70・72図)

西18グリッドで検出されたもので、窯本体から約11m離れた地点に位置する。粘土土壤としては窯から比較的離れた地点に位置するものである。

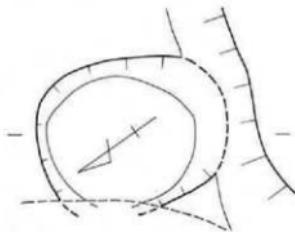
径80cmの粘土土壤であり、北西側は盜掘により削られる。南側は崖状に高くなる。土壤は浅く、深さは10cm程度である。底面に灰白色粘土の堆積がある。

出土遺物 (第71図)

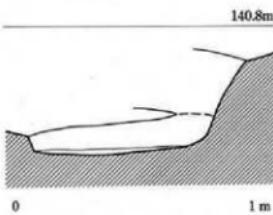
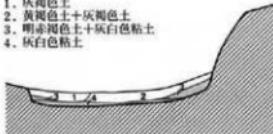
杏形の椀が一点出土した。屈曲を持たせながら広がる体部を有し、口縁端部は短く外側へ折り返し丸く仕上げる。口縁部の残存度はあまり良くないので、全体の器形は窺い知ることができない。素焼である。



第71図 西物原土壤16出土遺物実測図 (1/3)



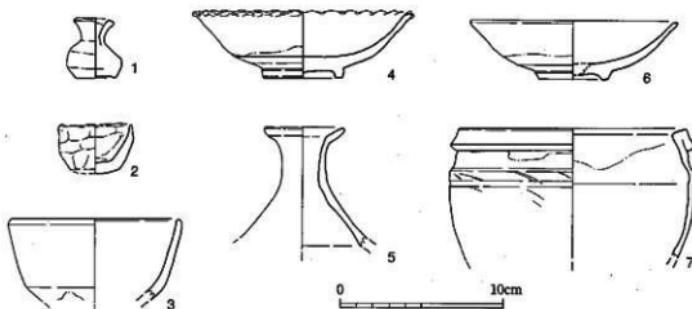
1. 灰褐色土
2. 黄褐色土+灰褐色土
3. 明赤褐色土+灰白色粘土
4. 灰白色粘土



第70図 西物原土壤16実測図 (1/20)



第72図 西物原土壤16粘土検出面 (北西から)



第73図 西物原ピット出土遺物実測図 (1/3)

ピット出土遺物 (第73図)

1～3は西13グリッド、窯本体11室から約5m離れて位置するピット16からの出土。11室西側には、まとまった数のピットが散在するが、そのうちのひとつである。径は約20cmを測り、小さい。検出面において2のぐい呑み形の手捏ねの椀が出土した。丁寧に鉄釉を掛け、茶褐色～濃青色に発色する。ピット底面にいたるまで3の椀小片しか出土しなかったが、底面に接するような形で1のミニチュア瓶が出土した。輪轂成形で丁寧につくられており、焼締により硬質に焼成されている。ピットは約20cmの深さがあるが、出土遺物の性格から考えて何らかの祭祀に用いられたものと考えられる。

4・5は西1グリッド、第2次調査時に検出された祭祀遺構に近い位置にあるピット9からの出土。

4は縁反形の小皿で口縁部に縁なぶりを施す。5は瓶で、緩やかに口頭部はくびれる。

6は西15グリッド、窯本体9室から約8.5m離れた位置にあるピット17から出土した小皿。丸形である。

7は西33グリッド、窯本体12室から約9m離れて位置するピット18から出土した甕或いは片口。口縁部は外側に折り返し密着させるタイプ。外面にタタキ痕を残す。

6 包含層の出土遺物

土壤出土遺物以外のものについての報告を行う。陶片は急斜面である物原を転落したためか、同一個体がグリッドをまたがって接合する場合が多くみられた。したがって特徴的な遺物であればよいが、特徴の少ない大形器種は接合が極めて困難であった。今回報告する遺物も小形器種に偏る傾向は否めない。

なお、窯道具に関してはトチンをはじめとして多量に出土しているが、報告は来年度に一括して行うこととしている。

茶入（第74・75図）

茶入は比較的多く出土し、パンケースで約3箱を数える。出土地点は5・6グリッド周辺、すなわち西物原の裾で窯本体からは比較的離れた地点に集中する。2次調査の成果によると、茶入は第12・13室で集中的に焼成されていることが示されたが、そこからしばらく横へ行ったところで失敗品の廃棄を行ったものと想定することができる。

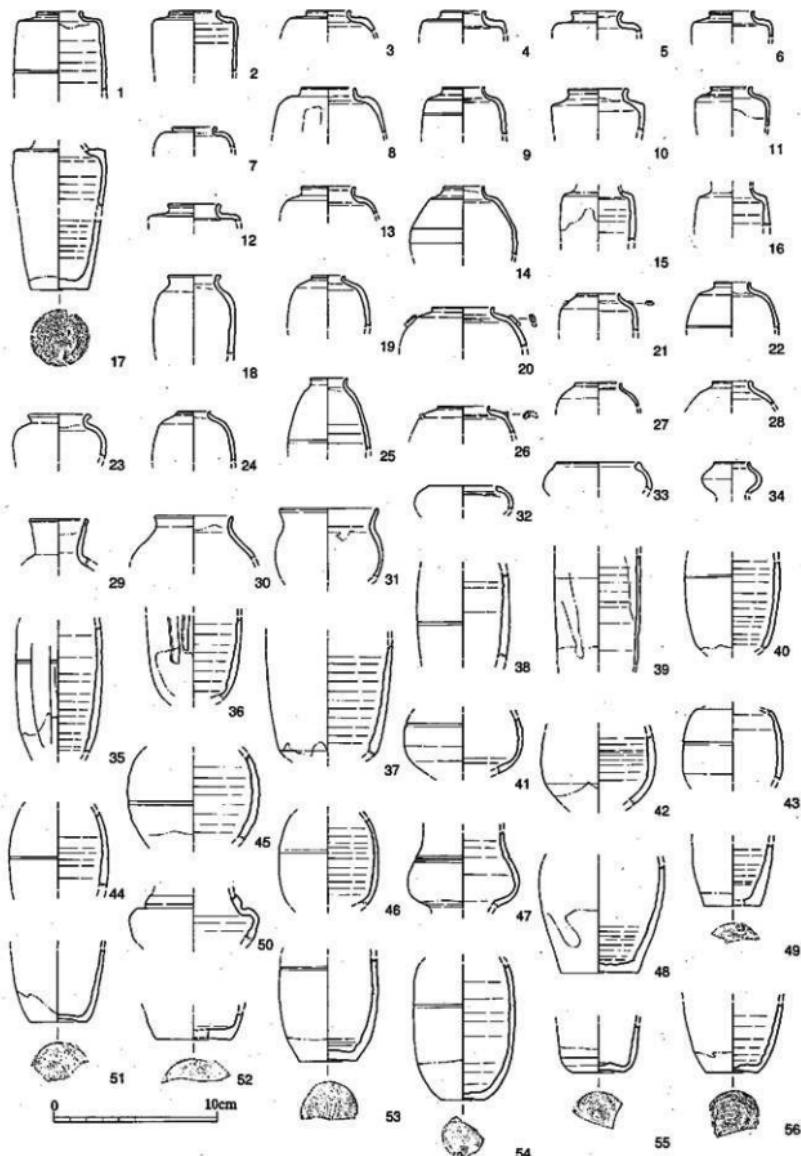
胎土に関しては精良で、大部分のものは明褐色・明灰色を呈するが、17は明黄褐色を呈する。一部の楕を除き、これに類する胎土のものは他の器種にはみられない。体部の形態については、直線的なものと丸みを帯びるもの二者に大きく分かれる。内面には輪轍目が走るが、鋭いものと弱いものの二者がある。

釉は大部分が鉄釉であり、茶褐色～黒褐色を呈する。色調の異なる鉄釉を二重掛けするものもある。土灰釉を掛けるものが少數ある。33・47・67・69が該当するが、いずれもやや特殊な器形をなすことは共通する。内面は基本的に露胎であるが、口縁部片である13は内面全体に鉄釉が及んでいる。

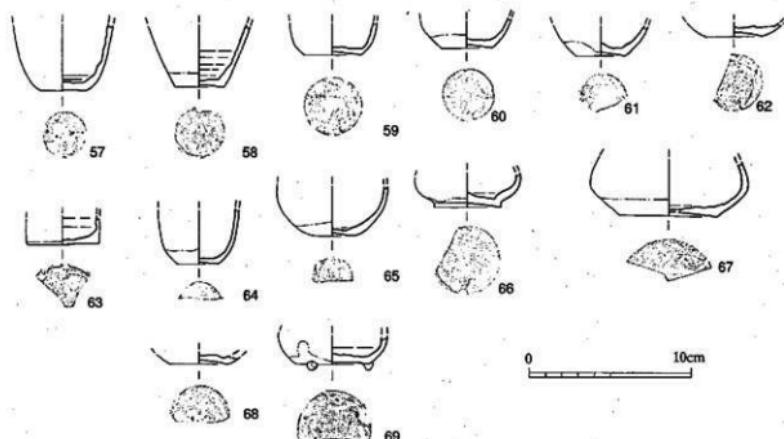
1～34は口縁部。短い頸部をもち端部は強く外反させるものが多い。口径は2.5cm程度のものが多く、24・25・28・34は口径2cm程度で小さい。肩部は明瞭なものとそうでないものとがあり、20～28はなで肩である。20・21・26には肩部に耳を有する。20は縱にひも状に伸びる下部は欠損する。21・26は小さい構造の耳がつくものである。29は直線的に広がる口縁部を有する。口径は3.2cm。30・31は緩やかに広がる口縁部を有するもので、壺形といえよう。口径は大きく、30は4.8cm、31は5.6cmに復元される。32・33は内傾する口縁部を有するもので、瓢形となろうか。口径は32が4.0cm、33は5.0cmと大きい。34は瓢形のもので、口径は2.0cmと小さく、くびれ部も径2cmと強くくびれる。

35～47・50は胴部。35・36は縱方向に面取りが施される。両者のタッチはやや異なりをみせ、35は幅広く、36はヘラ状工具で鋭く施される。胴部には1mm幅程度のヘラ先沈線、いわゆる胴紐を巡らせるものが多い。47は壺形、50は瓢形である。

48・49・51～69は底部。底径3cm程度のものが多いが、54や65は胴部径に対して底径が小さく安定が悪い。底面には基本的に糸切痕を残す。糸切は左切りによるが、58はほとんど渦を描かない。48は底面に糸切痕を残さないが、胎土がやや粗いこともあり茶入ではない可能性を残す。底面にはおがくずを敷いていた痕跡と貝目跡を残している。底部からの立ちあがりの形状は、基本的には丸みをもつて直線的に広がるものであるが、63は直線的に寸胴な形態であり、66は台付状となる。69は径6mmの小粘土を底部角に貼り付けて脚としている。脚は2個残存するが、その間隔から3個つくものとみられる。67は胴部最大径が9.8cmを測る大形のもの。丸みを帯びた胴部は強く横に



第74図 西物原出土遺物（茶入）実測図① (1/3)



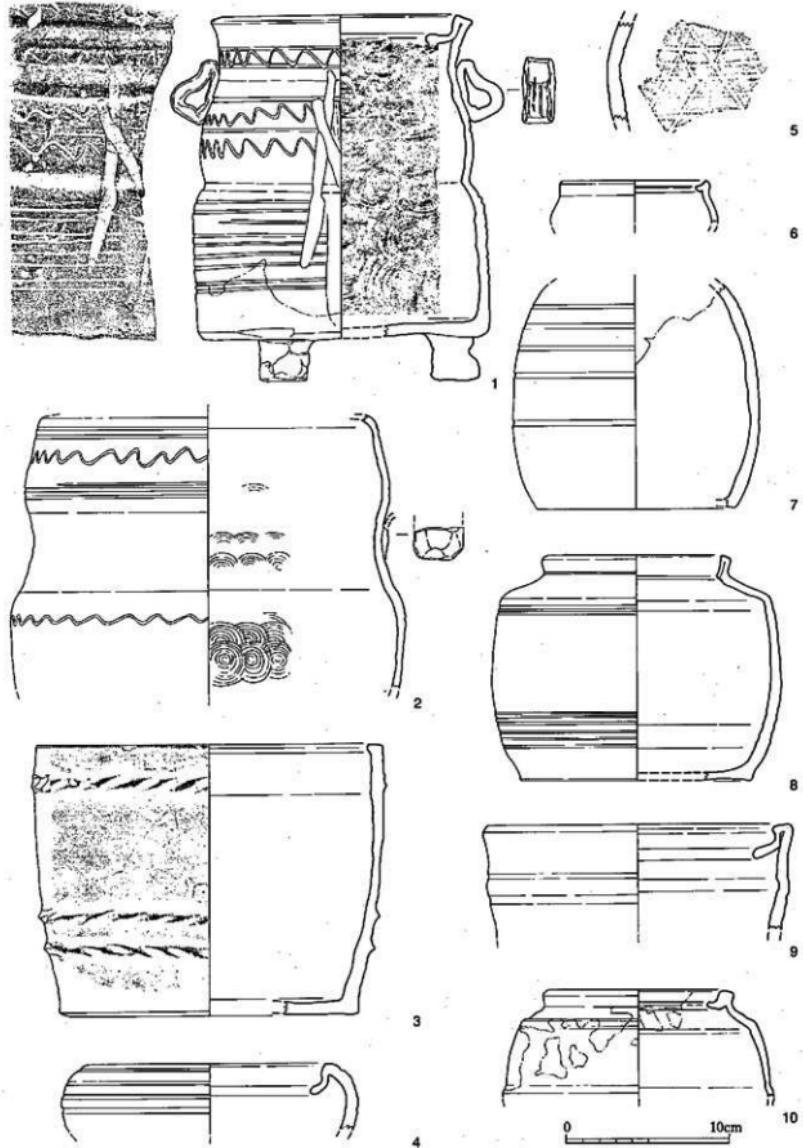
第75図 西物原出土遺物（茶入）実測図② (1/3)

張る。胎土はやや粗く、茶入ではない可能性を残す。口縁部は欠損するが、底部内面の全体に自然釉が付着しており、口径の大きいものであったとみられる。土灰釉が掛けられ、浅緑色を呈する。

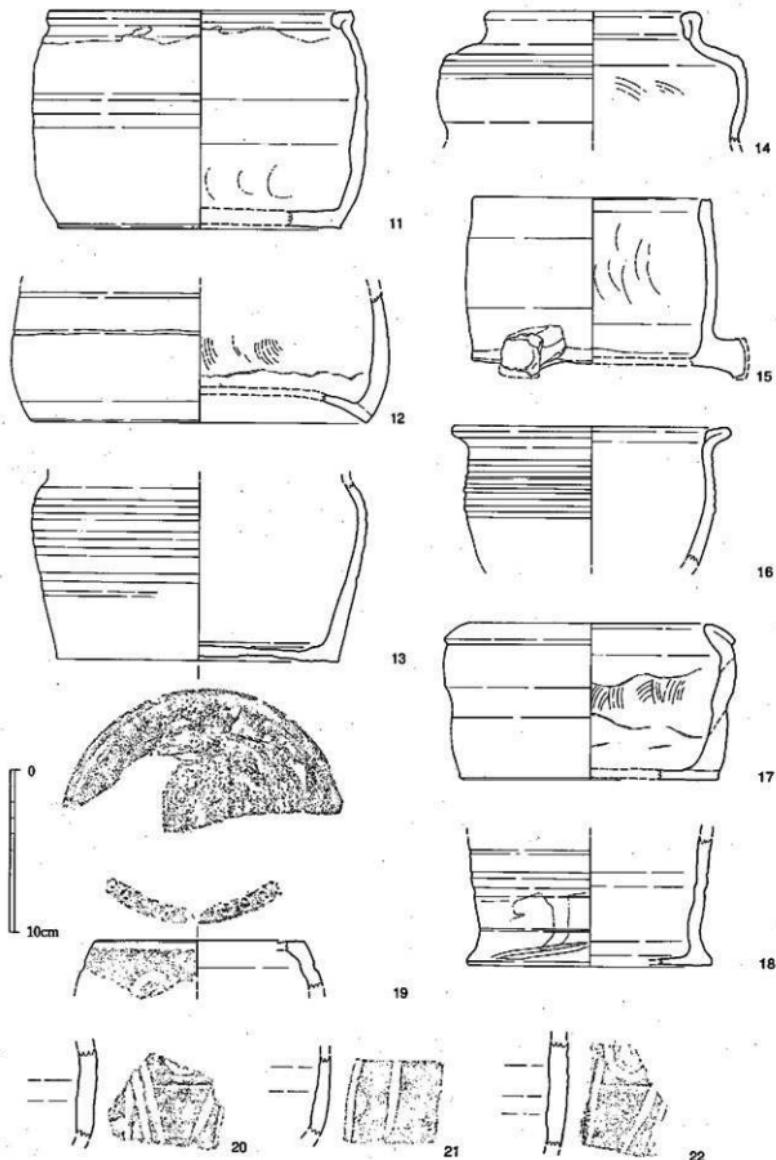
水指 (第76~80図)

水指は整理作業が中途で終わってしまったために、特に壺形のもの以外は来年度に詳細を記したい。1は残存度の良いもので全体像がわかる資料。口縁部には一旦内側に折り返して密着させた後に大きく内側に張りださせて端部をつくり蓋受とする。体部上半には波状文を三段にわたって巡らせ、下半には沈線を密に巡らせる。上半と下半を分ける部位にはくびれをつくる。体部外面に縦長×印の彫文をいれる。粘土帯を輪にして耳をつくり、側面には沈線をいれる。径3cm、高さ3cmの円柱状の脚をつける。脚は手捏ね成形で凹凸が多い。体部はタタキ調整で、内面には当て具痕である青海波文を残す。

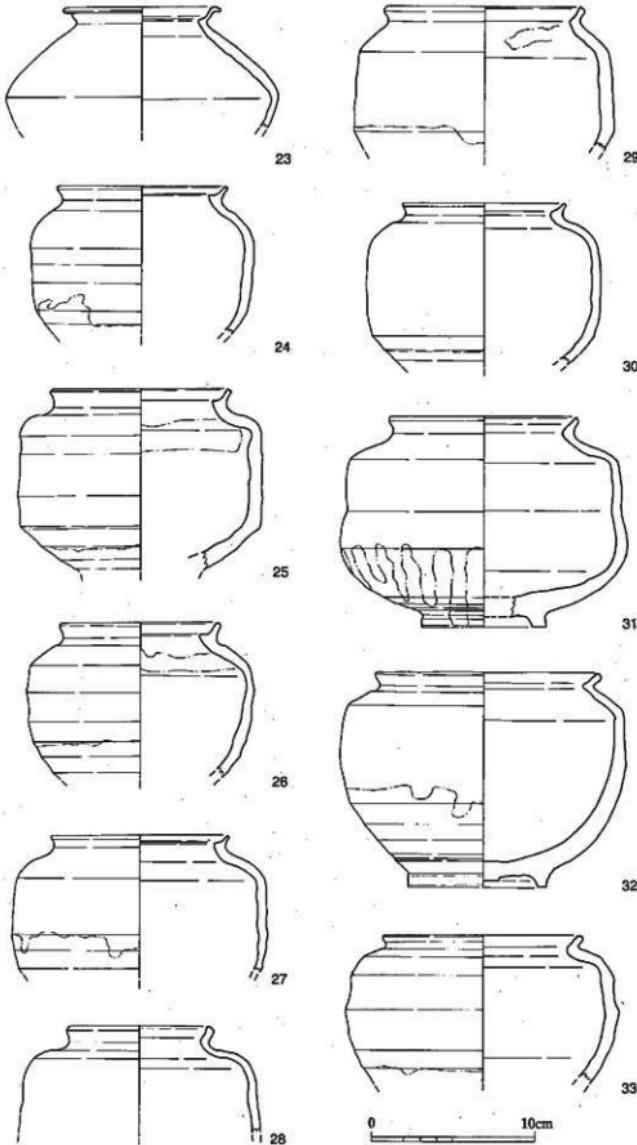
2は大形の水指で、大きさの割に器壁は薄い。中位にくびれがあり、それより上位には波状文と沈線を巡らせ、下位には波状文を巡らせる。くびれ部には耳或いは把手の付根が残る。3は桶形の水指。口縁部は端部を内側にわずかにせりださせる。ほぼ直立する体部であるが、全体的に歪みが大きい。この歪みは故意にしては極めて大きく、焼成時に歪みが生じたものと見られる。4は内湾する口縁部に大きな蓋受をつくるもの。外面には沈線を多条にわたりて巡らせる。瓢形になろうか。5は大きく歪ませた胴部に沈線と格子文を組み合わせたものである。6は口径8.8cmの小形のもので、内傾する口縁部に小さな蓋受をつくる。7は瓶状の体部をもつもので沈線を広い間隔で巡らせる。8は壺形を呈し、緩く開く口縁には内面に折り込むことによってつくられた弱い蓋受けがつく。体部には肩部近くと下半に沈線を巡らせる。9は直立する桶状の体部に、内側に折り込んでつくった大きな蓋受がつく。口縁部から4cm下った位置に内側から押し出して突起状とした部位があり、そこに耳の付根がわずかに残る。10は壺形の水指であり、外面には船釉



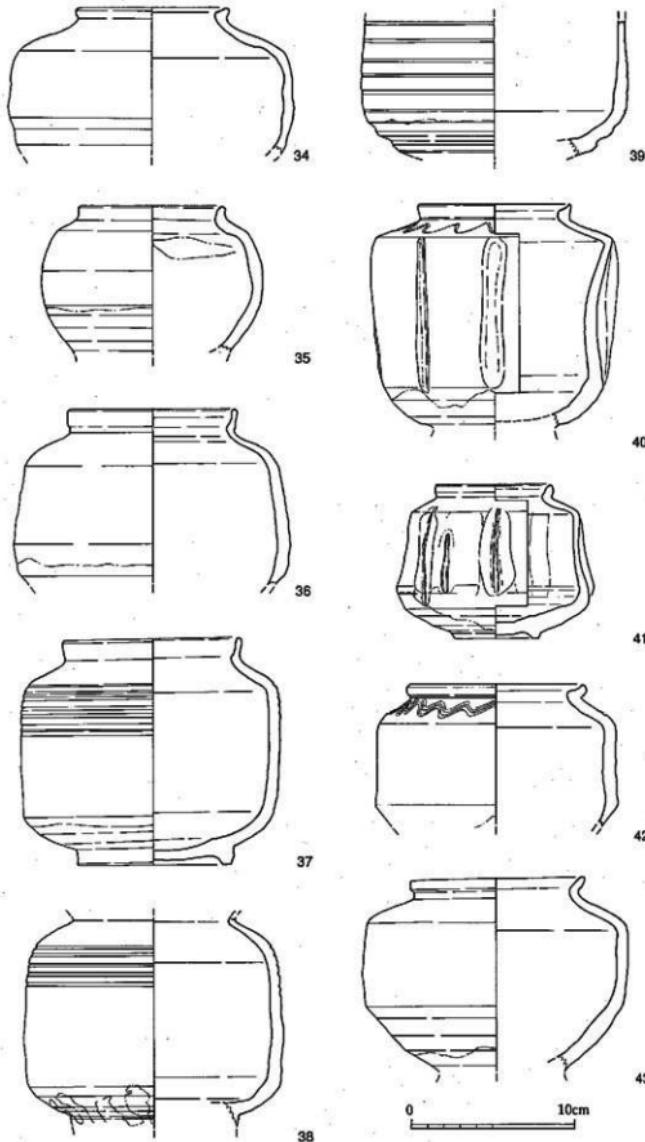
第76図 西物原出土遺物（水指）実測図① (1/3)



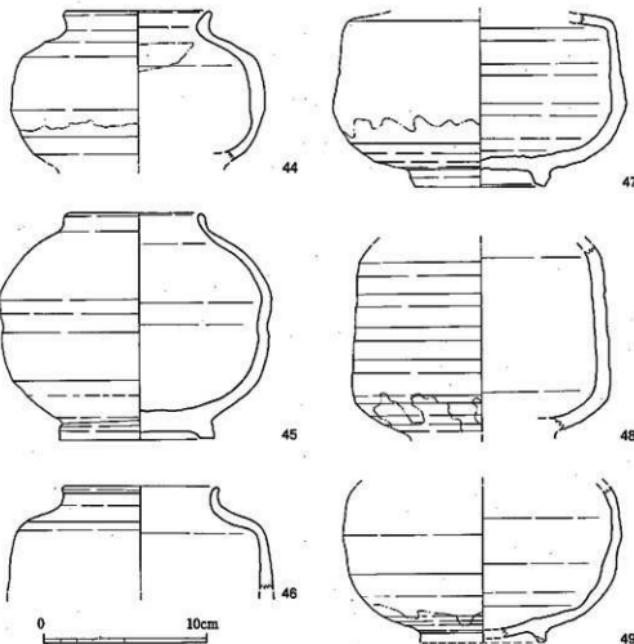
第77図 西平原出土遺物(木指)実測図② (1/3)



第78図 西物原出土遺物（水指）実測図③ (1/3)



第79図 西物原出土遺物（水指）実測図④（1/3）

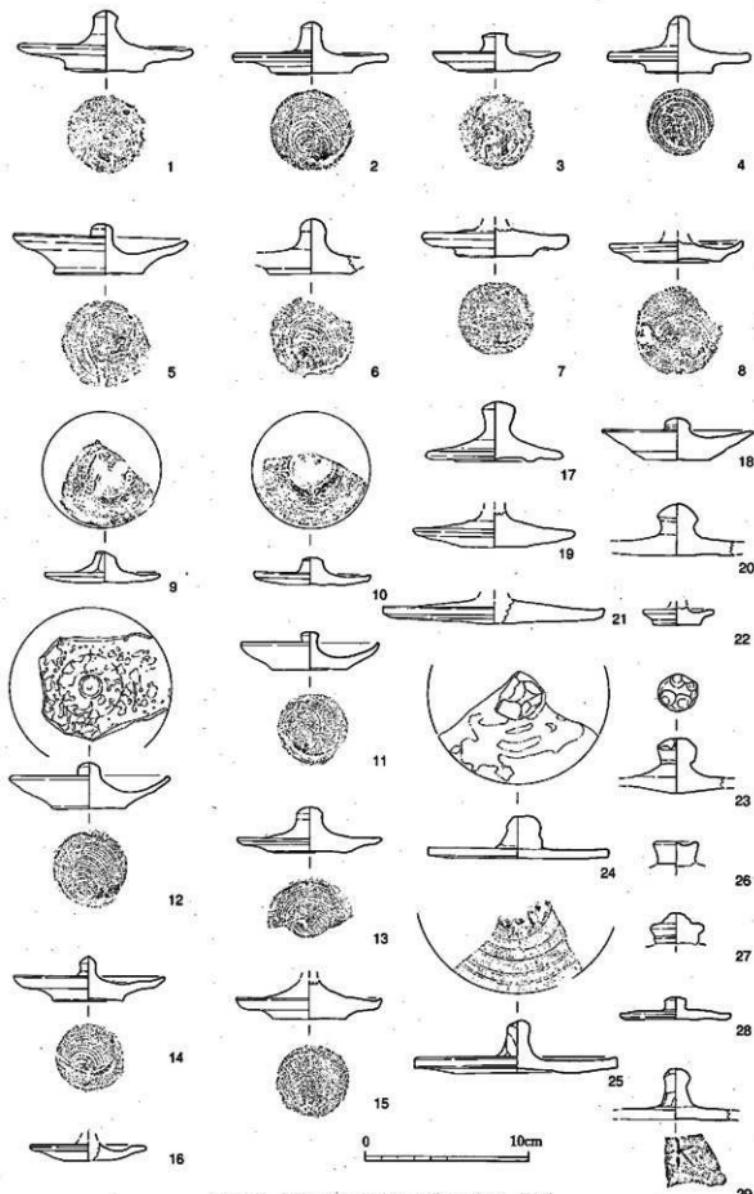


第80図 西物原出土遺物（水指）実測図⑤（1/3）

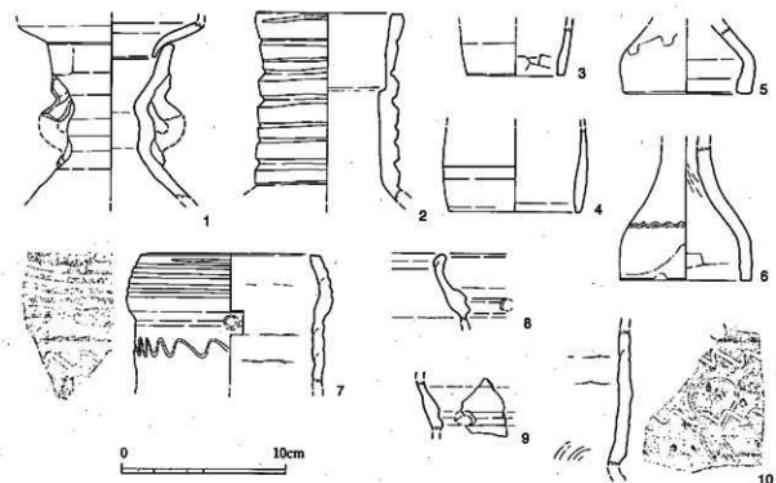
をイッチン掛けで施釉する。

11～22は蓋受等をもたず水指とは言い難いが、手の込んだつくりで日常の雑器とは一線を画するものであり、ここに集めた。建水等の用途が考えられる。11は桶状のもので口縁部は内面に折り込んで上面を平坦とする。体部中位に沈線を巡らせる。12・13も体部に沈線を巡らせるもの。13の底面には作業台の反映と見られる凹凸が多い。14は直立する口縁部を有する壺形のもので、強く張る肩をもち、肩部下位には沈線を巡らせる。15は直立する体部に、底部角から横方向に円柱形の脚をつけるもの。口縁端部は四角く收める。16は緩やかに弧を描く体部を有する鉢形のもので、体部の最大径付近に沈線を密に巡らせる。外反する口縁部は端部を内側へ折り込んで上面を平坦とする。17は緩やかに屈曲する体部を持つ鉢形のもので、口縁部は内傾させ端部を外側へ折り返して密着させ、2cm幅に肥厚させる。18は緩やかに開く体部をもつもので、底部は大きく張りだし安定した底面をつくりだす。体部には沈線を巡らせる。19～22は同一個体とみられる。内傾する口縁部をもち、平坦とした上面には円文の刺突文を密に連続させる。円文のいくつかには中に「×」や「—」の線刻を加える。側面は横方向のケズリ調整であり、太い彫文で直線文・円文を描く。内面は太い輪輪目が顯著に残される。

23～49は壺形の水指であるが、43～46は蓋受をもたず壺に分類すべきであろうか。23は強く外反させる口縁部をもち、先端は尖る。肩部は算盤玉形に横に張る。鉄輪を掛け、茶入に見られる



第81図 西物原出土遺物（蓋）実測図（1/3）



第82図 西物原出土遺物（花生）実測図（1/3）

のような茶褐色の発色をする。23を除けば体部は直線的なものと丸みをもつものの二者に分けることができ、31や41は緩くくびれさせている。37・38は肩部下位に、39は体部全体に沈線を巡らせる。40・41は肩部に波状文を巡らせる。40・41は体部に縦方向の太い凹帯をいれる。

蓋（第81図）

蓋の形態には大きく分けて二種類あり、ひとつは水引きにより成形したものであり、もうひとつは円盤状の体部につまみをなでつけたもの。

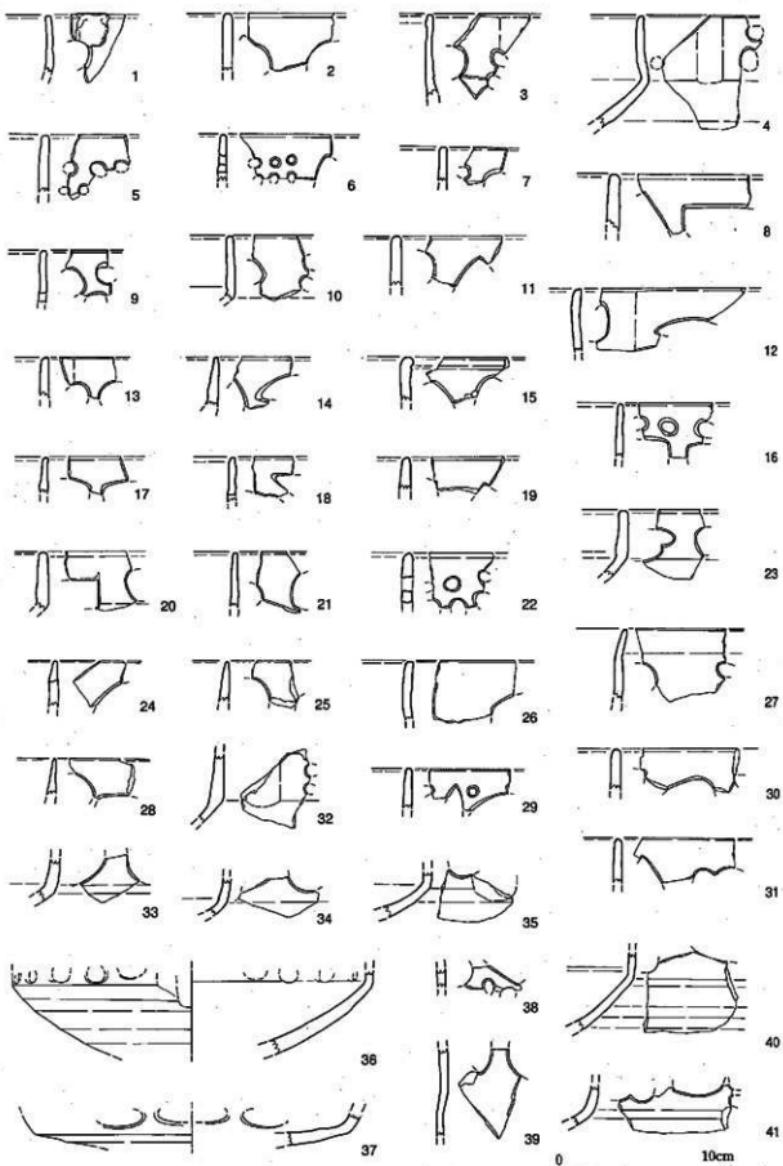
1～23は水引き成形のものであり、底部に糸切痕を残すものが多い。糸切の方向は右切りである。9・10・17・19～23は底面の糸切をケズリにより消しており、17はケズリにより高台をつくる。体部は強く内湾させるものと水平か或いは緩やかに内湾するものの二者がある。9・10は上面に菊花文のスタンプ文を3個施す。22は最大径4.5cmを測るごく小さい蓋。23はつまみに4個の刺突を入れる。

24～29は円盤状のものにつまみをつけるもの。つまみは手捏ね成形で、凹凸が多い。25は体部上面に同心円の沈線を入れる。29は底面に作業台に彫られていた星形の割付印が浮き出る。

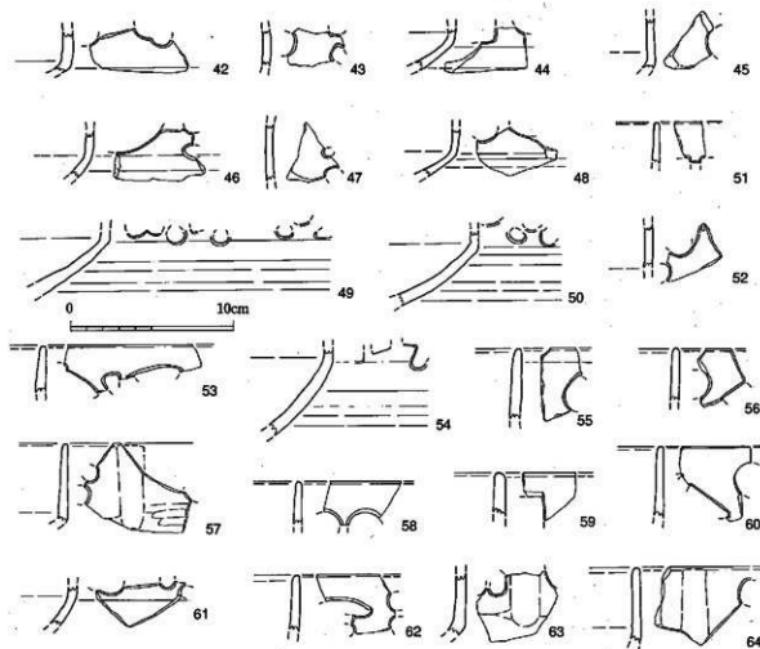
花生（第82図）

1は二段にわたってくびれる口頸部をもつ花生で、口縁部は直立する。口縁部には縦方向の幅広い面取りが連続する。口縁部下から頸部下段のくびれまで耳をつけるが、大部分を欠損する。花生の口縁部に入れ込む形で短頸蓋が口縁部を下にして重ね焼きされており、完全に接着されている。花生・蓋とも同一の釉（蘿灰釉）を掛け、乳濁色を呈する。

2はわずかに外反する口頸部であり、強い段を作り出す。口縁部を含め7段あり、段の幅は一定しない。蘿灰釉を掛け乳濁色を呈する。

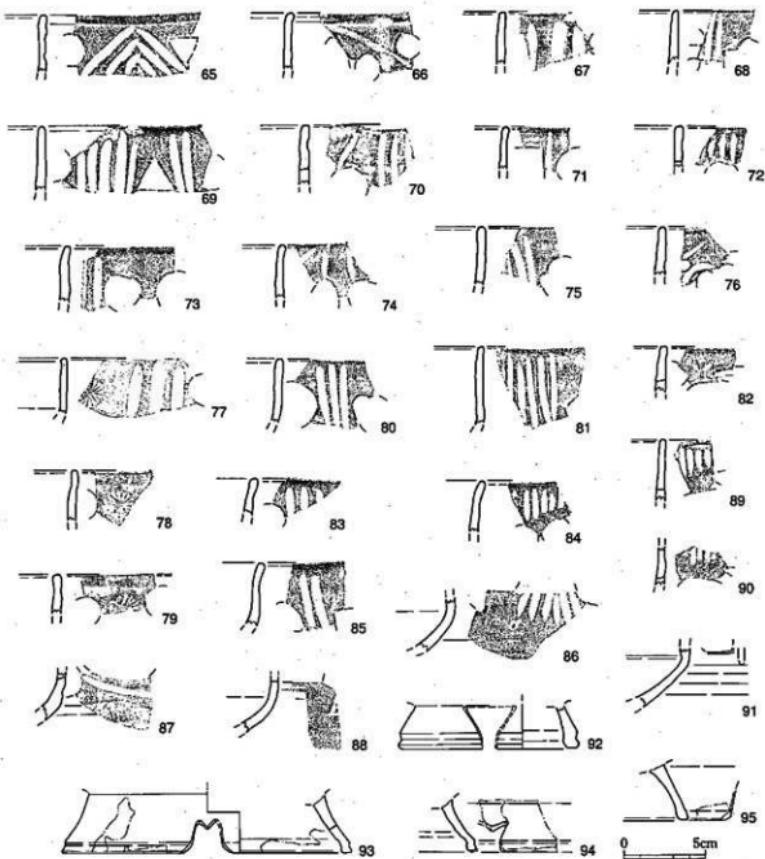


第83図 西物原出土遺物（有孔鉢）実測図① (1/3)



第84図 西物原出土遺物（有孔鉢）実測図②（1/3）

3・4は簡形をなすもの。花生ではない可能性があるが、分類が困難なためにここに含める。両者とも端部外面はケズリを加え、内面は3の場合は粗いケズリ、4はヨコナデである。口縁部としては調整や傾きに疑問が残るために底部と判断した。両者とも素焼で淡黄褐色を呈する。5・6は瓶の形状をなすが、底部が割り貫かれており、瓶としての機能がないためにここに分類した。5は底面に糸切痕を残す。外面には鉛釉が掛けられ茶褐色～青白色の海鼠釉となる。内面は露胎である。6は瓶形の体部の肩に細かいピッチの波状文が巡らされる。頸部内面にはシボリ痕を残す。釉は未発色で、内面は口縁から流れてきた以外は露胎である。7は内湾する口縁部を有するもので、歪みがあるために径復元しがたいが、口径11cm程度になるものと見られる。口縁部外面には5条の沈線がめぐる。直立する体部外面には波状文が巡らされ、内面には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。口縁部と体部の境には径6mmの穿孔がある。鉄釉が全体に掛けられ、茶褐色を呈する。8・9は内傾する口縁部の花生であり、口縁端部は内側へ折り込んで肥厚させる。口縁部から3cmほど下った外面に断面が丸みを帯びる突帶を巡らせる。突帶の高さに径1cm程度の穿孔を設ける。鉛釉が掛けられる。10は穿孔部を含む体部であり、外面には波状文が二段にわたって巡らされ、その後に把手を象ったような線刻文様が描かれる。耳が付くようであるが、欠損し付根が残るのみである。内面にはタタキの當て具痕である青海波文が残るが、粘土紐の接合痕は明瞭に残したままである。鉄釉が掛けられ茶褐色に発色する。調整・色調からみて7と同一個体の可能性がある。

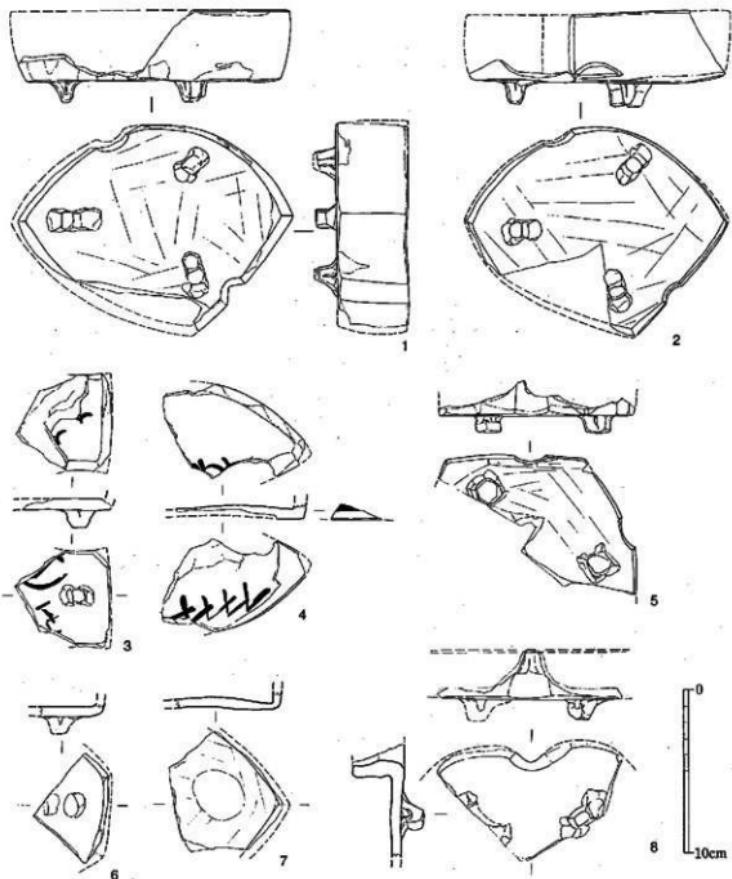


第85図 西物原出土遺物（有孔鉢）実測図③（1/3）

有孔鉢（第83～85図）

円形・方形の透孔をあけるものであり、向付として使用された鉢であろう。釉は藁灰釉を全体に掛けるものが大部分を占め、ごく一部に鉛釉のものがある。鉛釉のものは藁灰釉との掛け分けのものとみられる。この他に素焼のものも多い。口縁部の形状は直立するものであり、端部外面をわずかに突出させるものもあるが少数である。1は口縁部に補修の痕跡が認められる。65～91は太い沈線による装飾が伴う。77・78・79は菊花文のスタンプによる装飾である。

92～95は透孔をもつ脚部である。必ずしも上述の鉢に伴うものとは言えないが、類似する特徴



第86図 西物原出土遺物（結文形鉢）実測図（1/3）

のためにここに掲載した。四方に透孔を設けるもので、その形状は逆W形になるものとみられる。

結文形鉢（第86図）

西物原では結文形鉢の破片がパンケースで約1箱分出土しているが、整理途中であり今回は第86図に示した8点のみを報告する。結文形鉢の基本的な特徴は、器形は平坦な底部に直立ないしや内湾する口縁部をもち、底面には粘土紐をU字形に折り曲げてつくられる脚を有するものが多いということである。平面形は変異が大きく、伝世品などをみると菱形のものや瓢箪形のものが

みられる。成形は型づくりによるものとみられ、器面調整は底部外面がケズりで、その他はナデによるものが多い。

1・2は若干法量が異なるもののほぼ同一の形状をなすもので、全体の器形がほぼ把握できる貴重な資料である。平面形は扇形であり、やや内湾する口縁部をもつ。口縁部側面には現状で2ヶ所（推定3ヶ所）に内側への張出をつくる。3・4は出土地点が近いことからも同一個体と考えられる。両者とも口縁部を欠損しコーナー付近の3は幅約6cmの底面を、4は長い弧を描く側面を含む底面のみ残る。3は粘土紐をU字形に曲げてつくられた脚をもつ。外面に円彌文及び格子文の鉄絵を描く。側面にも描くようであるが、残存状況が悪いために詳細は不明である。鉄絵を描いた後には通常では長石軸を掛けるが、この2点には施釉されず硬質に焼成されている。5も口縁部の大部分を欠損する。平面扇形をなすものであろうか。脚を2点残しており、ずんぐりした団子状の形状をなす。内面及び側面は施釉されるが、発色していない。6はコーナー部。団化後に接合資料を見出したために、現状は実測図に示したものより残存度は良く、側面の内側への張出部も確認できる。脚は欠損し、付根のみ残存する。船軸を掛けた後に蓋灰軸を掛ける掛け分け。7もコーナー部であるが、脚は確認できず、底部外面には貝目跡を明瞭に残している。もともと脚を持たないものであろう。施釉されずに硬質に焼成される点は3・4に類する。8はU字形の屈曲部を含むもので、脚部を1点残している。丸みをもった平面形状になるとみられる。素焼であり、薄茶色を呈する。

筆立（第87・88図）

小皿状のもので、底部に穿孔があるもの及び底部外面に小突起があるものを筆立とした。いずれも瓶状の器種が下へ続くものとみられる。

1～19は底部に穿孔のある小皿形のもの。緩やかに内湾する体部に断面匙状の口縁部がつく形態が多い。7・8は外反する口縁部がつく。穿孔のある底面は平坦に整えるものが多い。12は外面に細い沈線による線刻がある。

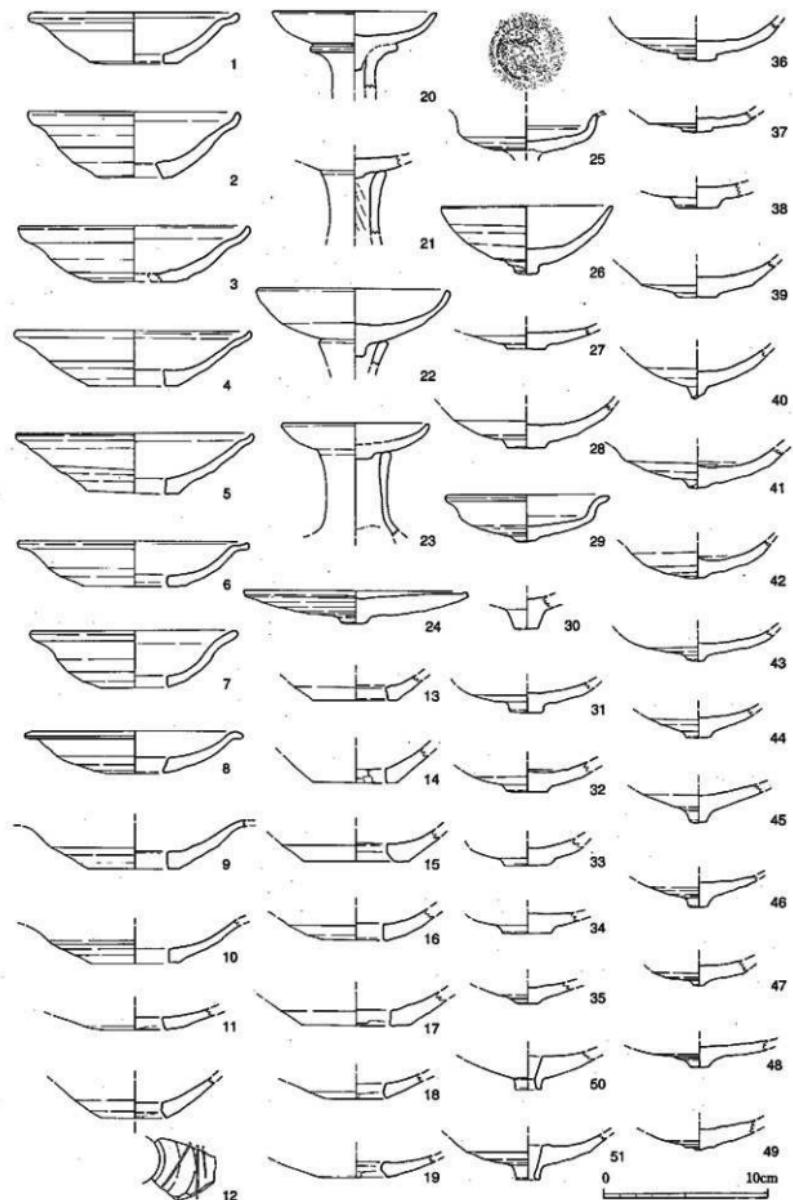
20～49は底部に小突起があるもの。20～23は瓶状の別個体が密着しており、この器種の使用状況を示すものとみられる。小皿の形態は緩やかに弧を描きながら底部から口縁部に至る丸形といえるものが多いが、24は平坦、25・29は外反する口縁部をもつものである。25は内面に矢印状の小線刻がある。

50・51は底部にある小突起に穿孔するもの。上述の二種を組み合わせたような形態である。

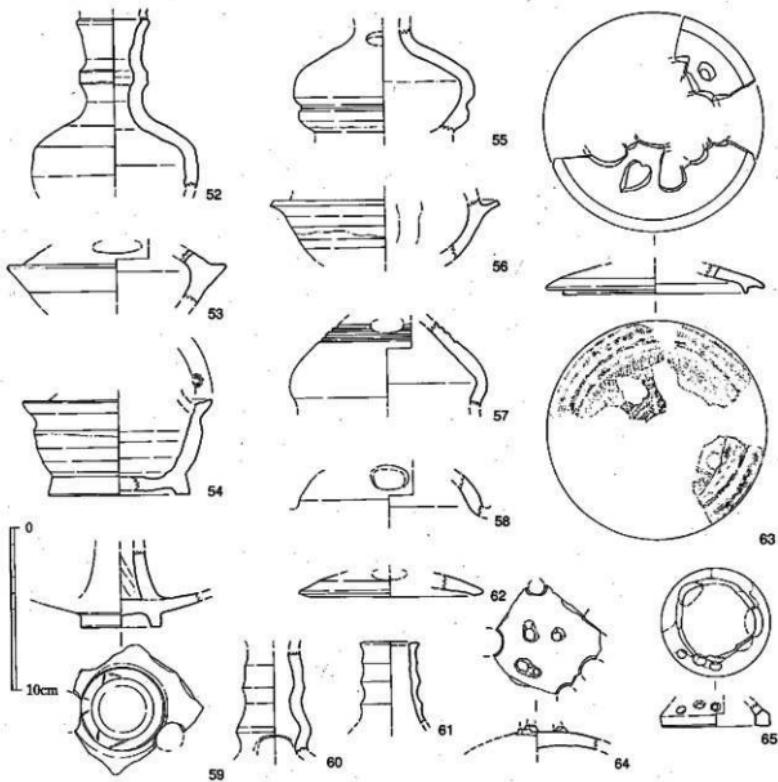
52～58は上記の皿に伴うものではないかとみられる瓶状の器種。口縁部に突出・突帯を加えるなど特異的な形態をもつものをそれとしたが、通常の瓶であるかもしれない。また体部に径2cm前後の透孔を有するものが多いのも特徴である。

52はU頭部の中位に突帯を持つもので、体部に穿孔は認められない。口縁端部に別個体が付着しているが、上述した皿状のものであろうか。53・55・57・58は宝珠形の体部に穿孔をもつもの。57は体部上位に沈線を巡らせる。53には最大径に断面三角形の突帯を巡らせる。54・56は最大径に突帯を有する体部下半の資料。54は突帯の上面に菊花文のスタンプ文が押される。60・61はU頭部。なだらかな段を連続させるものであり、60は体部との境に穿孔が認められる。

59は小皿状の台部に円柱が載る形状であり、台部には2個の穿孔がある。円柱が伸びその上部に上述した皿状のものが載るものであろうか。豊付には細い棒状の圧痕を残す。



第87図 西物原出土遺物（筆立）実測図①（1/3）



第88図 西物原出土遺物(筆立②・香炉)実測図(1/3)

香炉(第88図)

62~65は穿孔を施す蓋状のもので、香炉の蓋かとみられる。62は平坦な蓋に円形の穿孔の一部がみられるもの。63は内面にかえりを有するもので、円形或いはハート形の穿孔を多数あけるもの。内面には線刻で細かい格子状の文様を刻む。

椀(第89~94図)

椀は内ケ穀窯で多く出土する器種のひとつである。形態は丸形のものが多く、筒形・天目形・杏形が少量含まれる。報告はまず一般的な器形のものを行い、特殊なものを次に掲載している。

全体的な特徴を挙げると、高台のつくりは低いものが多く、高台内中央が尖るいわゆる兜巾高台となるものが大部分を占める。また高台内のケズリの中心が偏る三日月高台も多くみられる。高台径については5cm程度のものが最も多く、それより小さいものは4cm程度の一群がある。小振りの椀はほとんどが高台径3.5cmである。高台の高さは1cmに満たないものが多く、それより

高いものは目立った存在となる。体部のケズリは範囲が狭く、また疊付には糸切痕を残すものもみられる。高台外面～疊付に目跡を残すものが多い。胎土目がほとんどであり、貝目はごく少ない。目跡の個数は3～4個である。釉の種類は内ヶ磯窯でみられるほとんどのものが採用される。ただし茶入に用いられるような茶褐色の鉄釉は、胎土が精良なものには一般的に認められるが、他のものには採用されない。

丸形及びそれに若干の変化が加わったものを口径順に並べると1～50のようになる。9の口径が8.4cm、11の口径は9.7cmであり、小形・中形の境がこの辺りにあるものか。10cm以上のものについては約1cm刻みで規格性があり、数量的には12cmを超えると少數となる。

1から9は小振りの楕で、ぐい呑みというふうにふさわしい。1・2は直立する体部にわずかに外反する口縁部を有するもの。1は口径5.8cmで今回報告する中ではもっとも小さい。底部は基筒底である。3と9は直線的に開く体部に強く外反させる口縁部をもつもの。4～8は丸形である。これらよりも口径が大きくなると、一部を除き丸形の形態をとる。23は外面にイッチン掛けにより施釉するが、焼成が悪く大部分が剥離する。32は底面に糸切痕を残し、底部外面にケズリを施さない。水引き成形した後に高台をつくらす釉を掛けた焼成したものである。51は口径13.4cm以上となる大形の楕であるが、口縁部が欠損しており、小形の片口である可能性も残す。

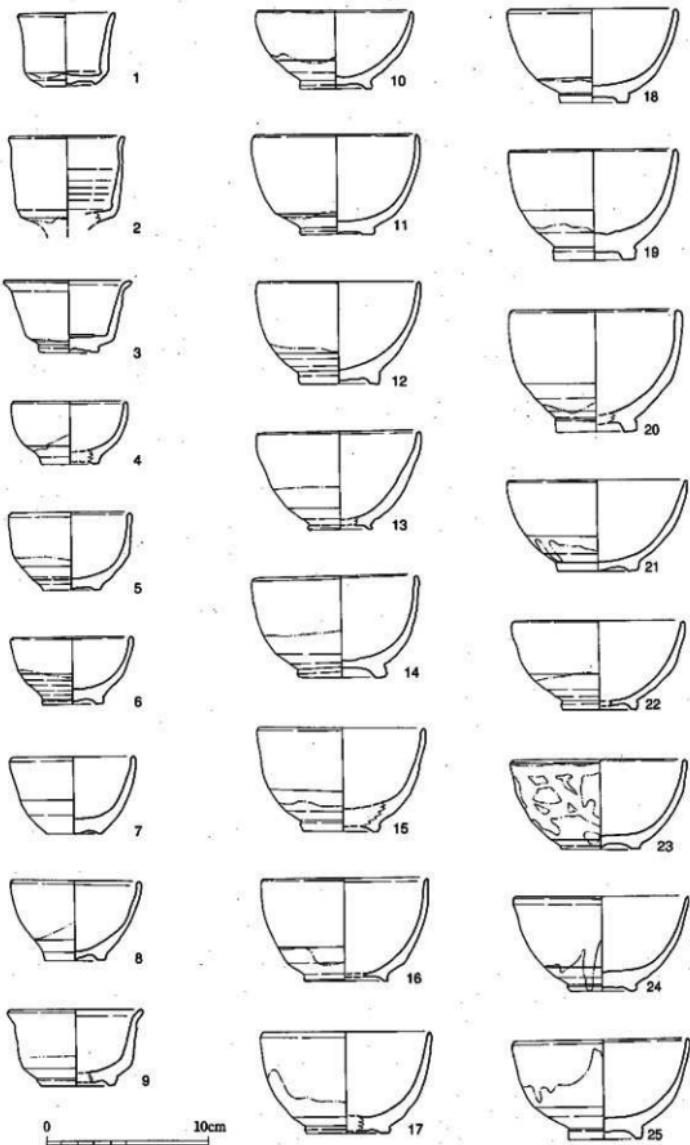
52以降は丸形ではなく特殊な器形のものを集めている。

52は直立する体部に短く外反する口縁部を有する楕で、口径の割には体部が浅い。体部外面には沈線を2条巡らせる。薦灰釉を高台内を含め全体に施す。53は大形の楕で口縁端部を内側へ屈曲させる。54は直線的に大きく開く体部を有する楕。口径は15.6cmを測る。55は素焼の楕で、体部のほぼ中央に小穿孔があるが、その機能は不明である。56は直線的に開く体部に直立する口縁部がつく楕で、口径18.5cmを測る大形品である。底部付近外面には指の圧痕或いはケズリの施し方によるものか、凹凸が連続する。釉は焼成温度が上がりすぎたためか、小豆色の小凹凸を多数生じさせる状況を呈する。57は丸形の体部に短く外反させる口縁部がつくもので、口径14.6cmを測る大形品である。高台は三方の割高台であり、高台内を含めて長石釉が厚く掛けられる。58は輪花口縁の楕。底部から丸みをもって立ち上がり、一旦軽くくびれた後に直立し、強く外反させる口縁部に至る。薦灰釉を掛け浅緑～乳濁色に発色する。

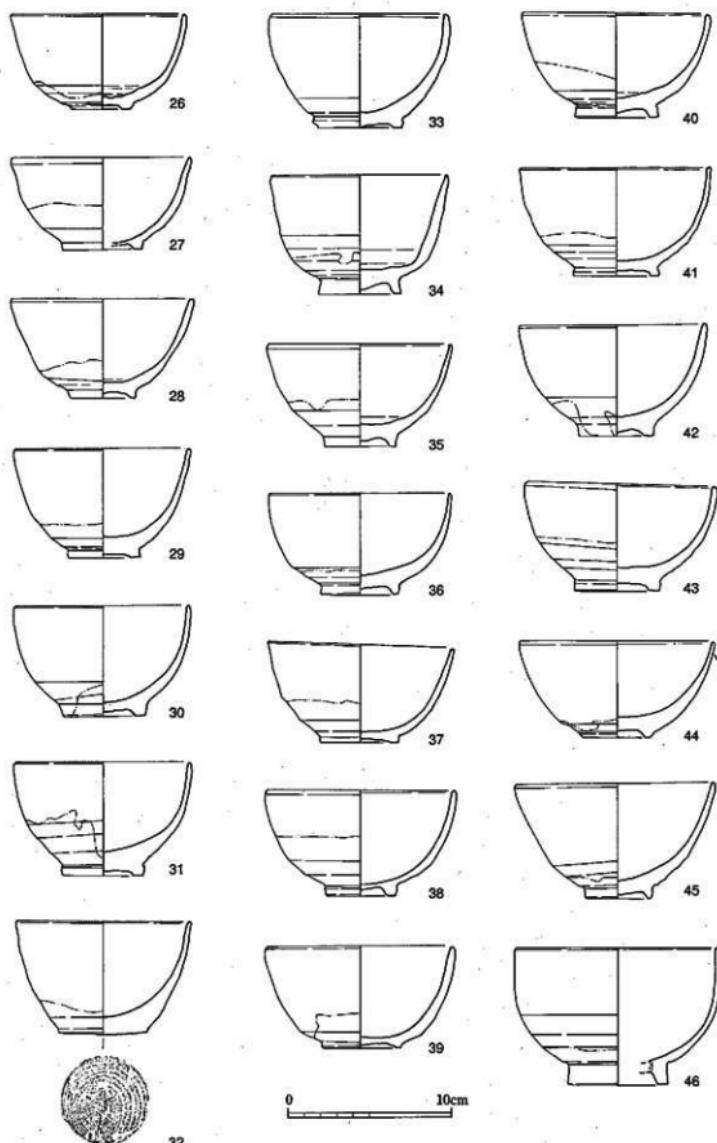
59～64は筒形の楕。59はわずかに内傾する体部に弱く外反する口縁部を有する。体部外面に細い沈線を三条巡らせる。62は基筒底。64は体部外面に太い沈線を巡らせるようである。65は浅い体部の楕で底面には糸切痕を残し、高台際にもケズリを加えない。

66～69・71～76は天目形の楕。く字形に屈曲する口縁部を有するもので、体部の形状やケズリ調整は通常の楕と変わらないものが多く、口縁部の屈曲も弱いものが多い。70は内湾する口縁部を有する楕で、端部は外側へ折り返し丸みを持たせるように整形される。厚手のつくりで、全体に鉄釉を施釉する。

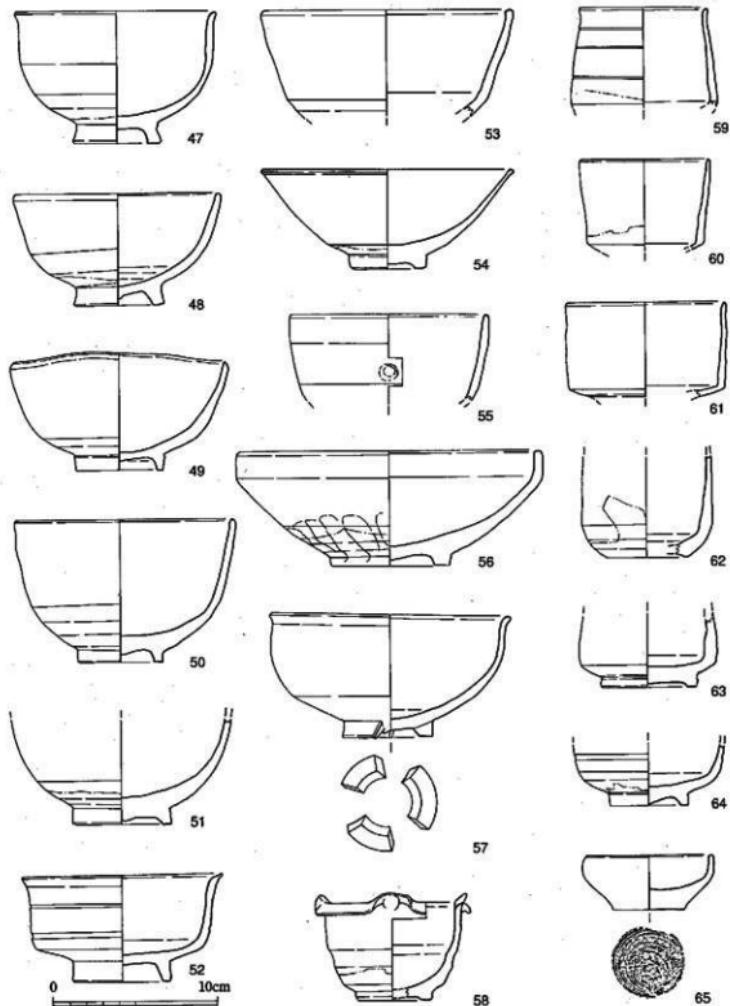
77～81は杏形の楕。77は平坦な底部から強い稜を経て直立する体部に続き、口縁端部は外側へ短く折り返し丸みを持たせるもの。横二方向から押させて平面形を楕円形にする。平面形は三角形に近いものとなろう。鉄釉をイッチン掛けした後に約半分に薦灰釉を掛ける。78～81は体部に強い屈曲を持たせながら立ちあがるもの。79・80は口縁端部を外側へ短く折り返し丸みを持たせて仕上げる。81の口縁端部は短く外側へ屈曲させるものである。78は素焼、79は薦灰釉を掛け、



第89図 西物原出土遺物(碗)実測図① (1/3)



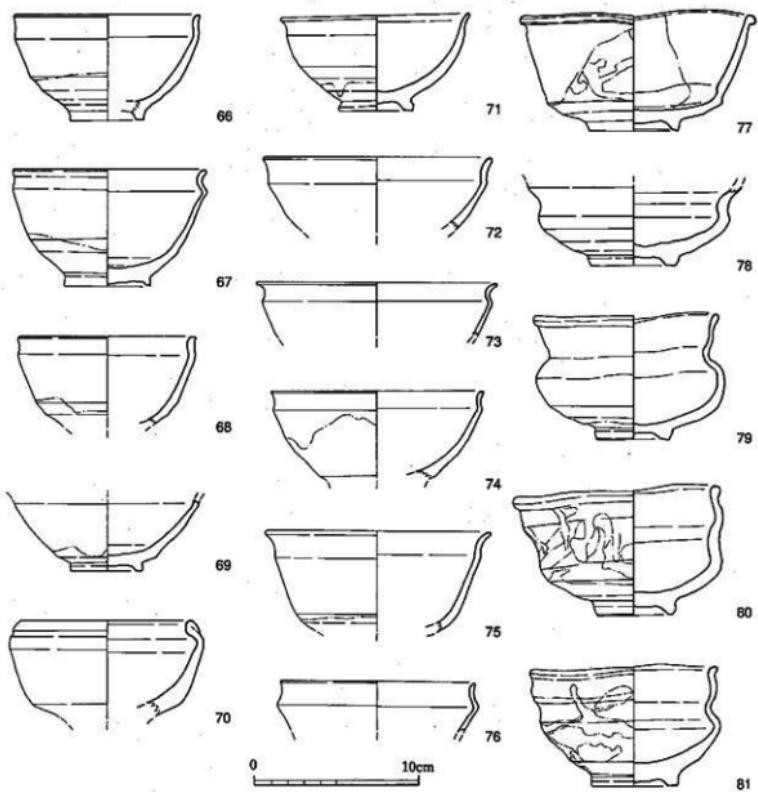
第90図 西物原出土遺物(碗)実測図② (1/3)



第91図 西物原出土遺物（椀）実測図③（1/3）

80・81は外面にイッチン掛けを施す。発色は悪いが、80は鉛釉を内面全体及び外面にイッチン掛けした後に薬灰釉をイッchin掛けし、81は逆に薬灰釉を内面及び外面にイッchin掛けした後に鉛釉をイッchin掛けしている。

82～99は胎土が茶入と共に通するつくりの良い椀である。82～84・88のように浅い体部をもつも



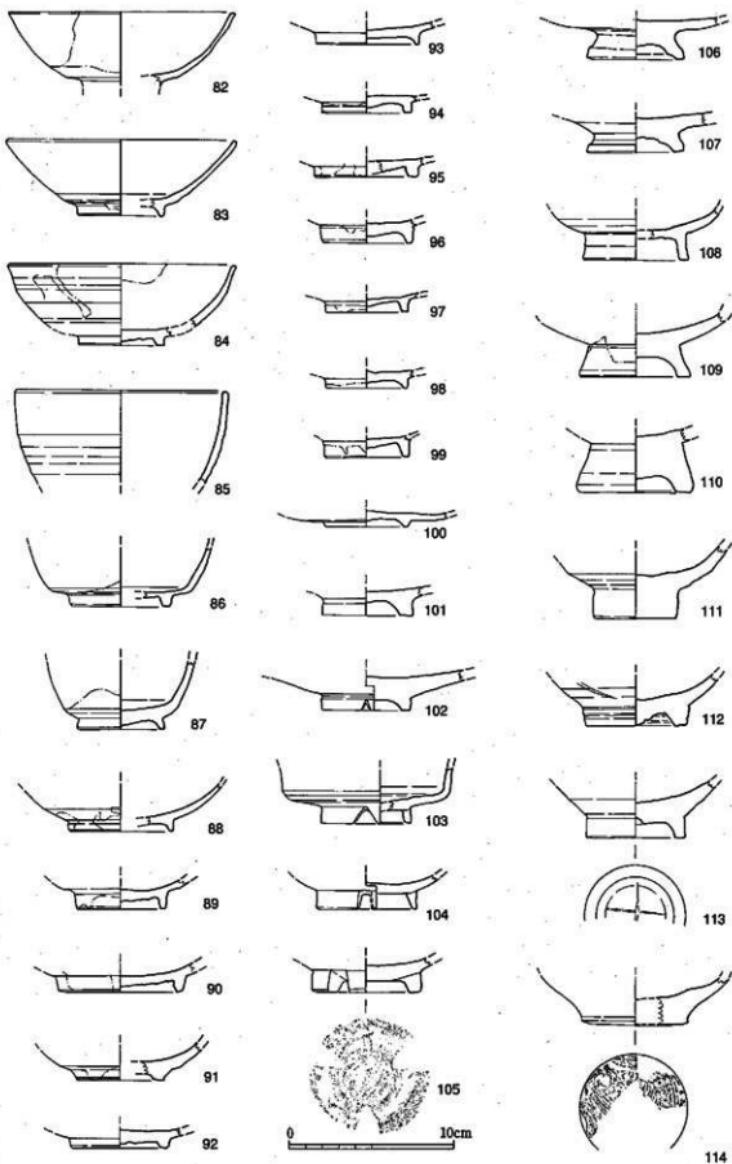
第92図 西物原出土遺物(楢)実測図④(1/3)

のと、85~87のように深い体部を持つものの二者に分けることができる。釉もまた茶入と共に通するものが多い。すなわち茶褐色~黒褐色を呈する鉄釉である。88は土灰釉、93は未施釉である。

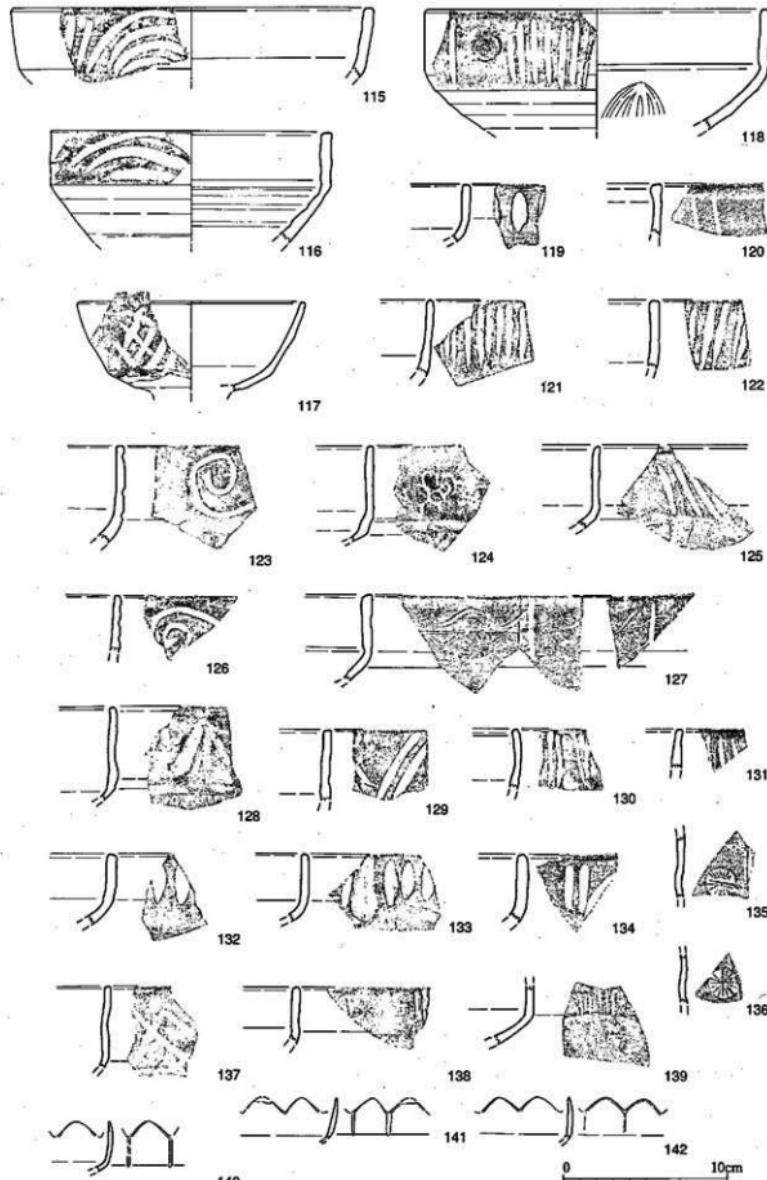
100・101・108は高台内にまで施有するもの。102~105は割高台であり、102と103は正面観が三角形で104と105が台形である。102は2方向にあけるもので工具痕が粗く残る。103は筒形の楢となる。2或いは3方向である。胎土は精良で、葉灰釉を高台内にまで施釉する。104は4方向にあけるもので、精良な胎土である。105は3方向にあけるもので、高台内に「二」字の線刻がある。106・107はハ字形に広がる高台で途中に段を生じさせている。両者とも葉灰釉と船釉の掛け分けである。

111は高台高が2cmを測るもので、底面は平面的にケズリ調整をするのみであり高台内を削りこまない。113は高台内に大きく「X」印を線刻する。

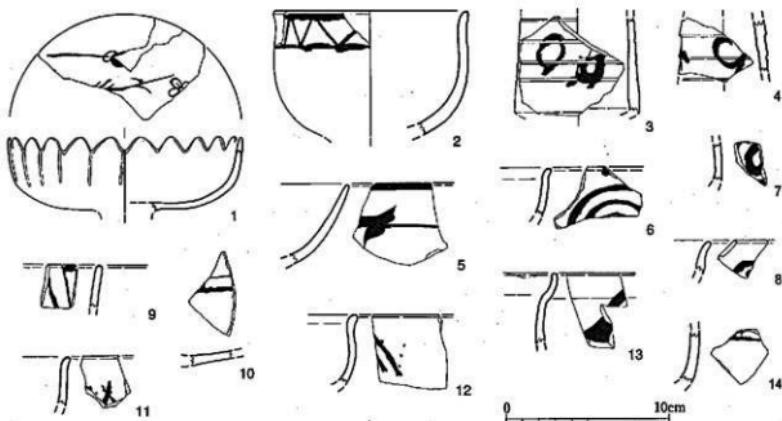
115~139は直立する口縁部を有する楢であり、彫文・線刻により装飾を加えるもの。縱方向



第93図 西物原出土遺物（響）実測図⑤ (1/3)



第94図 西物原出土遺物(焼)実測図⑥(1/3)



第95図 西物原出土遺物（鉄絵陶器）実測図（1/3）

に太い彫文を刻むものが多く、115・116は円弧文、117・137は格子文、120は四角文、123・126は渦巻文、124は花文、127・138は波状文が描かれる。118・135・136には菊花文のスタンプ文が伴う。118は見込に木の葉文が描かれるが釉が厚く不明瞭である。117・128・139は藁灰釉と鉛釉の掛け分けである。

140～142は直立する波状口縁である。屈曲部の外側には縦方向に沈線が入る。第95図1のように高杯の口縁部であろう。

鉄絵陶器（第95図）

鉄絵陶器の出土はごくわずかであり、第95図に示したもの及び第86図の一部の結文形体で全てである。1は高杯の杯部。口縁は花弁状となり、第94図140～142もこうした器種になる可能性がある。「内ヶ磯窯跡1」報告の799に類例がある。見込に鉄釉で梅の木を描き、緑味灰色の土灰釉を掛ける。2は口径11.6cmを測る大振りの椀。口縁部外面に格子文の鉄絵を描き、灰色の長石釉を掛ける。3は筒形椀で外面に4条以上の沈線を巡らせる。外面に鉄釉で円文を連続して描き、緑味灰色の土灰釉を掛ける。4は怪からみて花生であろうか。径5.5cmの直立する筒形を呈し、外面にはわずかに波打った段を生じさせる。外面には3に類する円文を鉄釉により連続して描き、緑味灰色の土灰釉を掛ける。5は椀の口縁端部を鉄釉で縁取りし、体部中位の外面に一条の線と画題不明の鉄絵を描く。その上に描かる長石釉はやや暗い緑味灰色。6・7・8は椀の外面に同心円文の鉄絵を描くもの。乳濁灰色の長石釉を掛ける。椀の口縁部は短く外反させる。9・10は同一個体であろうか。9は椀の内面に直線的な鉄絵を描くもので、同様の文様が10にみられる。やや暗い灰色の長石釉を掛ける。11は外面に壁土が多数付着し観察しがたいが、直線文を描くようである。12は短く外反する口縁部を有する椀の外面に直線的な鉄絵を描くもの。厚く乳濁灰色の長石釉が掛けられる。13は瓶形の器種の口縁部、或いは図化したものと転地が逆で高杯の脚部となろうか。外面には淡い色調に発色する鉄絵が描かれるが画題は不明である。乳濁灰色の長石釉を掛けるが、

内面は露胎である。14も直線文を描くものであり、長石釉が掛けられ暗灰色に発色する。

皿（第96～116図）

皿は内ヶ礪窓跡で出土する最も多い器種といえる。皿には大きさから小皿・中皿・大皿と大きく分類することが可能であり、さらにその中でも細かく、例えば同じ小皿といっても大小の分類が可能である。大きさのほかに全体の器形によって分類でき、特に口縁部形態に特色が現れる。

まず小皿について全体的な特徴を挙げると、高台のつくりは低いものが多く、高台内中央が尖るいわゆる兜巾高台となるものが大部分を占める。また高台内のケズリの中心が偏る三日月高台も多く見られる。体部のケズリは範囲が狭いものが多く、また置付には糸切痕を残すものもみられる。見込み及び高台に目跡を残すものが多い。胎土目がほとんどであり、貝目はごく少ない。目跡の個数は3～4個である。釉の種類は内ヶ礪窓でみられるほとんどのものが使用される。ただし茶入に用いられるような茶褐色の鉄釉は非常に少ない。

1から105までは高台から口縁部にかけて緩やかに内湾する体部を持つものであり、丸形と呼ばれているもの。小皿の中ではこの形態のものが一番多い。口縁端部は丸く收めるものが基本であるが、端部内面にシャープさをもたせるものもある。口径に関してみてみると、1の口径8.7cmのものから105の17.0cmのものまであるが、12～13cmのものが最も多く、極端に大きなものや小さなものは特殊な存在である。

106～121は高台から口縁部に向かって緩やかに内湾する体部をもち、口縁端部のみ外反させるもので、縁反形と称されるものである。外反の度合いは強いものと弱いものとがあるが、その境界は曖昧であり分類していない。118・119は口縁端部上面をわずかに窪ませ、断面で浅い匙状をなす。

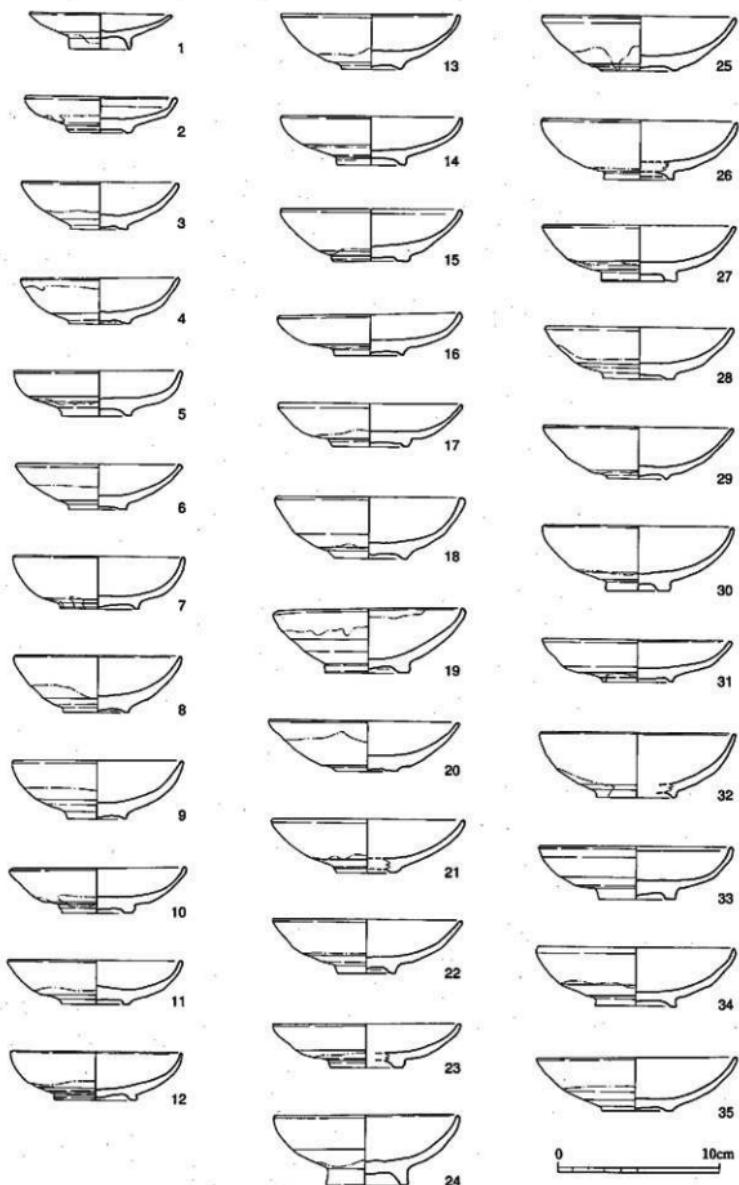
122～136は口縁部が全体的に外反するものであり、縁反形の一種といえよう。137～145は全体的に外反する口縁部の端部付近上面をわずかに窪ませ、断面で浅い匙状をなす。

146～215は口縁部が全体的に外反するが、外反の際に内面に強い稜が生じるものであり、縁付形と呼ばれるものである。その縁には広いものから狭いものがある。また内面の稜にも強弱があり、縁反形との区別に苦慮するものもある。183～198は縁付形の口縁端部上面をわずかに窪ませ、断面で浅い匙状をなす。199は口縁端部をつまみ上げるもの。200～207は口縁端部を内湾させるものである。208～215は縁部が全体的に内湾する。

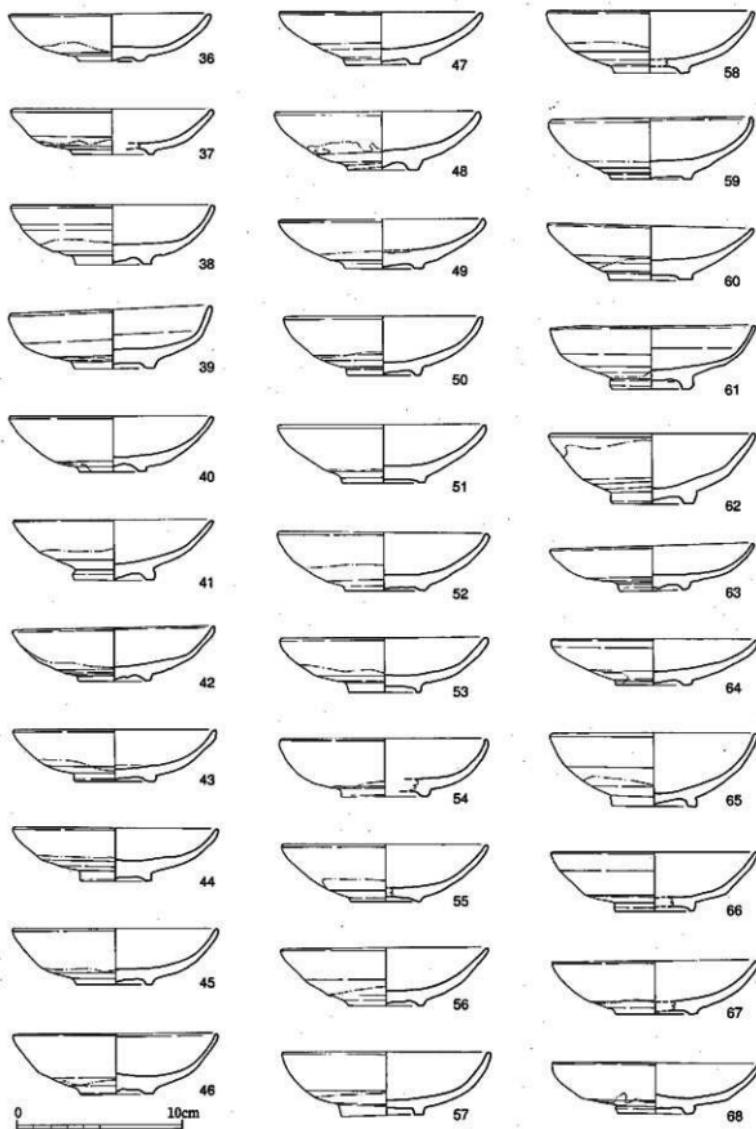
216～218は非常に平たい形状の皿。口縁部の形状は一旦強く上方に屈曲させその後真横につまみ出す。

219～228は口縁部を直立させる縁立形と呼ばれるものである。全体の中に占める割合は低い。228は口径18.6cmと大振りである。

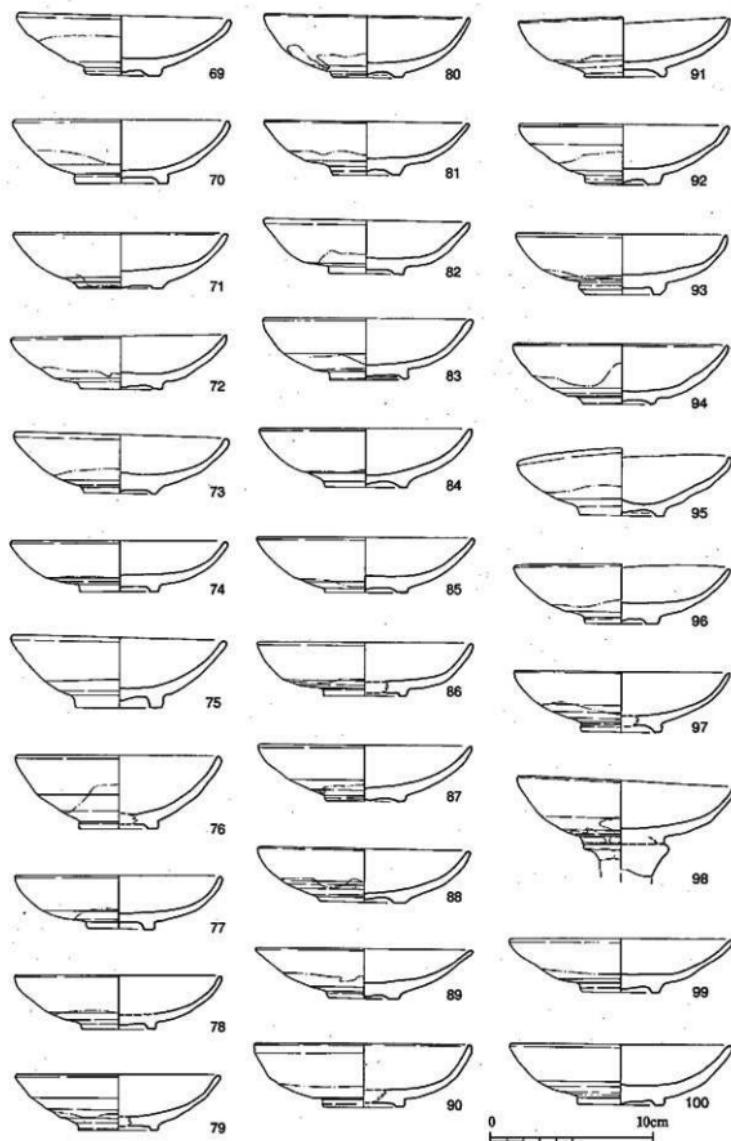
229～269は口縁部にユビオサエ等により形に変化を加えるもの。229～251は口縁端部の数ヶ所を摘み上げるもので、その数は4ヶ所のものが多い。229・230は丸形、231～235は縁反形であり、それ以外は縁付形である。口径は12.5cmのものが多く、248～251は口径14cmを超える大形品である。252～254は縁付形の皿を四方から大きく内側へ押さえ、さらにそれによって張り出した四つの頂点に対し指で内側へ押し込む形態である。この結果、口縁部は大小の波を打つ形状を呈する。255・256は四方から大きく内側へ押さえ込む形態であり、平面形は四角形に近くになる。両者と



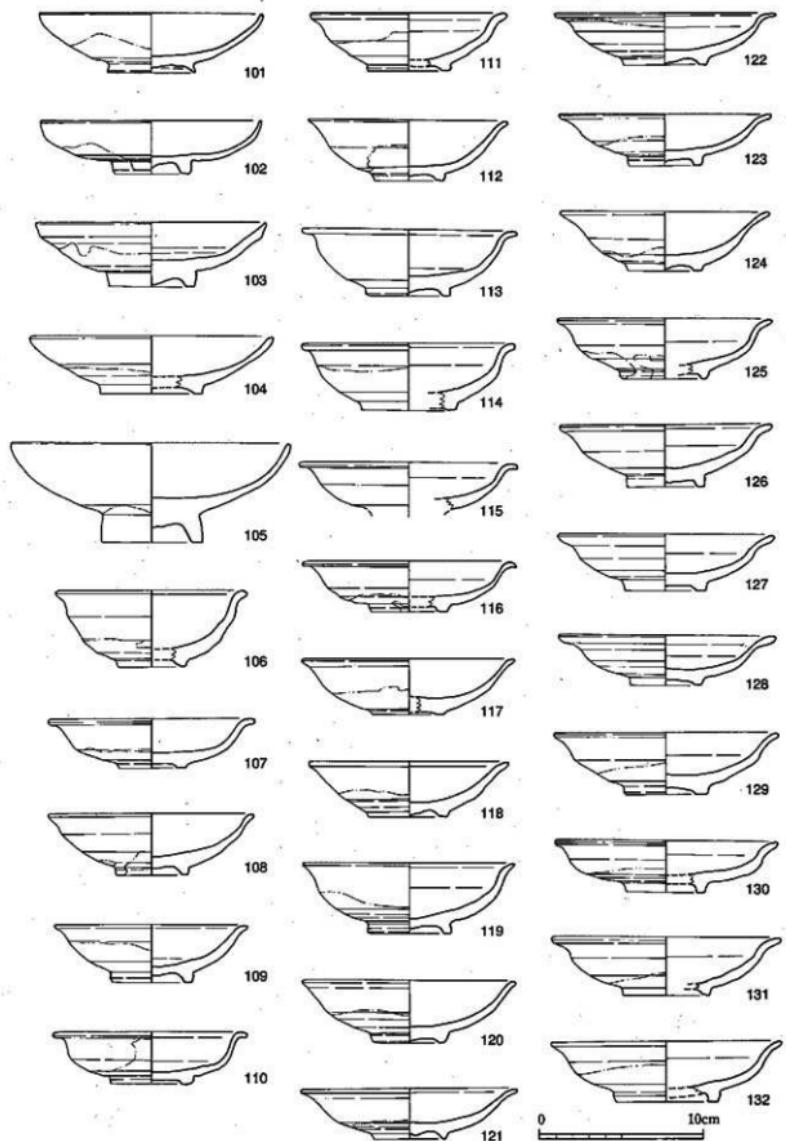
第96図 西物原出土遺物(Ⅲ) 実測図① (1/3)



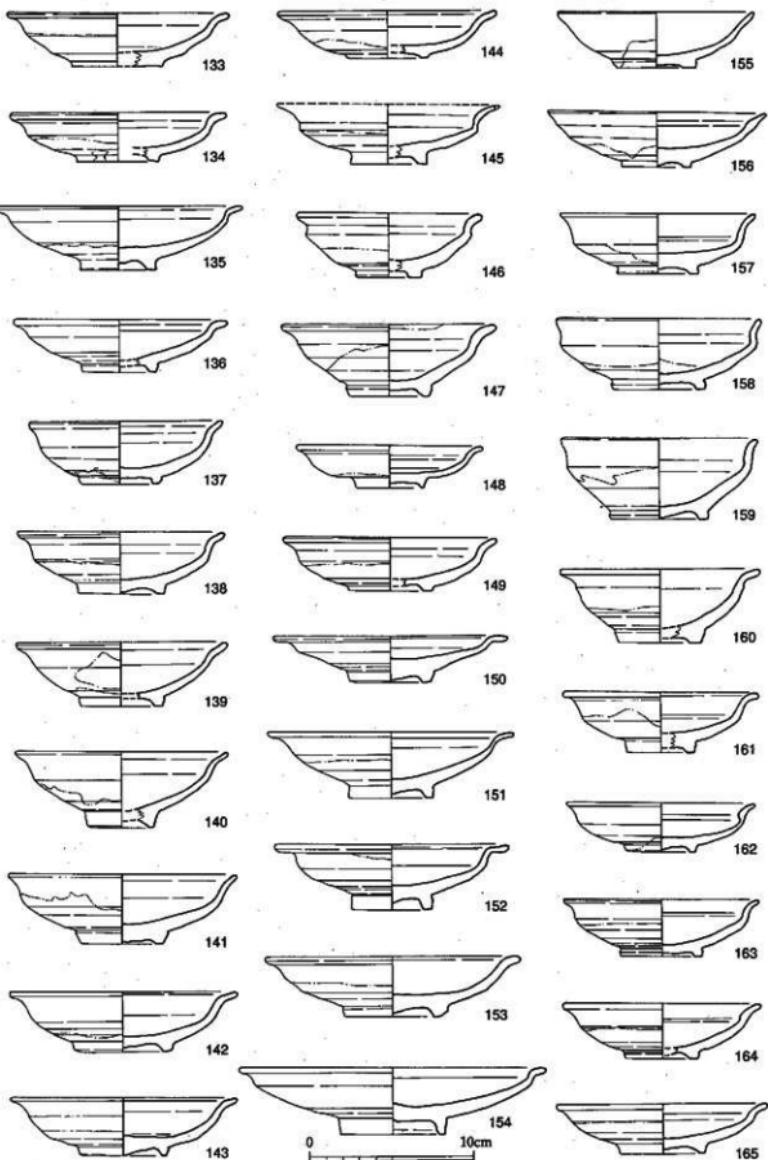
第97図 西物原出土遺物（皿）実測図② (1/3)



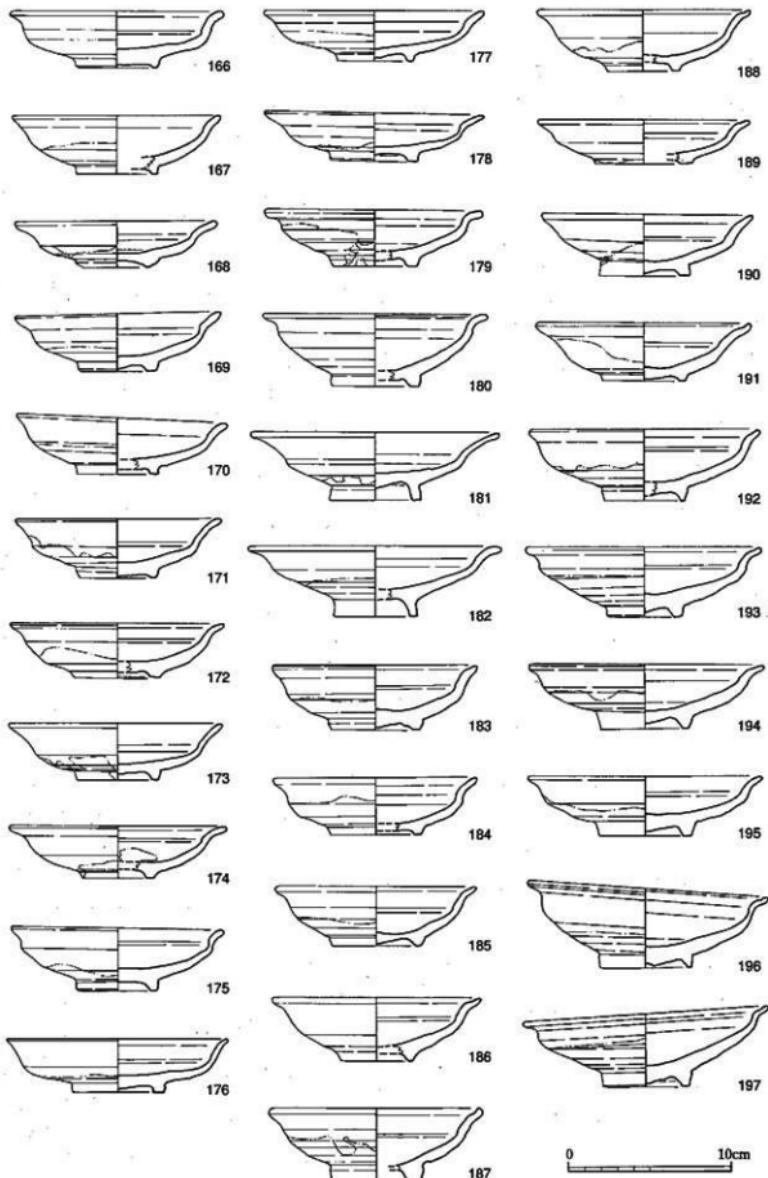
第98図 西物原出土遺物(皿)実測図③ (1/3)



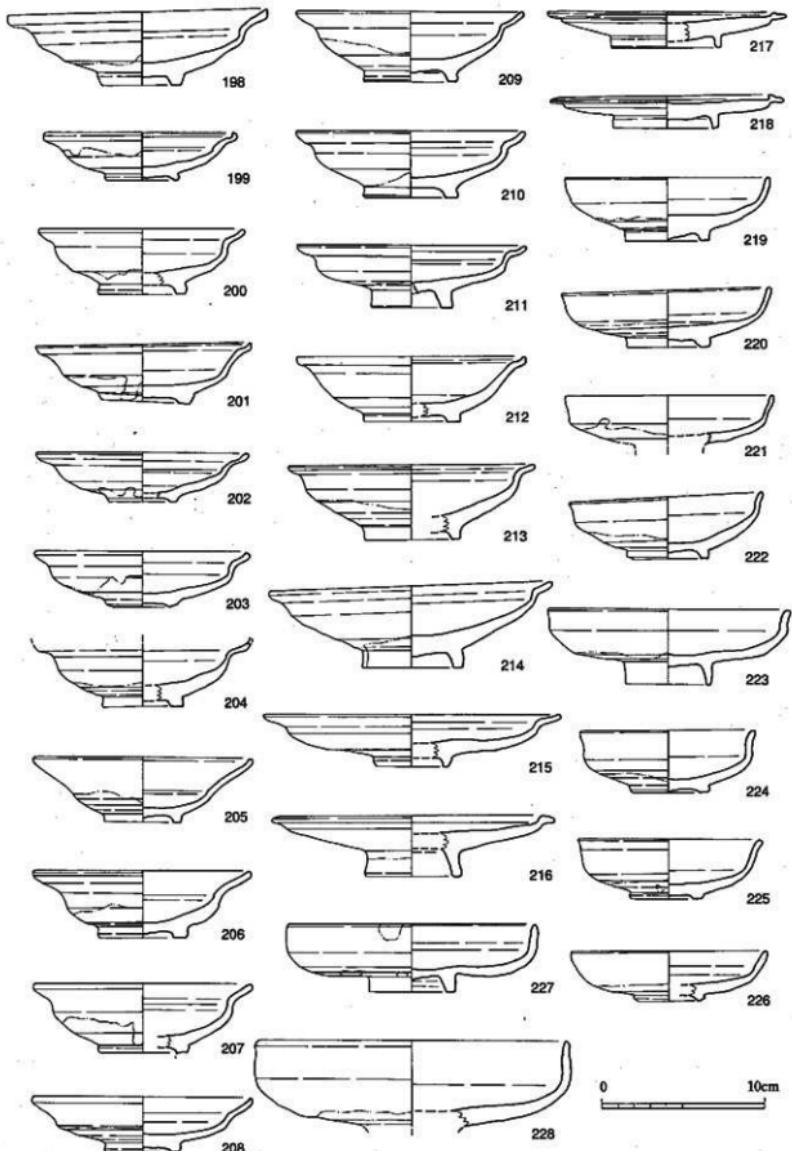
第99図 西物原出土遺物(Ⅲ) 実測図④ (1/3)



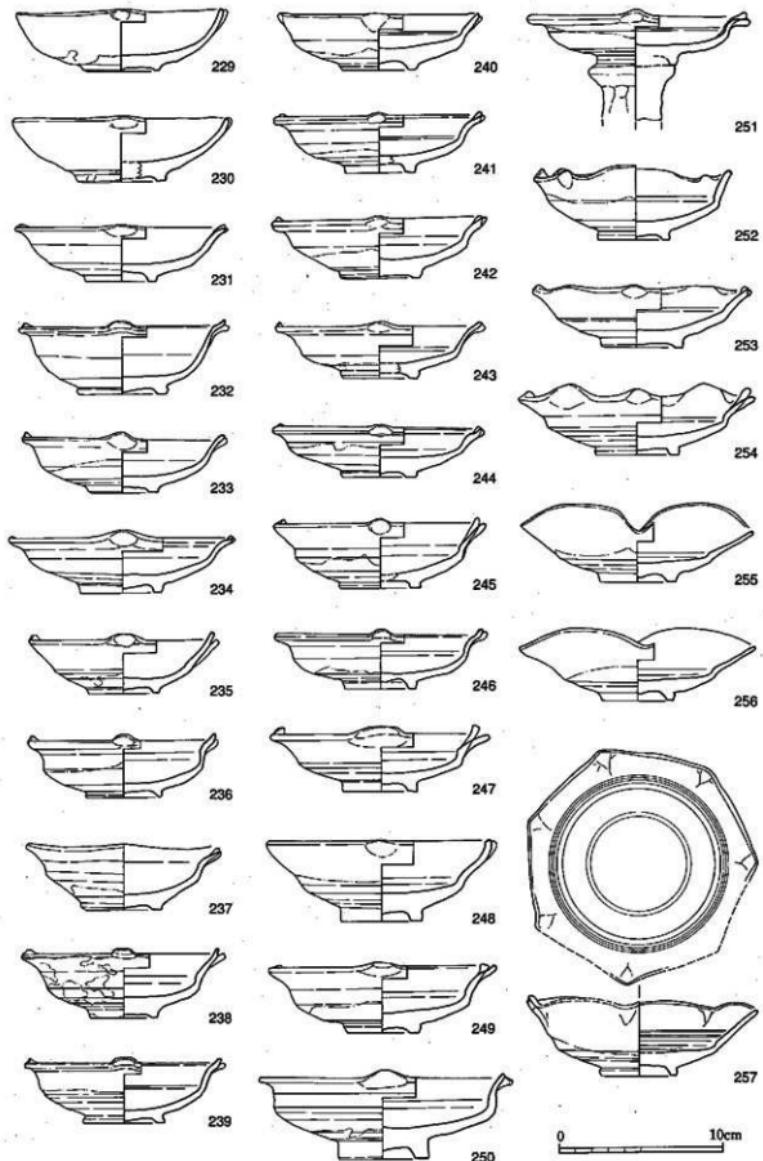
第100図 西物原出土遺物(Ⅲ) 実測図⑤ (1/3)



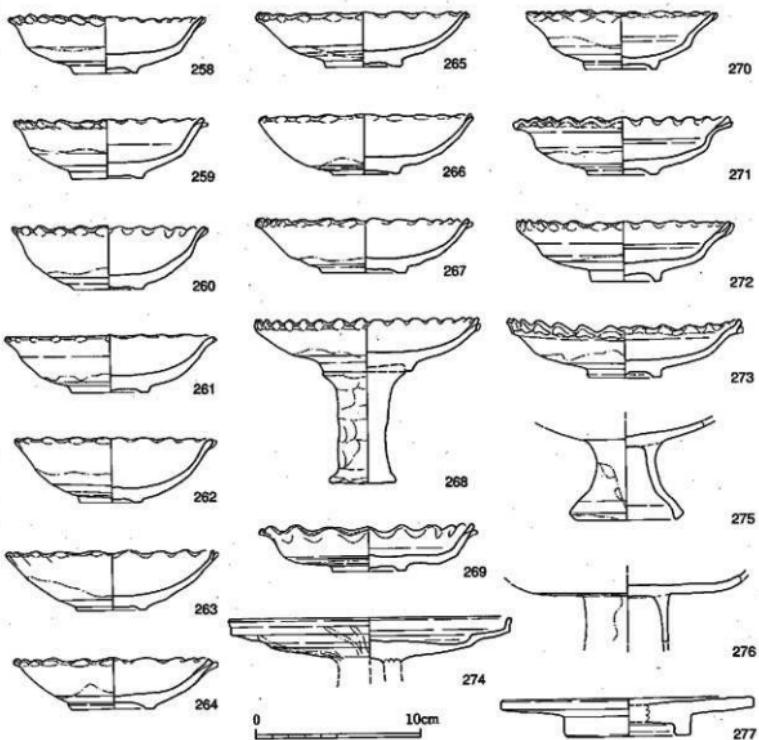
第101図 西物原出土遺物(皿)実測図⑥(1/3)



第102図 西物原出土遺物（Ⅲ）実測図⑦（1/3）



第103図 西物原出土遺物（III）実測図⑧（1/3）



第104図 西物原出土遺物（III）実測図④（1/3）

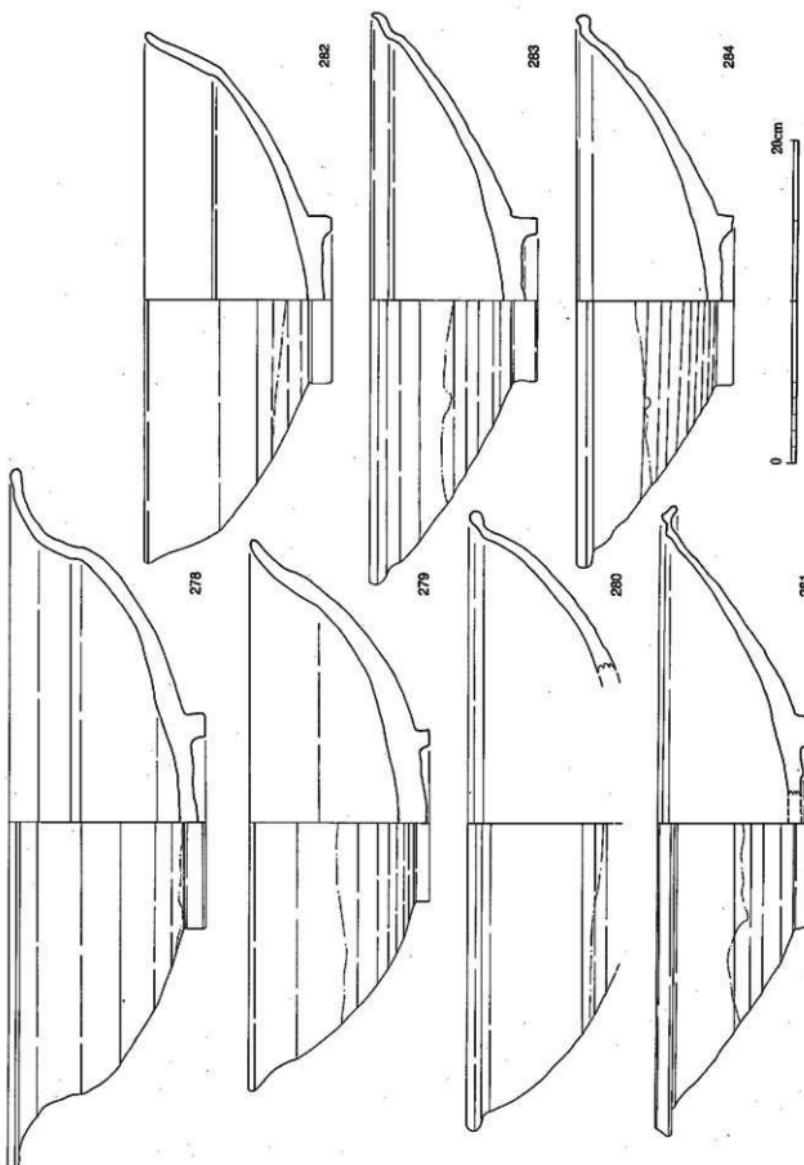
も縁の広い縁付皿であり法量も近い。257は縁の広い縁付皿の口縁部を平面形で七角形に整えるもの。

258～273はユビオサエを連続させる、いわゆる縁なぶりの皿。丸形或いは縁反形の皿が多く、縁付皿のものは少ない。

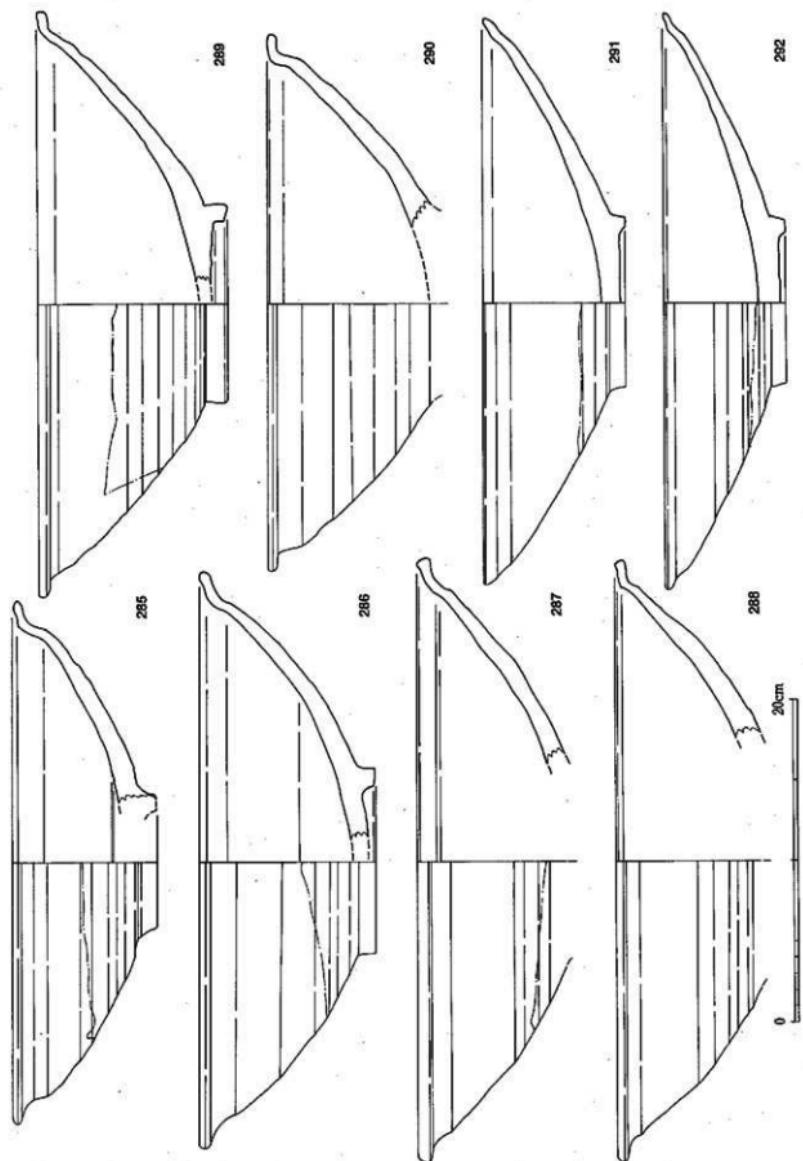
274～276は高杯。274は平坦な杯部を階段状に屈曲させ、更に端部を直角に挿み上げる形状。275は杯部を欠損する。緩やかに広がる脚は端部近くで内側へやや屈曲させる。長石軸を掛けた後に薬灰軸を掛ける掛け分けである。276は径14cm程度の大きく平坦な杯部をもつもので、径5cmの脚部は貼り付けにより杯部と接合する。器盤は薄く胎土は精良で全体的につくりが良い。

277は厚手で平坦な円盤状の体部に脚がつくもの。皿と言えるか疑問を残すが、用途は不明である。高台内にまで胎軸を掛けており、つくりが良い。

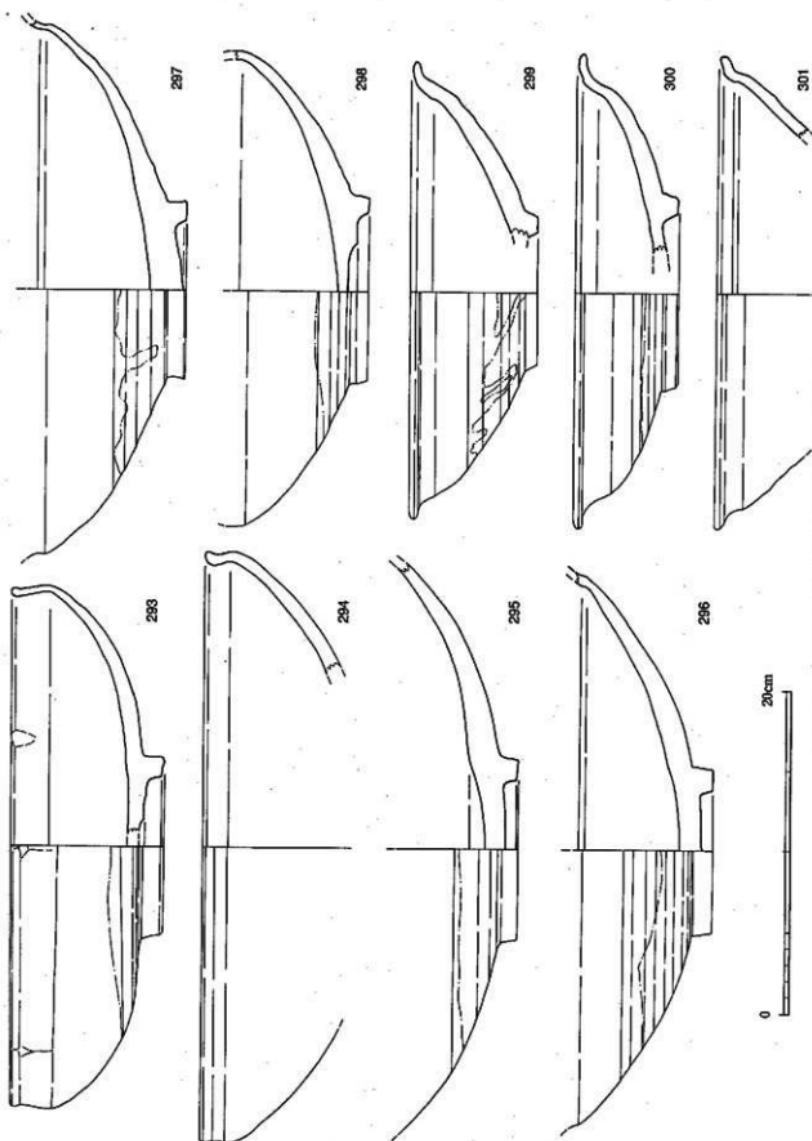
第105圖 西周原出土遺物（Ⅲ）實測圖① (1/3)



第106圖 西物販出土遺物 (Ⅲ) 實測圖① (1/3)

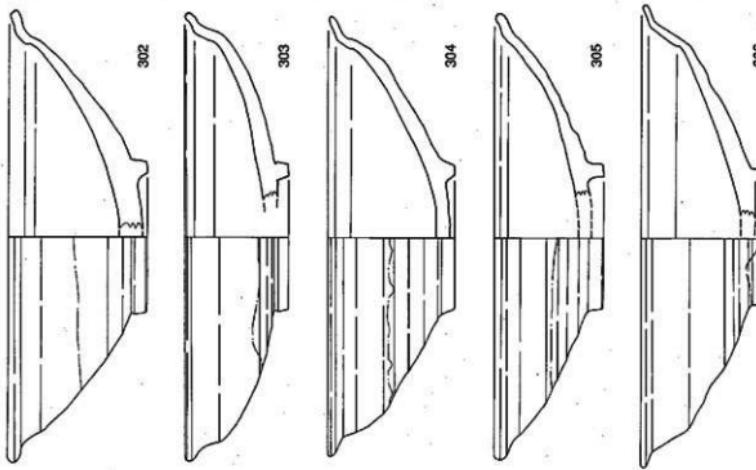
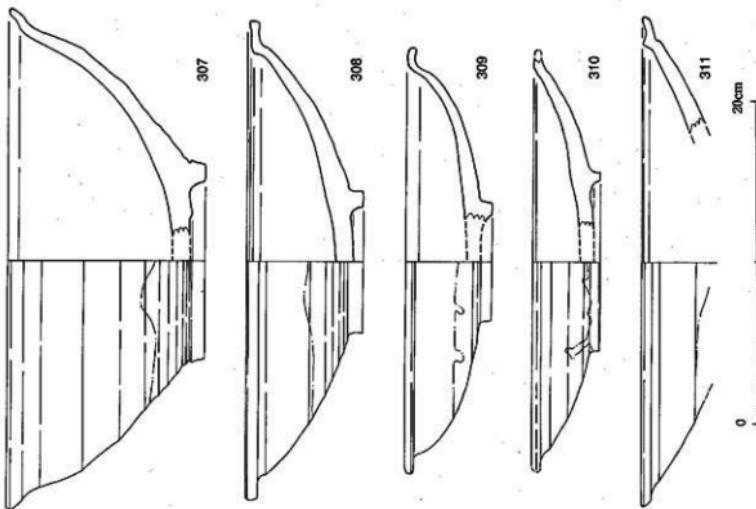


第107圖 西周廟出土遺物 (III) 實測圖⑫ (1/3)

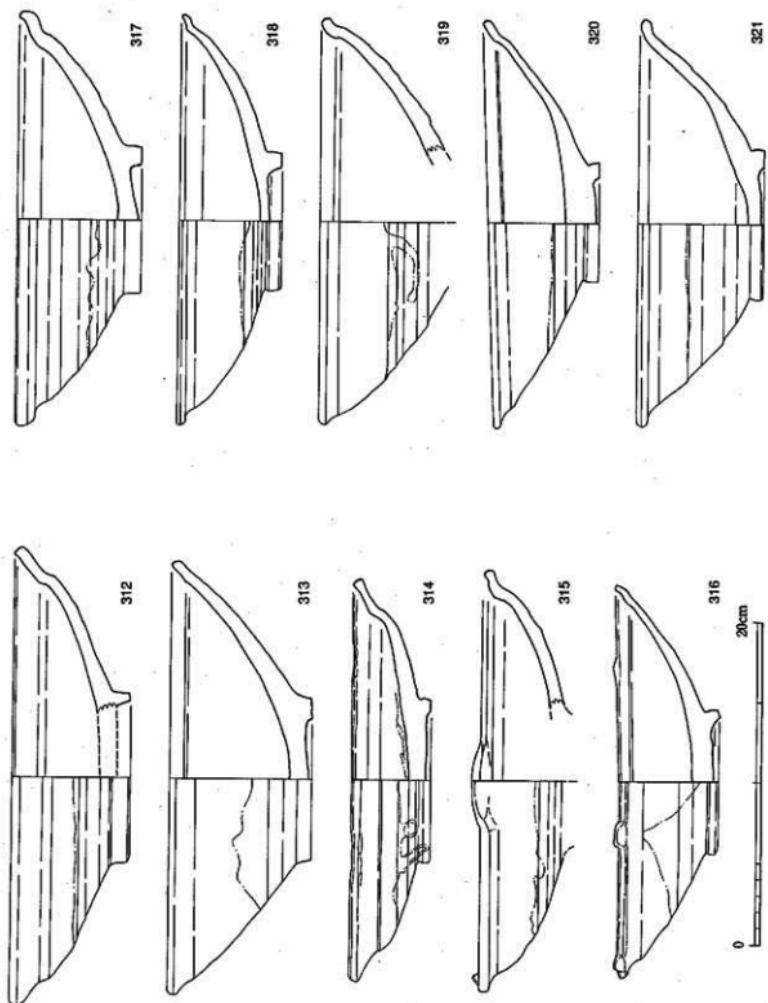


第108圖 西周原出土遺物(Ⅲ) 實測圖① (1/3)

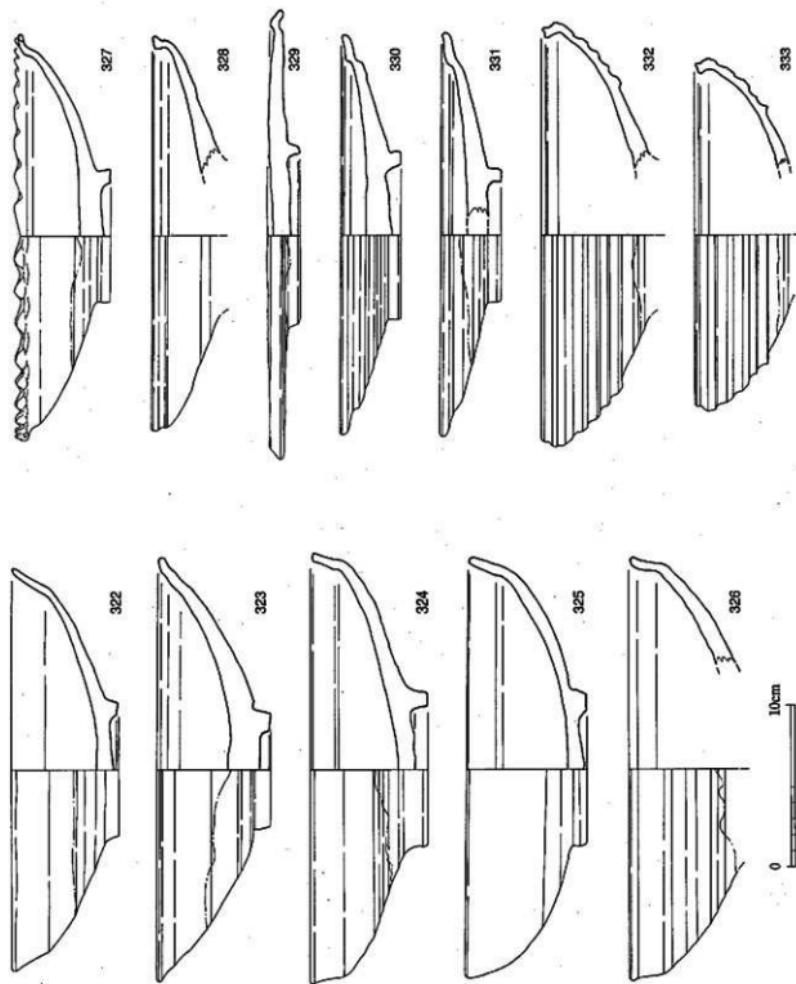
0 20cm

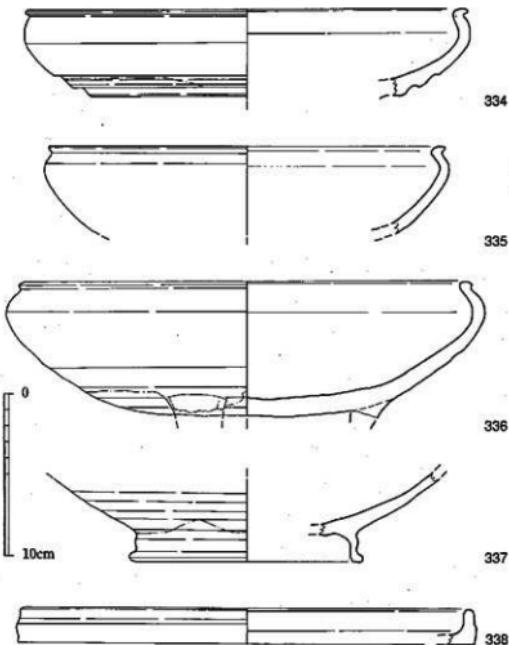


第109圖 西物所出土遺物(III) 實測圖① (1/3)



第110図 西物原出土遺物(III) 実測図⑤(1/3)



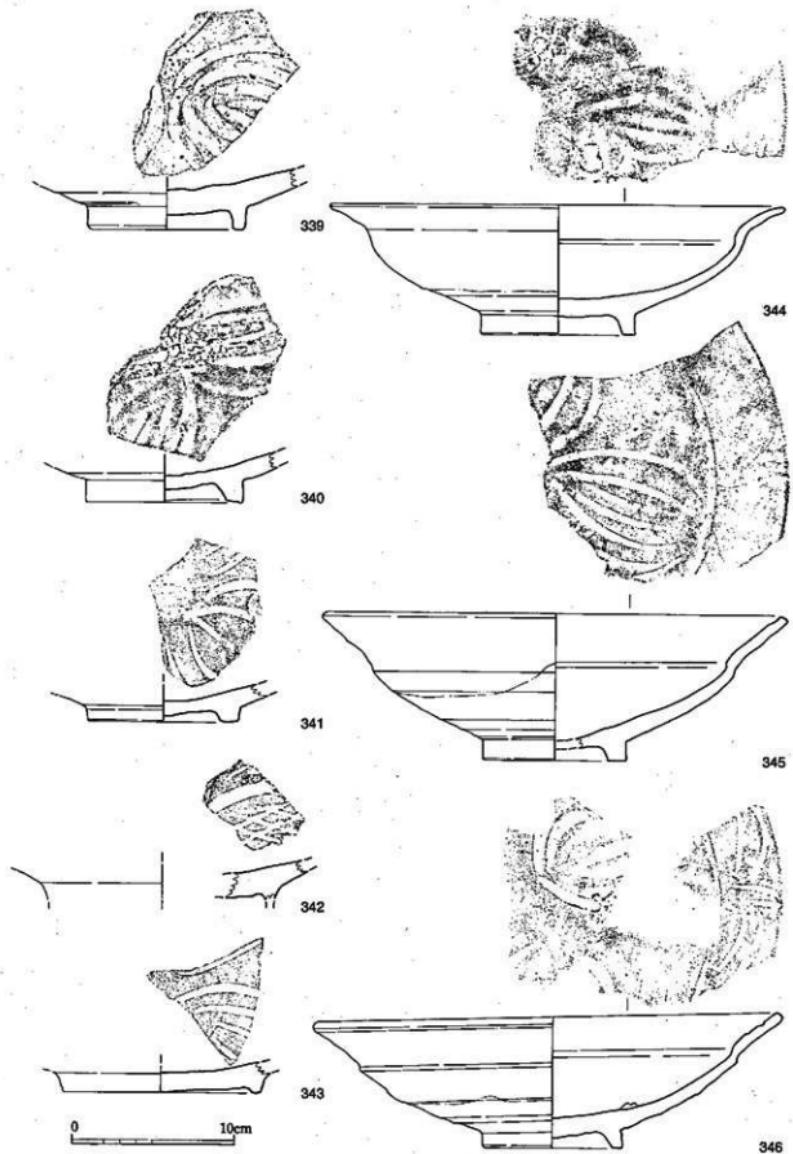


第111図 西物原出土遺物(Ⅲ) 実測図⑩ (1/3)

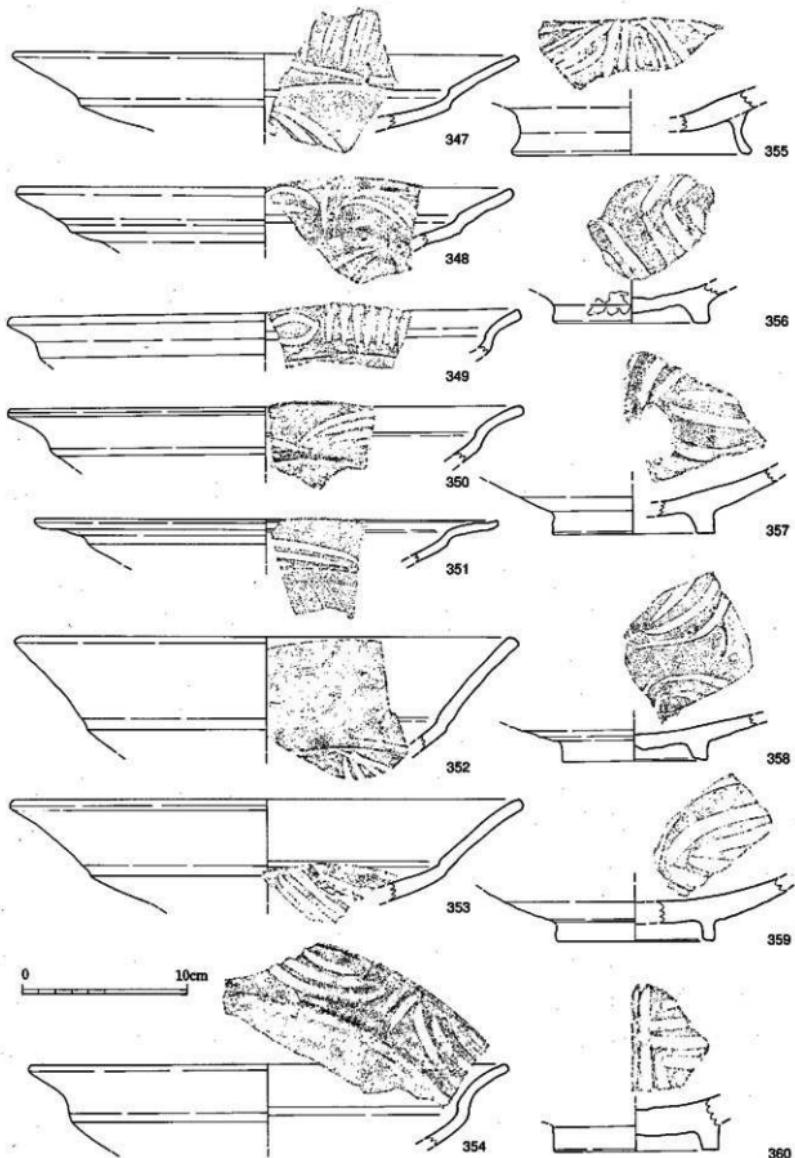
278~337は中皿及び大皿である。大皿と中皿で形態上の特徴は共通する。大形器種であるために焼成時に垂みが生じているものが多く、径復元には若干の誤差が生じている点は理解しておく必要がある。体部外面のケズリの範囲は概して広く、体部中位以上のものが多い。中には口縁直下までケズリを施すものがある。釉は褐色を呈する鉛釉と乳濁色を呈する薺灰釉で大半を占める。土灰釉は少ない。見込及び高台に目跡を残すものが多く、その個数はほとんどが4個である。大形の胎土目であり、貝目は少ない。見込の胎土目の位置にあわせ釉剥を行うのが一般的である。釉剥は長方形を呈するものが多いが、ごく粗く剥ぎ取るものもある。

口縁部形態は縁付形が多く、丸形と呼べるものはない。口縁部上面の形態は緩やかに外反するものと断面が匙状に窪むものとに分けられる。278のように縁の幅が非常に広いものがあるが、數は多くない。280・281は口縁部を外反させ、端部を内側へ短く折り込んで肥厚させるもの。291・292は口縁端部上面を断面匙状に窪ませるもので、シンプルな器形である。縁立形の大皿も多くはない。口縁端部をそのまま丸く收めるもの他に326のように外面に短く折りだすものがある。293は口縁部を正円ではなくわずかに角度をつけることにより平面形を七角形にする。縁なぶりを施すものもあるが、図化できるものは少なかった。

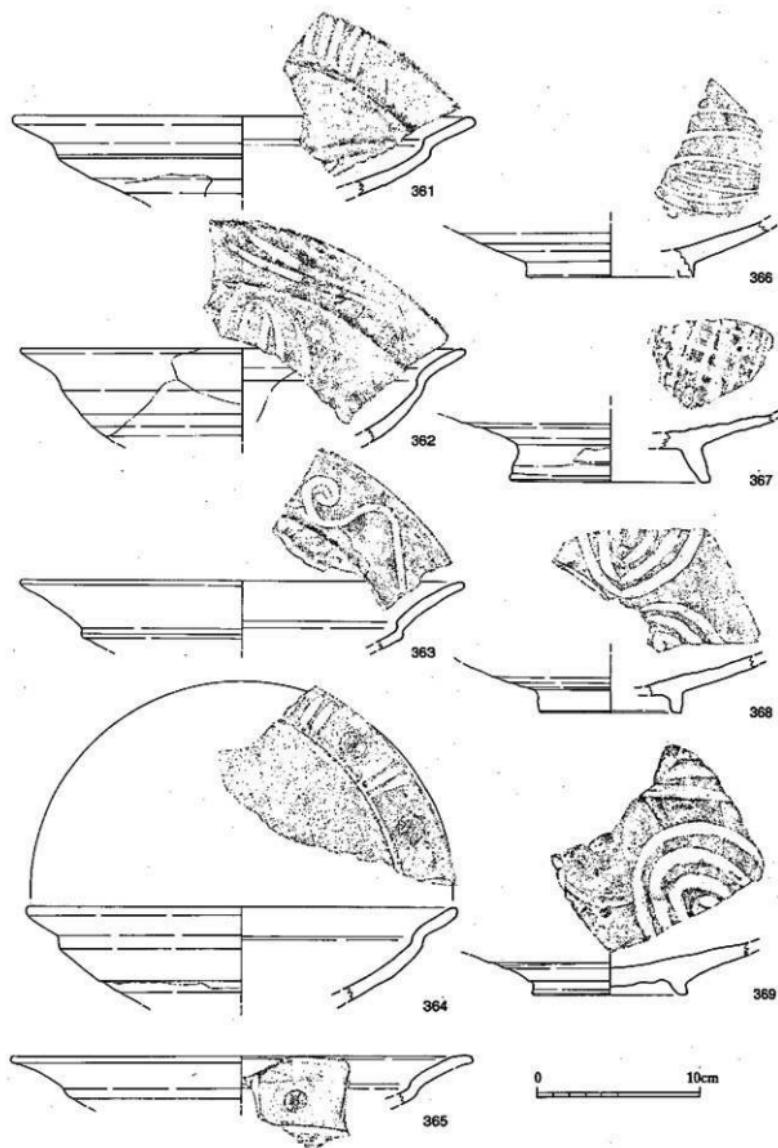
329~331は平坦な形状の皿である。特に329・331は小皿にある同様の形態のもの (216~218)



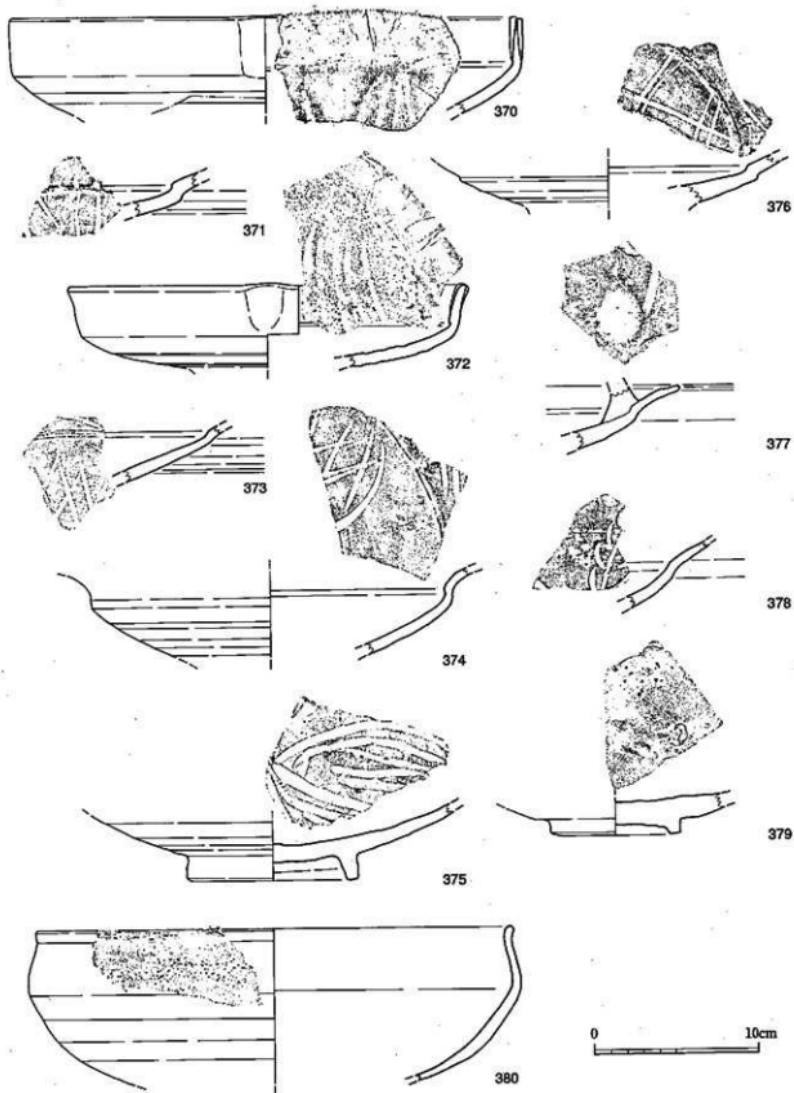
第112図 西物原出土遺物（Ⅲ）実測図① (1/3)



第113図 西物原出土遺物（Ⅲ）実測図⑩（1/3）

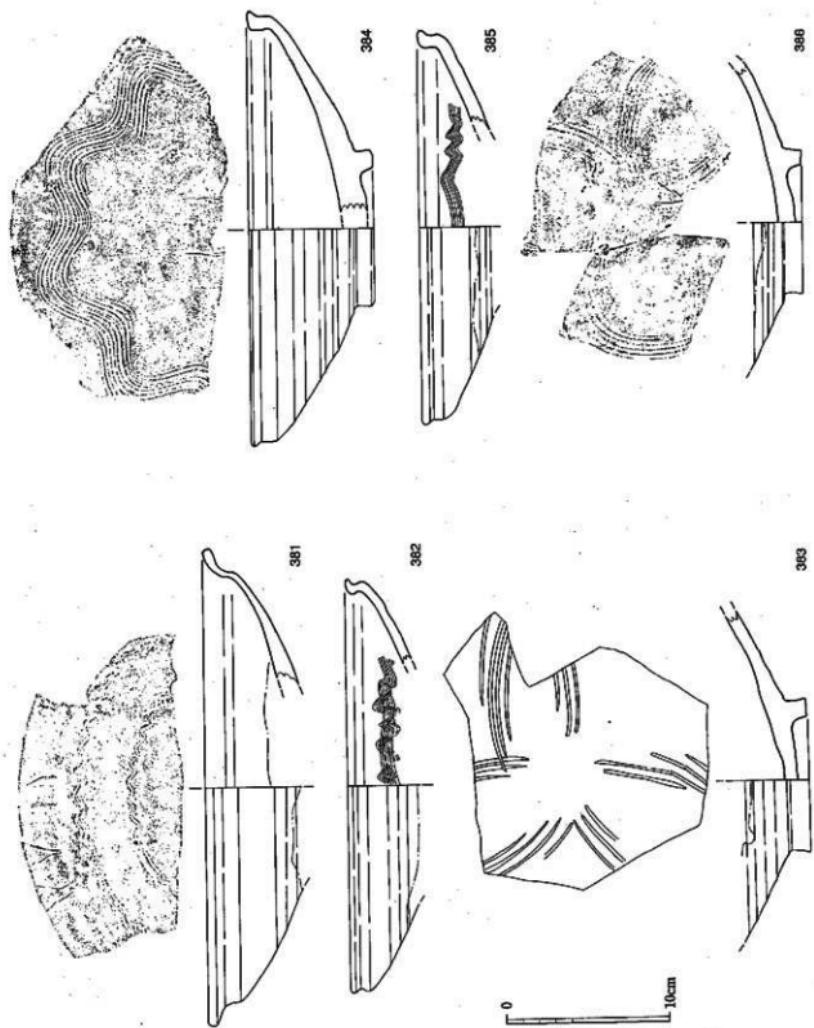


第114図 西物原出土遺物(III) 実測図⑩ (1/3)



第115図 西物原出土遺物（皿）実測図② (1/3)

第116図 西物原出土遺物 (III) 共測図② (1/3)



をそのまま大きくした形態である。332～334は底部からの削りが非常に強く、装飾的に段を生じさせるもの。口縁部は内湾させ、端部を外へ摘み出す。335・336も口縁部は同様の形態であるが、体部のケズリは通例のものと変わらない。336は高台ではなく方形の脚を三足有するが、全て欠損している。

337は高さ2cmの貼付高台を有する大皿。高台は薄く、端部は丸みをもって肥厚させている。338は盤状の皿。高さ1.5cmの短い立ち上がりをもつ。

大皿には無文のもの他に文様を入れるものも少なくはない。文様の種類は彫文と波状文の二者に分けられる。339～378は太い彫文で文様を描くものである。大皿の見込に描くものが多く、縁付形の大皿の口縁部上面に描くものも多い。外面に彫文をいれるものはない。見込に描かれる画題は大部分が木の葉文である。342・373・374は円文の中を格子文で埋めるもの。360・367・376には格子文が描かれる。378は草木文であろうか。口縁部上面に描かれるものは直線文や円文など抽象的なものが多い。364・365は菊花文のスタンプ文が伴う。377は口縁部屈曲部付近から断面梢円形の把手がつくものである。

379～386は櫛描波状文、或いは沈線で文様を描くものである。379は見込に細い沈線で直線が刻まれるもの。380は縁立形の大皿の口縁部外面に波状文を巡らせる。381～385は見込に波状文を一周させるもの。382～385は短く直立し端部を外へ摘み出す特徴的な形態の口縁部を有する。383・384は櫛描文で円弧文を描くものである。

鉢（第117図）

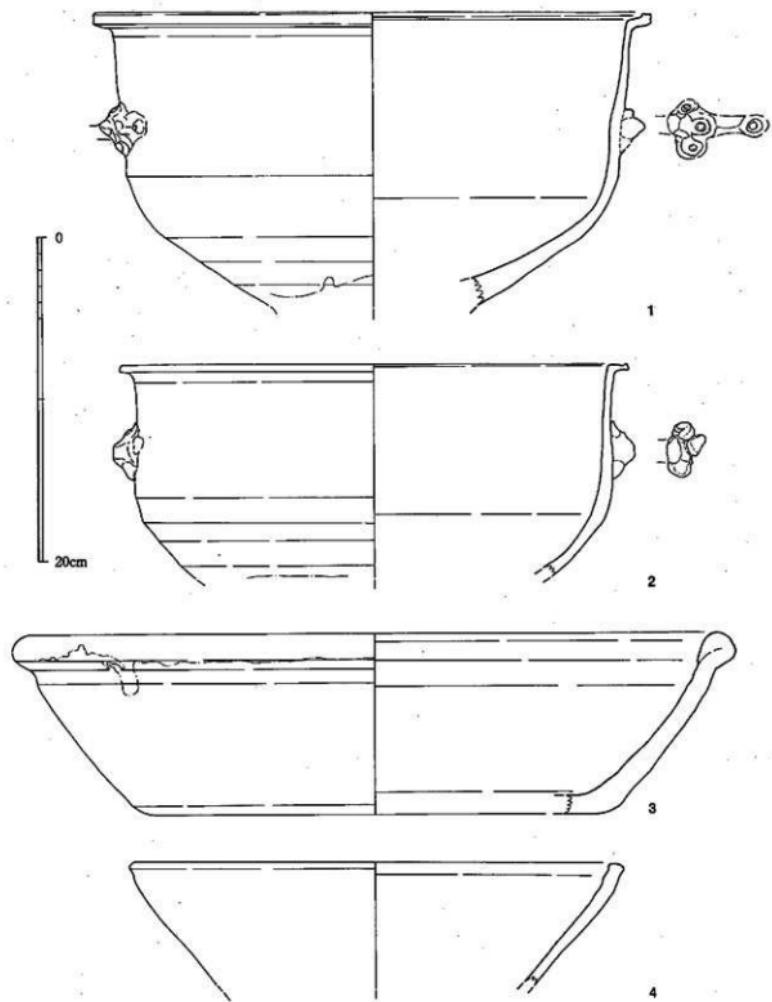
鉢については整理作業が中途となってしまったために、ここでは代表的なものである一部を報告する。

1は把手を有する大形の鉢。直立する体部のほぼ中位に把手をもつ。把手自体は欠損しているが、割れ口の観察から断面が径1.4cmの円形のものと判断できる。把手の付根には三重の円形浮文が貼り付けられ、やや離れた場所にも同様の円形浮文が一つ添えられている。口縁部は一旦直角に外反させ、更に端部を上方へ屈曲させる。これらの強い屈曲により鋭い稜線が生み出されている。口径は34cmを測る。藁灰釉が厚く掛けられるが発色は悪い。2も1と同様の形態で、把手の付根には3個の円形浮文が貼り付けられる。

3は口径44cmの大形の鉢。体部は比較的浅く、器高は11.1cmを測る。ごくわずかに内湾しながら大きく広がる体部を持つ。口縁端部は内側へ折り返して密着させ、丸く仕上げられる。4は大きく開く体部をもつ鉢であるが、端部はそのまま四角く取るのでシンプルな形態を呈する。

甕（第118～121図）

甕は多く出土する器種のひとつであるが、細片となっていると接合が困難であり、実測に耐えうるものは多くない。法量的には11・12に代表されるような口径15cm、器高18cm程度のものが多く、大形のものは少ない。体部はタキ成形で内面に当て具痕である青海波文を残すものが多い。釉は素焼きのものを除き鉄釉・鉛釉であるが、10は灰釉で体部中位に突帯状に張り出させるなど雜器としての甕とは使用目的が異なるものとみられる。口縁部は露胎のものが多く、重ね焼き時に接着することを避ける目的であろう。口縁部上面及び底面の周囲には目跡が見られるものが多く、ほとんどが貝目である。



第117図 西物原出土遺物（鉢）実測図（1/3）

1・23は大形の部類に入るものの、口縁部形状は外反させる口縁部の端部を内側へ折り込む点で共通する。17・18の口径13cm程度の製品にも口縁端部を内側に折り込む特徴を持つが、口縁部上面を平坦になるように整形している。3は口径50.8cmを測る大形品であるが、口縁部がハ字

形に開く特徴は珍しい。

5～8は綱状突帯を巡らせるもの。大形の壺の胴部最大径もしくは最大径より上位の肩部に巡らせてある。11～14は内傾する口縁部で端部を外側へ折り返す。15・16は強く内傾させて端部を外側へ折り返すもので、上面が水平に近くなるもの。折り返す幅は2.3cm程度で広い。

壺（第122・123図）

第122・123図に示したものは茶壺として使用されたとみられるもの。丸みを帯びる体部に直立する口縁部をもつ。口縁端部は短く外反させるものと外面に短く折り返すものがあるが、いずれにせよ端部を肥厚したような形を呈する。肩部には沈線を巡らすものが多く、口縁部との境に低い突帯を巡らせるものもある。また肩部に粘土紐を逆U字形に曲げた耳をつけるものがあり、8の場合は3個の耳が付けられている。体部はタタキ成形で、外面にタタキ痕である平行線を残すものがある。内面に当て具痕である青海波文を残すものが多いが、ナデ消したように不鮮明なものもある。工房部ではあまり出土しなかった器種であるが、西物原では比較的まとまった資料が得られた。出土地点は西6グリッド周辺が多く、茶入と近い場所で廃棄されている傾向が読み取ることができる。

瓶（第124～125図）

瓶は最大径が20cm程度の大形のものが多い。この中には肩部が張るものとならかなものの二者がある。また、肩部に沈線を3条程度いれるものが多いが、入れないものもある。体部はタタキ成形で内面には当て具痕である青海波文を残すものが多い。釉は鉛釉が多く、鉛釉を掛けた後に薫灰釉を二重掛けするものもある。11はイッチン掛けを施すが発色しない。

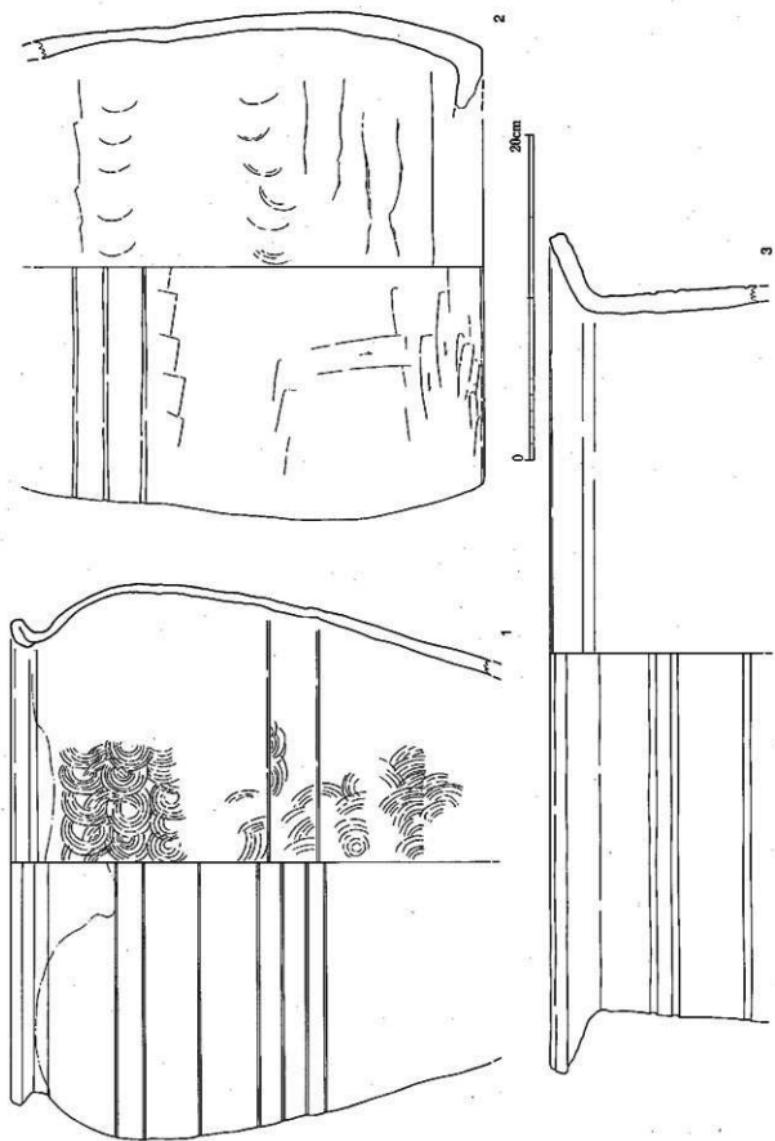
4は多条の沈線をいれる肩部で文字状の線刻を刻むが判読できない。5は縦方向に太い凹線を4方向に入れる。7は焼成時の歪みが著しい。13・15・16・18・19はスリムな形状の瓶で、大形で丸く張る胴部のものに比べると数は少ない。14は底部から5cmの高さに突帯を巡らせ、突帯上には刻みを入れる。また、突帯よりも上位には線刻が認められるが欠損しており詳細は不明である。17は体部が算盤玉形に張るもの。20・21は底部のケズリが深く段々となっており、12・22～25は小形の瓶である。小形であるが急入りにつくられており、一輪ざしとして用いられたものであろうか。

片口（第126～128図）

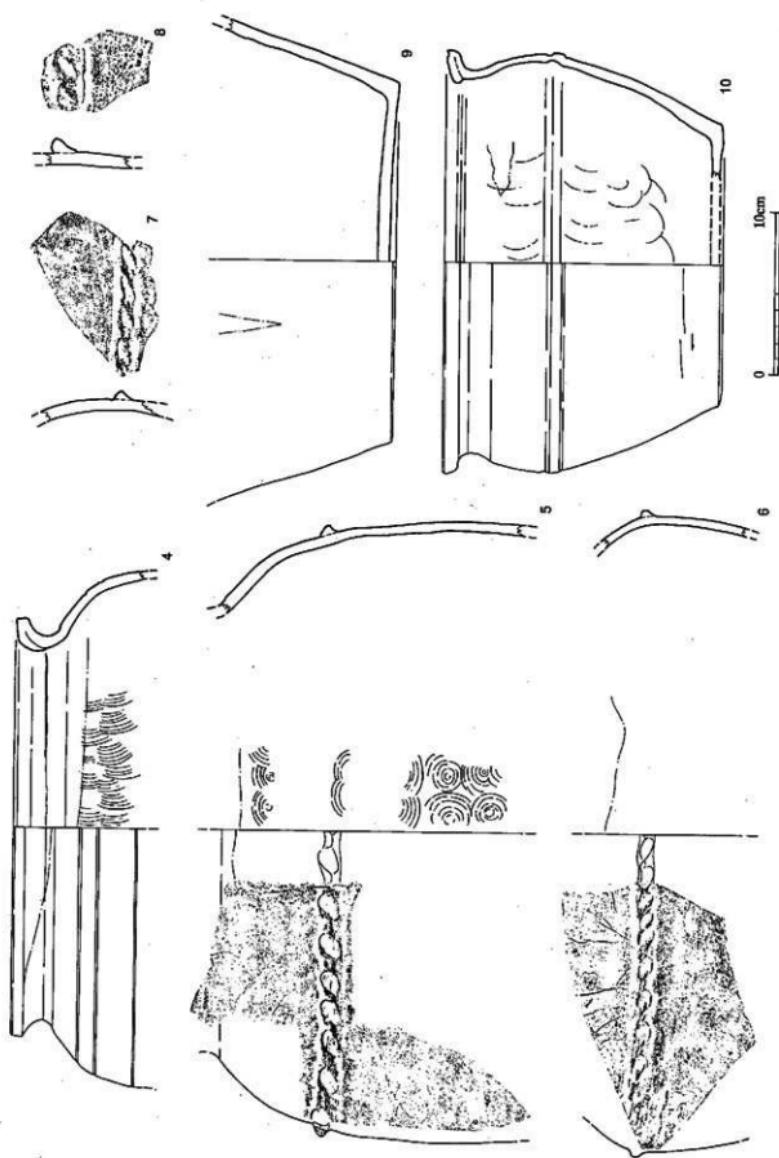
片口は口縁部形状から見て大きく3つのタイプに分類が可能である。ひとつは口縁端部を内側へ折り込んで密着させ、断面が方形に肥厚するもの。これには1～3が該当する。『内ヶ磯窯跡1』で報告した際には口径20cm程度の規格を考えたが、1・2はそれに該当し、3は小振りなものといえる。

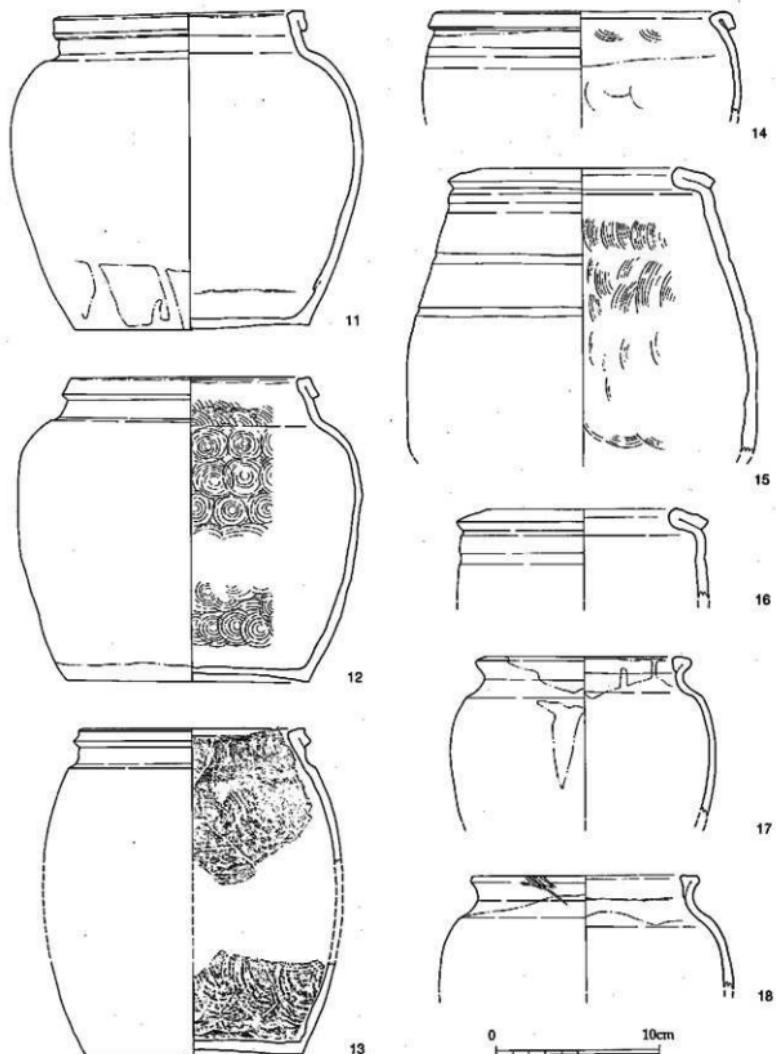
次に口縁端部を外側に折り返し密着させるものである。これには4～16までが該当する。これら二種は平底である点、体部がタタキによる成形である点等から共通項が多い。また釉についても鉛釉が多く、口縁部は露胎のものが大部分を占める。これは重ね焼き時に接着を防ぐためのものとみられる。口縁部上面及び底面には目跡を残すが、胎土目ではなくすべて貝目である。なおこの形状の口縁部は壺にも見られるものであり、今回示した中にも片口部のないものについては壺である可能性もある。

第118圖 西周灰陶罐出土遺物（燒）實測圖① (1/3)

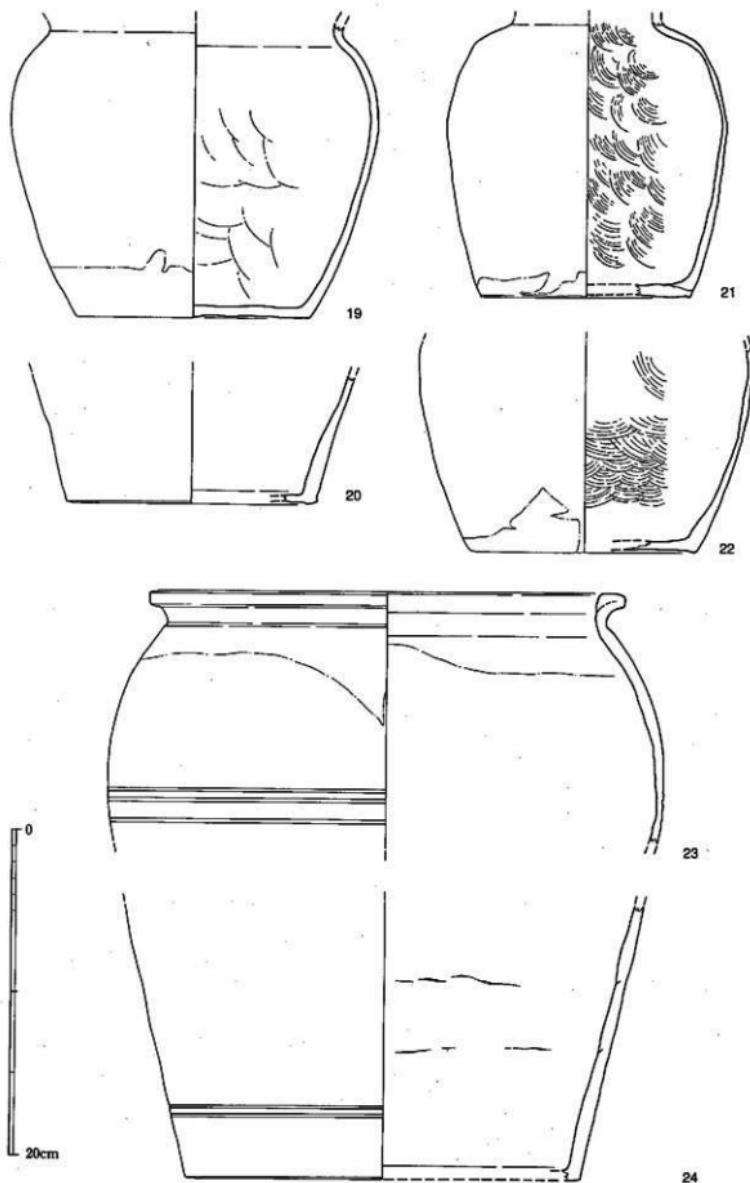


第119圖 西物原出土遺物（續）美洲圖②（1/3）

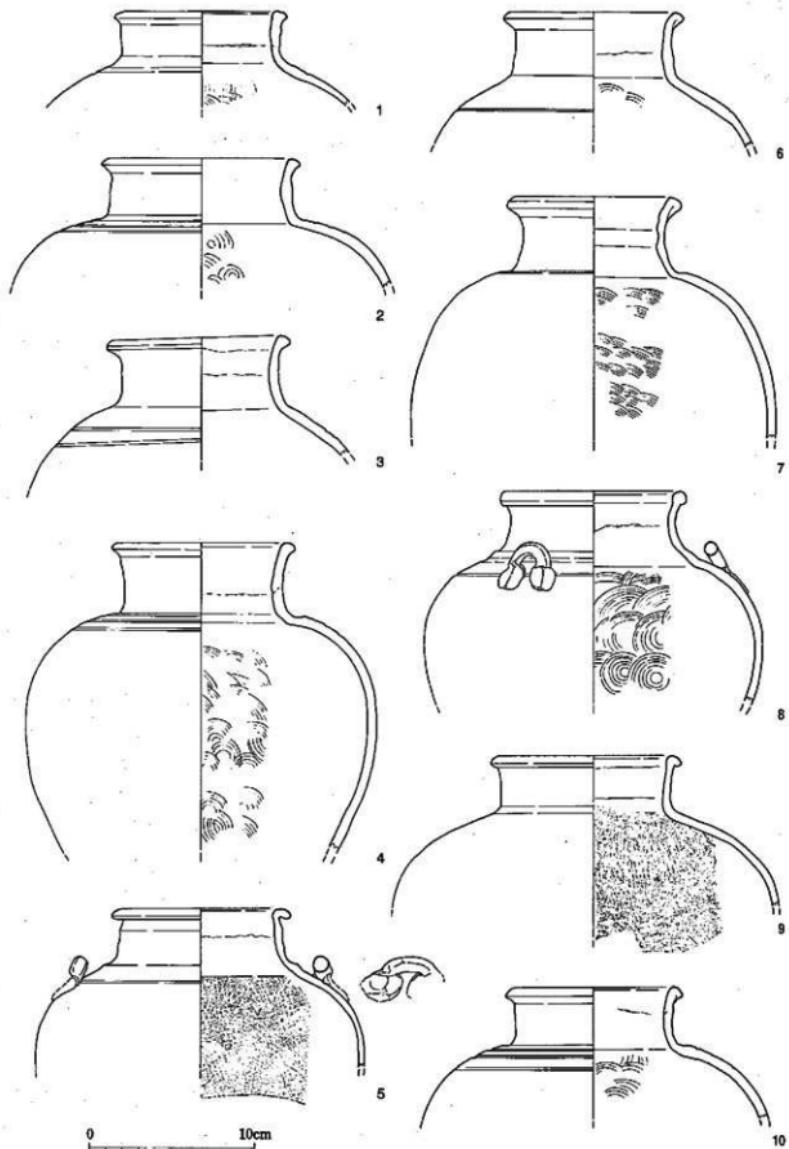




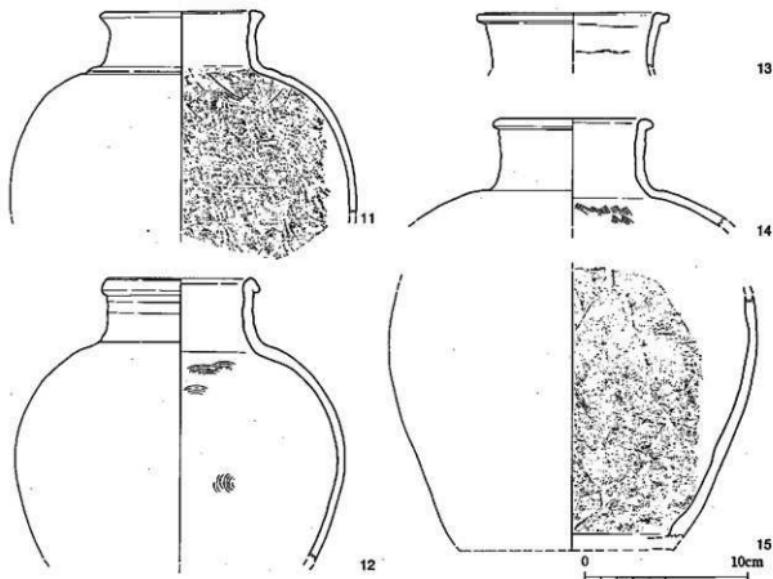
第120図 西物原出土遺物（甕）実測図③ (1/3)



第121図 西物原出土遺物(甕) 実測図④ (1/3)



第122図 西物原出土遺物（壺）実測図① (1/3)



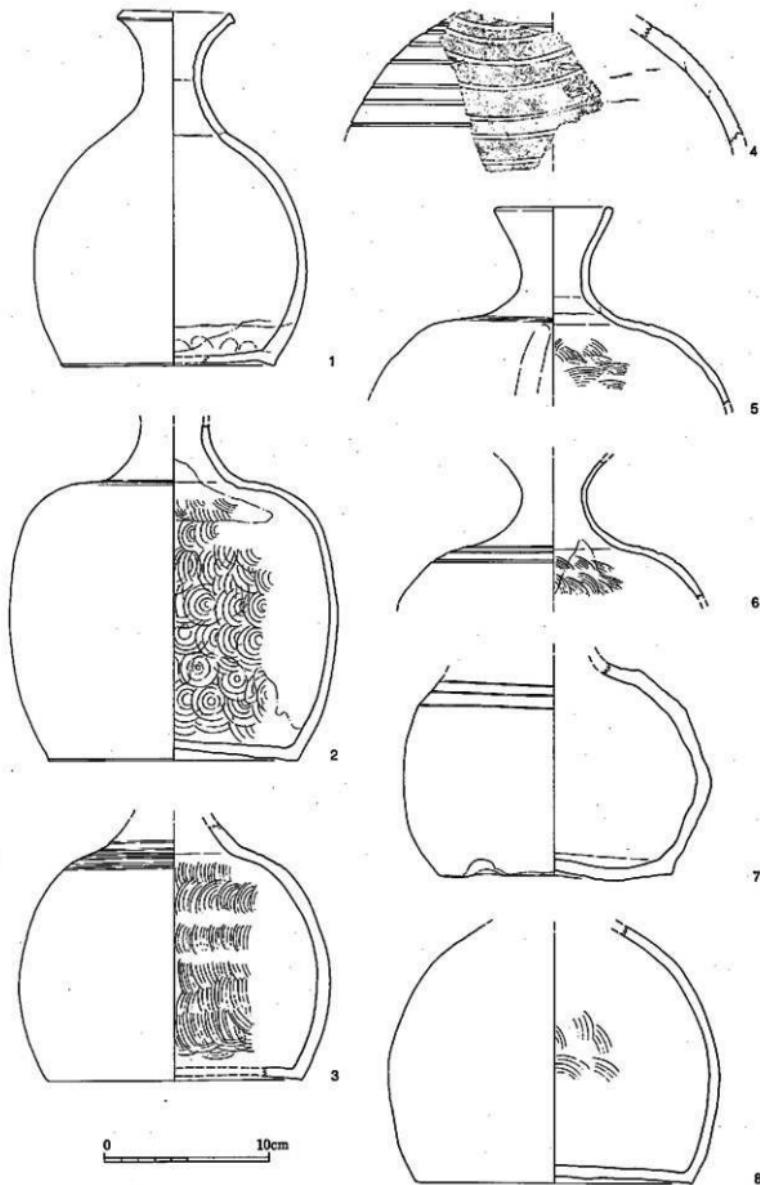
第123図 西物原出土遺物（壺）実測図②（1/3）

17~32は口縁端部を外側へ短く折り返し、丸く仕上げるものである。体部は水引き成形で丸みをもって立ち上がるものであり、高台を有する。23~27は片口部の両脇に円形浮文を貼り付けている。25は口縁部を折り返すことなくほぼ直立させる形をとるもので、類例を見ない形状である。26と27は体部に波状文を巡らせる。

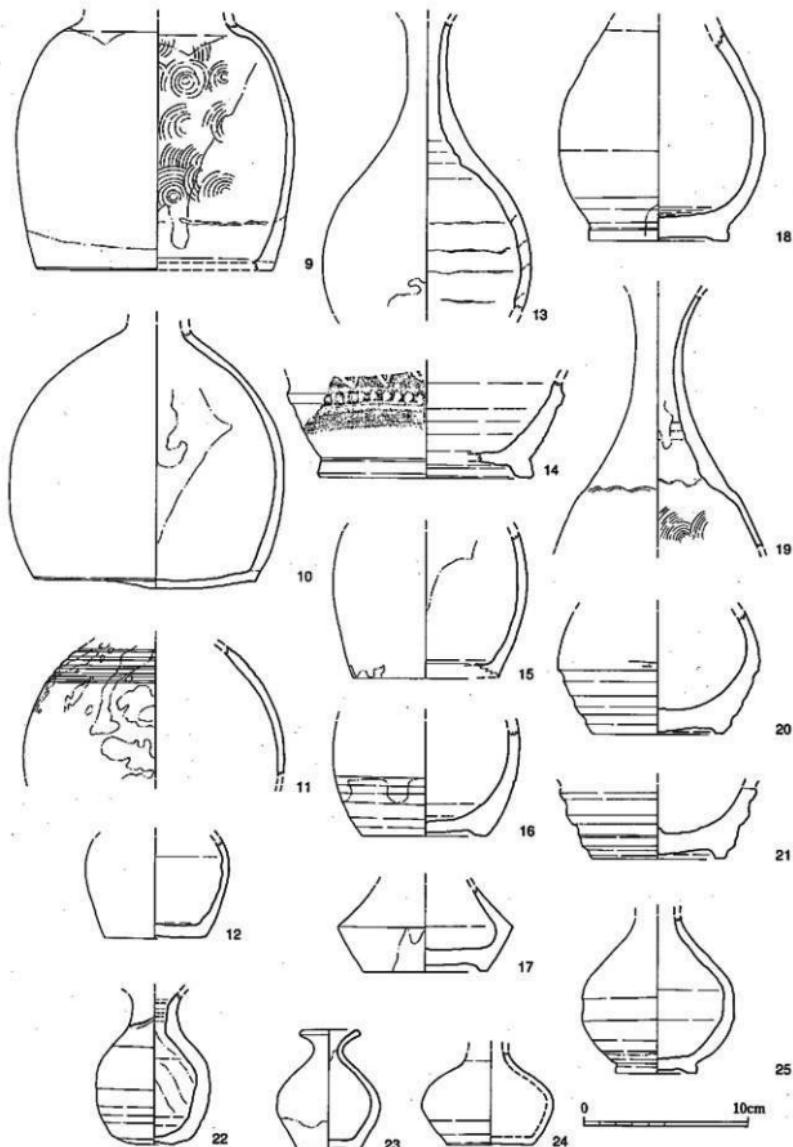
擂鉢（第129~132図）

擂鉢は数多く出土する器種の一つである。大部分は素焼、或いは焼締であり、施釉されるものは少ない。前者と後者は釉の有無に限らず器形もり、使用目的・対象者が異なっていたものであろうか。擂目の入れ方については、基本的には底部から口縁部に向かって直線的に施すものである。一部に5にみられるように方向を変えて擂目がクロスする様にしたものもある。擂目の間隔については、密に施すものは少なく、上端で2cm程度おくものが多い。全体的な器形は、底部から口縁部にかけて直線的に延びるものと、やや丸みをもって立ち上がるものの二者がある。体部の成形は水引きによるものとタタキによるもの二者がある。ただし施釉される擂鉢にはタタキによるものは認められなかった。タタキ成形のものには内面に當て具痕である青海波文を残すものがある。外面にタタキ痕を残すものは少ない。外面の調整はナデによるものとケズリによるものの二者がある。ケズリの場合はその範囲はかなり広い傾向にある。底部の形態は、素焼・焼締のものは平底或いは碁笥底であり、高台をもつものは少ない。逆に施釉されるものは全て高台を有するタイプである。

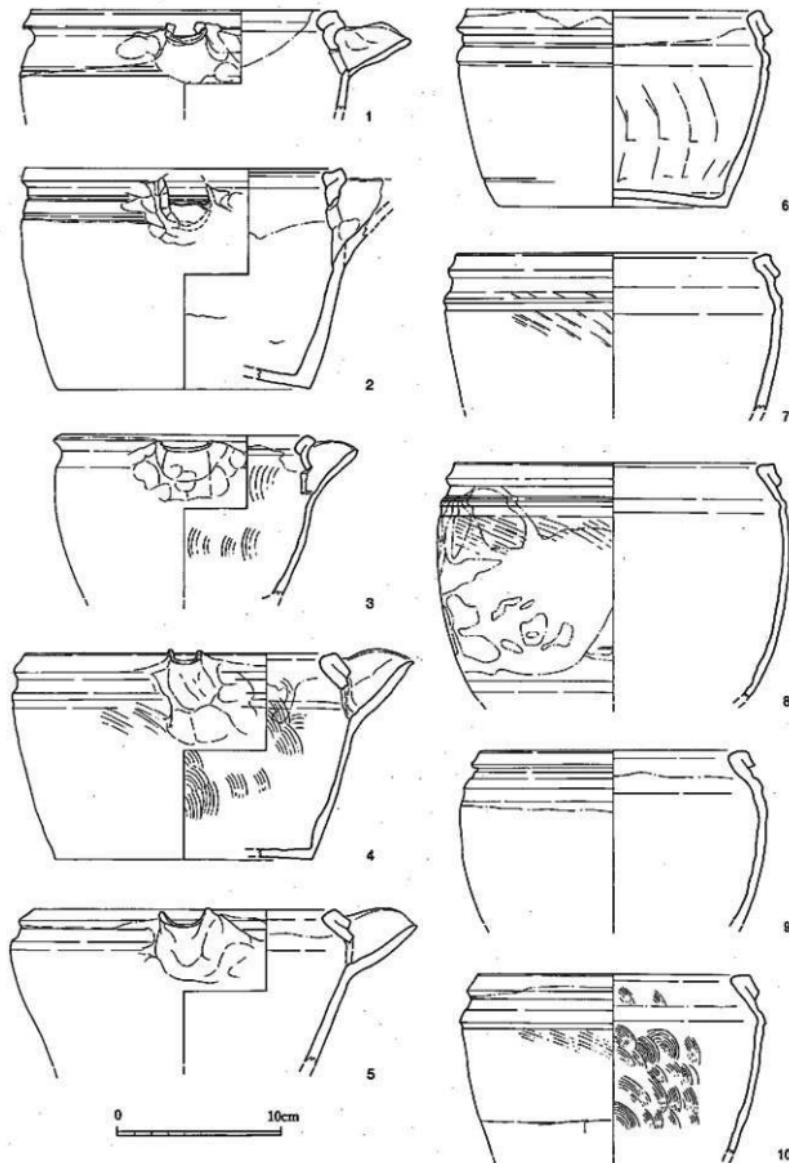
口縁部の形状は、素焼・焼締のものと施釉されるものとに共通するものはない。まず、前者に



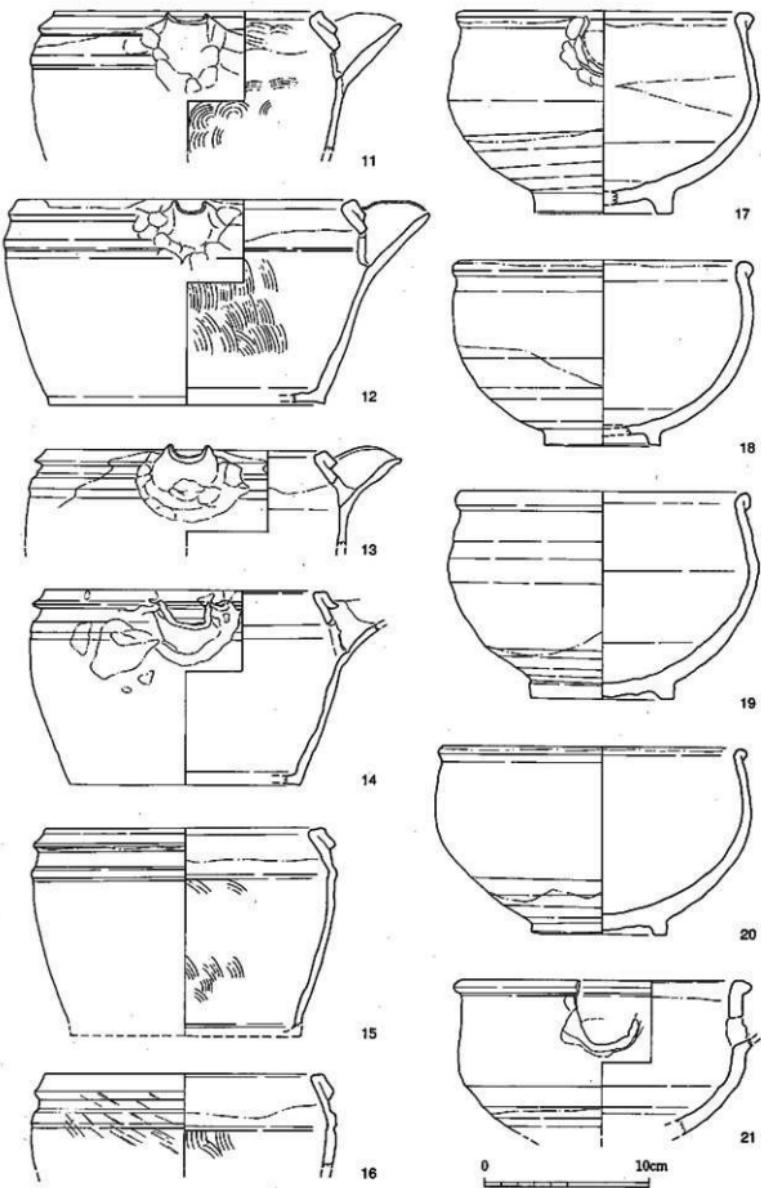
第124図 西物原出土遺物(瓶)実測図① (1/3)



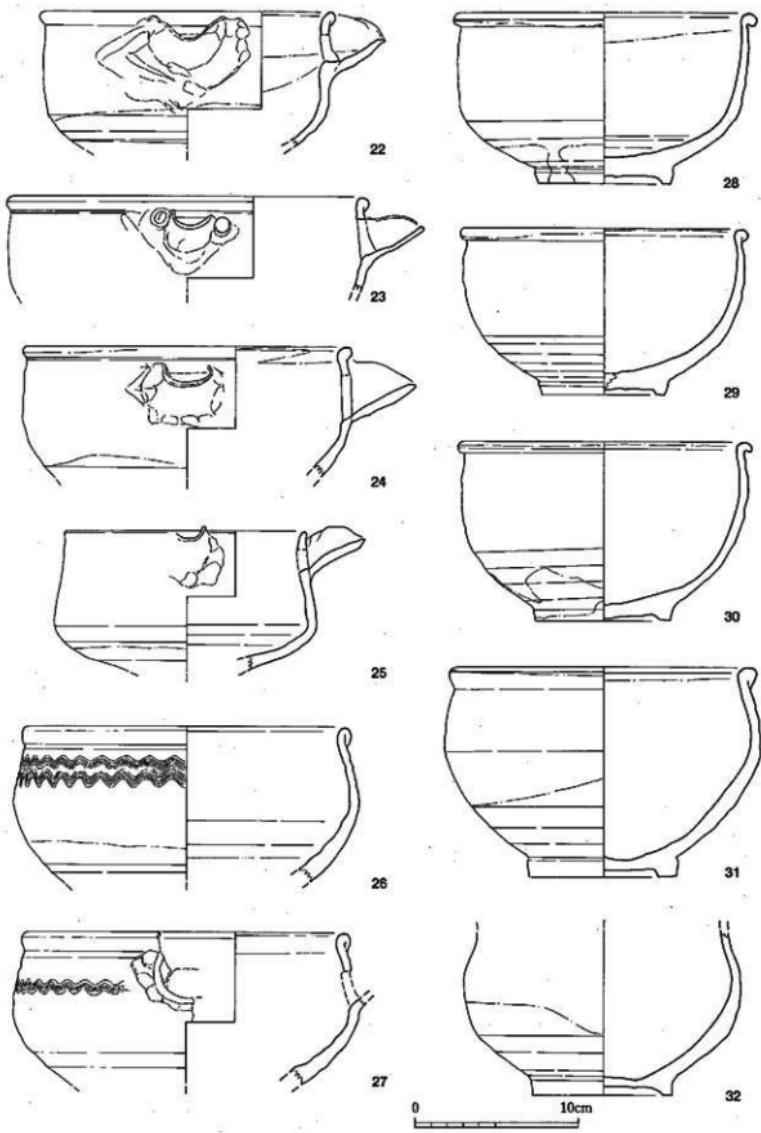
第125図 西物原出土遺物(瓶)実測図②(1/3)



第126図 西物原出土遺物（片口）実測図① (1/3)



第127図 西物原出土遺物(片口)実測図② (1/3)



第128図 西平原出土遺物(片口)実測図③ (1/3)

ついて最も多いものは、口縁部を外側に折り返して密着させて口縁帯をつくり、そこに2条の凹線を巡らせるものである。凹線には強い輪轆目によってつくり出るものや、沈線とするものがある。凹線は2条ではなく1条のものもみられるが、その数は少ない。口縁帯の幅は変異が大きく、また口縁帯の下端を強調するように突出させるもの、口縁部内面に蓋受状の突出部をもつものなどバラエティーが多い。口縁帯として肥厚させることなく、輪轆目によって口縁部の凹線をつくるものも比較的多くみられる。また、口縁部は直立させるものと内傾させるものの二者がある。次に多いタイプは口縁部を外側に折り返し密着させるもので、上記のものに比べるとシンプルな形状である。口縁帯の幅には若干の変異があるが、概して狭い。

施釉される擂鉢の口縁部形状は、一旦直立或いは内傾させた後に外反させるものが多い。22・23は口縁部を外側に折り返し密着させるもので、その内外面に波状文を巡らせる。釉には鉛釉と薺灰釉が多い。

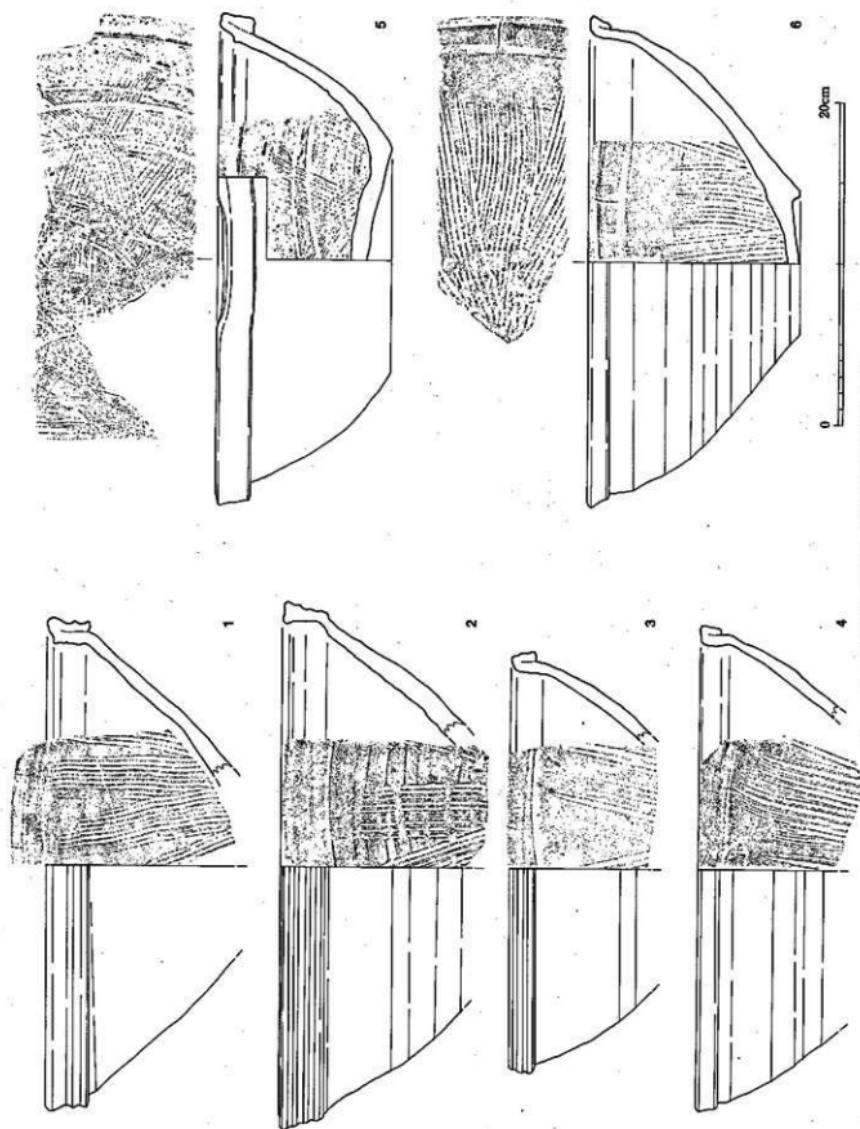
特殊品（第133・134図）

1は星形の小皿。手捏ねで6個の頂点を作り出す。釉は未発色で、底面は露胎である。2は1と同様の形態と見られるもので、約1/2を欠損する。内面に鉛釉を施釉するが全体には及ばない。3～5は小形の椀で、3・4は手捏ね成形である。3は鉛釉をまだ掛ける。4は素焼であり、指頭圧痕が著しい。5は輪轆目成形であり底面は手持ちのケズリで調整する。釉は未発色で、剥離している。6は内湾する口縁部を有する瓶形のものである。粘土の貼り付けで注口かとみられるものをつくるが、欠損部が多いために詳細は不明である。素焼で黄褐色を呈する。

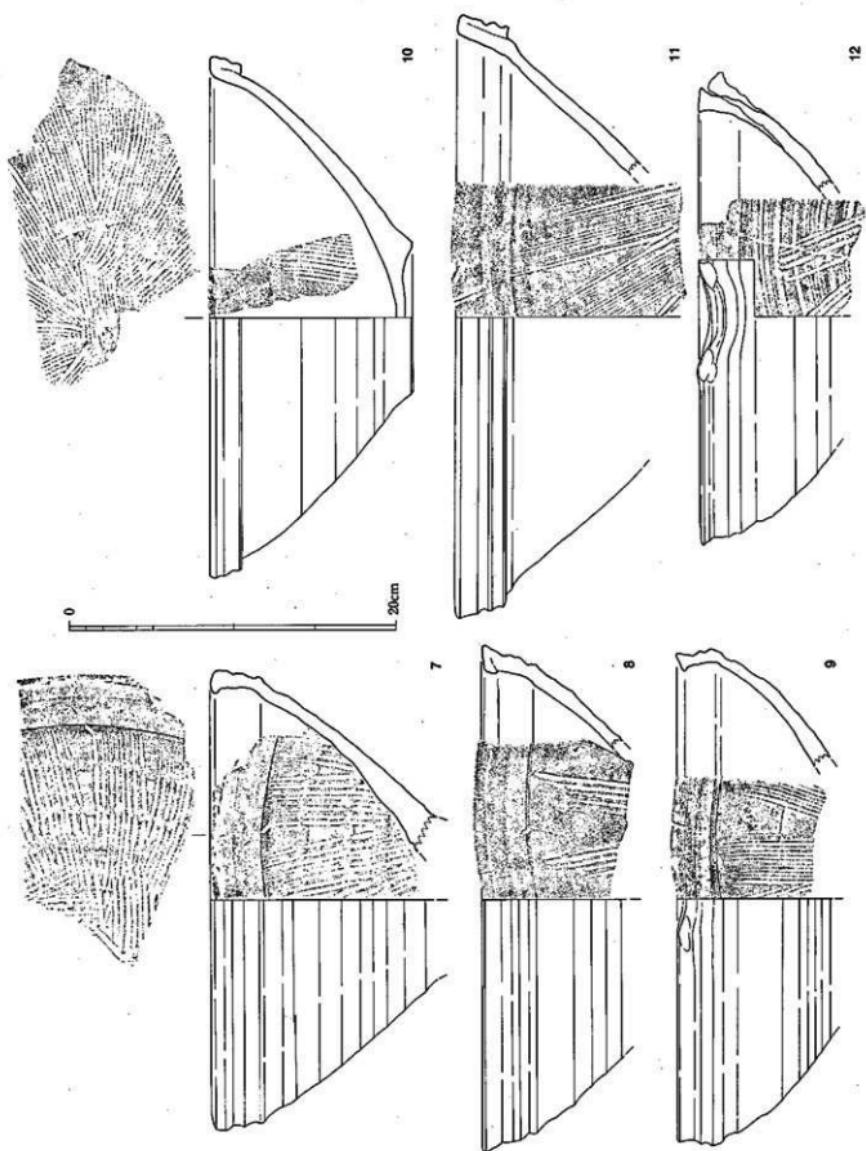
7は浅い小皿の口縁端部に9mm幅の先端円形の突起を有するもの。突起の持つ意味は想定できない。体部は非常に薄く2mm程度の部位もある。薺灰釉が掛けられ乳濁色に発色する。8～10は木の葉形の皿であろうか。9は葉の先端部で葉脈の表現がある。8・10は付根の軸部分であろうか。口縁端部を屈曲させ、粘土を加えて軸を成形している。いずれも薺灰釉が掛けられ乳濁色を呈する。11は浅い皿で口縁部を花弁状につくる。内外面の花弁の屈曲部にあたる部位には沈線を入れる。薺灰釉が掛かり乳濁色を呈する。

12は大皿或いは鉢の口縁部であろうか。一旦外反させた口縁部を直立させ、端部を波状に成形する。薺灰釉を掛け、乳濁色を呈する。13は椀であろうか。底部は三方の割高台で、直線的に開く体部がつく。割高台の切り込み部分から逆ハ字形に体部外面を削りこむ。それより上位は縱方向に沈線を密に刻む。釉は発色しない。14は直立する体部を有する椀形のもので、面取り・オサエにより故意に歪みを加える。内面には強い輪轆目を残す。外面には鉛釉が流し掛けされ、内面は露胎である。15は最大径13.8cmの輪状のもので、上下を欠損する。瓶の体部としては厚く、どのような形状をなすかは不明である。外面は大部分をケズリにより調整し、内面は幅広い輪轆目が明瞭に残る。素焼で薄茶色を呈する。16は何らかの器種の底部であるが、外面に線刻文様を刻む。具体的な画面であるが、何を表現したものかは不明といわざるを得ない。内面に釉が掛かるが未発色であり、線刻のある外面は露胎である。17は大きな穿孔のある筒形の形状のもので、天地が逆かもしれない。側面はケズリにより面取りが施される。素焼で灰白色を呈する。18は用途不明の上製品。平面形は半月形になるか。一端に切り込みがあるが、欠損部を含むために詳細はわからない。円弧部には体部が統くような剥離痕を残す。剥離痕を残す面はナデにより調整さ

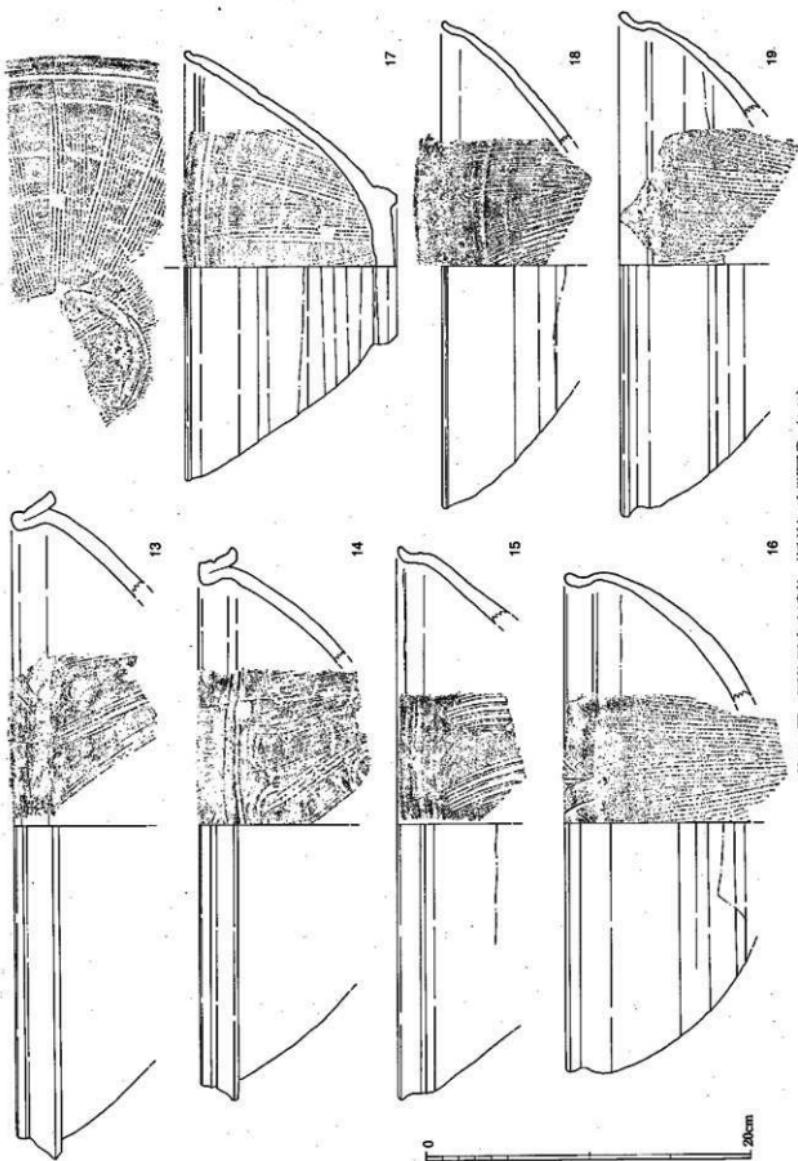
第129図 西物原出土遺物（鐵鋤）実測図① (1/3)



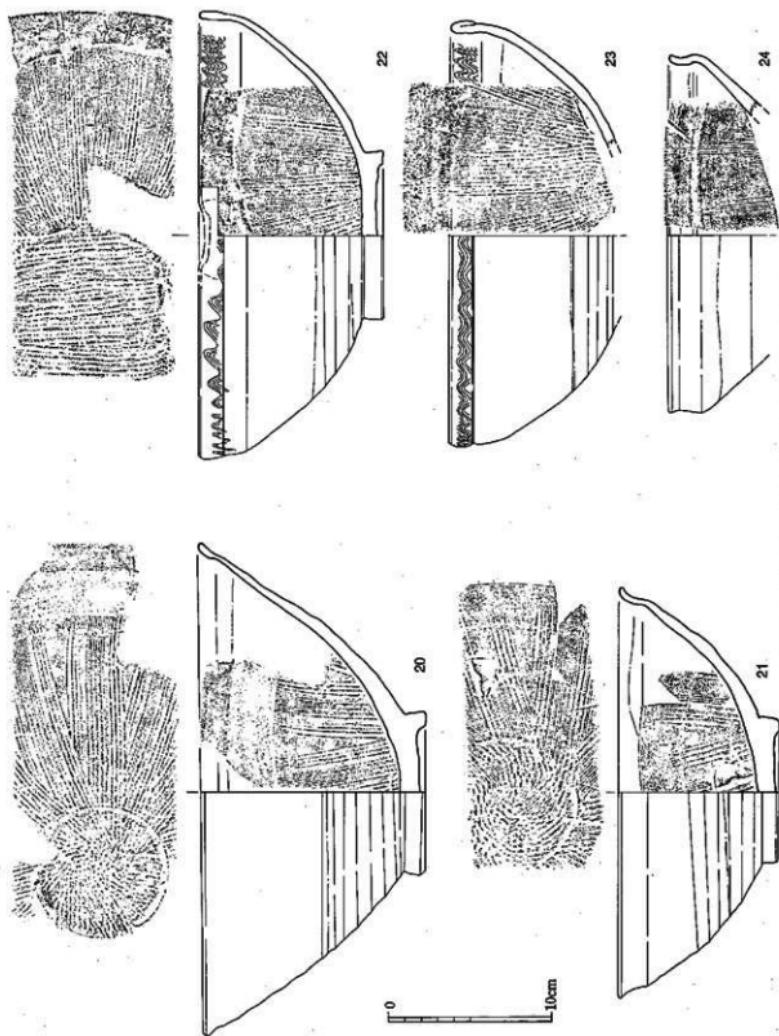
第130図 西物原出土遺物（擂鉢）実測図② (1/3)

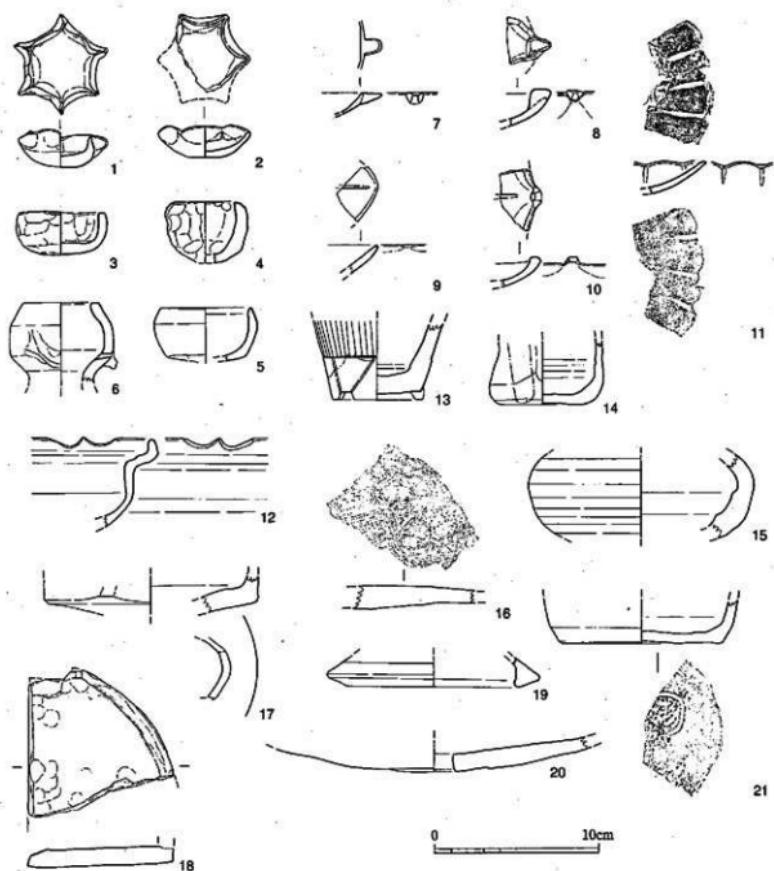


第131図 西物原出土遺物(擂體)実測図③ (1/3)



第132図 西物原出土遺物（擂钵）実測図④（1/3）

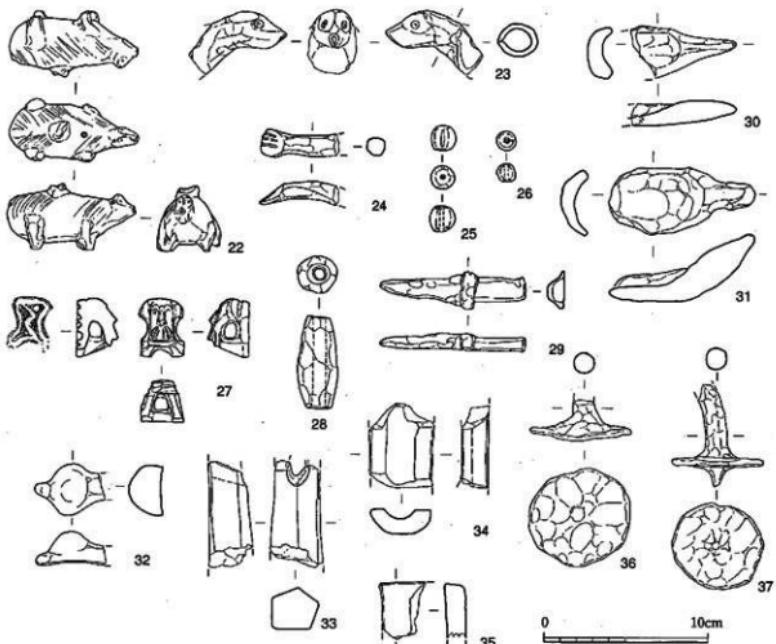




第133図 西物原出土遺物（特殊品）実測図① (1/3)

れるが、一部にタタキ痕を残す。外面はケズリにより平滑に仕上げられる。素焼である。19は径12.8cmの断面三角形の端部である。香炉の蓋かもしれないが、残存部に穿孔は認められない。20は大形の浅い皿で、底面中央に径2.4cmの穿孔がある。高台はなく、底部外面の狭い範囲にケズリを施す。擂鉢に通例見られるような硬質の焼成である。21は瓶の底部であろうか。底面に「圭」字形の縦刻を丸で囲むような文様を刻む。書き順は①横棒2本を右から②縦棒③「レ」④横棒を右から⑤円で囲む、である。素焼で薄茶色を呈する。

22は動物形の水滴であるが、何を模したものは判断できない。丸みのある胴体の上面には穿孔があり、動物の口から水を出す仕組みである。胴体上部にはつまみ状の突起があるが、釉が厚

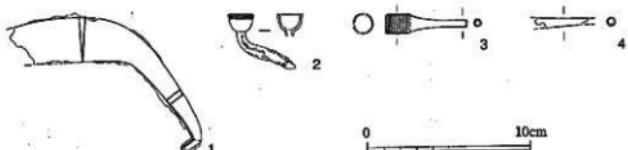


第134図 西物原出土遺物（特殊品）実測図② (1/3)

いこともあり詳細は不明である。胴体の大きさの割には小さい頭部がつき、目が刺突により表現される。耳は線刻により表現されるようであるが、釉で隠れる。胴体には脚が4本つけられる。結文形鉢にみられるような粘土紐をU字形に折り曲げた形状の脚である。尾はわずかに突出させることにより表現する。胴体両側面には細い線刻が連続するが、毛の表現であろう。長石釉が全体に掛けられ、明灰色に発色する。23は犬のような表情の土製品であるが、耳の表現がなく亀であろうかと思われる。粘土板を丸めて成形されており、口は開口している。口から水を出す水滴の可能性がある。目は小円盤を貼り付けその中央を刺突することにより表現する。釉は首付近に胎釉を掛けけるが、顔面付近は露胎である。24は動物の腕の表現である。何らかの別個体に貼り付けられていたものであろう。先端に3本の沈線を入れることにより指の表現をする。土灰釉を掛け、明緑色に発色する。

25・26は土玉である。25は径1.5cmで、中央に径2mmの穿孔が貫通する。穿孔に平行して外面に浅い沈線を連続させるようであるが、釉が厚く観察し難い。釉は未発色である。26は径1.2cmを測り、中央に径3mmの穿孔が貫通する。焼締であり、ひび割れが生じている。

27は印鑑であろうか。2本の脚と連続する体部により印面部と把手部が作り出され、蛙がしゃがんだような形状をなしている。把手部上面には髭を生やした人物の顔面が表現される。高くて長い鼻や髭の生やし方をみると日本人らしくなく西洋人の顔つきをなしている。印面にはヘラ先



第135図 西物原出土遺物（金属器）実測図（1/3）

工具による線刻がある。その表現するものは具体的には不明であるが、「Z」字と丸印を組み合わせた文様である。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。印面を除き土灰釉が掛けられ、浅緑色を呈する。28は土錘である。手捏ね成形で、両端はケズリにより直線的に切られる。素焼であり、灰白色を呈する。重量は26.2gである。29は太刀形の土製品。別個体に接合していたものとみられ、片面は平面をなす。鍔は粘土紐をなでつけることによって表現する。

30・31は匙状の土製品。30は先端を欠損する。把手先端は尖り、そこから直線的に匙部へ続く。素焼で灰白色を呈する。31は30を大きくしたような形状である。粗いナデにより成形され、厚手でつくりは良くない。硬質に焼成され、トチンのような質感をなす。30・31ともに実用的な形状ではなく、祭祀具であろうか。

32は筆架であろうか。瓢箪を半裁したような形状で、一面は平坦である。鉛釉を掛けるが、大部分は発色していない。

33は不明土製品。断面五角形の棒状製品で、徐々に先細りになるようである。五角形の形状は丁寧なケズリにより整形されている。先細りになった一端には粗い穿孔があるが、その先は欠損している。素焼であり、灰白色を呈する。34は半裁竹管形の土製品であり、用途は不明である。全体に鉄釉が施され、暗茶褐色を呈する。35は不明土製品で直方体の一部である。薫灰釉が施され、浅緑～乳濁色で発色が良い。

36・37は紡錘車形の土製品。具体的な用途は不明である。粗いナデにより成形され、指の圧痕が顕著である。37は円盤に屈曲する輪部つくもので、輪部と反対の面には突起がつくり出される。36は輪・突起ども欠損するが37と同様の形状をなすものと見られる。なお、これら2点と29の太刀形土製品は近接して出土した。

金属器（第135図）

1は鉄鎌であり、刃部先端を欠損する。く字形に屈曲する形状であり、屈曲部よりも先が刃部となる。柄部は断面長方形であり、先端は断面正方形とし上方へ強く屈曲させる。

2～4はキセル。いずれも青銅製である。内面全体に黒色の有機物が付着している。2は雁首。火皿は半球形であり、口縁端部は丸く肥厚させる。屈曲する管部は押し潰されて変形する。薄いつくりであり、縫合線が走る。3・4は吸口。3は羅字との接合部に小刻みに11の小段をつくり出す。4は薄いつくりで両端部を欠損する。縫合線が認められる。

V 「内ヶ磯窯跡1」の補遺

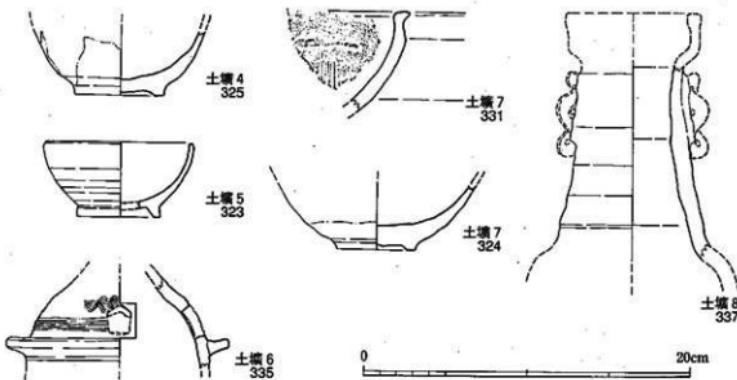
1 K区の補遺

K区は平成7年度に発掘調査を実施した第4次調査区の東側のテラス面であり、今回報告した西物原の裾部にあたる（第20図）。

遺構は掘立柱建物1棟・柵列状ピット列・土壙17基を調査時に確認していたが、昨年度の報告時に担当者の不注意により、土壙1～3以外の土壙出土遺物は遺構と照合できなかつたため、土壙一括遺物として報告した。土壙4～8については遺構実測図及び遺構写真のみ報告したが、今回遺物と照合できたため、下記の通り補足報告する（第136図）。土壙9～17については、搅乱やピットとすべきもの、一部照合できなかつたものもあるため、個別の土壙としては報告せず、昨年度報告とおりに土壙一括遺物とする。なお遺物に関する記述は「内ヶ磯窯跡1」105～106頁に掲載しているのでそちらを参照していただきたい。

K区土壙

- | | |
|---------|---------------|
| 土壙4出土遺物 | 第136図 325 |
| 土壙5出土遺物 | 第136図 323 |
| 土壙6出土遺物 | 第136図 335 |
| 土壙7出土遺物 | 第136図 324・331 |
| 土壙8出土遺物 | 第136図 337 |



第136図 K区土壙出土遺物実測図 (1/3) (「内ヶ磯窯跡1」第136図より抜粋して再録)

2 出土遺物の補遺

第137—179図の遺物は「内ヶ磯窯跡1」刊行時に整理・報告が間に合わず今回報告するものである。内ヶ磯窯跡工房部からの出土遺物であり、CD区北西側の落込み包含層からの出土遺物が大部分を占める。遺物の全体的な諸特徴については、前章及び「内ヶ磯窯跡1」と重複する内容が多いために記述を省略した部分が多い。

土壤出土遺物（第138図）

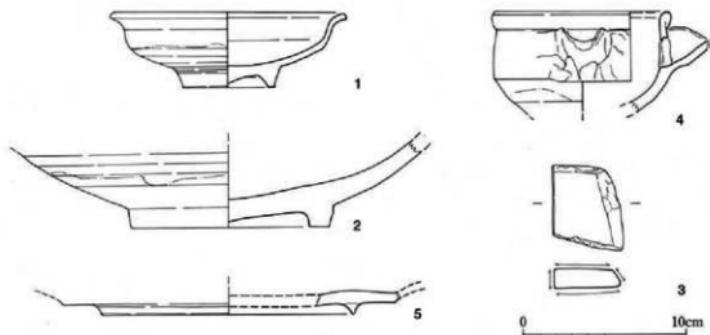
1～3はCD区土壤3から出土したもの。1・2は第137図の写真で左側にみえる2点である。1は小皿。口径は14.4cmを測り、比較的大きい部類に入る。深い体部を有し、口縁部は強く外反させる。見込には4個の目跡を残す。釉は大部分が未発色であるが、一部乳濁色を呈することから薬灰釉と判断できる。2は大皿の底部。釉は未発色。見込に4ヶ所の方形釉剥ぎがみられる。3は砥石。砂岩製。

4はH区土壤7からの出土。口径11cmの小形のもので、口縁部は外側に折り返し幅1cmの口縁帯をつくりだす。薬灰釉が施され、乳濁色に発色する。

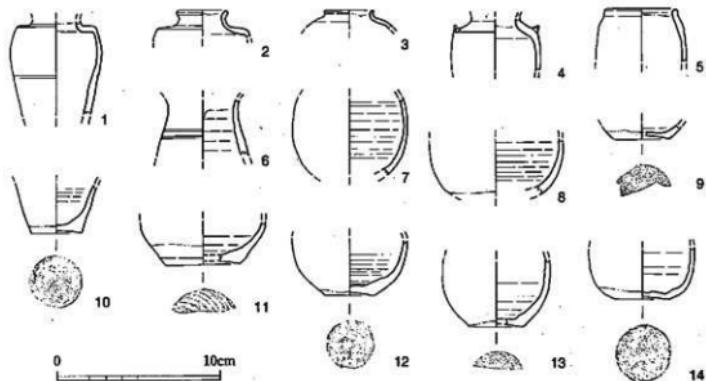
5はK区土壤1から出土。長石釉を高台内まで施有する大皿で胎土も良い。高台内に貝目跡を残す。



第137図 CD区土壤3 遺物出土状況



第138図 工房部出土遺物実測図（1/3）



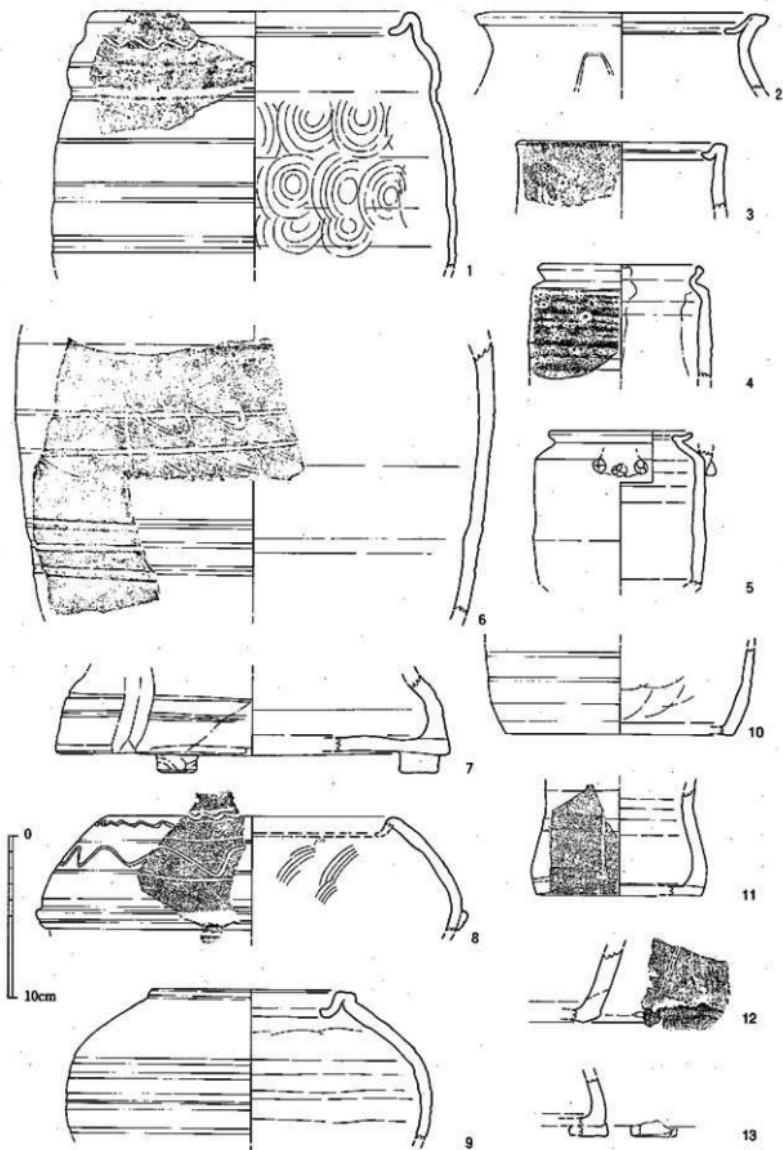
第139図 工房部出土遺物(茶入)実測図(1/3)

茶入(第139図)

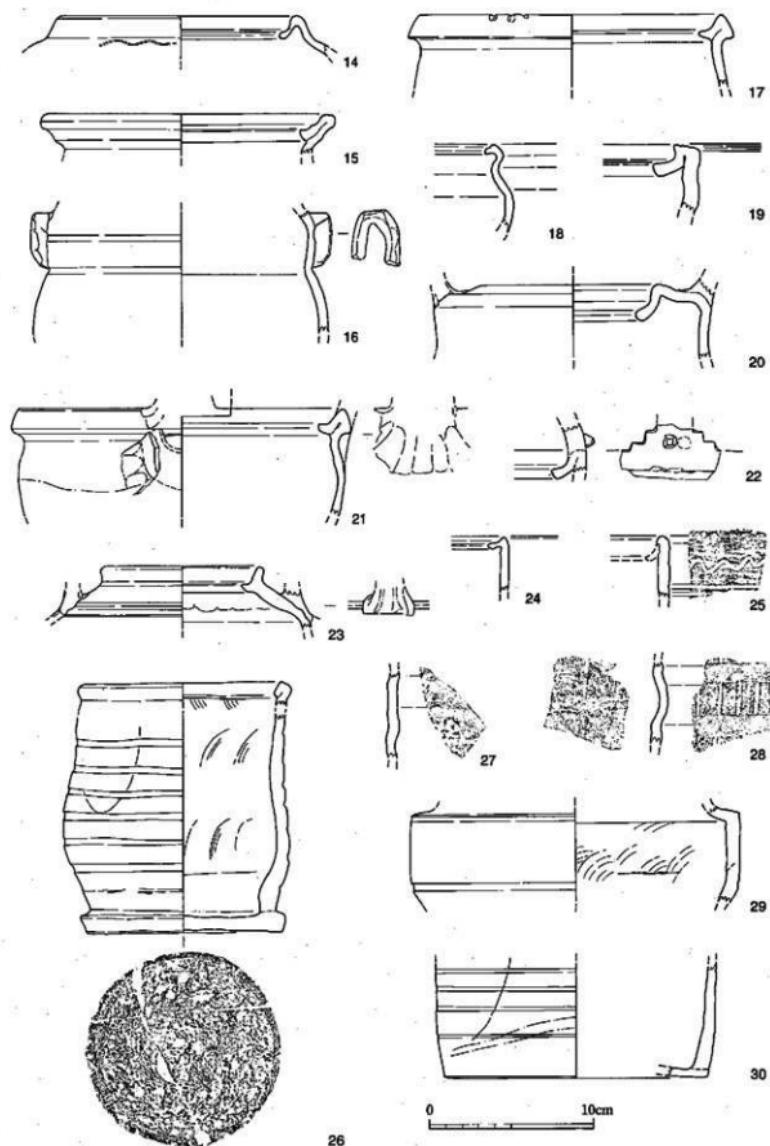
茶入の諸特徴は前述のものに共通するので参照されたい。1～4は肩衝茶入で、1は口縁端部・底部を欠損するものの比較的全体の形がわかる資料。明瞭な肩部をもつもので、胴部最大径より下位に胸紐を巡らせる。4は構造の耳を肩部に有するが、上端を欠損する。5は直立する口縁部を有し、蓋灰釉を掛ける。蓋灰釉はこの資料のみであり、他は全て鉄釉である。6は壺形の茶入で、頸部よりやや下位に沈線を二条巡らせる。7・8は丸みをもった胴部。9～14は底部で、底面には全て糸切痕を残す。糸切は全て左切り。11と13は糸切痕の目が粗い。

水指(第140～143・145図)

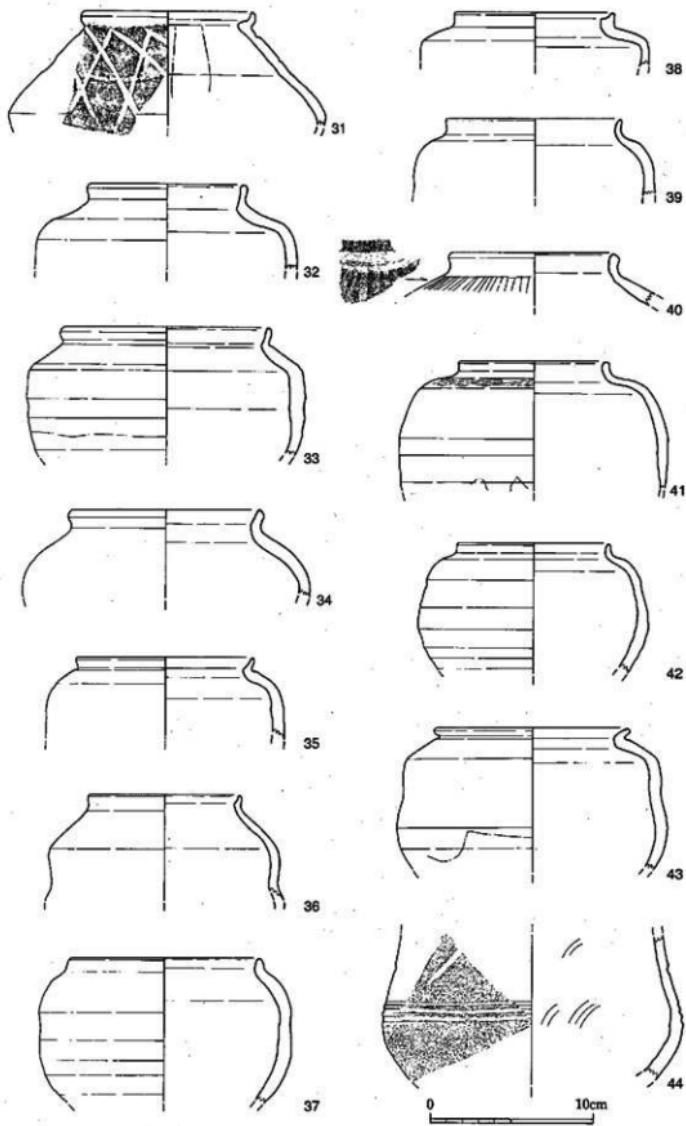
1は屈曲しつつ立ちあがる体部の隨所に沈線を巡らせるもので、口縁部付近には波状文を巡らせる。口縁部は丸みを持たせて内側へ折り込み、幅1cm程度の蓋受をつくる。2は弓状に外反する口縁部で、端部を内側へ折り込んで蓋受をつくる。外面には波状文を巡らせる。3～5は細長い直立する体部をもつもので、4・5は頸部を有する。3は口縁部に短い蓋受をつくる。外面には沈線で文様を描くようであるが釉が厚いために観察できない。4は横方向に沈線を密に連続させる。蓋受はわずか凹みをもたせるのみである。5は肩部から把手が上方へ伸びる。付根には3個の小玉を貼り付ける。6は直立する体部に沈線・波状文を巡らせるもの。7は屈曲の著しい体部を持つ底部片で、円柱形の脚を持つ。体部には沈線が巡らされ、縦方向に深い彫文が入れられる。8・9・14は丸みをもった体部を有するもの。8は外面に波状文と沈線を巡らせ、最大径近くに突唇を巡らせる。9も体部外面に沈線を巡らせる。これらは瓢形になるものとみられる。10・30は横方向、11・12は縦方向に沈線を入れる底部片。13は7と同様の脚部をもつ小片である。15・18・19・24・25は口縁部の小片である。体部の形状は直立するものから屈曲のあるものまであるが、小片のために全形を窺い知ることはできない。16は外面に逆U字形の貼付文を有する。20～23は把手を有するものである。20は口縁部を強く内傾させ幅3.5cmの口縁帶をつくり、その内側にしつかりした蓋受をつくる。21は片口部がある水注。17は21と同一個体であろうか。



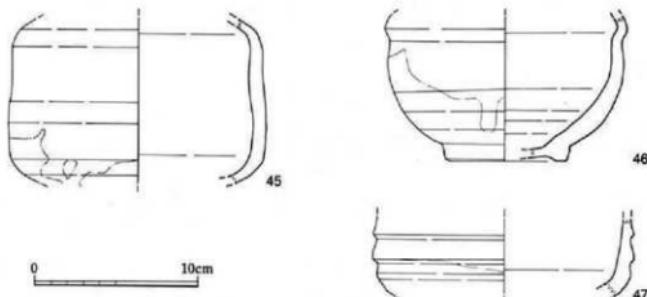
第140図 工房部出土遺物（水指）実測図① (1/3)



第141図 工房部出土遺物（木指）実測図② (1/3)



第142図 工房部出土遺物（水指）実測図③ (1/3)



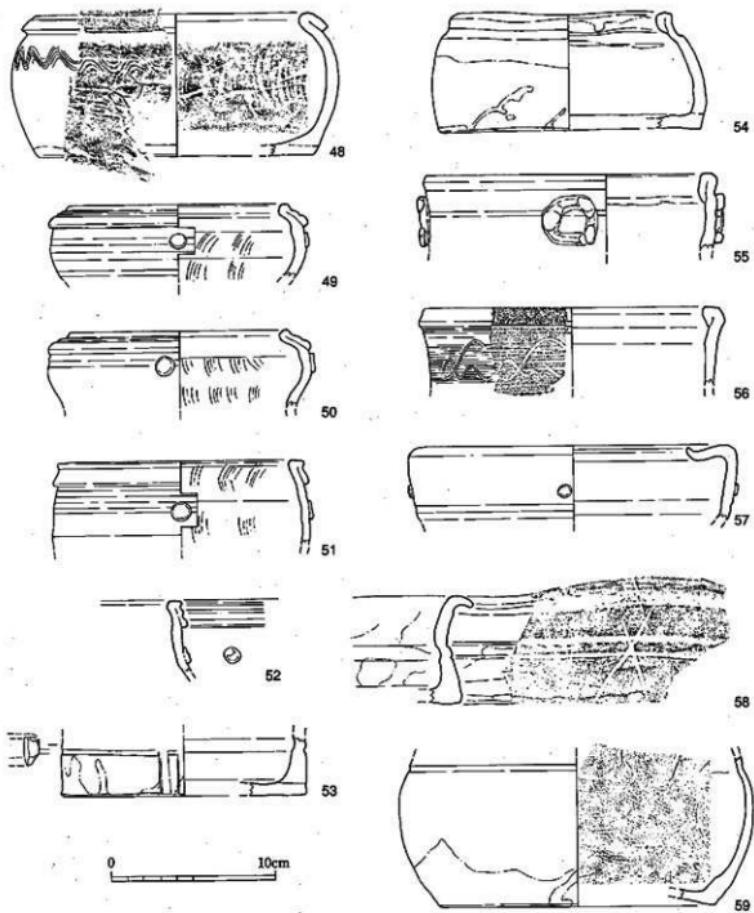
第143図 工房部出土遺物（水指）実測図④ (1/3)

外反させた口縁部を内側へ折り込んで蓋受をつくる。22は蓋受と把手付根のみ残る。付根は階段状に整形し、外面に2個の小玉を貼り付ける。23は壺形の体部の肩から把手をのばす。把手には二条の沈線を刻む。26は円盤状の底部に大きく歪ませる直立する体部を載せるもので、口縁端部は内側に小さく折り込む。体部には7条の沈線を巡らせるが、体部と口縁部とは図上で復元したものであり、体部はまだのびる可能性を残す。底面には作業台の反映と見られる凹凸が顕著に残される。

31～47は壺形の水指である。39～43は蓋受をもたず壺に分類すべきであろうか。31の胴部は算盤玉形に横に張る。肩部には格子文を太い沈線で描く。31を除けば体部は直線的なものと丸みをもつものの二者に分けることができ、36は体部中位を緩くくびれさせている。また46は体部



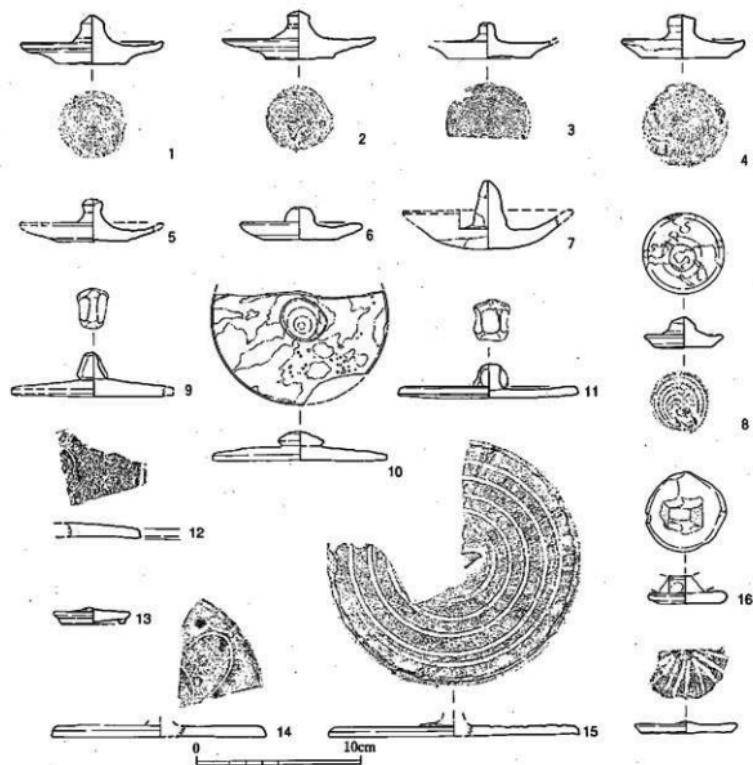
第144図 CD区落込み土壤群



第145図 工房部出土遺物（水指）実測図⑤（1/3）

上位に強い屈曲を有する。40は肩部に縦方向の沈線を放射状に入れ、41は肩部に波状文を巡らせる。44は体部下位の底部への屈曲部に沈線を巡らせ、体部中位には「×」印の彫文をいれる。47はケズリが強く、深い段を生じさせている。

11-22は蓋受等をもたず水指とは言い難いが、手の込んだつくりで日常の雑器とは一線を画するものであり、ここに集めた。48・54・58は浅い鉢である。48・54は内傾する体部で、口縁部は48は外側へ折り返し、54は内側へ折り込む。58は口縁部を強く外反させる。48は体部の最大径近くに波状文を巡らせる。58は体部中位に沈線を巡らせ、「×」印を大きく線刻する。49・50

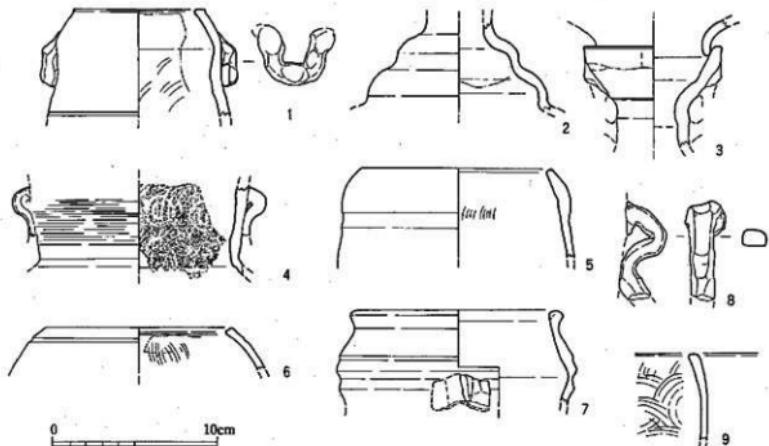


第146図 工房部出土遺物（蓋）実測図（1/3）

は48と同様の形態となろうか。内傾する口縁部に外側へ折り返す端部を有するもので、口縁部外面には沈線を巡らせる。また口縁部下の最大径には径1.2cmほどの円形浮文を貼り付ける。51・52・55・56は直立に近い体部を有するもので、51・52は口縁部を外側へ折り返し、55・56は口縁部を内側へ折り込む。51・52には49・50でみられたような円形浮文を貼り付ける。55は粘土紐を円形にした花文を貼り付け、56はカキメ状の調整後に波状文を描く。57は強く内傾する口縁部で、端部を摘み上げる。8mm程度の円形浮文を最大径付近に貼り付ける。53は直立する底部。外面に縱方向に面取りが施される。底部から2.8cm上がった部位に沈線を巡らせ、その高さで耳をつけるが欠損して付根のみ残る。59は丸みをもって立ちあがる底部。くびれる部位に沈線状の凹線が走る。

蓋（第146図）

1～8は水引き成形による蓋で、1～4・8は底面に糸切痕を残しており、その他はケズリ・ナ



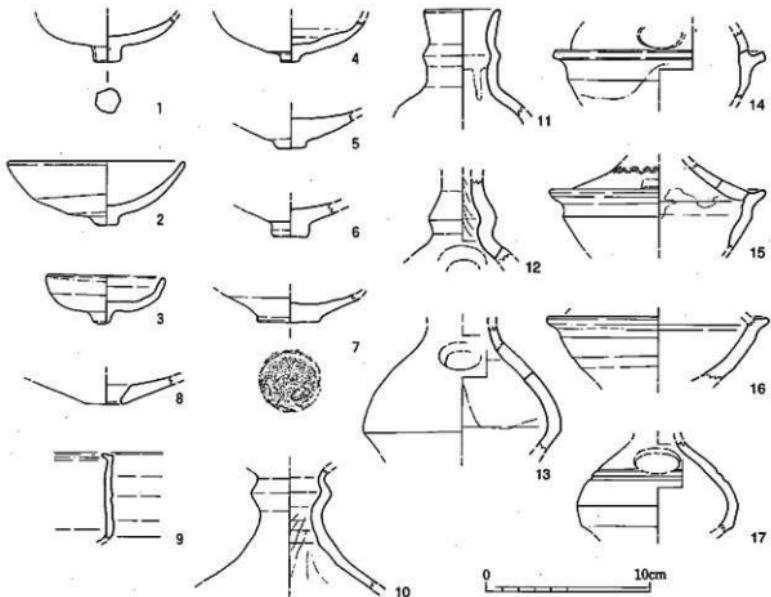
第147図 工房部出土遺物（花生）実測図（1/3）

デにより糸切痕を消す。7を除き体部は平坦に近いものである。7は強く内湾する体部をもつ。つまみは高く、ユビオサエにより凹凸をつくる。8は最大径4.8cmの非常に小形のもの。イッチン掛けにより施釉するが発色しない。

9～17は円盤状の体部につまみをつけるもの。9・11は手捏ねによるつまみをつけ、10はドーム状のつまみをつける。前者は比較的多くみられる形態であるが、後者は珍しい。12・14は上面に線刻で曲線文を描き、15は同心円を描く。13・16・17は蓋かどうかの判断が難しい。13は上面の中央に小穴起があるが、何らかの貼り付けが剥離した残りかもしれない。底面には蓋の周に沿って高台状に粘土紐を貼り付ける。16は最大径5cmの円盤上面に粘土紐が貼り付けられるもの。粘土紐の両端が欠損しているために、詳細は不明である。17は最大径6.2cmの円盤であり、上面中央はやや尖る。上面に浅い沈線で放射状に線刻を刻む。

花生（第147図）

1・5・6・9は内傾する口縁部を有するものである。いずれもタタキにより成形されるもので、内面に当て具痕である青海波文を残す。1は外面に逆U字形の粘土紐を貼り付けて装飾する。2は強く屈曲する体部をもつもので、瓶となるかもしれない。3はラッパ形の口縁部を有するもの。口縁部側面は広く面取りを施している。口縁部から頸部にかけて耳があったとみられるが欠損して付根付近が残るのみである。花生の口縁部に入れ込む形で短頸壺が口縁部を下にして重ね焼きされており、完全に接着されている。形態も重ね焼きの状況までも西物原で出土した第82図1に類似している。花生の焼成方法を物語るものであろう。4はゆるく開く口頭部をもつもので、S字形の耳が付けられる。7は内傾する口縁部をもち、口縁端部は外反した後に短く内面に折り込んで丸く仕上げるもの。横方向の構造になるとみられる耳の付根が残る。8はS字形をなす耳。



第148図 工房部出土遺物（筆立・香炉）実測図（1/3）

筆立・香炉（第148図）

1～7は皿状の体部の底面に小突起を持つもの。1は小突起が八角形をなす。

8は底部に穿孔のある皿状のもの。

10～17は上記の皿に伴うものではないかとみられる瓶状の器種。口頭部に突出・突帶を加えるなど特異な形態をもつものをそれとしたが、通常の瓶であるかもしれない。12は突出のある口頭部を持つもので、体部には穿孔がある。13～15・17は宝珠形の体部に穿孔をもつもの。14・15には最大径に突帶を巡らせる。15は突帶より上位は外反しながら口頭部に統一し、その外面には波状文を巡らせる。16は15と同様の形態をなすものであろう。17は2条の沈線を巡らせる。

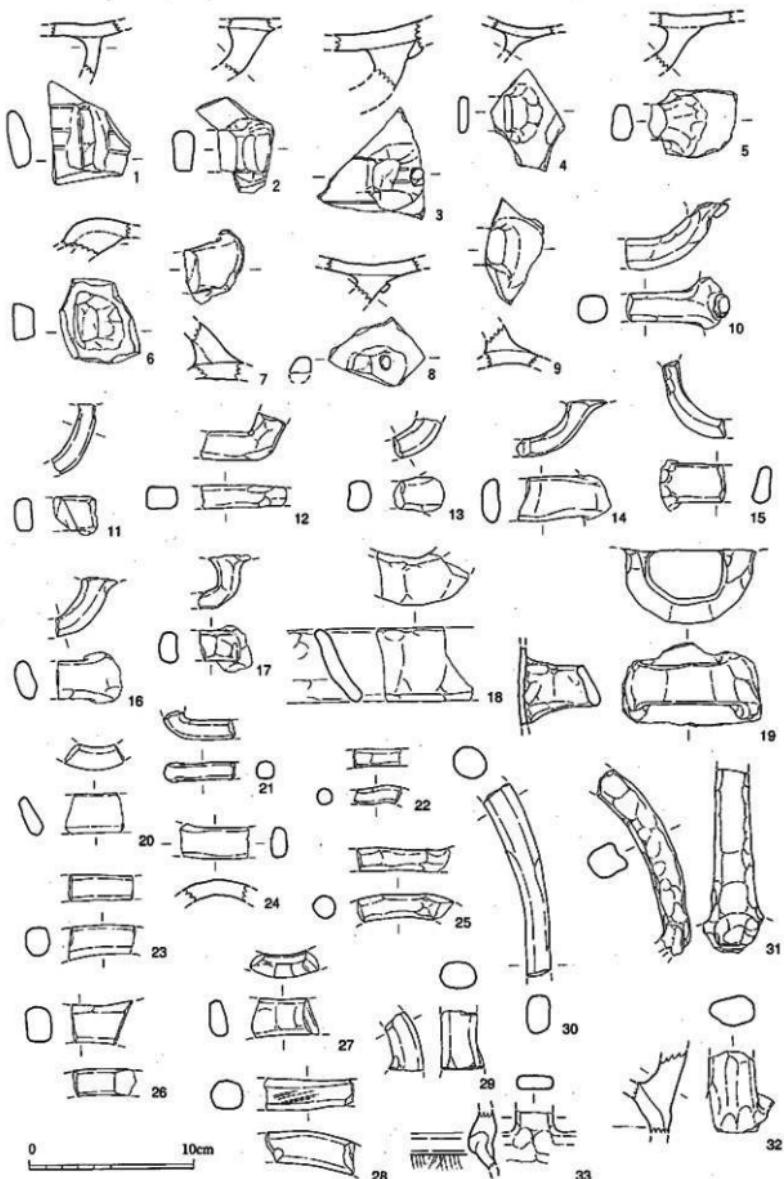
9は直立する体部に内側へ突出させる口縁部を伴うものであり、火入とみられる。外面には薺灰釉を掛け、内面は露胎である。

把手（第149・150図）

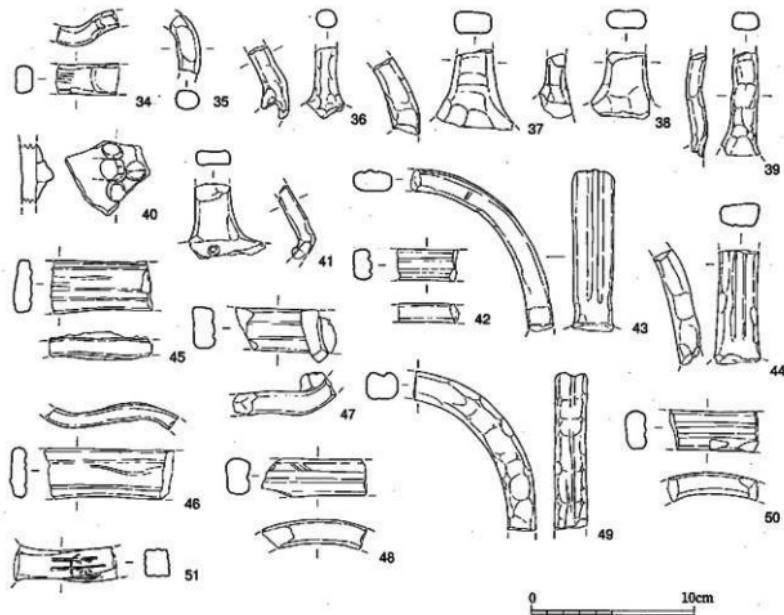
把手は水指・水注・大皿・鉢につくものがあるが、判別は困難なものが多く一括して報告する。断面は隅丸方形或いは円形をなす。釉は鉄釉・胎釉・薺灰釉があり、素焼のものも多い。沈線を走らせるものも多いが、51のように四面に菊花文の装飾を加えるものは珍しい。

椀（第151～154図）

椀の諸特長は前章と共通し、特記すべき点のみ挙げておきたい。まず2は高台をつくり出さず



第149図 工房部出土遺物(把手)実測図① (1/3)



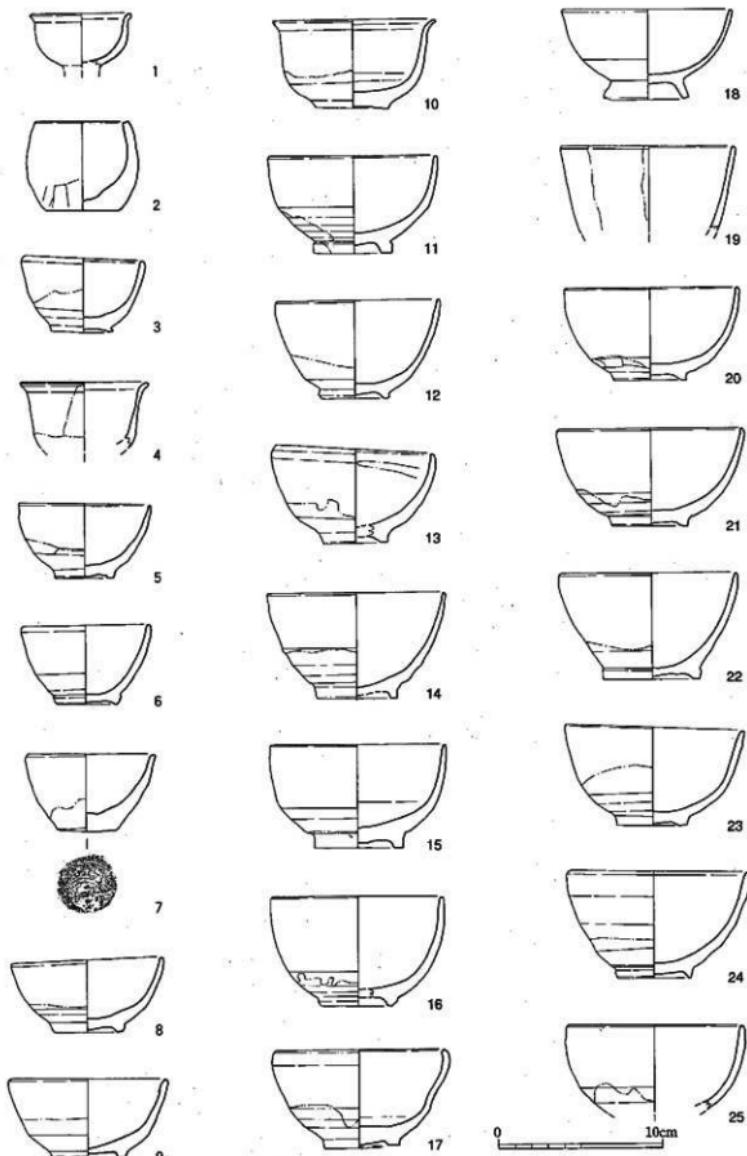
第150図 工房部出土遺物（把手）実測図② (1/3)

底部を粗く削ることにより整形するもの。7も高台をつくり出さず、ケズリ調整も行わない。したがって底面は糸切痕を残したままとなる。18と34は底面まで施釉する総掛けのもの。18は大きくハ字形に開く高台を有し、34は緩やかに弧を描き外反する口縁部をもつように、両者とも特異な形態をとる。29は薄く灰釉を総掛けした後に薺灰釉を掛けける。43は深い体部の椀で、く字形に外反する口縁部をもち、端部に縁なぶりを加える。44は口径17.2cmの大形の椀。直線的に開く体部に外反する口縁部を有する。

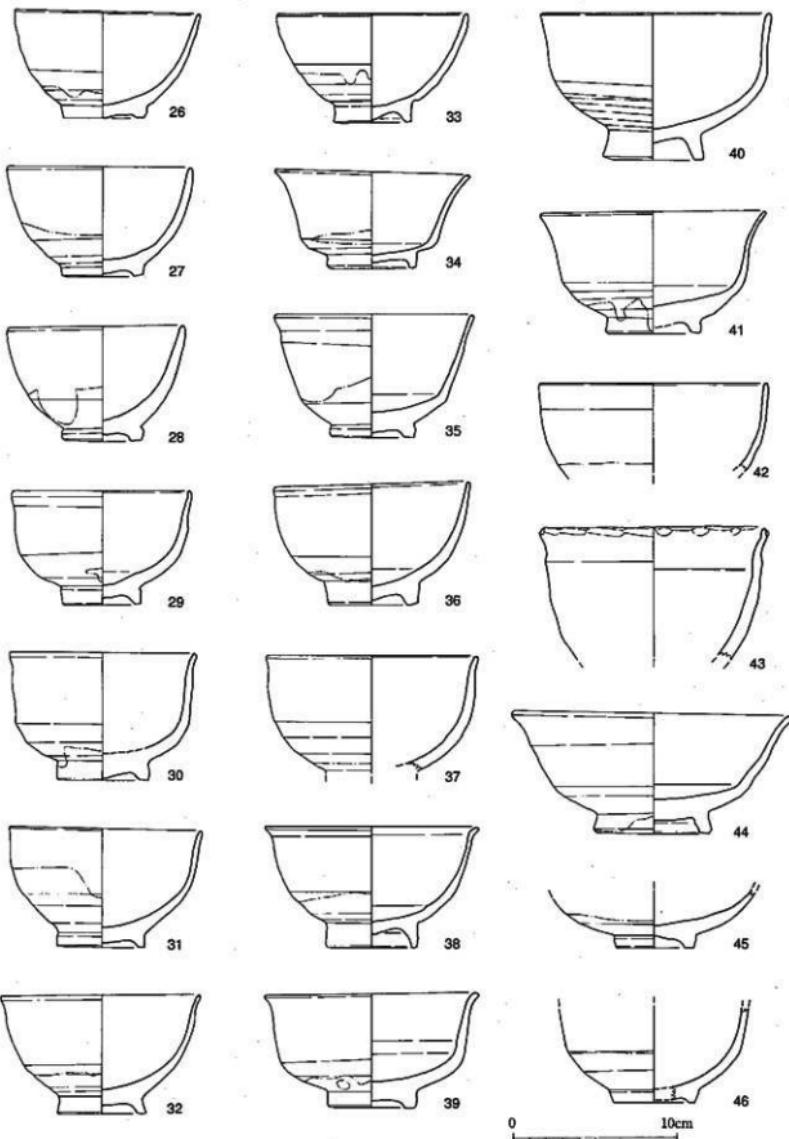
47・48は外面に波状文を巡らせるもの。49は縦方向に幅広く面取りを行う。

50～53は筒形の椀。50は外面に輪轍目を頗著に残す。51は多条の沈線を巡らせる。52は底部から1.8cm上方で強くくびれる形態。底部は基筒底である。53は底面に糸切痕を残す。54は口縁部に小段がつくもの。天目形を意識したものであろうか。55～57は天目形の椀。く字形に屈曲する口縁部を有する。58は直線的に開く口縁部を有するもので、底部近くの外面に小段をつくり出す。59はブロック状の脚をもつ椀で、口縁部は緩やかに外反する。全体に薺灰釉を掛けける。

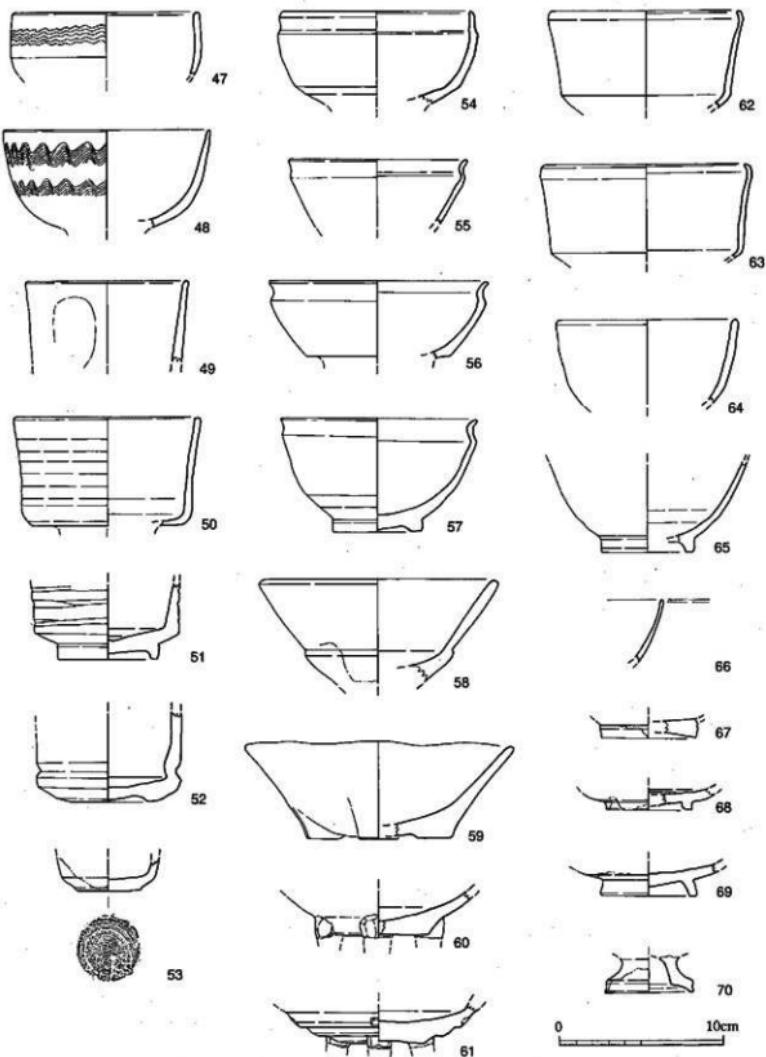
60・61は断面円形の脚部をつけるものであるが、脚は欠損している。60は高台内を削りこまない状態で脚を貼り付ける。61は外面全体に強いケズリを施し、沈線状の段をつくり出す。体部にかかる部位に方形の刺突がある。19・62～67は胎土が茶入に共通する精良なもので、鉄釉を掛け茶褐色～黒褐色を呈する。62・63は直立気味の口縁部で端部は内湾させる。68・69も胎土は精



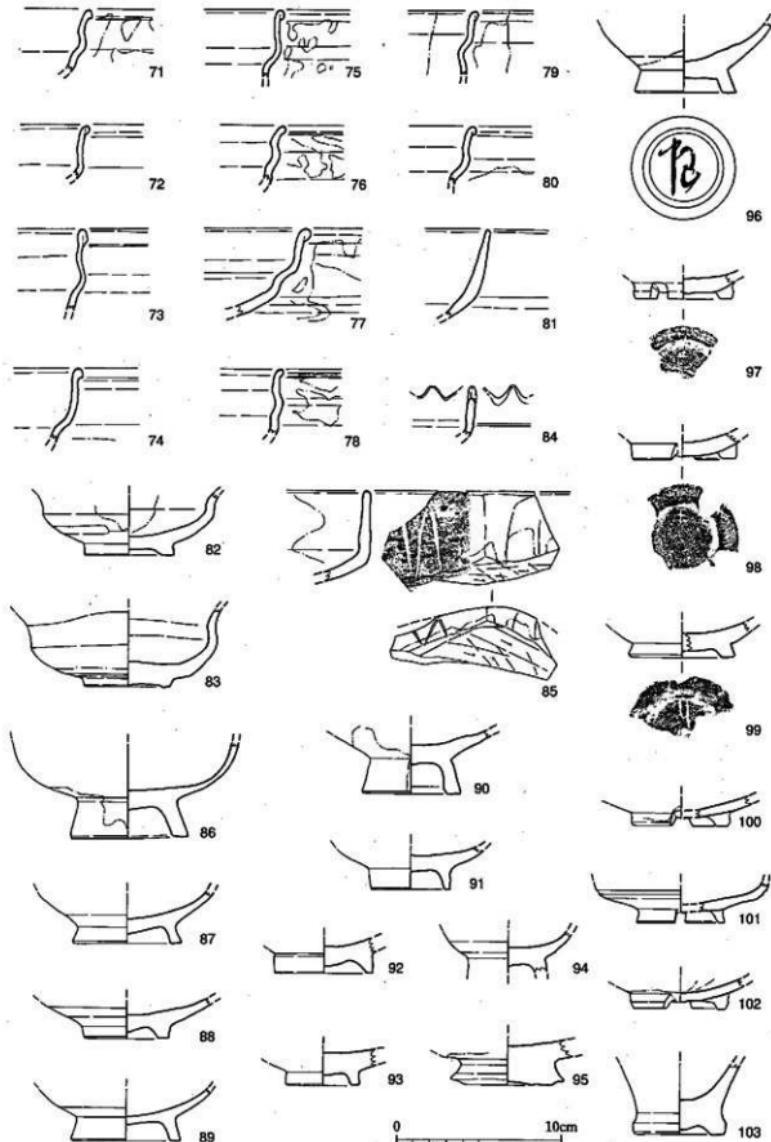
第151図 工房部出土遺物(横)実測図① (1/3)



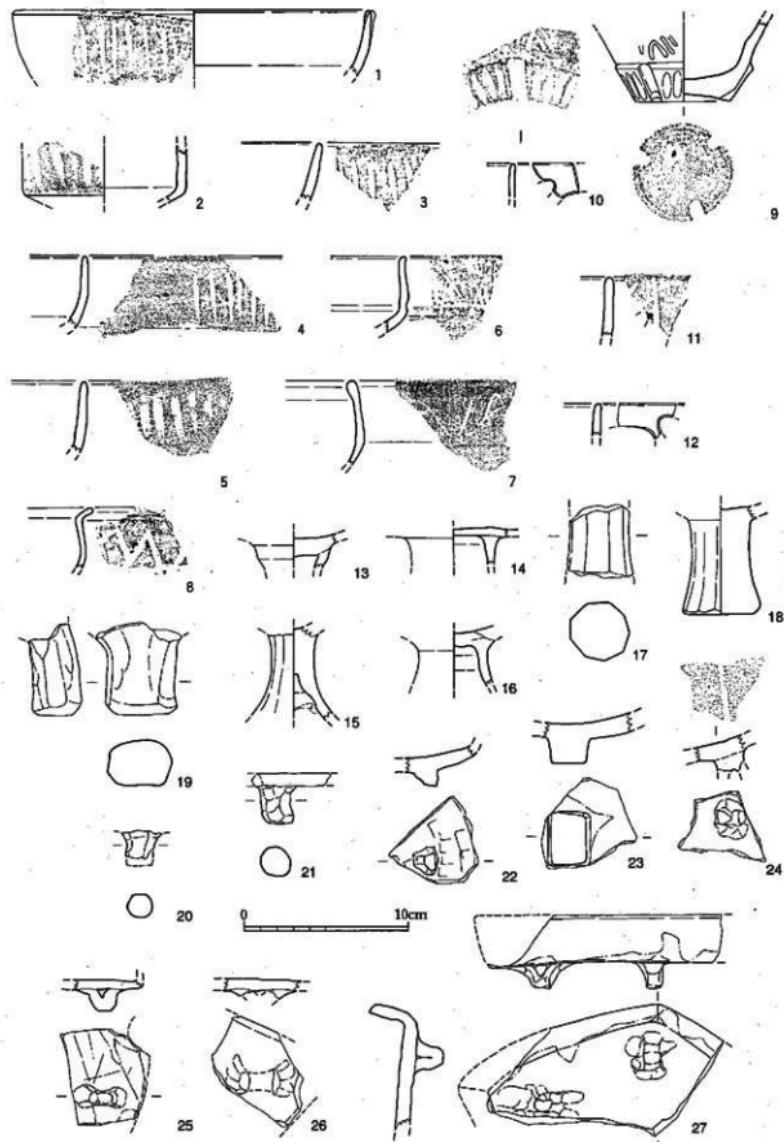
第152図 工房部出土遺物(椀)実測図② (1/3)



第153図 工房部出土遺物（椀）実測図③ (1/3)



第154図 工房部出土遺物(楕)実測図④ (1/3)



第155図 工房部出土遺物（特殊窯・鉢）実測図（1/3）

良でつくりが良い。68は土灰釉、69は藁灰釉である。70は短脚の高杯と呼ぶべきか。大きく開く脚部は端部を直立気味に屈曲させる。

71～83・85は杏形の椀。口縁部は屈曲させながら立ち上がり、口縁端部は外側へ折り返したり外反させたりして丸みを持たせて肥厚させるものが多い。71・75～79はイッチン掛けで施有し、77と79は藁灰釉と鉢釉の掛け分けである。85は山形文を線刻し、コーナー部を面取りするもの。84は口縁部を鋸歯状につくる椀の口縁部。

86・90・96は撥高台。98は高台内面に墨書きで記号状のものを描くが、判読できない。

87～94は高台内まで施有する総掛けのもの。95は高台内を削り込みず、凹凸のある平面の底面を持つものである。

97・98・100～102は割高台。97は三方、98・100・102は四方に穿ち、101は残存度の関係で個数は不明である。97・98には「王」（或いは「王」か）、99には「二」の刻印が高台内にある。101は19・62～67にみられた胎土が精良なもの。暗茶褐色の鉢釉を総掛けする。

103は底部から一旦くびれて細長く直線的に伸びる体部をもつもの。

特殊椀・鉢（第155図）

第155図にあげた資料は特殊な形状或いは装飾を施す椀・鉢であり、いわゆる向付として使用されたものであろう。

1～7は直立する体部をもつ椀で、いずれも外面に文様を有する。1は口縁部の一部を内面に軽く押し込むことにより形に変化を加えている。他のものも上からみると直線的になる等、単純に平面円形になるものは少ない。1～5は縦方向に太い彫文をいれる。6は細い沈線で格子文をいれ、7は山形文をいれる。8は強く外反させる口縁部を有する椀。外面には深い沈線で格子文を刻む。9は椀或いは瓶となる。人きく開く体部を有し、太い沈線によって傘形の文様を3方向に入れる。底部は一段肥厚させ文様帯をつくる。文様帯には縦方向に太い彫文を連続させ、3方向に割高台を意識したような溝を切る。底面には「王」（或いは「王」か）の記号を刻む。釉は全体に掛けられるが、未発色で剥離が進行している。

10～12は透孔のはいる鉢。11は沈線が文様としてはいる。いずれも小片で全体がわかるものではない。いずれも藁灰釉が掛けられ、乳濁色に発色する。

13～18は高杯形のもの。13は鉢釉が厚く掛けられ、濃青色の海鼠釉となる。釉が厚いため観察しがたいが杯部と脚部の境界が明瞭で、筆立の可能性も残す。14と16が太い脚部がつくのに対し、15は細長い脚部がつく。15は外面を縦方向に長く面取りし、釉は鉢釉の後に藁灰釉を掛けている。17と18は中実の脚部。17は縦方向に明瞭な面取りを行い、断面は九角形を呈する。18は17ほど明瞭ではないが脚部の面取りを行っている。底面には糸切を残すが、ナデにより不明瞭になっている。

19～24は皿・椀につくとみられる脚。19は大形の脚。全体をナデにより調整し、特に側面は縦方向に強いナデによる稜が走る。断面は隅丸長方形。20・21は小形の円柱形のもの。22は三角柱に近い形状をなすものであるが、高台を削りだすことによってつくられたものかも知れない。体部の底面も細かいケズリによって器面調整される。23は3cm×2.2cm×1.6cmの直方体の脚を有する。釉は未発色であり、深い貢入がはいる。24は二股になる脚を有するが先端は欠損する。体部内面

面には沈線による文様が入る。

25~27は結文形の鉢。26は脚部を欠損する。脚はいずれも粘土紐をU字形に曲げて体部にナデつけられる。27は平面扇形になるものであろう。

鉄絵陶器（第156図）

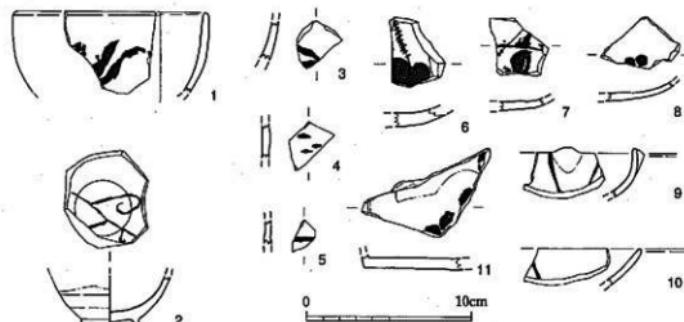
1は口径11.4cmの楕で、外面に波打つ文様を鉄釉で描き、乳濁灰色の長石釉を厚く掛ける。2は小形の楕の見込に鉄釉で細線による文様を描き、青白色の海鼠釉を掛ける。3~8は小片で傾き・天地が判断しがたいが、皿或いは楕にならうか。6~8は梅の木を描くものである。いずれも明灰色の長石釉が掛けられる。9~10は皿の口縁部で、内面に木の枝であろうか、直線的な鉄絵を描く。11は結文形の鉢の内面に鉄絵を描くもの。列点文が描かれるが、画題は不明。乳濁灰色の長石釉を掛けるが、内面には露胎部もある。底面にはおがくずを敷いていた跡を顯著に残す。

皿（第157~167図）

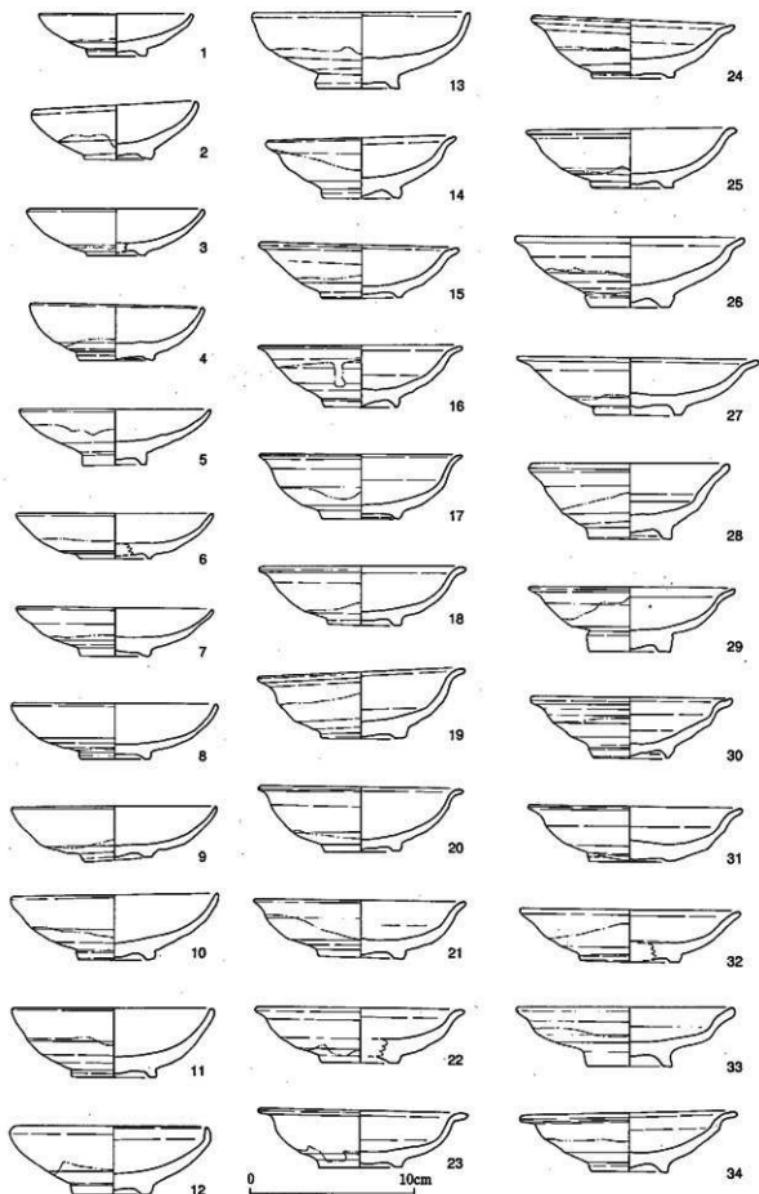
皿の全体的な特徴は前章を参照されたい。器形の分類に関しても特記すべき事は少なく、丸形（1~13）、縁反形（14~42）、縁付形（43~59）、縁立形（60~73）に分けることができる。やや特異な形態として挙げられる点を記せば、12は丸形としては口縁端部の内湾度が強く、また77は口縁部を一旦強く内湾させた後に小さく外反させる特徴は類例を見ない。50・59は高い撥高台を有する。60は基筒底。75は四方から指で押し込み、76は四方から幅広く押さえ込んで平面形を四角に近づけている。79~98は口縁端部をユビオサエ等で変化を加えるもの。98は縁立形に近いが、口縁部は弓なりに外反する。高い高台や薬灰釉と胎釉の掛け分けといった特徴も備え持ち、手の込んだつくりといえる。

99~101は平坦な円盤状の体部に高台を貼り付けるもの。体部はタキによって成形されるらしく、101にはタキ痕を残している。

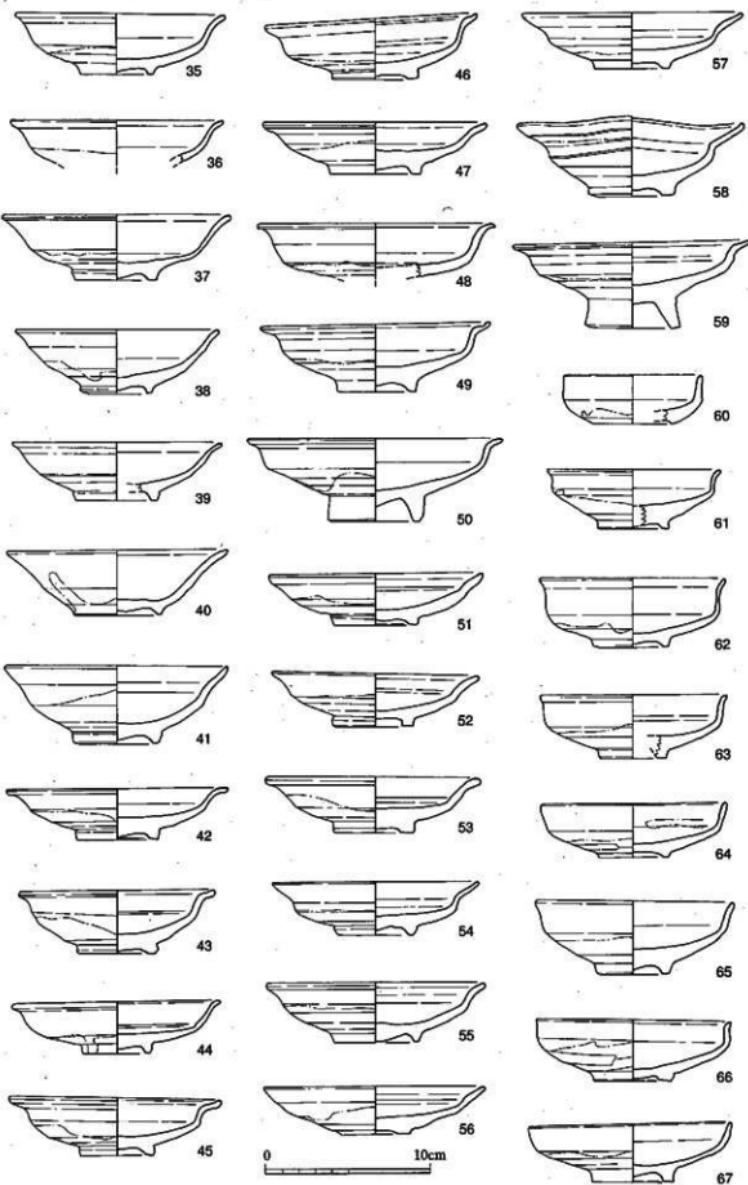
中皿・大皿についても諸特徴は前章のものと共通する。124は鉢に分類すべきか。内湾する端部は丸みをもつ。130は口縁部上面に円形浮文をつけるが、小片のために全体での位置等の詳細は不明。126・131~133は釉をイッチン掛けする。



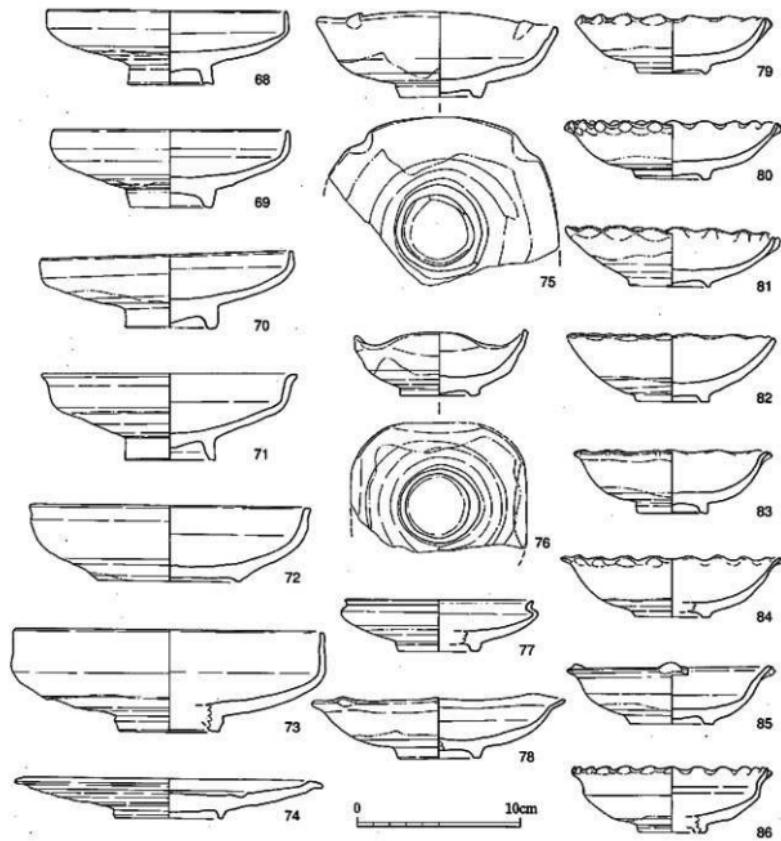
第156図 工房部出土遺物（鉄絵陶器）実測図（1/3）



第157図 工房部出土遺物(皿)実測図① (1/3)



第158図 工房部出土遺物(皿)実測図②(1/3)

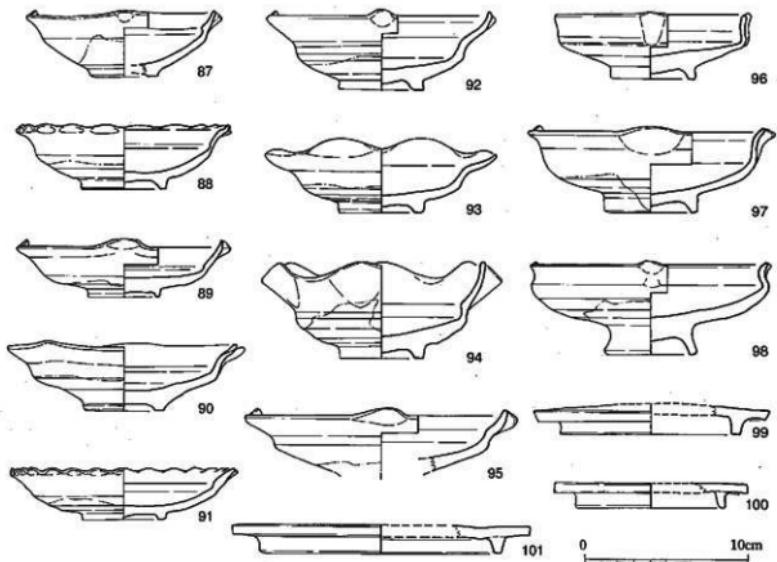


第159図 工房部出土遺物(Ⅲ)実測図③(1/3)

鉢 (第168・169図)

1・13・14は大きく外反する体部をもち、口縁端部を内側へ折り込んで密着させるもの。大形であり、1は口径46.2cm、13は38cmを測る。13は外面に胎釉をイッチン掛けし、14には波状文を巡らせる。2・3は緩やかに内湾して立ちあがる体部をもつもので、口縁部は外面に折り返し密着させるもの。4・5は直立する体部に直角に屈曲する口縁部をもち、さらに端部を上方へ屈曲させるもの。体部には把手がつき、把手の付根には3個の円形浮文を貼り付ける。5の円形浮文は大小を二段重ねるもの。把手は断面円形のものであるが、欠損している。

15は体部の形状は2・3に類するが、口縁部は一旦強く外反させ、その後内側に折り込んで密着せるもの。深い体部には外面にカキメ状の沈線が全体に巡り、内面にはタタキの当て具痕で



第160図 工房部出土遺物（Ⅲ）実測図④（1/3）

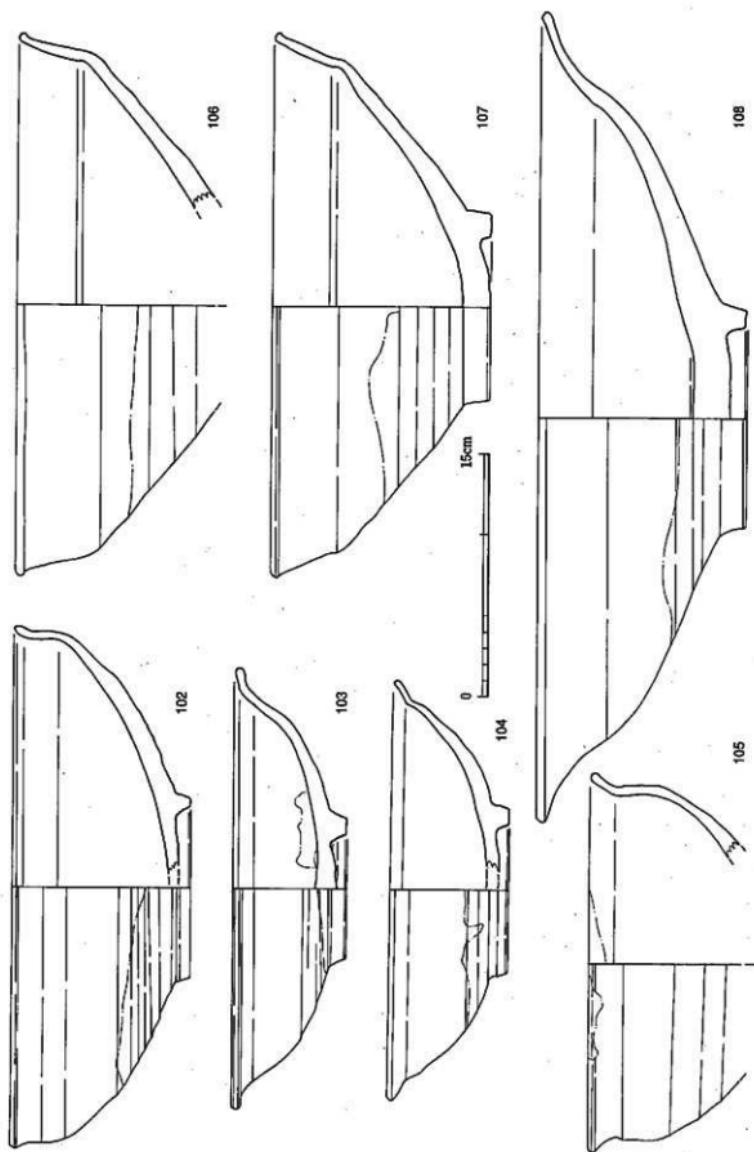
ある青海波文を残す。体部外面の中位には横方向に把手がつくものと見られるが、欠損して付根のみ残る。6～9・12は浅い体部のもので、皿と分類すべきか。6は平坦な底部にハ字形に開く口縁部をもつもの。7は古墳時代の須恵器のような内側する口縁部を有するもの。8・9・12は短く直立する立ち上がりを円盤状の底部に貼り付けるもの。12は口縁端部を強く外側へ屈曲させる。

10・11は縁立形の皿に分類されようか。大きさの割に器壁は薄い。口縁端部は10の場合は短く外反させ、11はわずかに内面に肥厚させる。11は高台の推定3ヶ所を2.5cm幅に残して削り落とし、三本の脚をつくるものである。

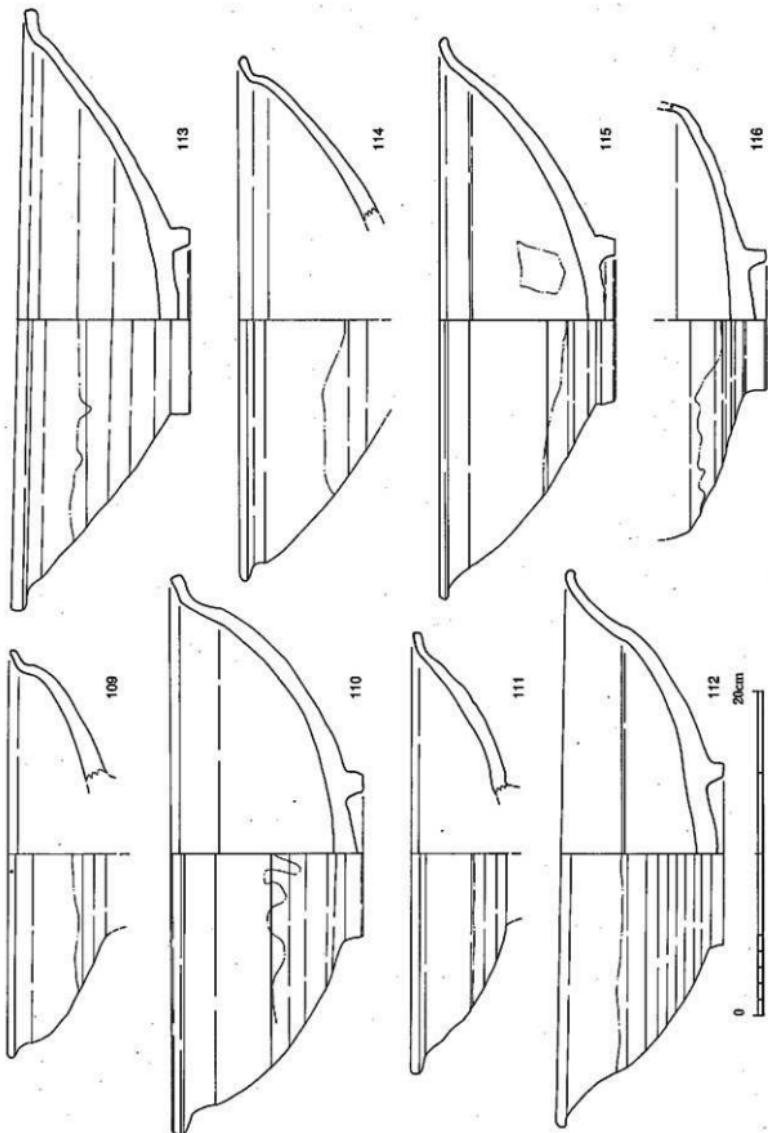
甕（第170～172図）

1は人形の甕。接合しない口縁部～胴部片と底部片があり図上で合成したが、器高59cmに復元できる。内ヶ磯窯ではこの規模の甕は稀な存在である。短い直立する頸部をもち、口縁部は短く外反させた後、内側に折り込む。口径は44.5cm。胴部最大径は53.7cm。胴部最大径よりも上位に綱状の突帯を巡らせる。底部径は31.0cm。全体に鉄釉を掛けるようであるが発色していない。胴部中位に釉が流れた状況が察知できる。胴部はタキによる調整であり、頸部付近の内面には当て具痕である青海波文を残すが、それより下位は比較的細いヘラ状工具で削ったような痕跡を残す。2・3も大形の部類に入る。口縁部形状は前章でも述べたとおり外反する口縁部の端部を内面に折り返し密着させるものである。この形態は8・11・12にもみられる。9のように口縁部を外側へ折り返し密着させるものもあるが、法量からみて片口であるかもしれない。2は胴部

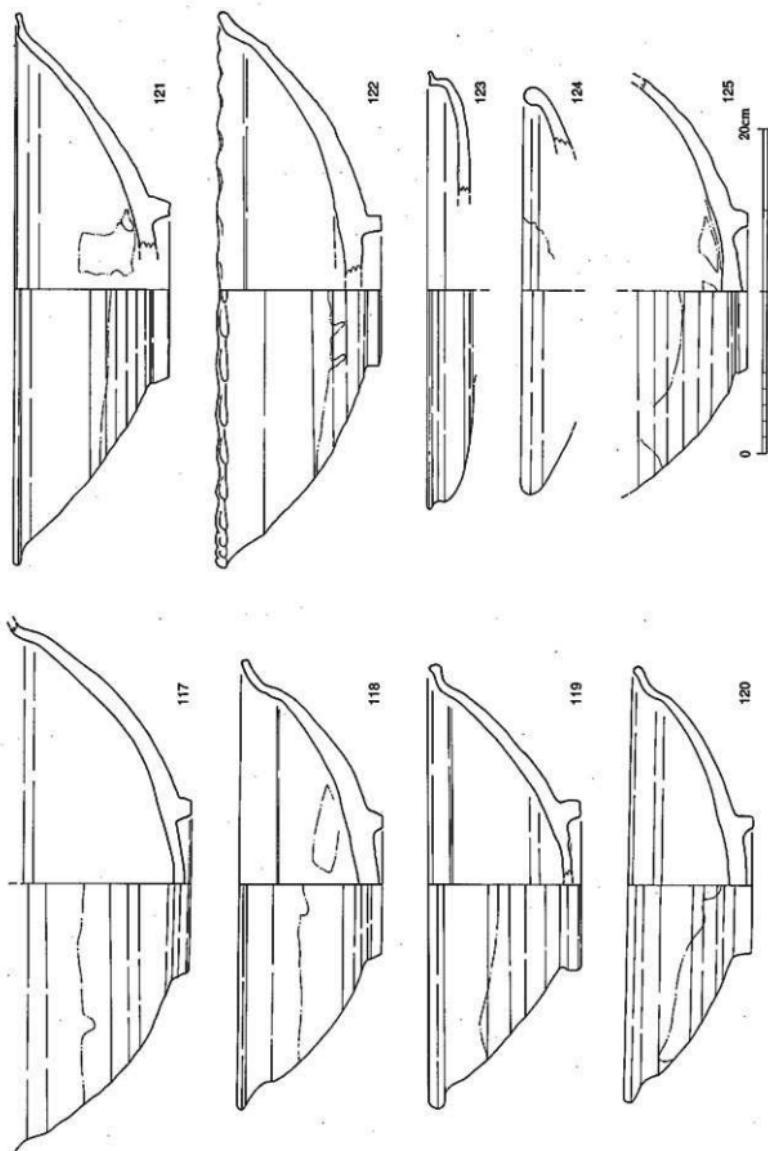
第161図 工房跡出土遺物 (III) 実測図⑤ (1/3)



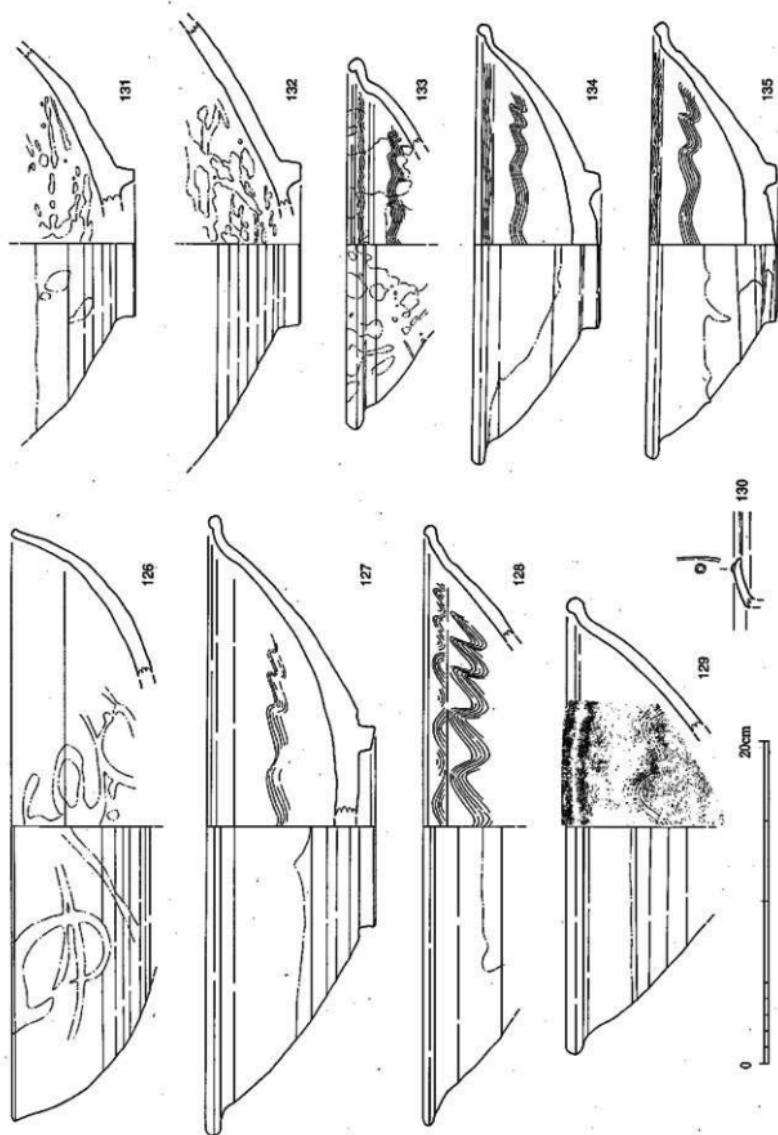
第162図 工房部出土遺物（III）実測図① (1/3)



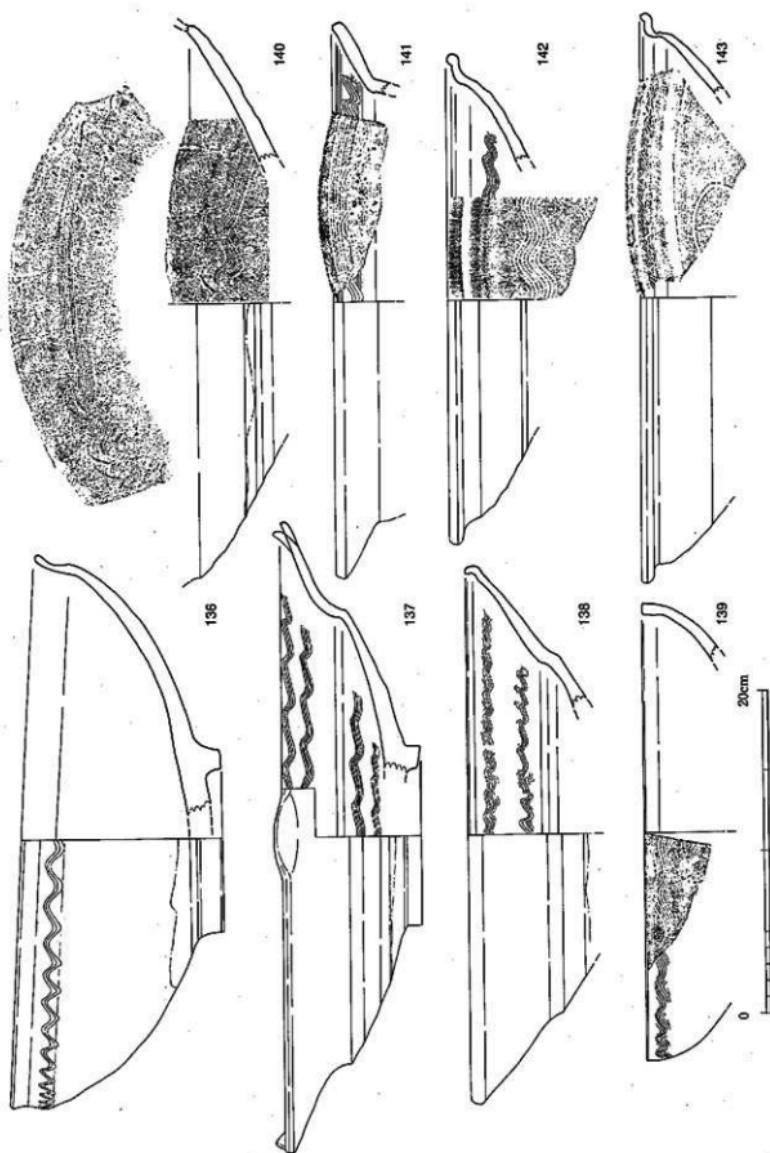
第163図 工房部出土遺物 (Ⅲ) 寶鏡図⑦ (1/3)



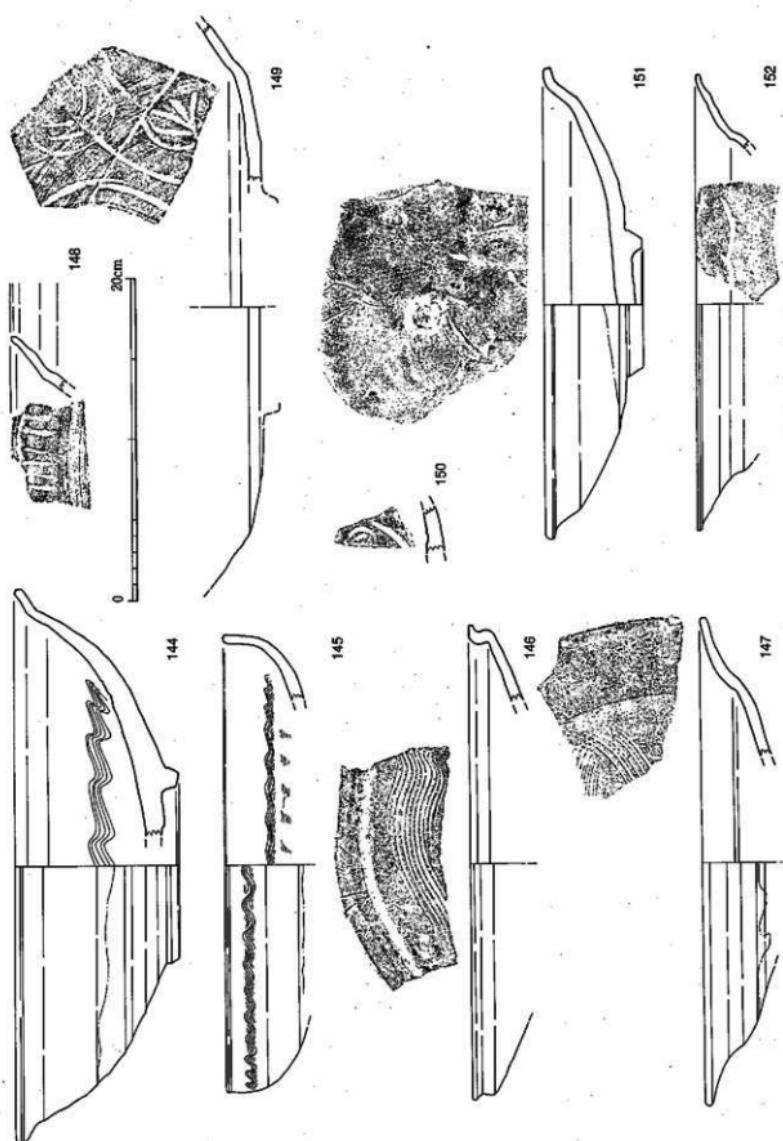
第164図 工房跡出土遺物（Ⅲ）実測図③ (1/3)

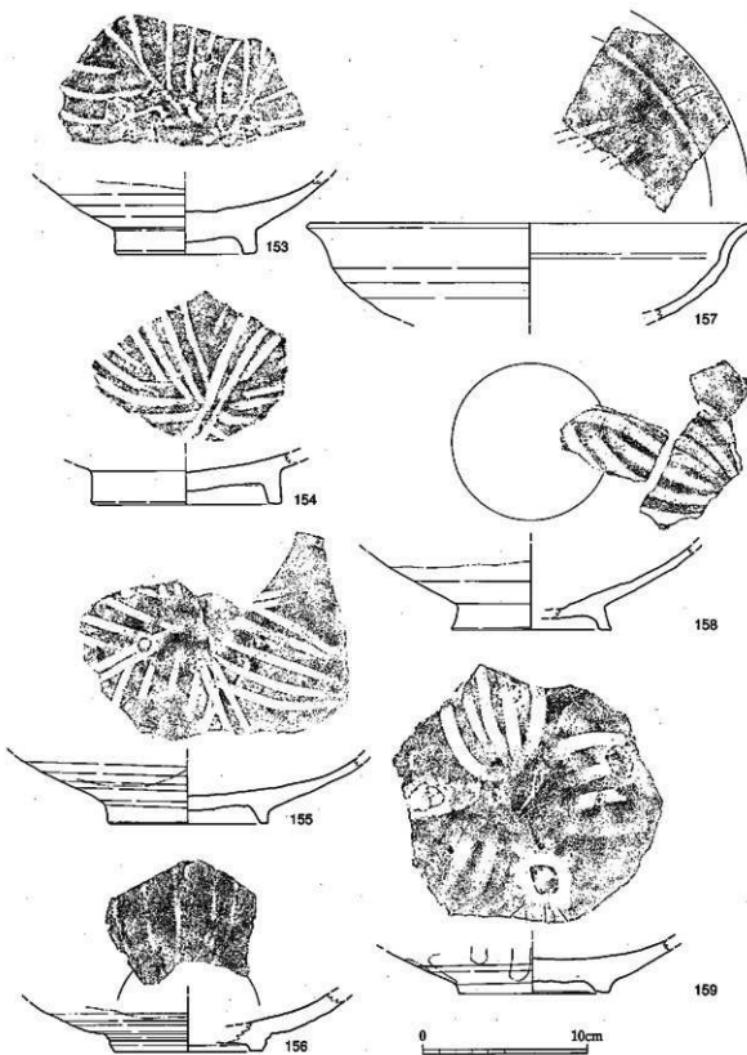


第165図 工房跡出土遺物（Ⅲ）実測図⑨ (1/3)

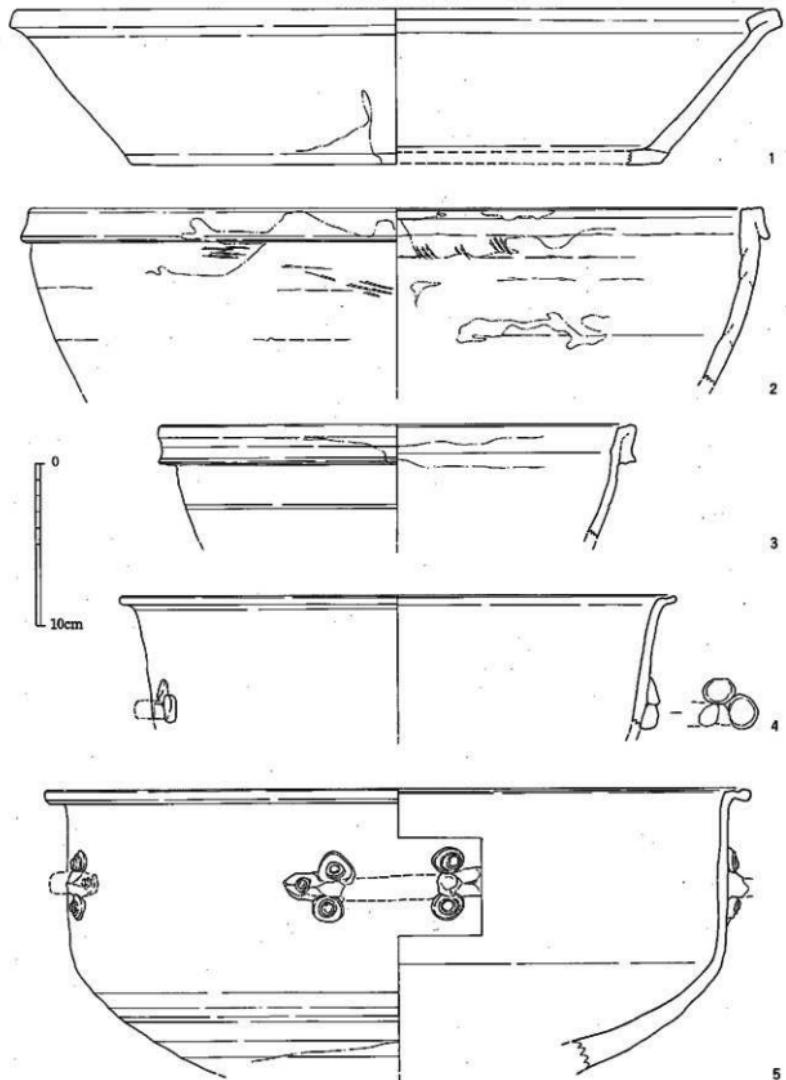


第166圖 工房部出土遺物（III）実測図① (1/3)



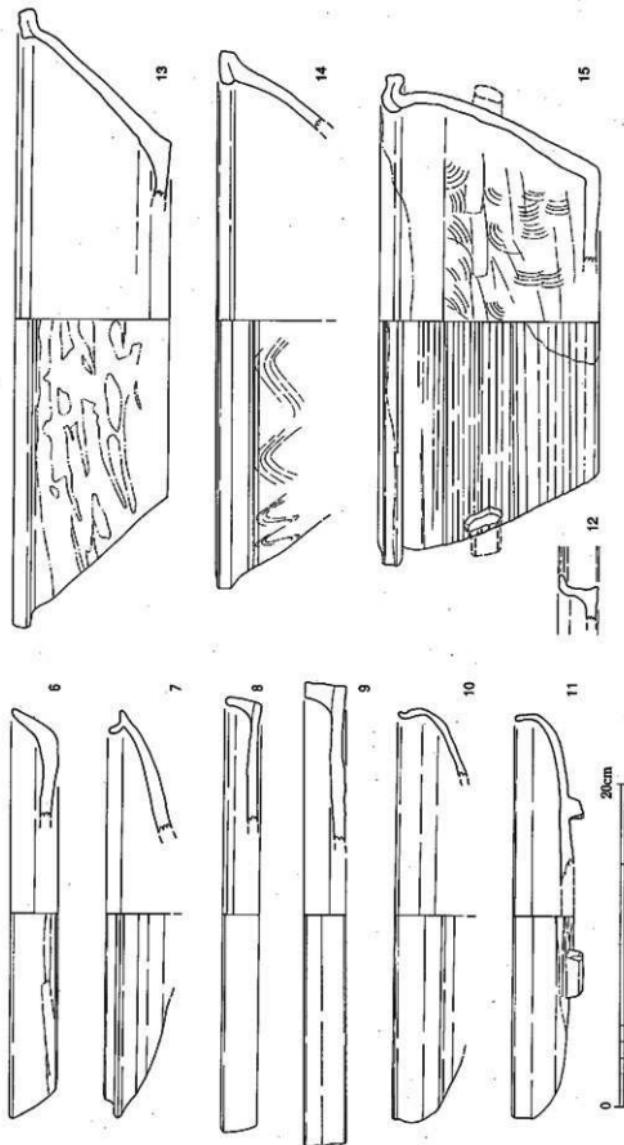


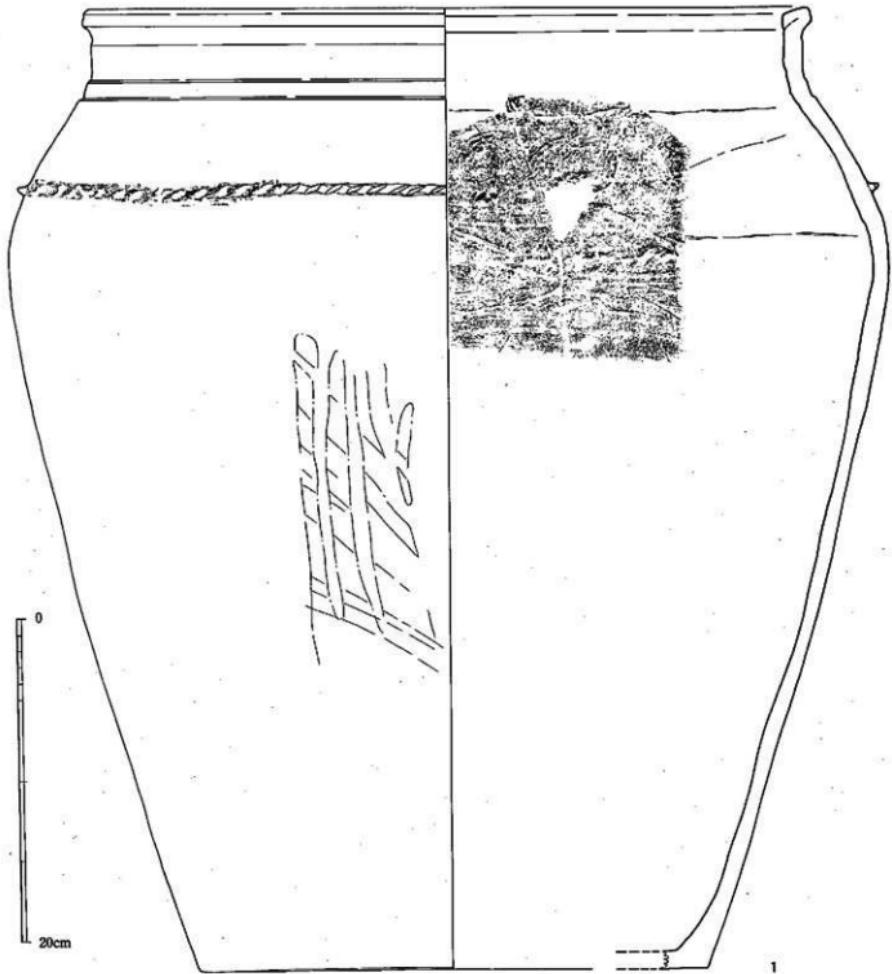
第167図 工房部出土遺物（Ⅲ）実測図①（1/3）



第168図 工房部出土遺物（鉢）実測図① (1/3)

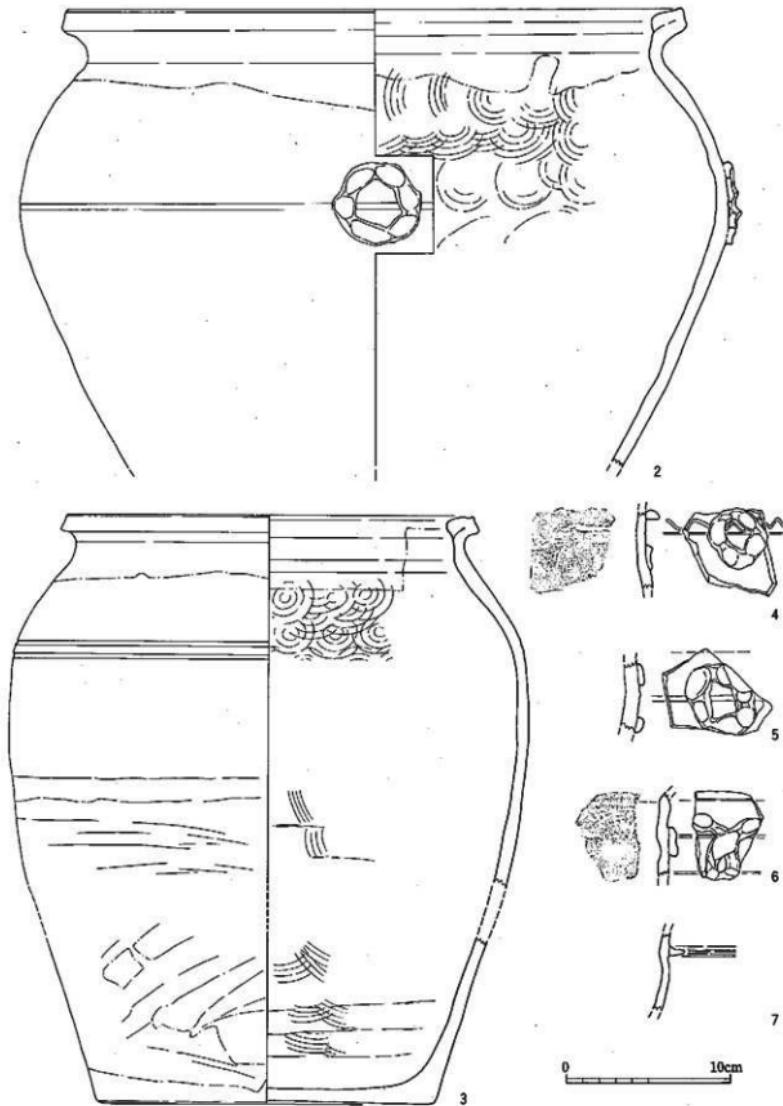
第169圖 工房部出土遺物（鉢）実測図② (1/3)



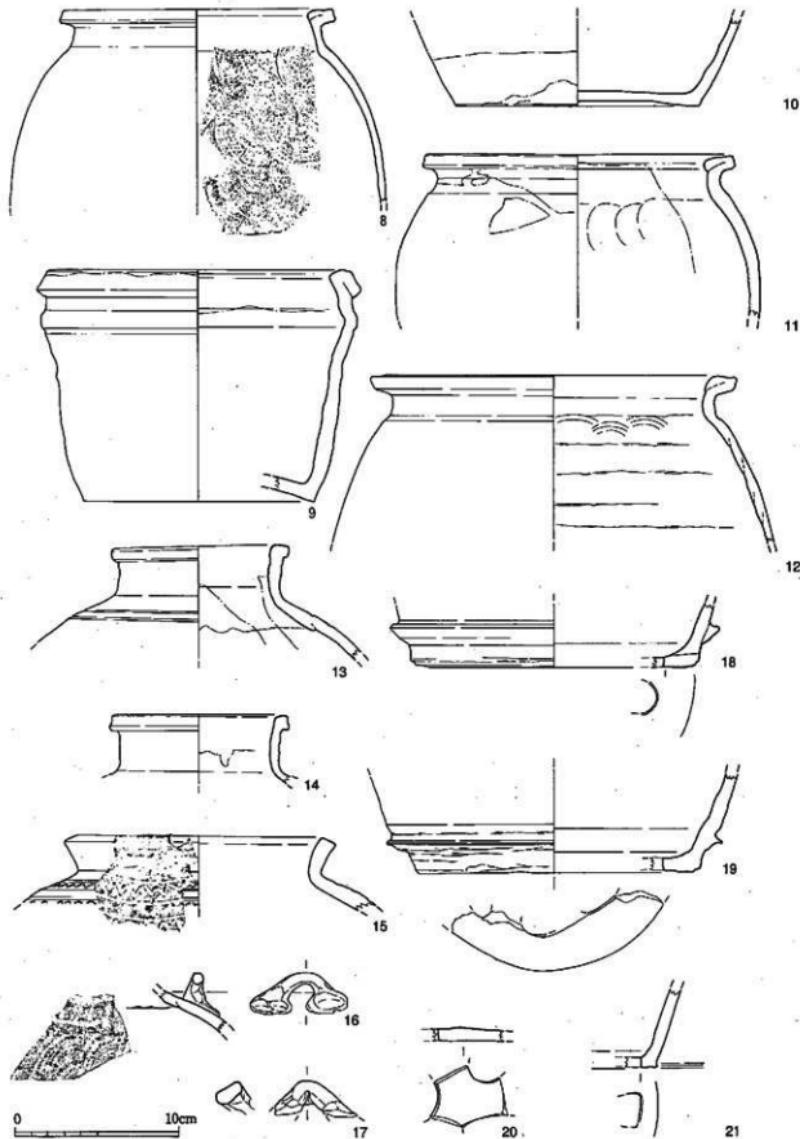


第170図 工房部出土遺物（斐）実測図① (1/3)

最大径に沈線を巡らせ、粘土紐を円形に貼り付けた花文で装飾する。同様の花文を4~6に掲げる。
6は粘土紐を交差させるものである。7は斐の最大径に巡らせる突帯であろう。水指の可能性も残される。



第171図 工房部出土遺物（甕）実測図② (1/3)



第172図 工房部出土遺物（甕③・壺・瓶）実測図（1/3）

壺（第172図）

口頭部が細く立ちあがるものを壺とした。13・14は直立する口頭部をもち、端部は直角に外反させ方形に肥厚させた状況をつくる。13は肩部に二条の沈線を巡らせる。茶壺として利用されたものであろう。16・17は茶壺の肩につく耳。粘土紐を逆U字形に曲げ、付根にはそれぞれ2個の指頭圧痕を残す。15は緩やかに外反する口頭部をもつもので、端部は四角く收める。肩部に波状文・沈線を巡らせる。

瓶（第172図）

瓶は昨年度報告した工房部の調査ではある程度出土したが、西物原の調査では確認されなかった。底面に円形・方形の穿孔を有するもので、18・19は底部から2cmほど上方に短い錫状の突帯を巡らせる。釉はほとんど発色しないが胎釉と見られる。

瓶（第173図）

補遺編に掲載したものは小形のものが多いが、前章で見た通り実際には大形品が多い。1・2は茶入のような形状をなすが胎土は精良なものではなく、器壁も厚いため瓶として分類した。3は直立する口縁部であり、端部は四角く收める。端部の一部を粗く削り込むことにより片口状となる。4・5・7は底面に系切痕を残すもので、碗である可能性もある。6は底面に作業台に彫られていたとみられる「X」印が凸文として残る。8はスリムな形状の瓶の底部で、基筒底となる。9は小形の瓶の底部。高台をつくるが内面を削り込まない。10も小形の瓶であり、内面には幅の狭い工具痕が顕著に残る。11～13はやや上げ底の底部で外面は面取りをするようにケズリ調整される。内面の輪轍目は強い。瓶ではないかもしれないが、全体の器形が想定できず瓶の可能性があるとしてここに掲載した。14・15は短い口頭部をもつ瓶。小形のもので、胴の横への張りは強い。16は丸みをもった体部で、底部に比較的近い場所に把手の付根がある。付根には3個の円形浮文を貼り付け装飾とする。瓶ではなく花生であろうか。17～19は中～大形の瓶。17は外反する口頭部から屈曲して直立気味になる口縁部をもつもの。頭部内面にはシボリ痕が顕著に残る。18は外反する口頭部がそのまま口縁部に続くもの。基筒底の底部とは接合しないが、釉調などからみて同一個体と考え図上で合成している。19は肩部に4条の沈線を巡らせる大形品である。

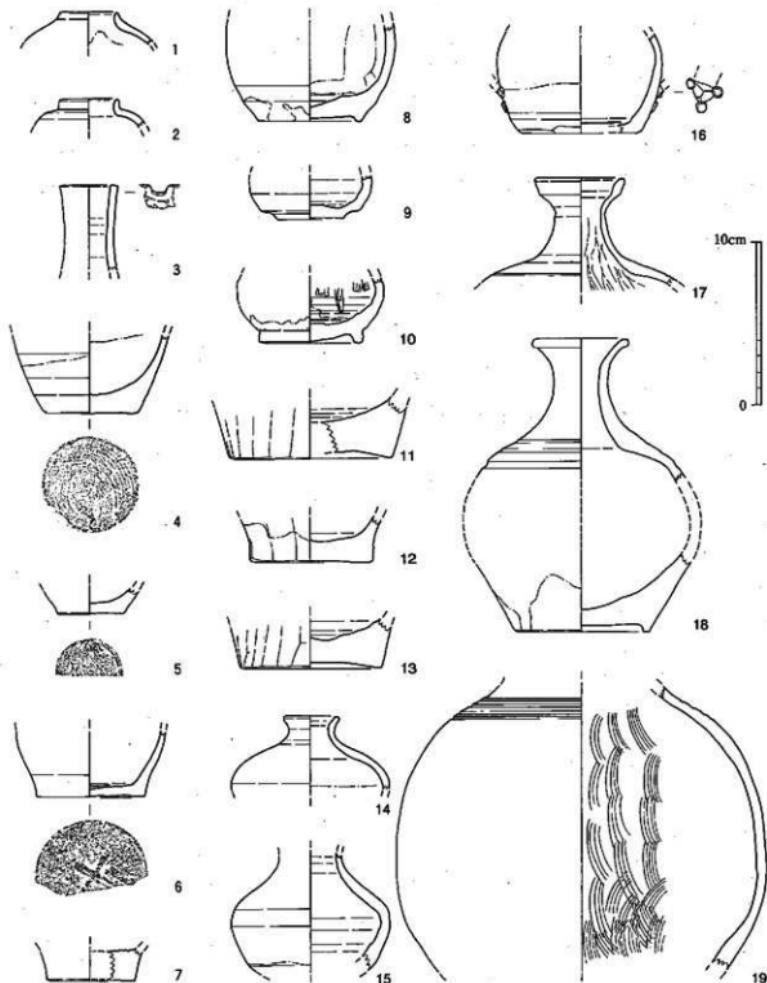
綱状突帯(第174図)

第174図に綱状突帯を集成した。甕の肩部につくものとみられるが、1は水指の口縁部である。7は波状文を伴う。素焼のもの他は全て胎釉が掛かる。

片口（第175図）

諸特徴は前章に準じるが、先の分類の「口縁端部を内側へ折り込んで密着させるもの」は、この補遺編分には含まれない。また、「口縁端部を外側へ折り返し密着させるもの」に該当するものは6の1点のみである。

他は口縁端部を短く外側へ折り返し丸く仕上げるものである。『内ヶ磯窯跡1』を含めてこれまで見てきたこの種の片口は、口径が20cm程度のものが大半であった。7～9はその規格に合わないもので、径が11cm程度の非常に小さいものである。全て胴部下半は欠損するが、高台を有す

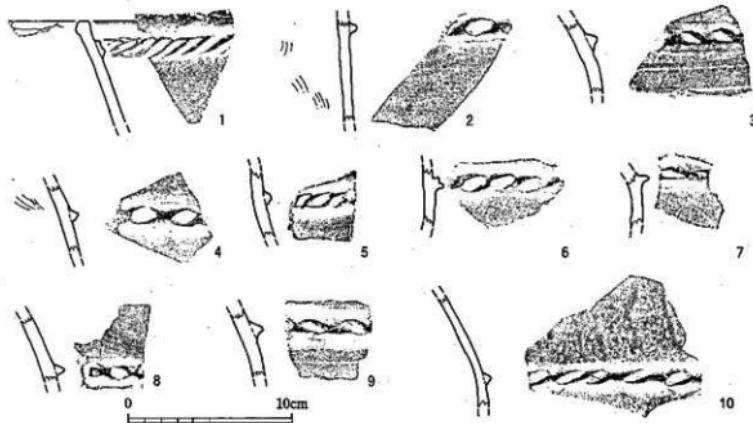


第173図 工房部出土遺物(瓶)実測図(1/3)

るものであると考えられる。なお第138図4に示したH区土壤7からの出土の片口はこの規格に合うものである。

擂鉢(第176・177図)

1~7は焼締によるものであり、8~10は釉を施すもの。擂鉢についての諸特徴は前述したもの



第174図 工房部出土遺物（網状文帶）実測図（1/3）

と変わらないので参照されたい。ただし8については、描日の施し方が特徴的である。すなわち、底部から口縁部に向かって直線的に施すものに加え、口縁に沿う形で小刻みに施すものが加わるものである。飴釉を施すものであり、描目についても装飾を意識したものと見られる。

特殊品（第178図）

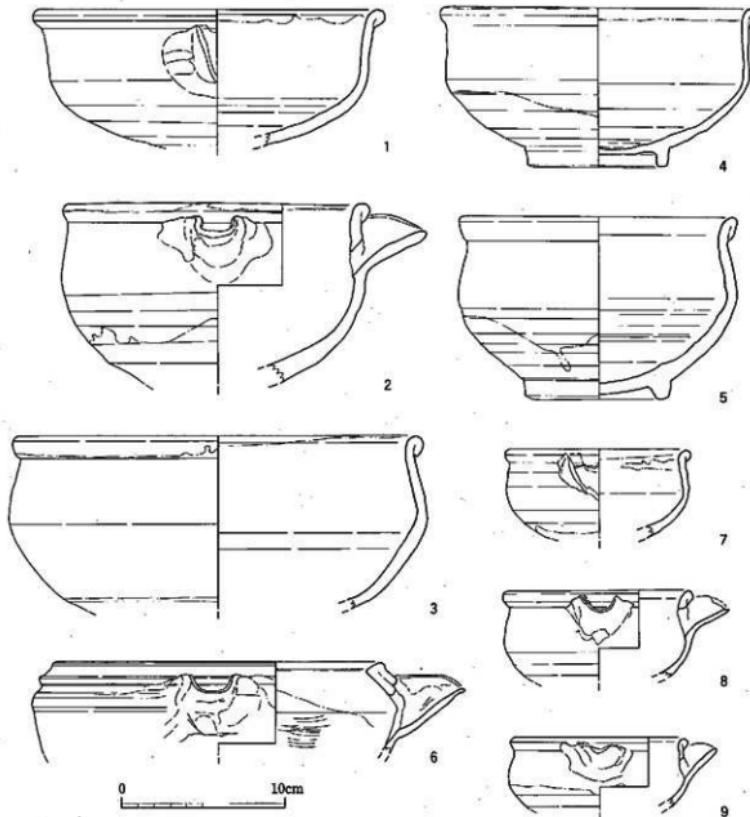
1は直径25cmの重量感のある土製品。長石釉を掛けた後に薬灰釉を掛ける二重掛けで、釉からみると特別な用途があったものと判断できるが、具体的には不明といわざるを得ない。皿或いは何らかの台となろうか。2も用途は不明。筒状のものと壺状の体部をもつものとが接合したような状況であるが、天地も不明である。接合痕は粗く残したままである。飴釉を掛けた後に薬灰釉を掛ける。

3は器台形を呈する筒状のもの。口縁部は強く外反し、端部を内面に折り込むことにより上面を水平にする。体部外面には縱方向に太い彫文を入れ文様とする。全体に施釉するが未発色。

4はミニチュアの椀。手捏ね成形の体部は、外面が丁寧にナデられるのに対し、内面は粗く凹凸を残す。小把手を付けるようであるが欠損する。硬質に焼成され、内面には飴釉が認められる。

5はミニチュアの椀の小片。底面は糸切が認められる。全体に施釉するが未発色。6は香合。小椀の一端を強く内面に変形を加える。底面には糸切を残す。素焼きで明黄褐色を呈する。

7は動物の腕の表現があるもので、沈線を3条いれることにより指を表現する。動物が付けられている本体は、器壁が1cmと厚手で内面は露胎であることから香炉或いは瓶であろう。9は薄い円盤状の台に動物が付けられていたもの。径約1cmの棒状の体部があり、短い抽象的な脚が表現される。体部とは離れた場所に手の先が表現された部分が残る。欠損部分が多いために動物の種類や機能はわからない。未施釉で、硬質に焼成され明灰褐色を呈する。14はダックスフントのような体部の犬の土製品で、頭部と3つの脚部を欠損する。体部の上面と尻部に小穿孔があり、水滴の可能性があるが、体部が中空かどうかは判断できない。



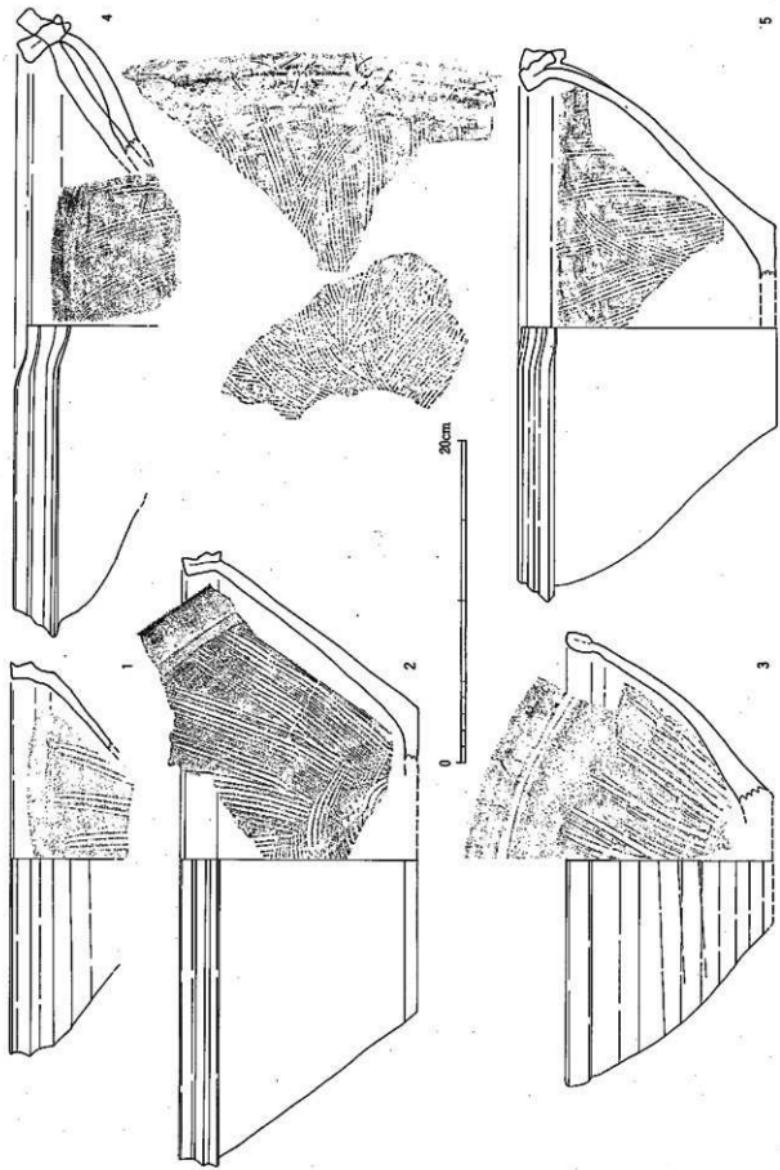
第175図 工房部出土遺物(片口)実測図(1/3)

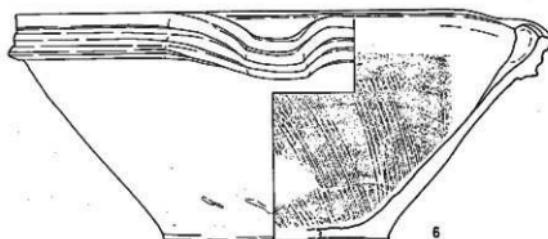
8は水指の把手であろうか。直方体の張出の付根に径1.2cmの半球形の浮文を付ける。鉄軸が施される。

10は花生の耳であろうか。カタツムリのように粘土紐を渦巻き状に巻く。付根は別個体に接合するものとみられる。鉄軸が掛け暗茶褐色を呈する。

11と12は石臼のような文様を刻む小円盤。両者ともつくりは粗く、硬質に焼成されている。11の径は4.5cm、厚さ1.8cm。中央からややずれた位置に粗い小穿孔があり、これとは別に貫通しない穿孔がある。12の径は3.7cm、厚さ1.9cm。中央に11よりは大きくて丁寧な穿孔がある。側面には別個体に接合していた痕跡がめぐり、何らかの胴部に埋め込まれたような使い方をされていたものであろうか。『内ヶ磯窯跡1』でも白形の土製品が出土していた(1394)が、同様のものと

第176圖 工房部出土遺物（櫛鉗） 斜側圖① (1/3)

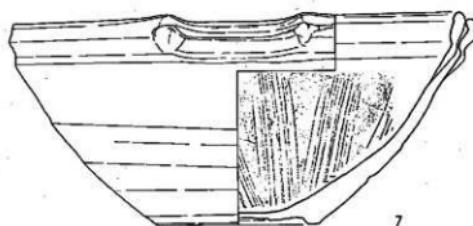




6



6 内面



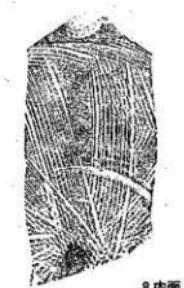
7



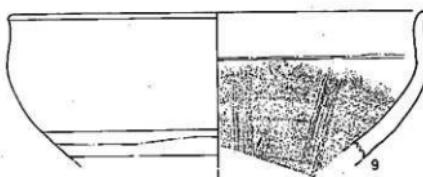
7 内面



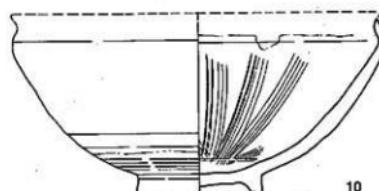
8



8 内面



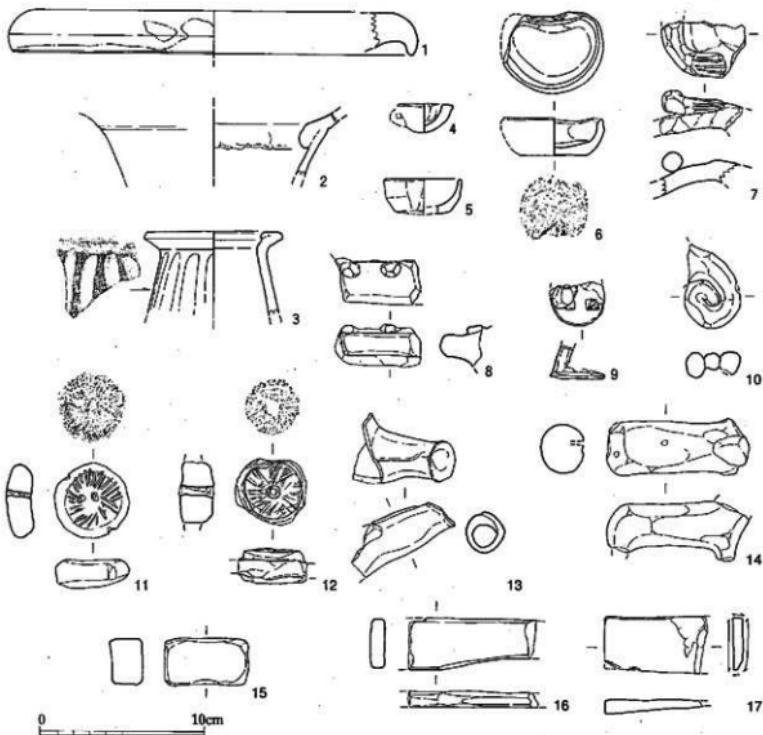
9



10

0 10cm

第177図 工房部出土遺物（擂鉢）実測図② (1/3)



第178図 工房部出土遺物（特殊品）実測図（1/3）

みてよう。

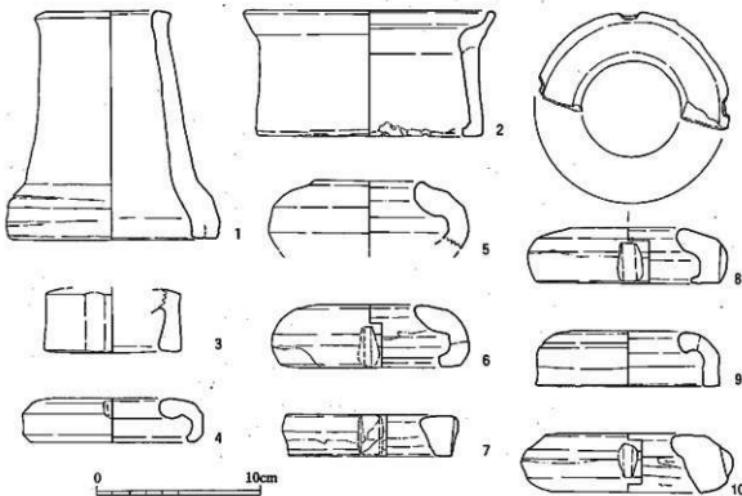
13は水注の口であろうか。薄い粘土板を筒状にし、端部は短く外反させ注口とする。未施釉で明茶褐色を呈する。16は厚さ0.9cmの板状のもの。全体をケズリにより丁寧につくる。鉛釉を施し茶褐色を呈する。

17は砥石。仕上げ用の緻密な石材で、粘板岩或いは凝灰質砂岩であろう。黄褐色を呈する。欠損部以外全面を使用している。

道具類（第179図）

道具類としてシッタと輥軸回転軸受を示す。1は高台を削りだす際の道具であるシッタ。緩やかに内傾する体部をもち、口径は8.6cmを測る。底部は丸みをもって径を増し、安定を良くしている。2は道具かどうか判断できない。底面は持たず、内側に粘土がはみ出す部分が多い。口縁部は外反し、内面には蓋受状の段をつくる。

3～10は輥軸の回転軸受け。輥軸の回転軸がぐらつかないように支えるものである。形状は様々



第179図 工房部出土遺物（道具類）実測図（1/3）

であるが、基本的には断面がC字形となり、外面には4方向に縦方向の削り込みがある。この削り込みは滑り止めであろう。5・6のように軸に当たる部分がよく擦れているものもあるが、あまり擦れていないものも認められる。轆轤の回転軸受ならば使用時には眼に触れないものであるが、つくり・施釉は非常に丁寧であり、道具に込めた陶工の思いが反映されたものかとみられる。

IV 西物原落込部（Ⅲ区）の調査

1 はじめに

西物原落込部とは、内ヶ磯窯の本体から約50m西の地点に広がる南北12m、東西8mの大きな落ち込み部であり、平成9年度の第6次調査時（工房部調査時）に工事用道路の設置のために前もって発掘調査が行われた地点である。第1～3次調査の報告の際に窯本体をⅠ区、工房部をⅡ区と名付けており、その続きとしてⅢ区という名称を用いている。この地区については調査の結果遺構の存在が確認されたこともあり、工事用道路の設置についてはなるべく避けるよう福智山ダ

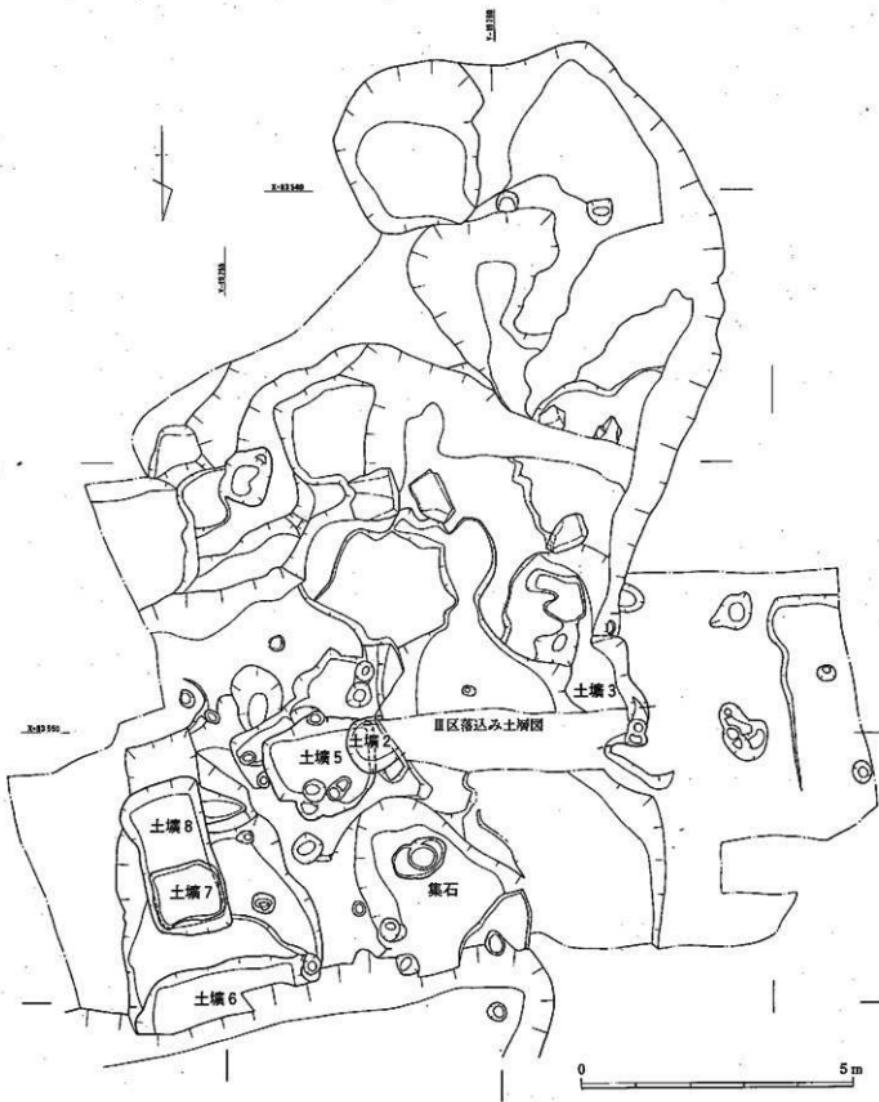


発掘調査前（北から）

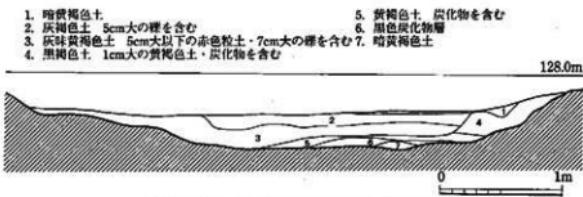


発掘調査後（北東から）

第180図 Ⅲ区全景



第181図 III区遺構配置図 (1/90)



第182図 III区落込み土層図 (1/40)

ム建設事務所に依頼したが、設計の変更により掘削されることは避けられそのまま水没させることとなった。

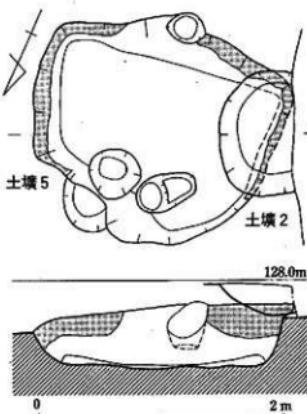
なお、この地区の埋め戻しの際に更に西側を重機を用いて試掘トレンチを入れてみたが、遺構は検出されず、遺物の出土もなかった。したがって、III区よりも西側には物原の広がりは存在しないことが示された。

2 検出された遺構

検出された遺構は土壙が6基・集石遺構1基・数基のピットである。土壙1としたものは炭化物・焼土の浅い広がりであったために土壙としての報告を割愛する。また、土壙4は土壙6~8を含む広い落込みを指していたために、欠番とする。いずれの遺構からも遺物は出土していない。また、いずれの遺構も落込みの外にあり、落込みからは遺構は検出されなかった。

III区土壙3 (第183図)

西側をカットされるが、径1m程度の円形土壙とみられる。土壙5を切るものであるが、土壙の観察から土壙5が完全に埋まってからある程度の段階を経てつくられたものと想定される。堆積は炭化物を多く含む灰褐色土であり、壁面や床面が火を受けた状況は確認できなかった。



第183図 III区土壙2・5実測図 (1/40)

III区土壙3 (第185図)

長方形の土壙であったと見られるが、1.8mの一辺を残して大部分がカットされる。埋土は黄褐色土であり、約40cmの堆積がある。

III区土壙5 (第183・184図)

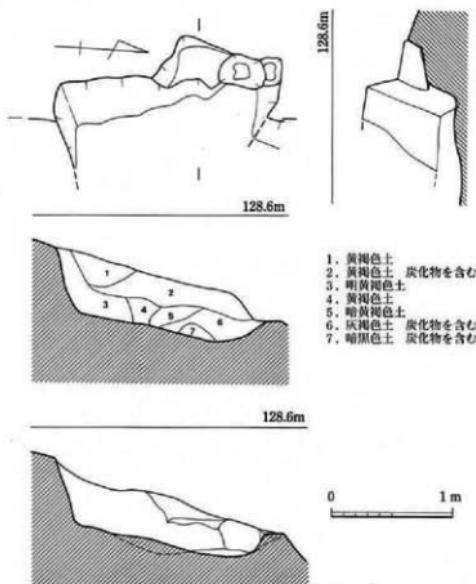
土壙2の下層に位置するもので、2.0m×1.2mの平面長方形の土壙である。南北の各辺にはピットがあり、それによって若干幅が広がる。30~40cmの堆積があり、床面上には約10cmの炭化物の堆積がある。壁面はよく焼け締まっており赤褐色を呈する。ただしピット部の壁面は火を受けおらず、ピットは上層から切り込んだ可能性がある。床面は平坦で、壁面とは異なり焼け締まった状況は観察されない。

III区土壤 6 (第186・187図)

北側を果樹園造成のためにカットされる。東西の長さは27m。幅は現存で0.6mを測り、本来は倍程度の規模となろう。壁面は火を受けて赤褐色に焼け縮まる。床面は火を受けた痕跡は認められない。暗黒色土の堆積が約35cmある。

III区土壤 7 (第186・187図)

土壤 8 の埋没後につくられたものであり、土壤 8 内にほぼ収まるような形に位置する。1.1m×1.2mのほぼ正方形のもので、45cmの堆積がある。壁面は直角に近く立ち上がり、強く火を受けて赤褐色となる。ただし床面は焼けた痕跡は認められない。底面に接して炭化物を含む黒褐色土が堆積する。



第185図 III区土壤 3 実測図 (1/40)



第184図 III区土壤 5 (南から)



III区土壤6堆積状況
(北から)

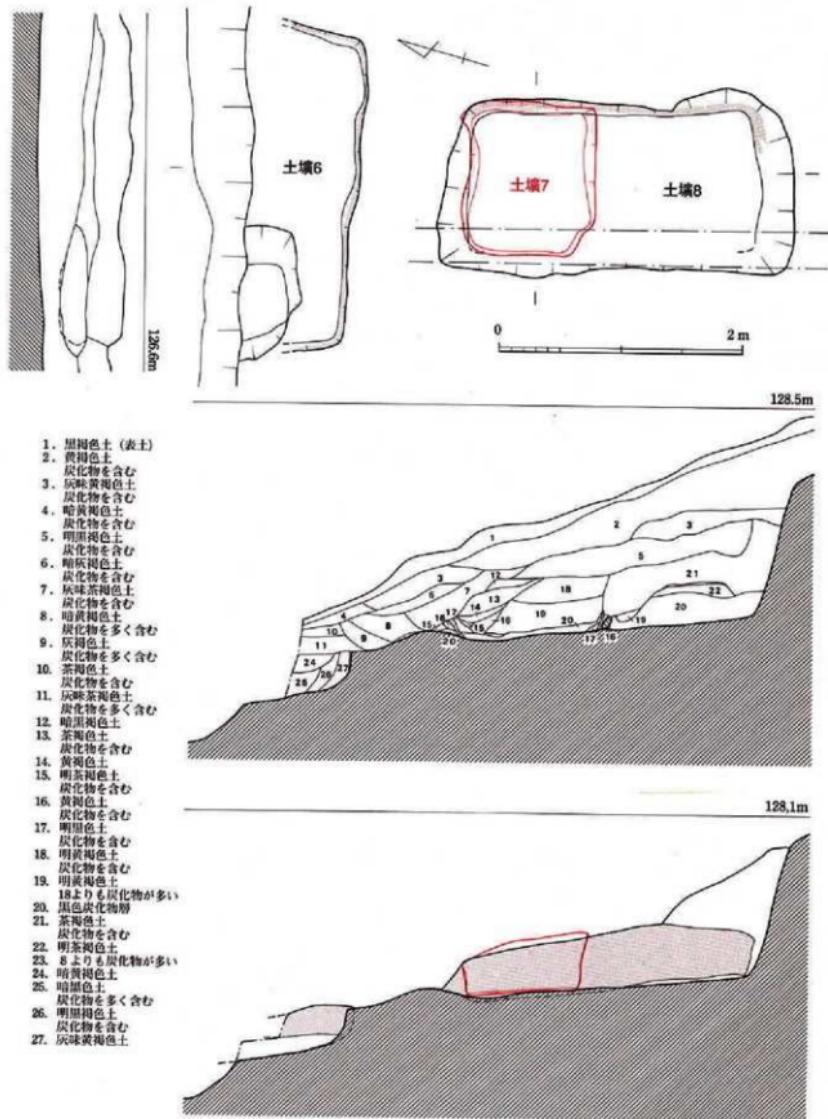


III区土壤6完掘状況
(北から)



III区土壤7完掘状況
(西から)

第186図 III区土壤6・7



第187図 III区土壤6~8実測図 (1/40)



第188図 III区土壌 8 完掘状況（北から）

III区土壌 8（第187・188図）

3m×1.3mの大形の平面長方形土壌である。地形的に高くなる南側は大きく掘り込まれており、比高差は1.1mを測る。南北に長軸をとり、土壌6とは直行する位置関係にある。東西の壁面は直角に近く立ち上がるが、南北は比較的傾斜をなして立ち上がる。特に東側壁面は強く火を受け、赤褐色となり硬く縮まる。底面には約20cmの厚い炭化物層がある。

集石遺構（第189・190図）

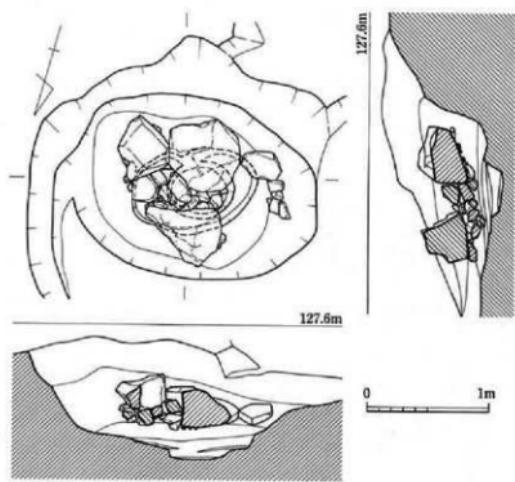
地山を径2.4m程度に半円形に切り込んだ所に石材が不自然に堆積していたために、記録を行った。大形の石材を3点おき、間には小形のものを詰めるが、石材を何らかの目的で組んだような状況ではない。また、石材が火を受けていたり、人為的な加工があったりということも確認はできない。石材を除くと浅い二段掘りのピットを検出した。

いずれの土壌内からも陶片等の内ヶ磯窯に関わる遺物は出土しておらず、また土壌が切り込む層（例えば土壌2と土壌5の間の層）中にも遺物は含まれない。したがってこれらの土壌の時期を積極的に示す根拠はないが、内ヶ磯窯操業以前のものである可能性は高い。ここで検出された炭化物を含み表面が被熱する土壌は、西物原土壌4にみられたものと類するものである。したがって西物原土壌4もまた内ヶ磯窯に伴うものではなく、それ以前の時期に属する見方をしておく必要があろう。なお、後述する炭窯地区でも同様の遺構が確認されたが、これらも同時期の所産かもしれないが、遺物がいずれからも出土しないために時期決定には及ばない。

III区に広がる落込は結局のところその性格ははっきりしないものであった。陶土の採取地の可能性も考えられ、粘土になりきっていないような土壌が見られる部分もあったが、積極的に陶土

採取地として認める根拠は得られなかった。

なお、Ⅲ区の表土中からは、内ヶ窯窯で焼かれた陶片が出土している。出土する陶片は多いものではないが、西側の物原が薄くではあるがこの地点にまで延びていることが確認された点も成果として加えておきたい。



第189図 Ⅲ区集石遺構実測図 (1/40)



第190図 Ⅲ区集石遺構 (南西から)

VII 炭窯の調査

1 はじめに

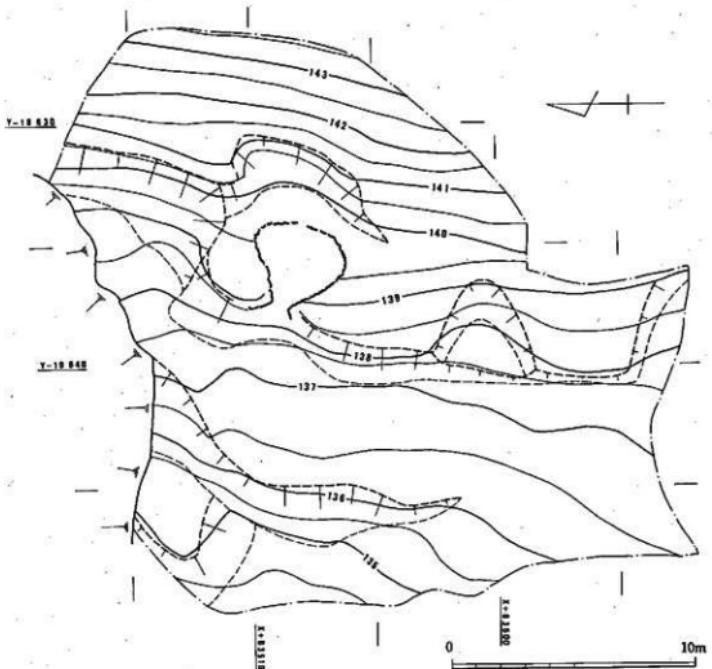
内ヶ磯渓谷には幾つかの炭窯跡が分布し、1960年頃までは実際に使用されていたものもあったと聞く。地元の方の話によると、かつては10ヶ所程度の炭窯があり、内ヶ磯集落では1件につきの窯を持っていたとのことである。現在では使われているものはなく全て森の中で壊れ逝くままとなっている。

今回調査した炭窯は、内ヶ磯窯跡の対岸に位置するもので、工事用道路建設により破壊されるものである。福地川に近い標高138m付近に位置するもので、山の斜面を切り開いてつくられる。窯の背後は弧状に山をカットしている状況が観察され、また窯の前面は作業場とみられる緩斜面地をつくり出している。調査前は石組が露出しており、炭窯の存在は知られるものであったが、内部には周囲から土砂が流れ込んでおり、また壁土も崩落して内部に落ち込んでいる状況であった。天井部は失われているものの保存状況は良好なものと判断された。調査はまず内部に落ち込んだ土を取り除き、周囲については地形測量を実施した。窯の前面には石垣状の遺構が認められたために、表土を取り除くことによって全体を露出させた。窯の前面の堆積状況を確認の際に焼土塊が検出されたので、表土を剥ぐことにより遺構検出を試みた。その結果3基の焼土塊が検出されたが、調査面積が狭いためにより多くの土塊が未検出のままである可能性が高い。

出土遺物には大正・昭和の範疇に収まるかとみられる陶磁器片やガラス片、鉄片がある。また内ヶ磯窯で焼かれたとみられる陶器片も出土した。地元の人によると昔は内ヶ磯窯の周辺で手頃な皿を掘り出して日常容器として用いていたとのことであり、今回出土した陶器もそのような理由で持ち込まれたものであって、この場所に別の窯がある訳ではないと判断された。



第191図 炭窯調査前（西から）



第192図 炭窯地区地形測量図 (1/200)

2 炭窯の調査

平面形状は巾着形のようないびつな円形を示す。この形状は焼けた炭を掻き出す際に道具を動かすのに都合が良い形状だそうである。すなわち、長くて重い棒を用いて焚き口左側の石を軸として捏ねるようにして掻き出したといい、したがって焚き口左側にはしっかりした石を据える必要があったとのことである。奥行きは3.4m、幅3.8mを測る。焚き口は東に開口し、幅は0.8mと狭くなる。高さは焼成面から1.6m程度残るが、本来の壁の高さに近いものと考える。拳大～人頭大の角石を12段程度積み重ねてつくりっている。壁には赤土に焼土を混ぜた土を貼り巡らされていたようであるが、火を受けた結果脆いものとなっており、現状で高さ70cm程度残るのみであった。焼土を混ぜるのは割れを防止するためという。

表土除去後の床面は硬く焼きしまっており、蜂の巣状にひびが入っている。この床面は水で練った赤土を突き固めたものであり、本来は窯の前面まで延びていたという。厚さ10cm程度あり、それを取り除くと多量の石が露出する。これはさらにその下にある排水溝の蓋石としての役割をもつ。この石敷は床全体には広がっておらず、南隅には及んでいない。この蓋石を除くと焚き口から八手状に伸びる石で築かれた排水溝が露出する。この排水溝は焚き口よりやや奥で一本となり、窯外部へと延びている。



炭窯全景



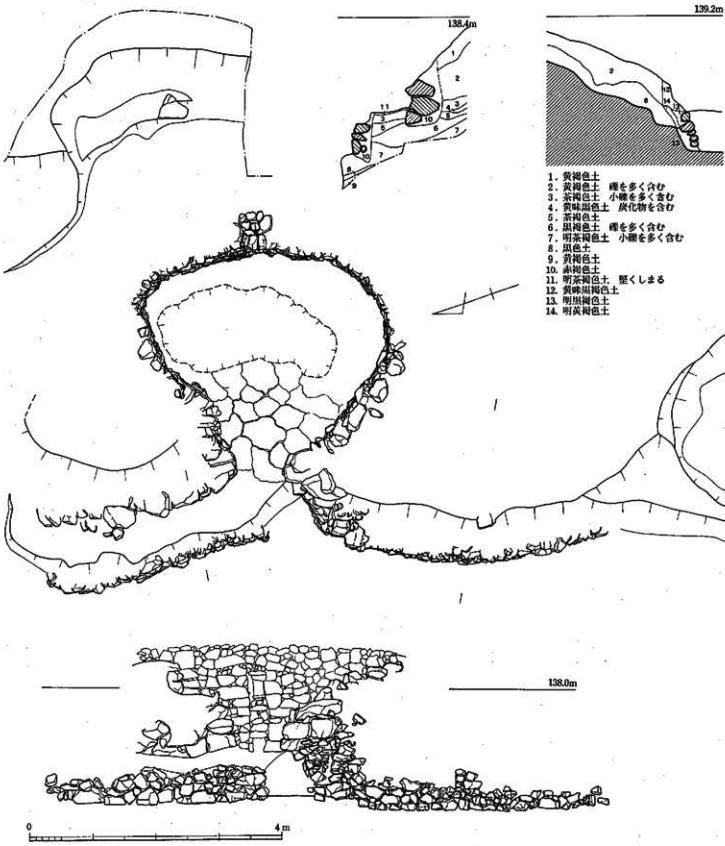
炭窯全景

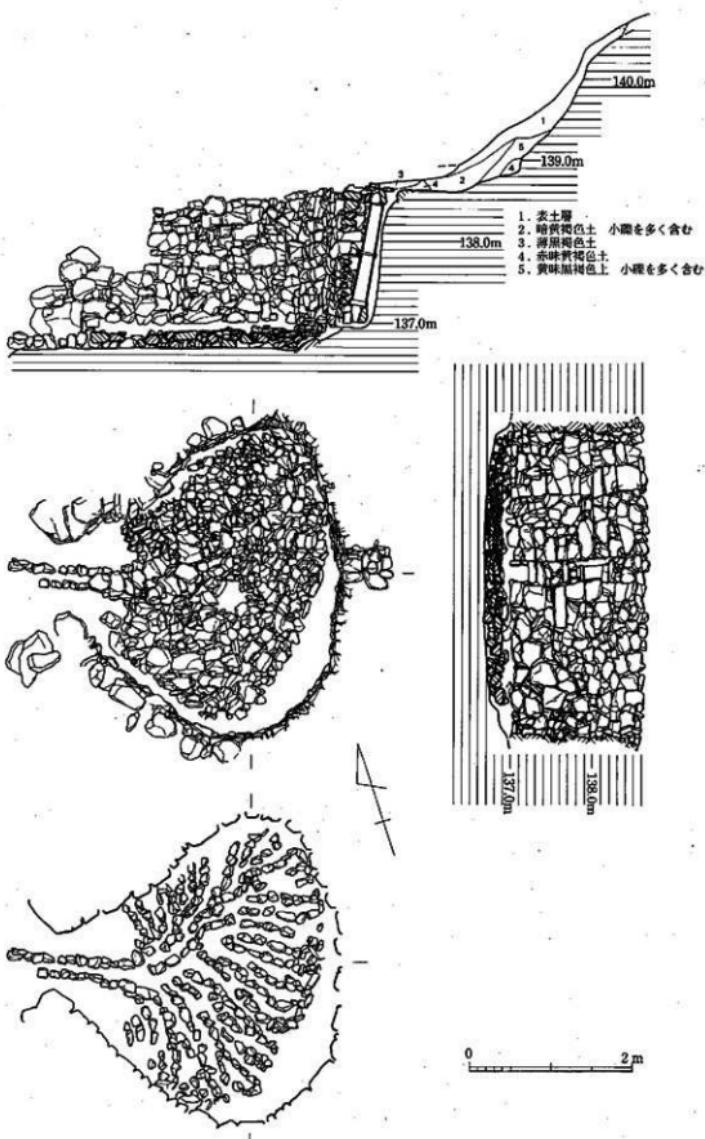


床面検出状況

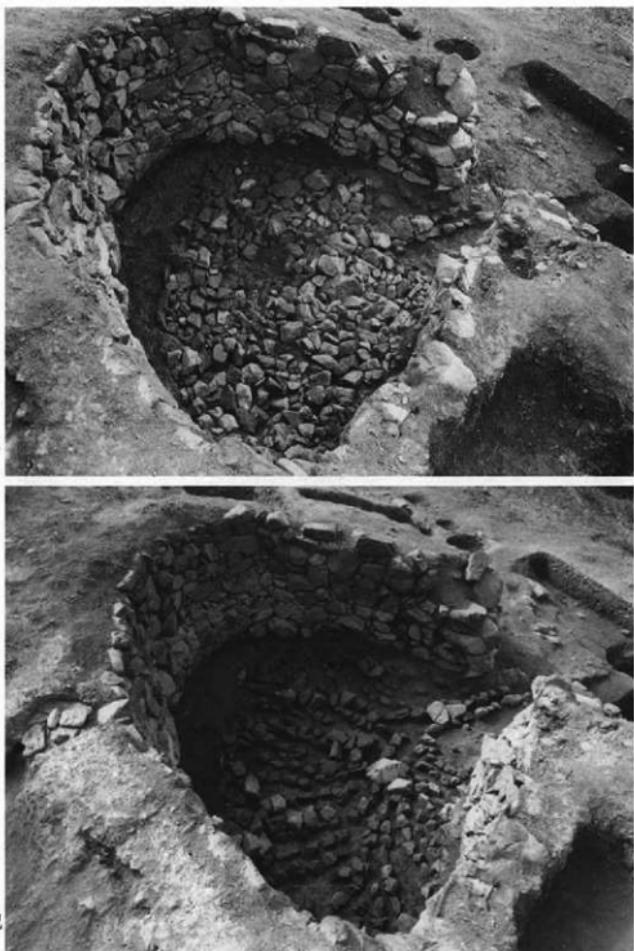
第193図 炭窯検出状況

第194図 京葉(検出状況)実測図(1/60)





第195図 炭窪（床面・排水溝）実測図 (1/60)



第196図 炭窯(床面・排水溝)

焚き口からみて正面奥には煙道がある。床面に接して20cm四方の口が開いており、そこからほぼ直角に土管を2個繋いだ煙道が延びる。土管の径は18cmである。土管上部には四角い石を4枚用いて枠状に立て、その上に扁平な隅丸方形の石を用いて蓋をする。

焚き口から外へはハの字形に石垣が広がる。北側へは「ヨコタ」と呼称される幅0.6m程度の通路が約4mのびる。下の作業場面までは約50cmの比高差があるが、ここにも石垣が築かれる。焚き口から南側へのびる石垣は約5mの長さがある。石垣は斜面に沿って現況で三段程度積まれているが、残りの良いところでは五段程度確認でき、本来はこの程度積まれていたものと考えること



煙道部検出状況
(西から)



煙道土管の状況
(西から)

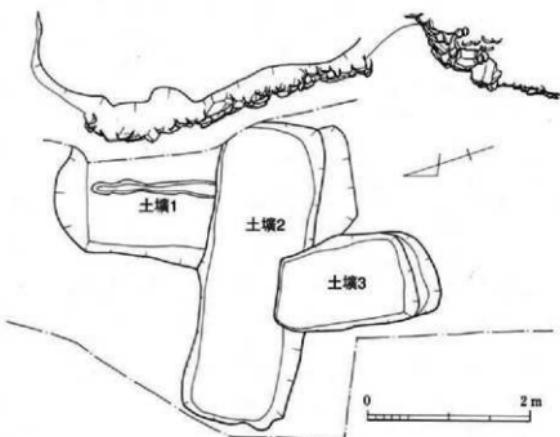


煙道蓋石
(北東から)

第197図 炭窯煙道

とができる。この石垣については「寝屋垣（ねやがき）」と呼ばれており、ここに炭を寝かせて置くということからくるらしい。

実際に炭窯を焼いたことのある地元の方の話によれば、この規模の窯では1回の炭焼きでおよそ60俵分の炭が焼けるであろうとのことであった。



第198図 炭窯前面土壤配置図 (1/60)



第199図 炭窯前面土壤完掘状況 (南から)

3 炭窯前面の構造

炭窯前面の調査では、壁面が焼け炭化物が堆積する土壤が検出された。これら土壤は炭窯の北側外石垣よりも下層に統いており、炭窯よりも古い段階のものと考えられる。いずれの土壤からも遺物は出土していない。検出された土壤3基は互いに切り合っており、土壤2が土壤1・3よりも新しい関係にある。

なお、南側外石垣の南端付近においても不整形のピットを幾つか検出したが、その性格は不明である。

炭窯前面土壤1（第200図）

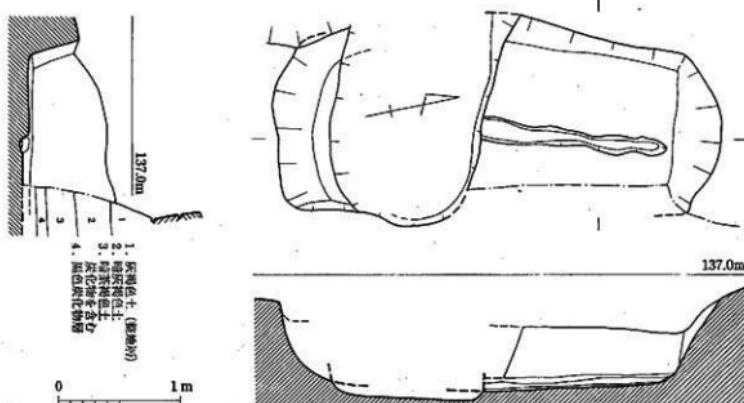
一辺が炭窯の石垣下層に統くために規模の詳細は不明であるが、 $3.65m \times 1.7m$ 程度とみられる平面長方形の土壤である。壁面は他の土壤に比べて緩やかに立ち上がる。壁面は焼け締まり、床面にも赤変して硬く焼ける部分がある。床面のほぼ中央、長辺に平行して幅15cm、深さ5cmの溝が走る。床面上直上に10cm程度の炭化物の堆積があった。

炭窯前面土壤2（第201図）

$3.75m \times 1.3m$ の平面長方形の土壤である。壁面は直立に近く立ち上がるが、東側は比較的緩やかな傾斜である。壁面は焼け締まり、床面にも赤変して硬く焼ける部分がある。床面上直上に5cm程度の炭化物の堆積がある。土壤内の東側は小刻みな堆積が認められるが、西側は一気に堆積した状況が観察できる。

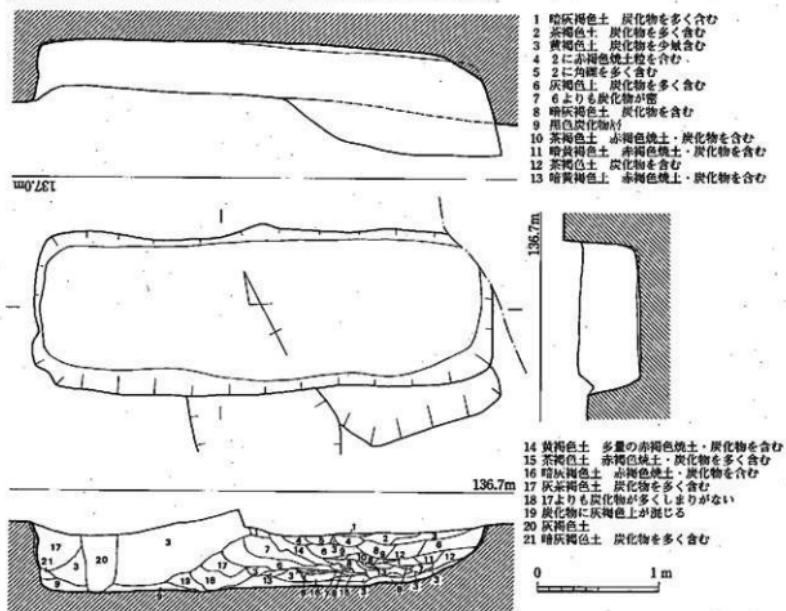
炭窯前面土壤3（第202図）

土壤2により切られるために規模の詳細は不明であるが、床面の立ち上がりから $2m \times 1.2m$ 程度の小規模なものと考えられる。壁面は焼け締まり、床面にも赤変して硬く焼ける部分がある。床面上直上に炭化物の堆積が認められる。

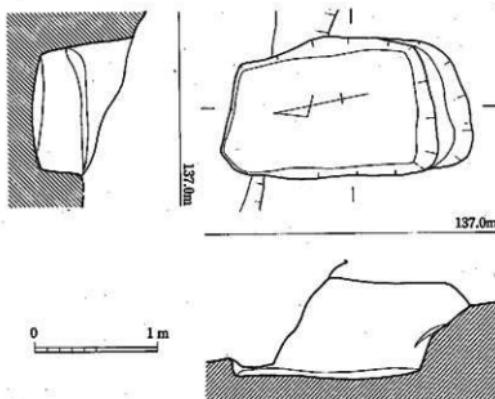


第200図 炭窯前面土壤1実測図(1/40)

これら検出された3基の土壤は規模の相違は若干あるものの、形状や堆積状況等から同様の性格を有するものと見られる。出土する炭化物がいわゆる消し炭に近い状況を呈しており、壁面が強く焼けることからも簡単な構造の炭窯ではないかとみられる。



第201図 炭窯前面土壤 2 実測図 (1/40)



第202図 炭窯前面土壤 3 実測図 (1/40)

VII おわりに

最後に今回の調査成果に関して若干のまとめを行っておきたい。今回の報告書の主な対象は窯の西側にひろがる物原であり、窯に付随する施設・作業場の存在が想定される地点であった。調査の結果、作業場であろう人為的な平坦面が検出され、土壤の存在も確認された。また、西物原は非常に急傾斜の斜面であるが、窯に至るまでには九十九折りに続く通路状遺構が検出された。窯本体から離れた地点にある落込み部（Ⅲ区）の調査では、粘土の採掘地ではないかと期待されたが、内ヶ磯窯操業時の遺構は確認されなかった。しかしこの付近にまで物原が延びていることが判明した。

検出された遺構の中で問題になるのは、粘土土壤の意味・用途である。粘土は何に用いられたものなのであろうか。窯のすぐ横で製陶されることはないであろうから、その可能性として、①窯の補修等、窯本体に関わるもの、②重ね焼き時の胎土目という二点が想定される。特に内ヶ磯窯では、重ね焼きには胎土目・及び貝目が用いられており、窯詰の際には比較的多く必要になると思われるが、そのために蓄えられていたのではないかと考える。粘土とはいえ、黄褐色を帯びていてたり粘性が弱いなどその質は良いものではなく、工房部で検出された粘土土壤のものとは異なる点は指摘しておきたい。また、粘土土壤の構造をみても、今回検出されたものは、直に粘土を蓄えるものであるが、工房部で検出されたものは、赤褐色粘土等で壁を取り巻いて、その中に粘土を蓄えていたというふうに相違点がある。したがって、西物原で検出された粘土の性格は、製陶に用いられるものとは扱いが異なっており、窯の補修や胎土目製作など粘土の質に左右されない作業に用いられたものではないかと考えたい。

窯の脇では手捏ね陶器とミニチュア陶器を埋納するピットが検出されたが、祭祀の形態を示すものとして注目されよう。また太刀形などの土製品も祭祀具として用いられたものかもしれない。玩具としての可能性も残されるが、窯祭祀等の民俗学的な事例も参考にすべきであろう。

今回の調査でも多種多様な遺物が出土した。これまで出土量が少なかった壺類（茶壺）について、まとまった資料が得られたことは特筆される成果であろう。鉄絵陶器・結文形鉢・有孔鉢についても資料数が増加し、伝世品との比較が有効になってくるものとみられる。胎土の精良な挽についてもこれまで以上の資料が得られた。いわゆる古高取ではなく遠州高取に近い作風の製品が焼かれていることの証明であり、その位置付け・背景は検討課題として挙げられる。また筆立についても断片的ではあるが資料数が増加したが、全体的な形状については不明な点が多く、他の窯での製品との比較が求められる。

面白いものに印鑑状の土製品の存在がある。描かれる印面の文様も管見に触れず、陶器に押印するスタンプなのか、朱肉を用いる印鑑なのか、或いは封泥のように荷物の封の際に用いられるものなのか、実際に用いられた例があるのかどうか非常に楽しみである。また把手部に刻まれる人面も日本人離れしたその顔つきを誰が描いたものなのか、興味は尽きない。

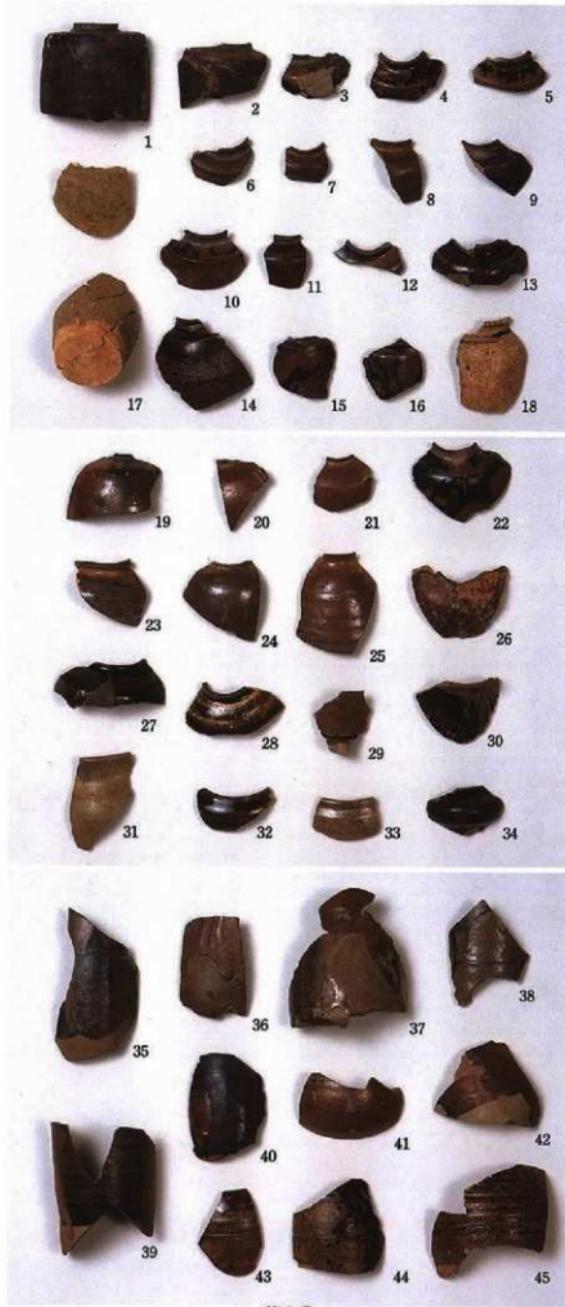
今回も出土遺物量が極めて多いために執筆者の力量では短時間でまとめきれないものであり、昨年度報告時の課題に加えて新たに浮上してきた問題点も多くある。来年度の最終報告時には工房部をも含め總括を行いたいと考える。

出土状況の観点からは、西14グリッドのように、搅乱を免れた地点において出土した資料群や、土壤5に切られる包含層の資料は、細かな分析の対象として検討されるべきものである。また、

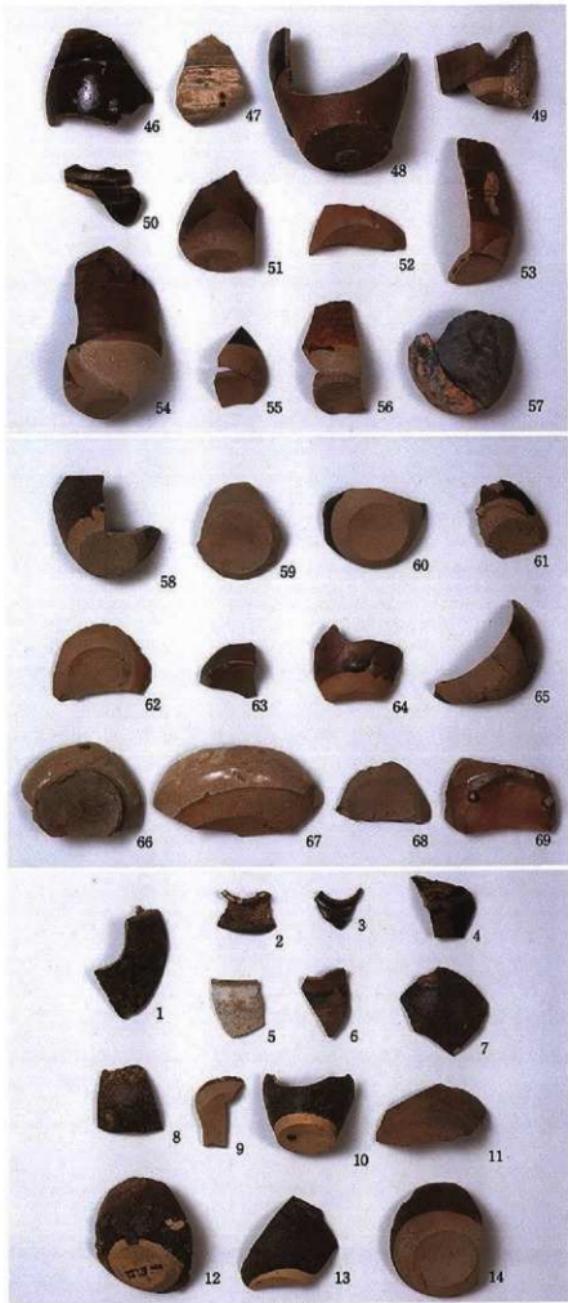
転落した状況ではあるが、茶入や茶壺が多く出土する地点は窯の比較的裾のほうの限られた場所であることは、これらが生産された場所がある程度狭い範囲に留まることを示している。茶入は第2次調査窯本体の発掘調査の成果により12・13室で集中的に焼かれていることが示されたが、それに対する廃棄場所とを考えることができよう。こうした状況は茶入のように目に留まる器種については明らかにしやすいが、他の器種ではどのような状況となっているのか、検討の余地がある。これらの成果とは逆に、乱掘により堆積の情報が乱されている地点があまりにも多いことは非常に残念なものとなっている。

内ヶ磯窯跡の報告は、来年度に東物原の調査成果を対象とする予定である。西物原の調査によって作業場の存在が想定されたが、東物原と比較対比していかなければいけないために、窯の横でいかなる作業場が展開されていたのかについては来年度さらに詳しく検討を行ってみたい。それ以外にもこれまでの工房部・西物原の出土遺物の整理を通じて、多くの問題が山積みとなってきた。内ヶ磯窯の調査は、窯本体に留まらず、工房部の状況・物原の堆積・窯付近の作業スペースといった具合に、窯を構成する諸要素に対して調査成果が出された稀有なものである。また出土遺物も多種多様で、当時の文化を大きく反映したものとして重要である。今回は整理期間の関係もあり、十分な検討ができず、また来年度に一部報告をまわさざるを得ないものもでてしまったが、来年度に向けて課題の解決を試みたい。

図 版



茶入①



茶入②



3



25



32

水指①



33



37



40

水指②



41



45



31

水指③



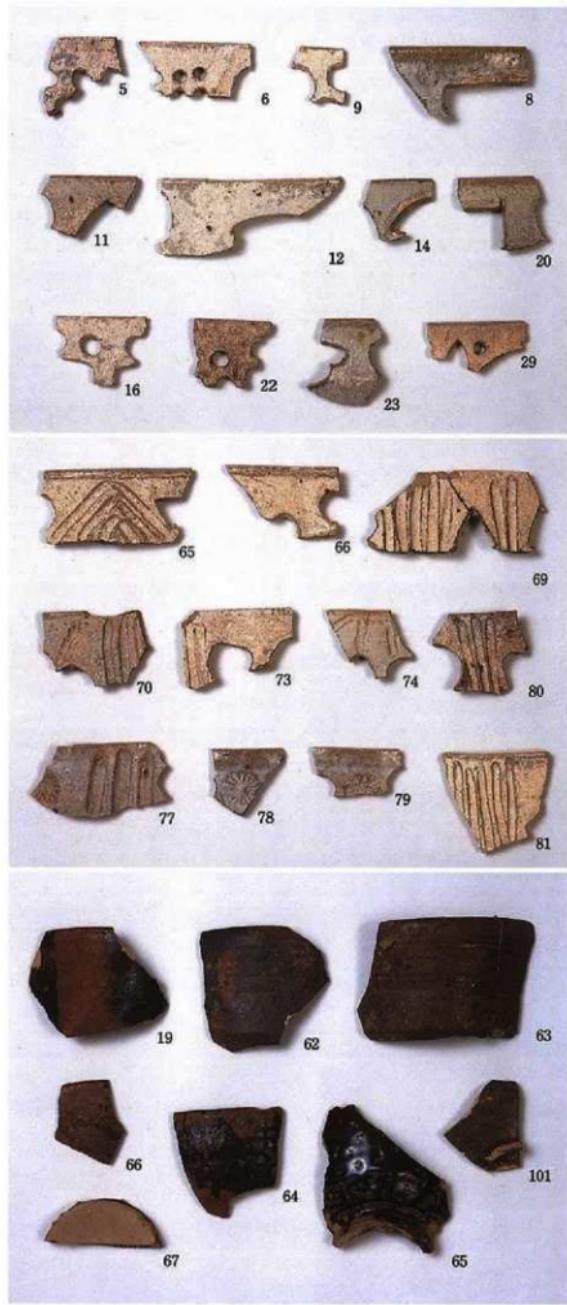
1



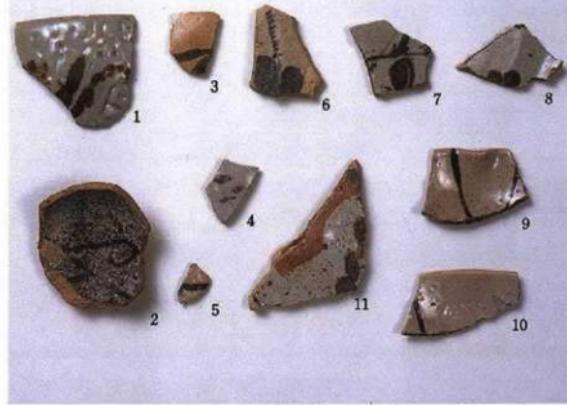
2



結文形鉢



有孔鉢・胎土精良椀



鉄絵陶器



1



49



12



56



34



58



土14-6



71



48



10



13



18



17



59



87

88

89

91

92

93

94

板②



52



57



77



34



標③



16



196



52



197



137



219



141



269



185



13



194



21



255

257



33

67



41

82



62

96





314



112



52



3



10

皿④・筆立・花生



22



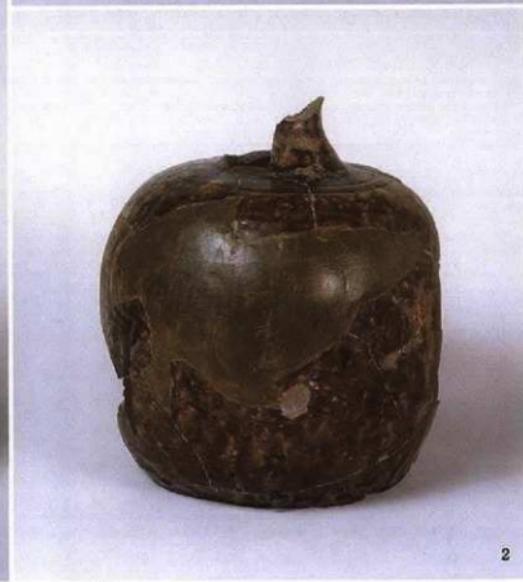
23



1



13



2

瓶①



3



18



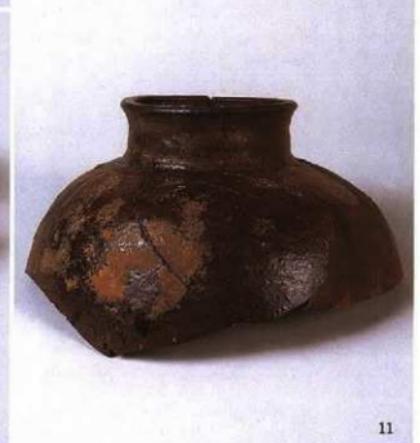
4



8



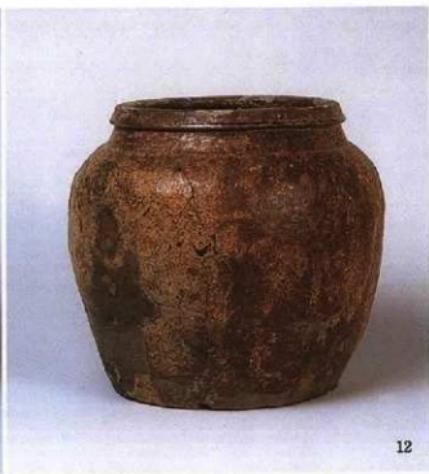
5



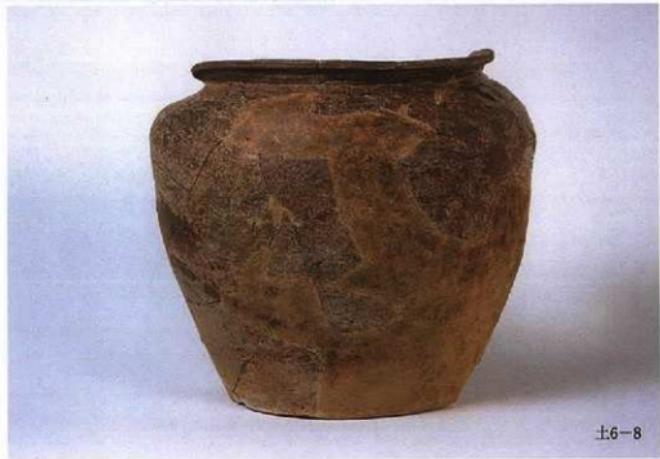
11



11



12



土6-8



29



30

甕・片口



22



22



23



27

土製品①



1



2



土11-19



8



9



10



6



7



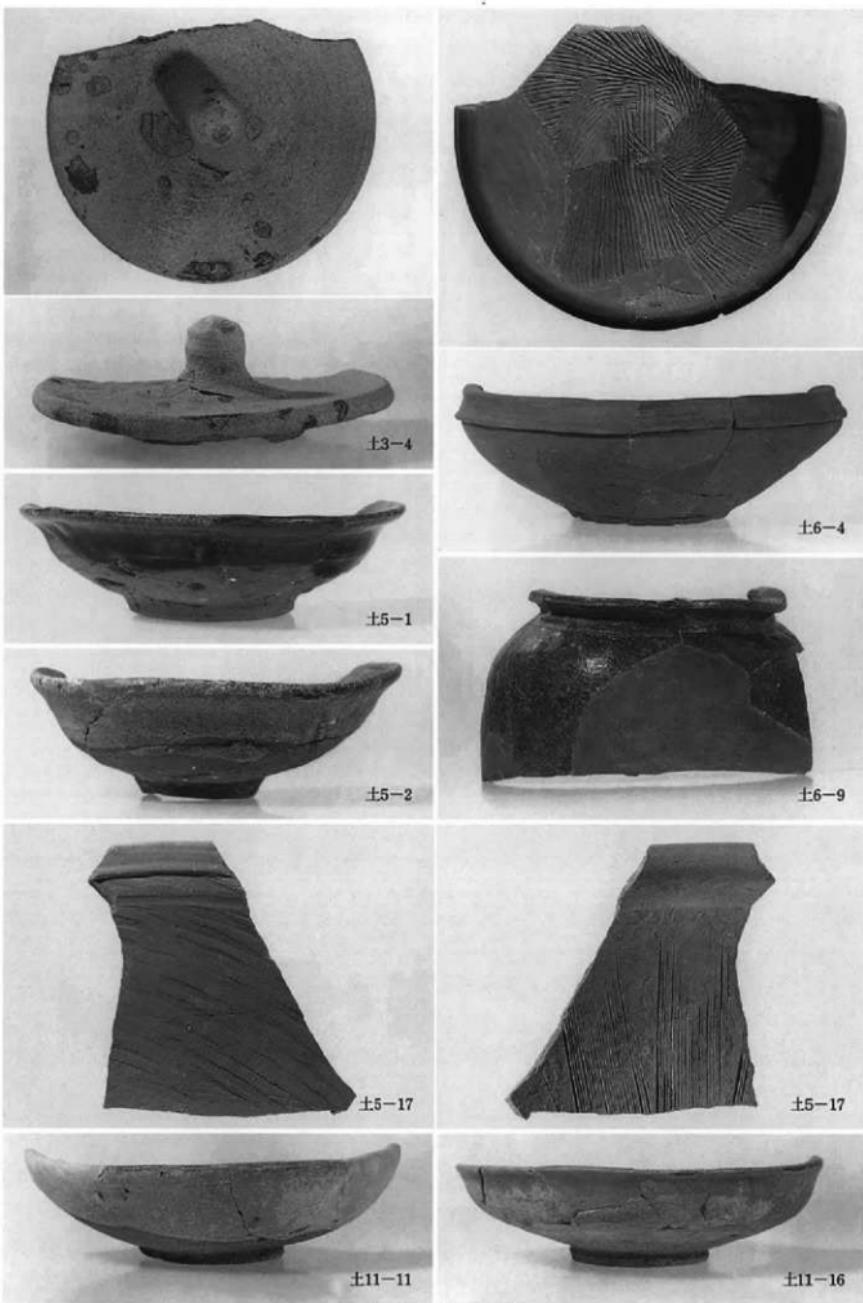
4



5



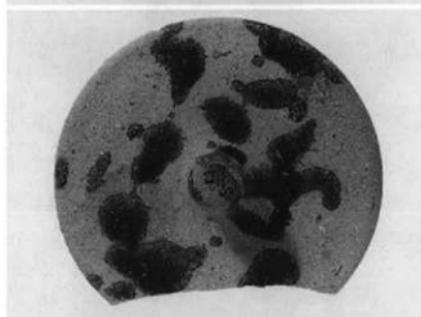
3



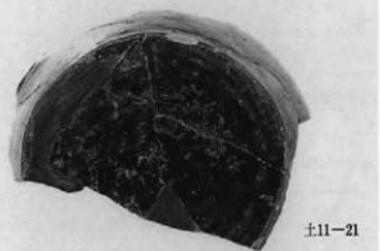
西物原土城出土遺物①



土11-2



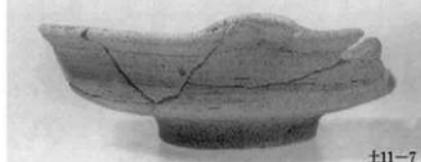
土11-21



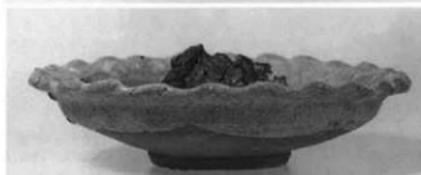
土11-5



土14-3



土11-7



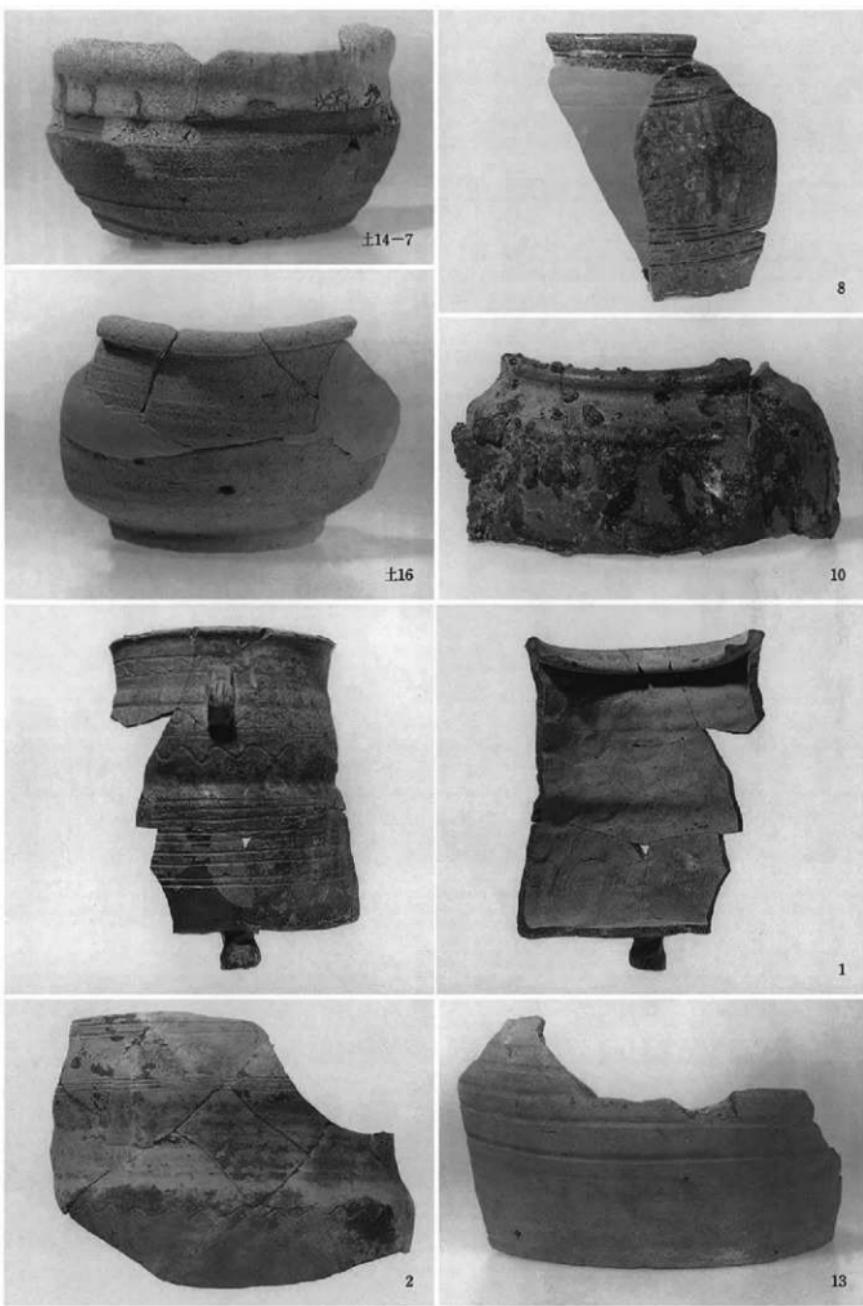
土11-18



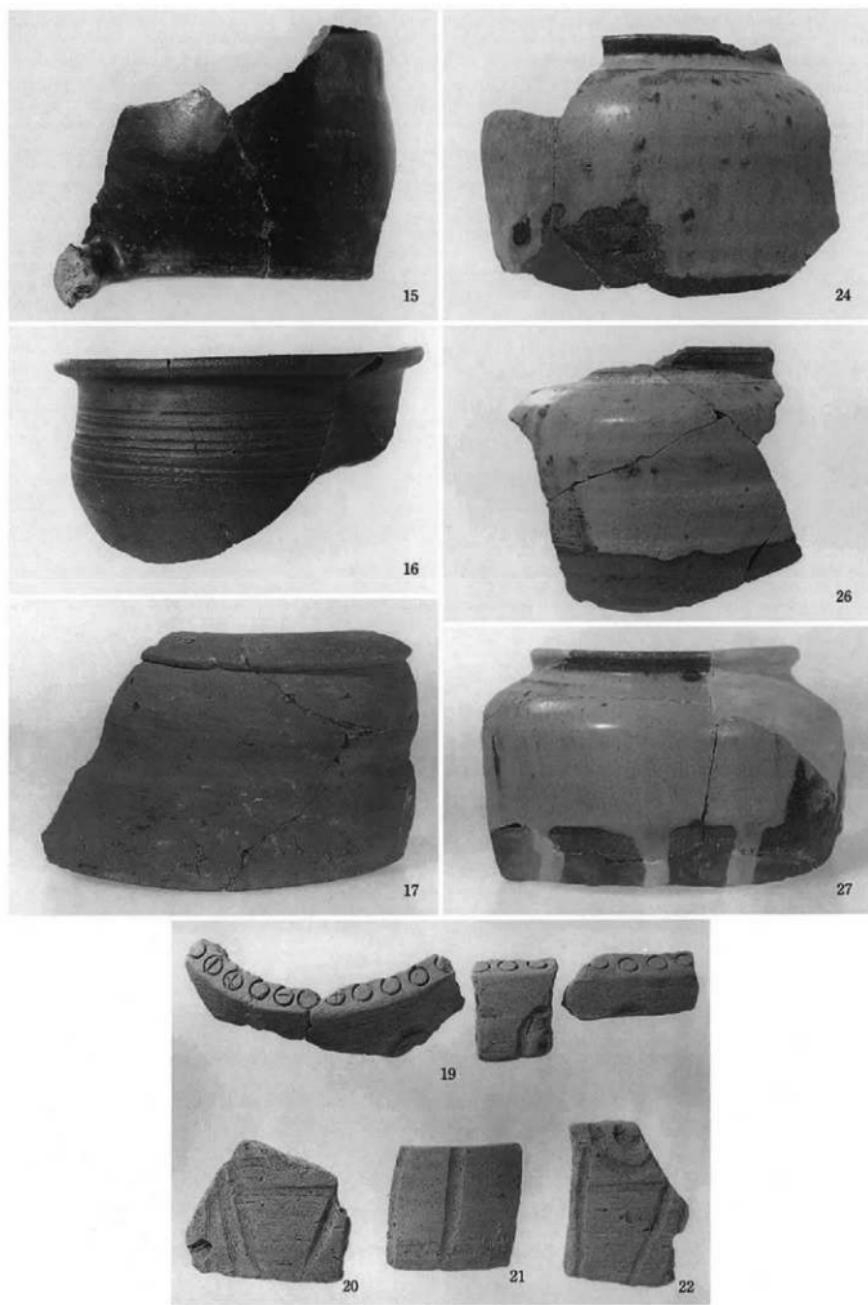
土14-9



土14-9



西物原土壤③・包含層①出土遺物



西物原包含层出土遗物②



29



35



30



36



31



38



34



39

西物原包含層出土遺物③



42



9



43



10



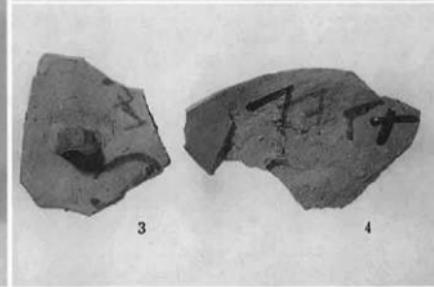
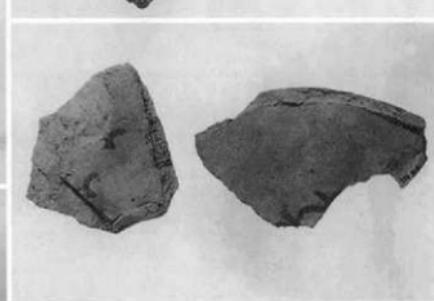
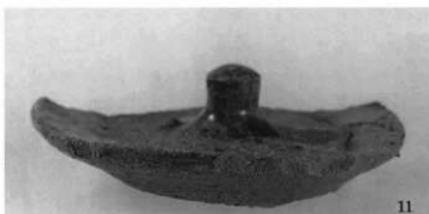
47



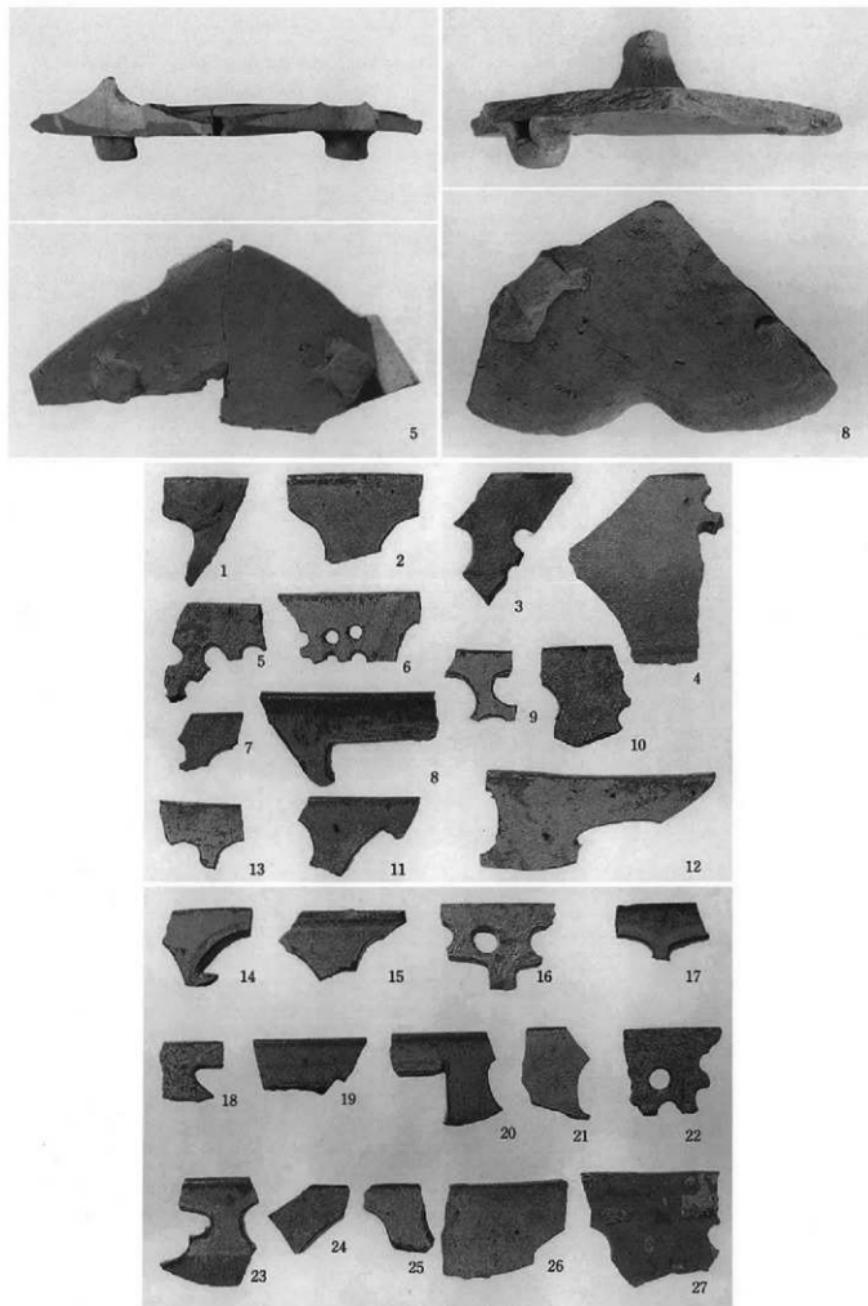
3



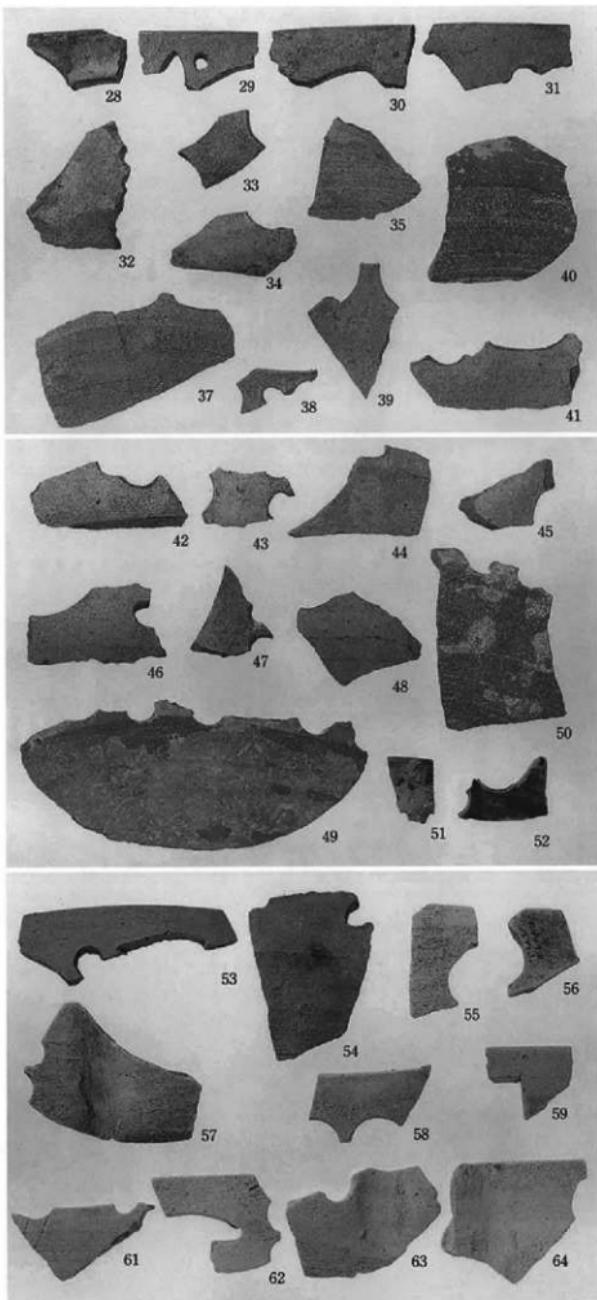
11



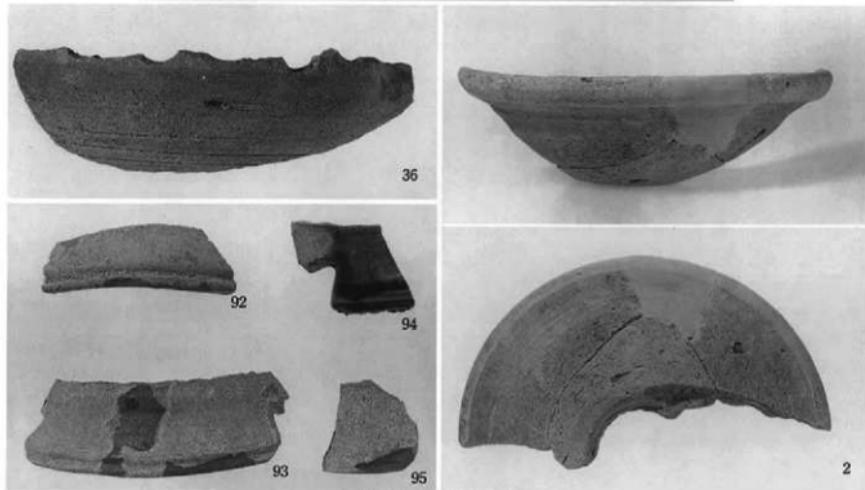
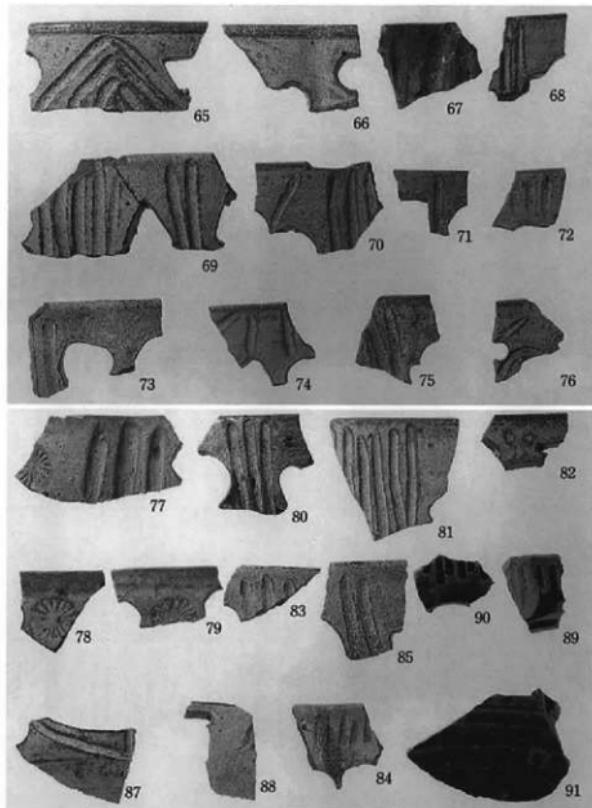
西物原包含层出土遗物⑤



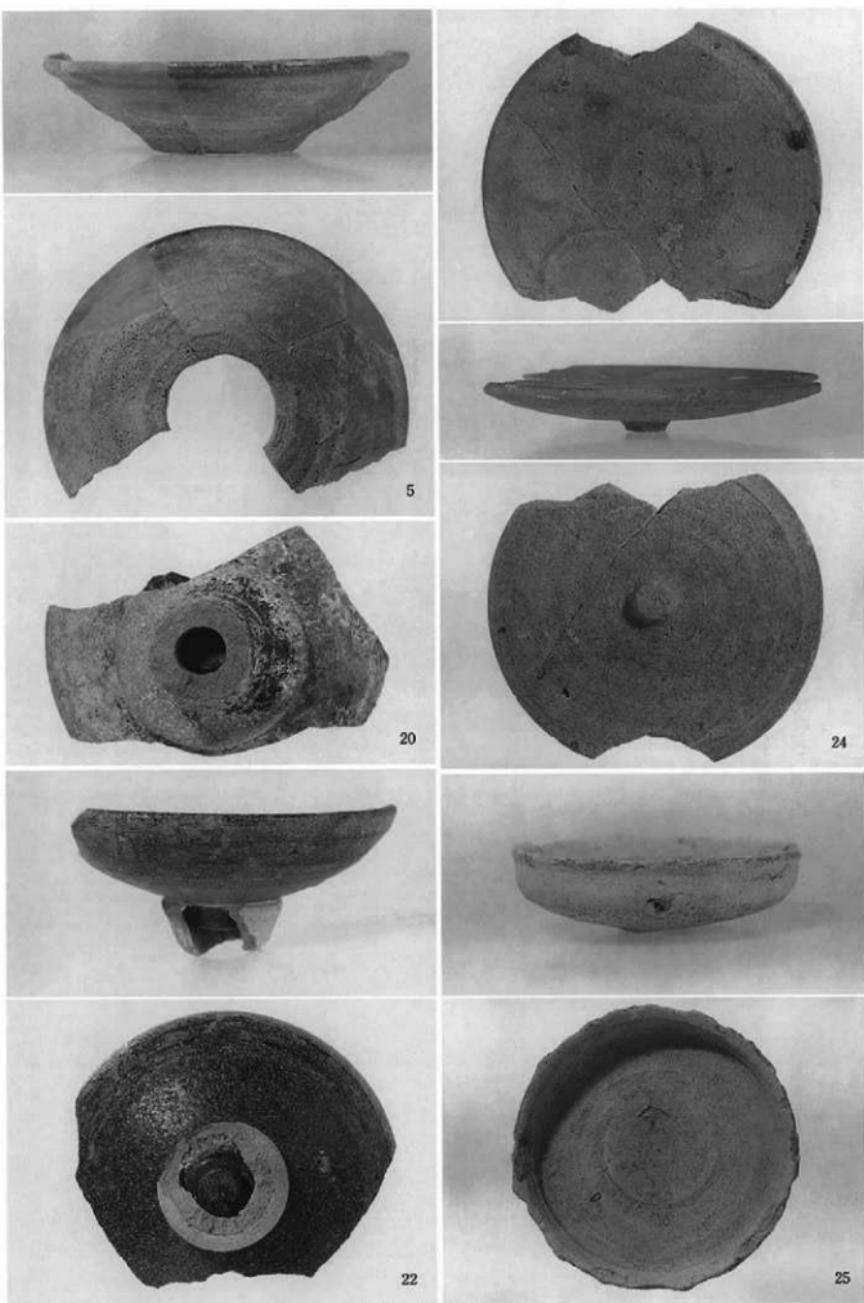
西物原包含层出土遗物⑥



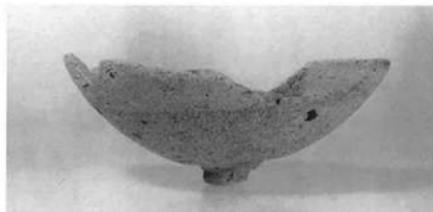
西物原包含層出土遺物⑦



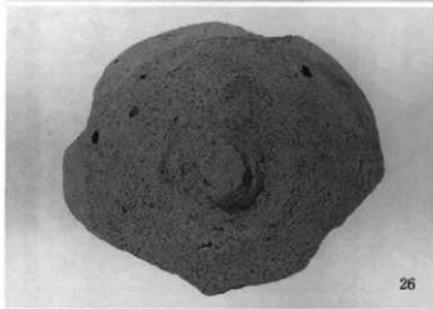
西汉原包含层出土遗物⑧



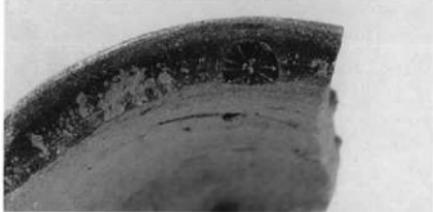
西物原包含層出土遺物⑨



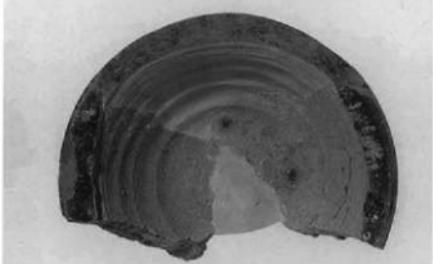
55



26



63



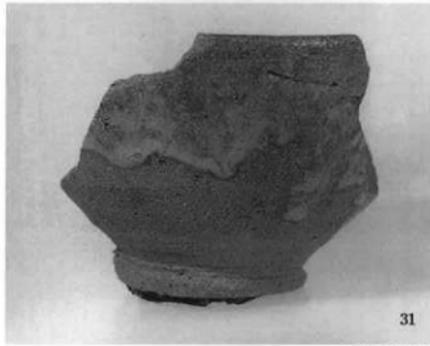
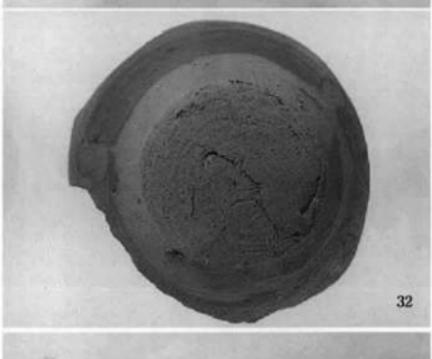
54



3



西物原包含層出土遺物①



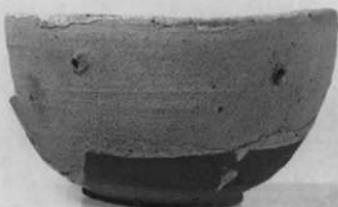
西物原包含層出土遺物⑫



37



43



39



44



40



45



41



50



42



54



65



67



79



81

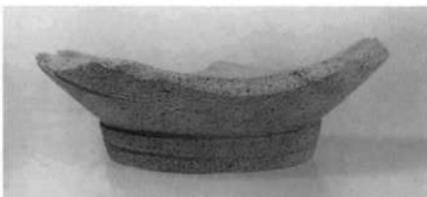


103

西物原包含层出土遗物①



102



104



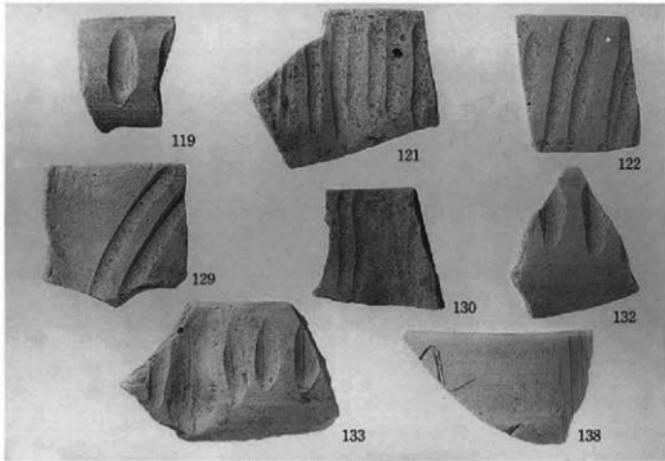
105



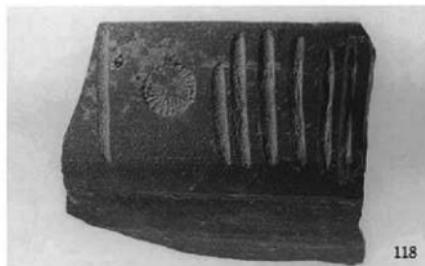
106



107



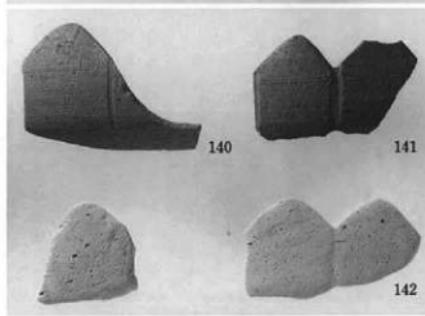
西物原包含層出土遺物⑩



118



12

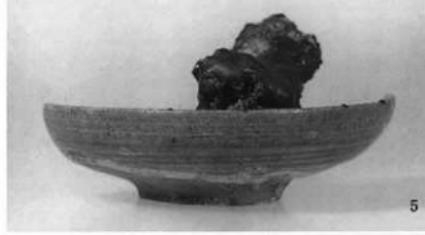


140

141



13



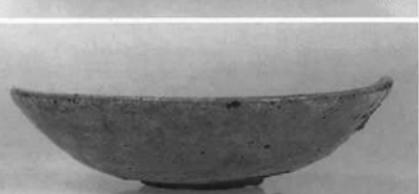
5



19



7



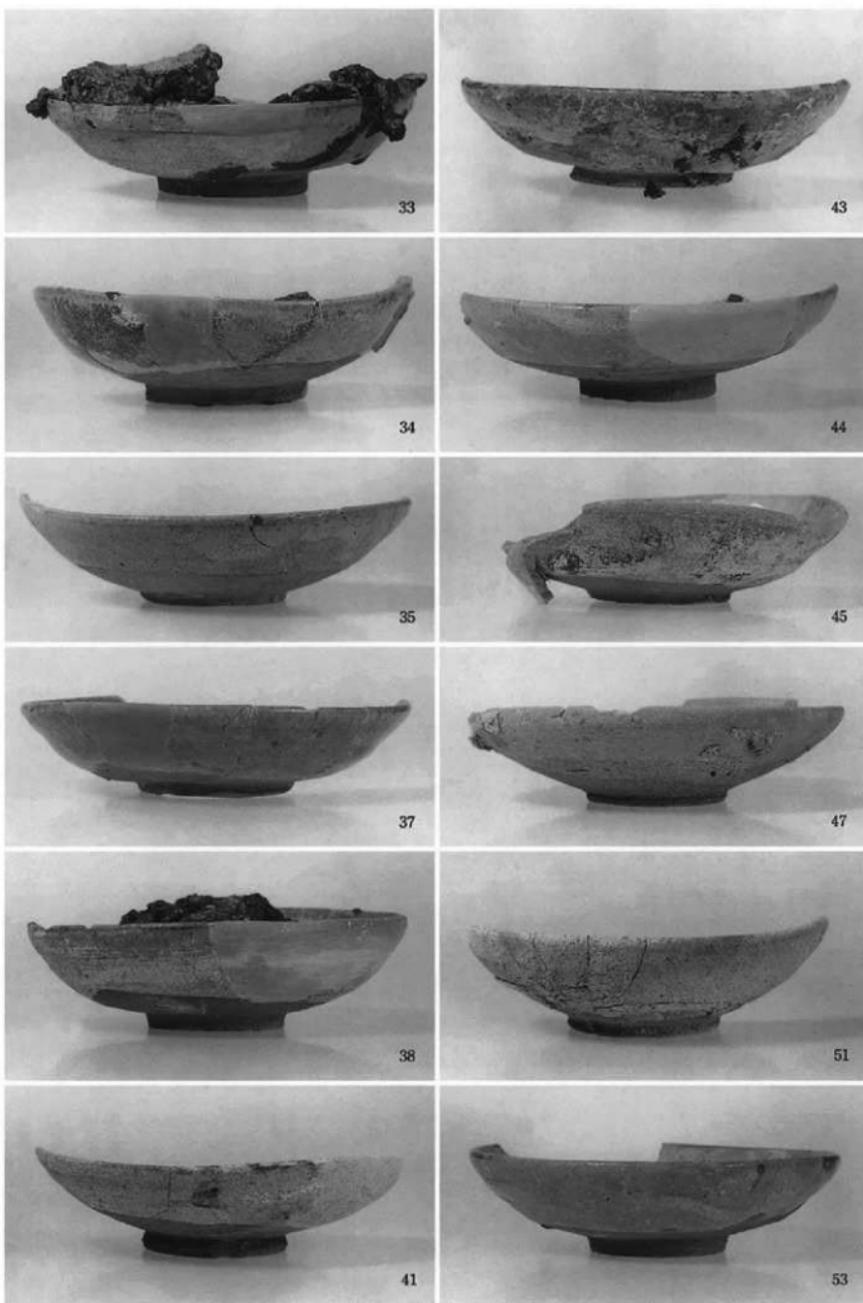
20



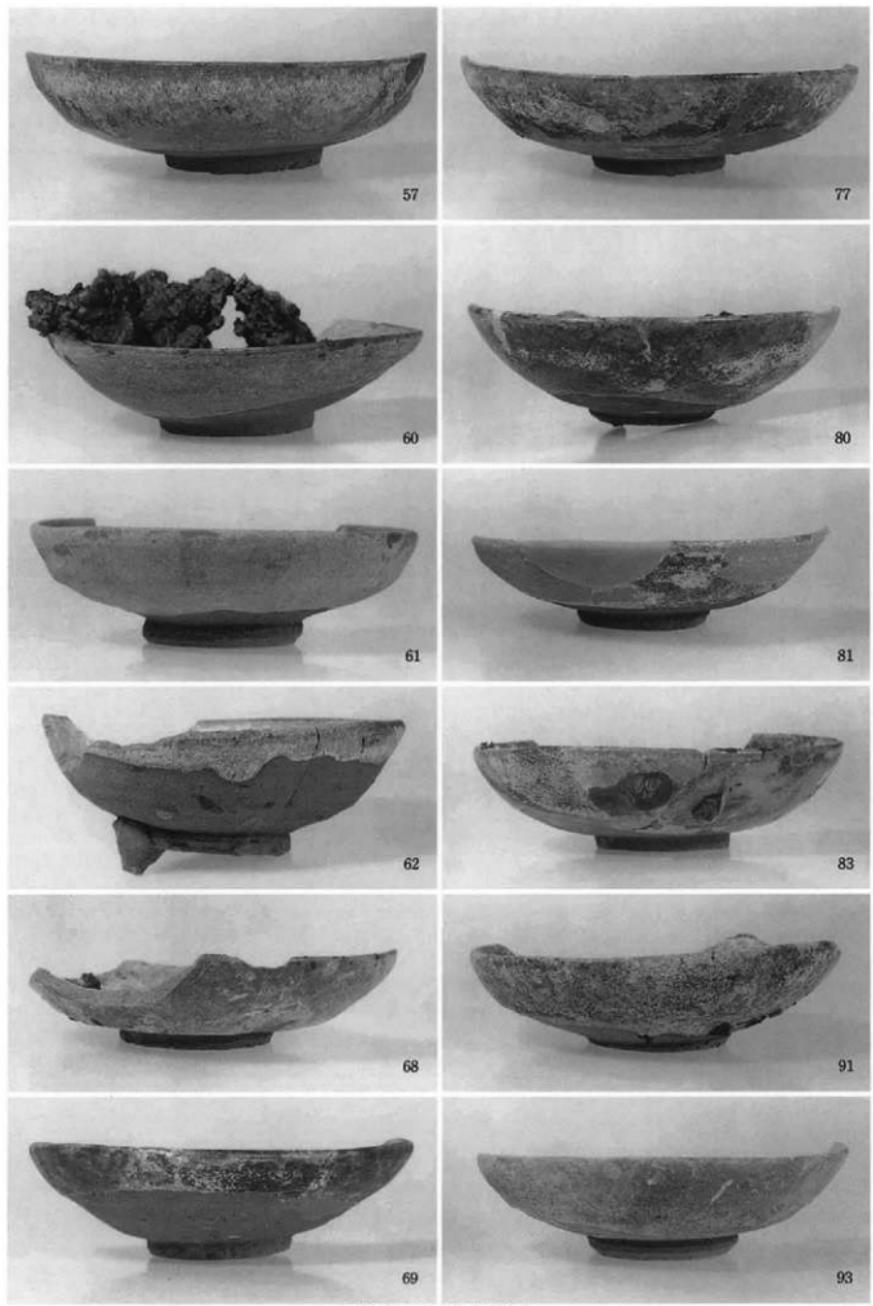
8



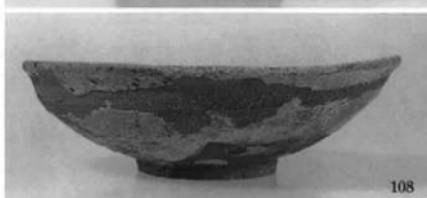
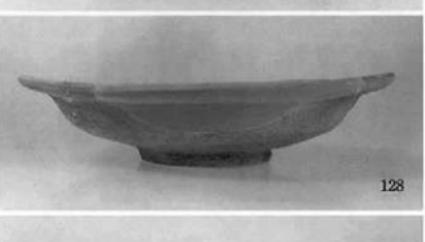
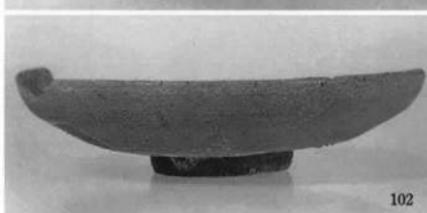
31



西物原包含層出土遺物②



西物原包含层出土遗物⑩





152



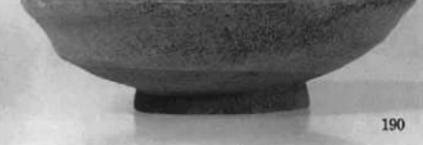
178



180



153



190



156



193



172



198



173



199



201



232



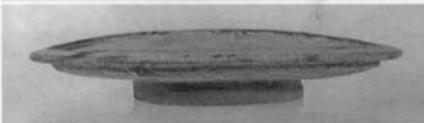
203



205



214



218



221



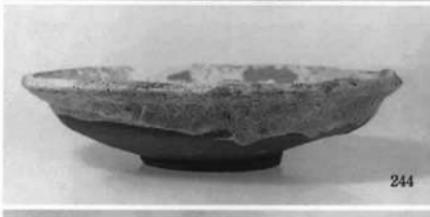
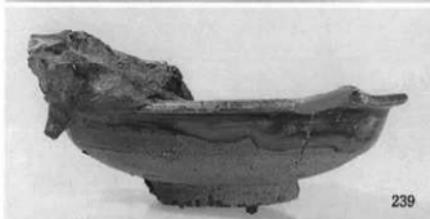
222

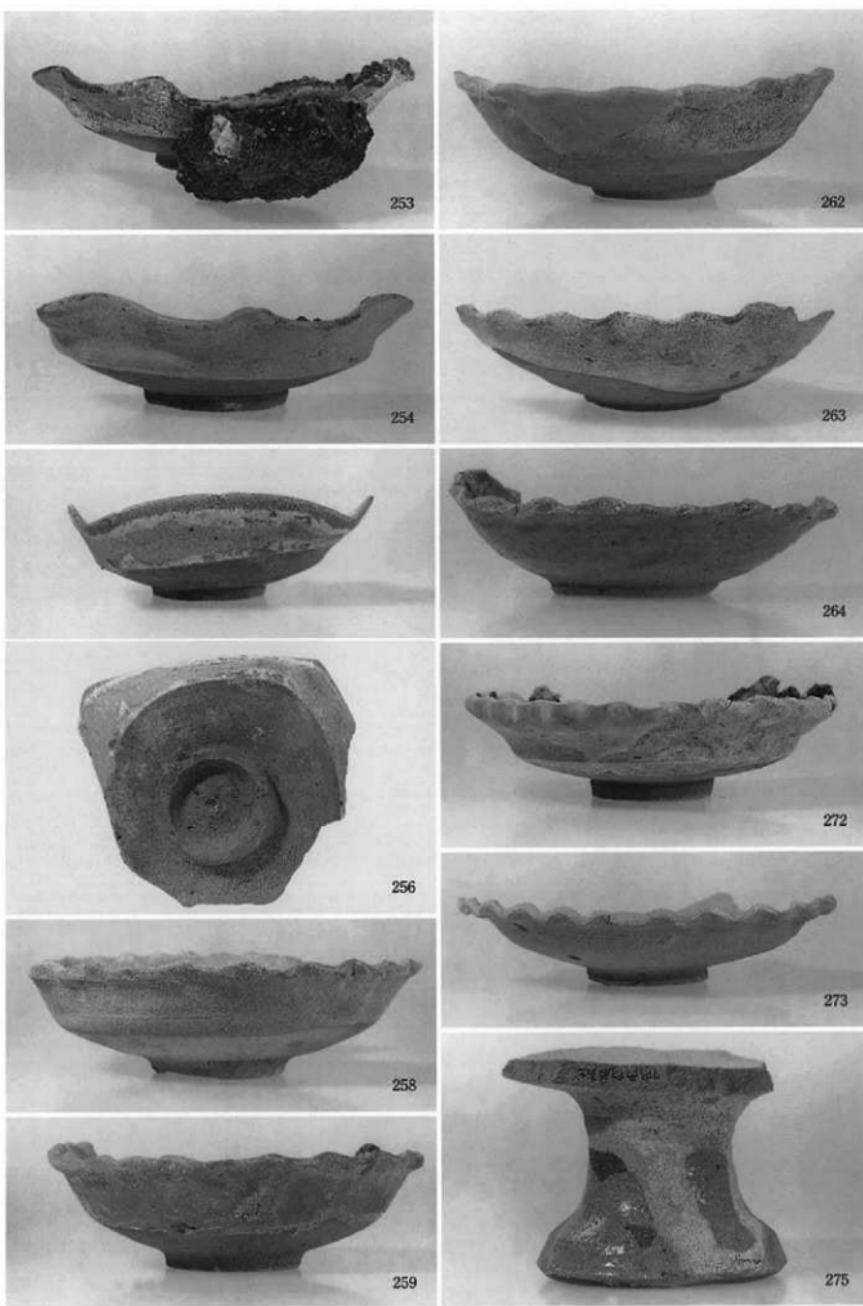


222

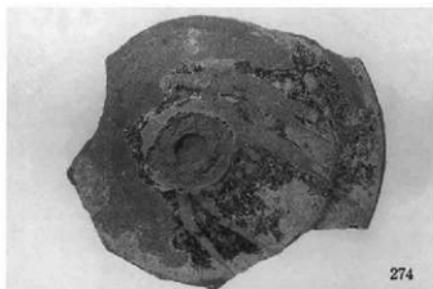


234

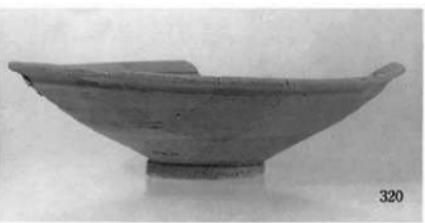




西物原包含層出土遺物③



274



320



284



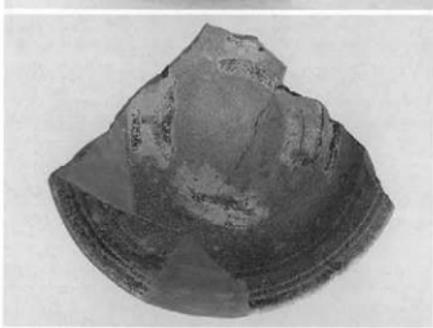
322



297



325



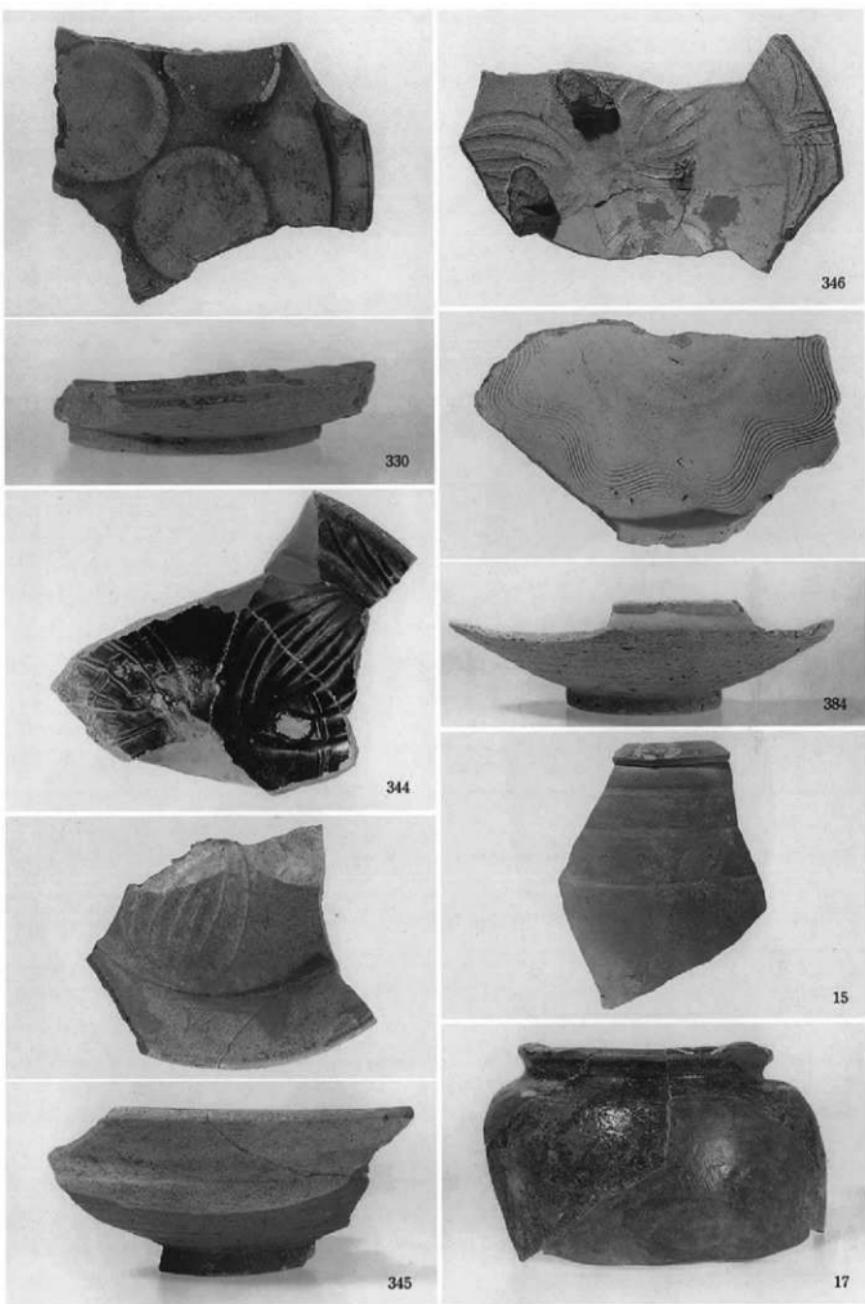
321



327



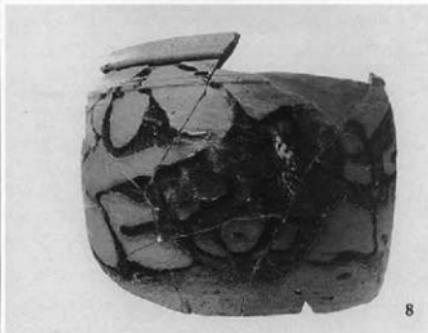
329



西物原包含層出土遺物②



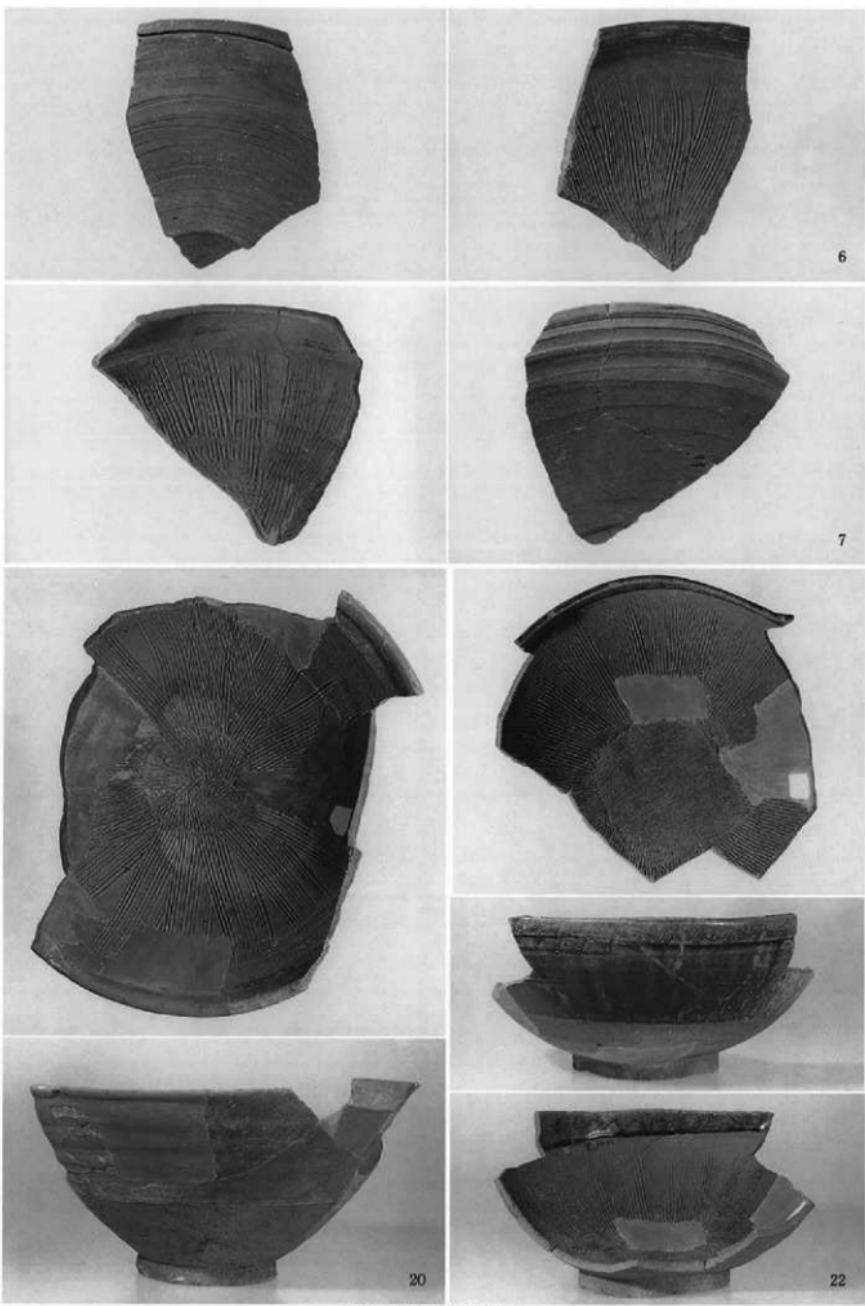
西物原包含層出土遺物⑧



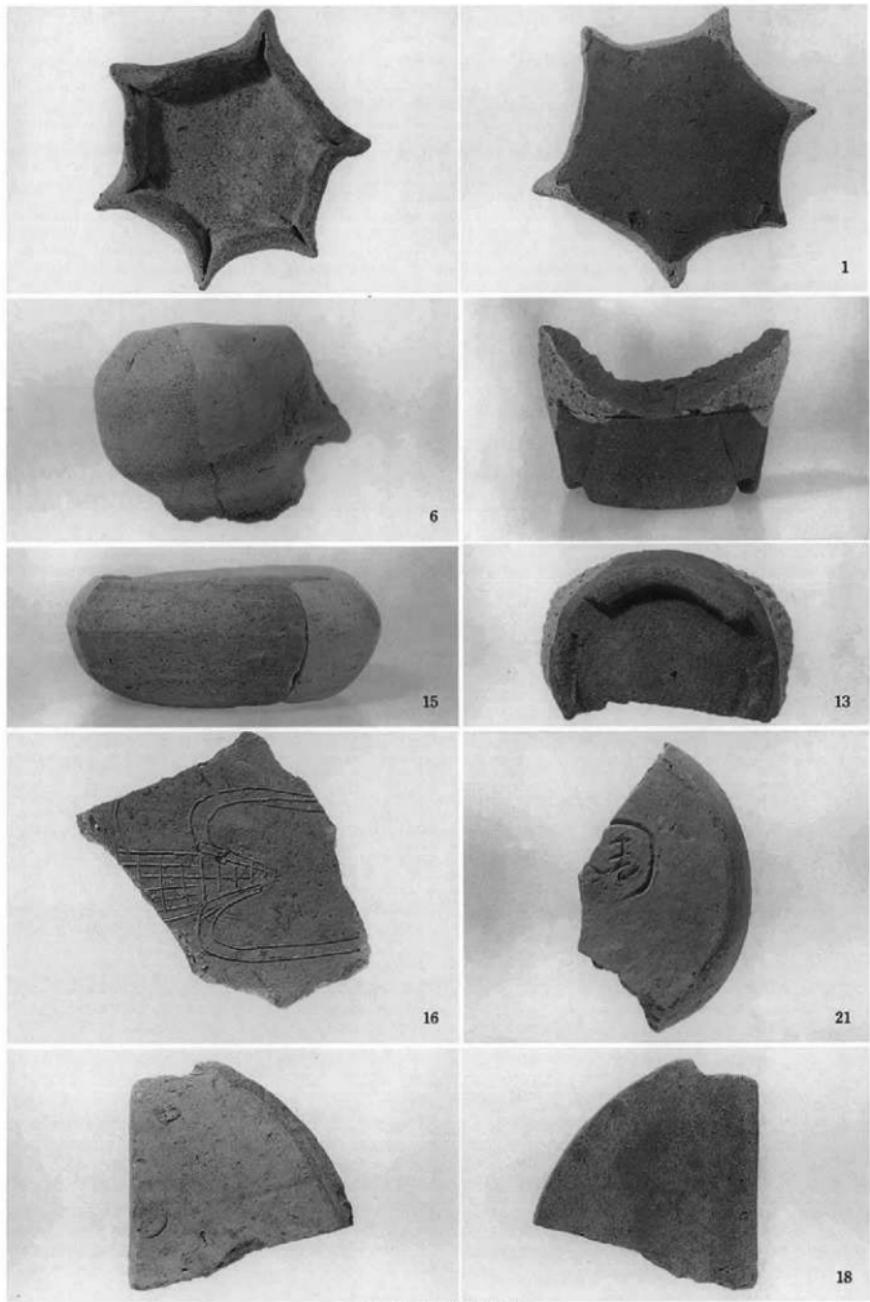
西物原包含層出土遺物②



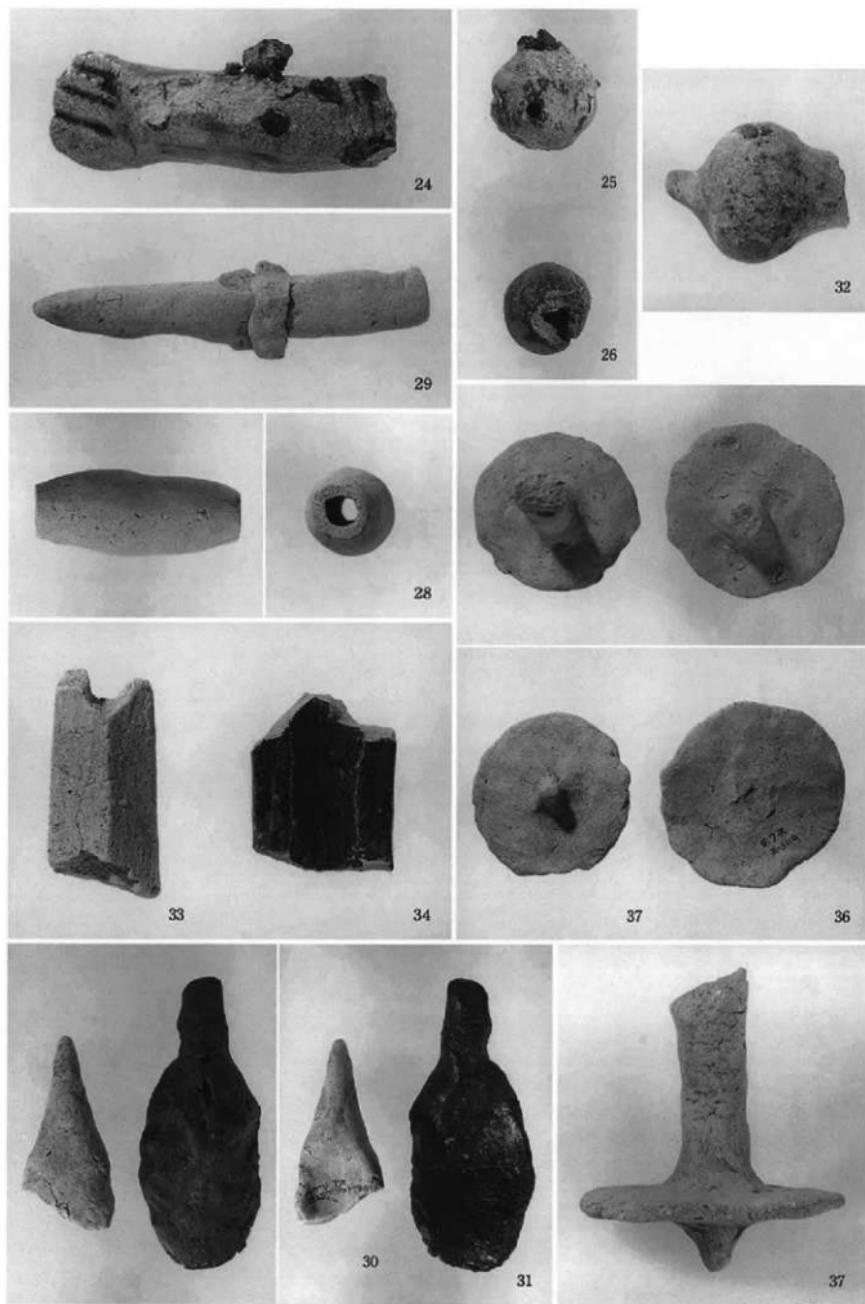
西物原包含層出土遺物②



西物原包含層出土遺物②



西周原包含层出土遗物③



西物原包含層出土遺物⑩



CD区土3-1



23



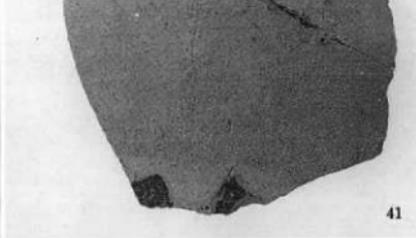
4



26



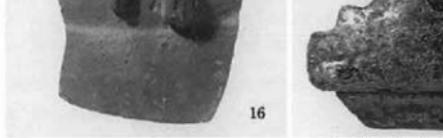
5



41



7



16



22

27



42



54



46



55

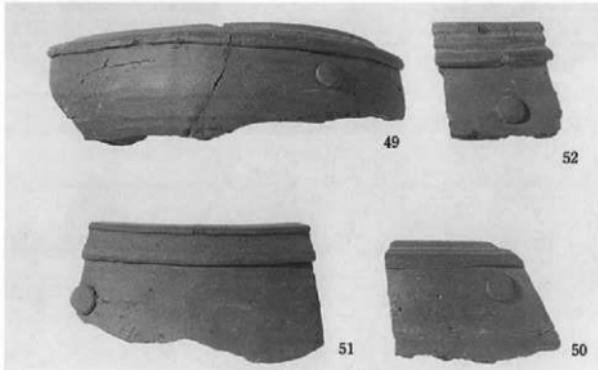
56



48



58



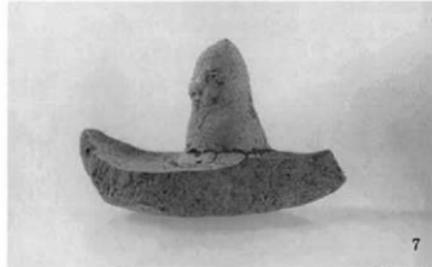
49

52

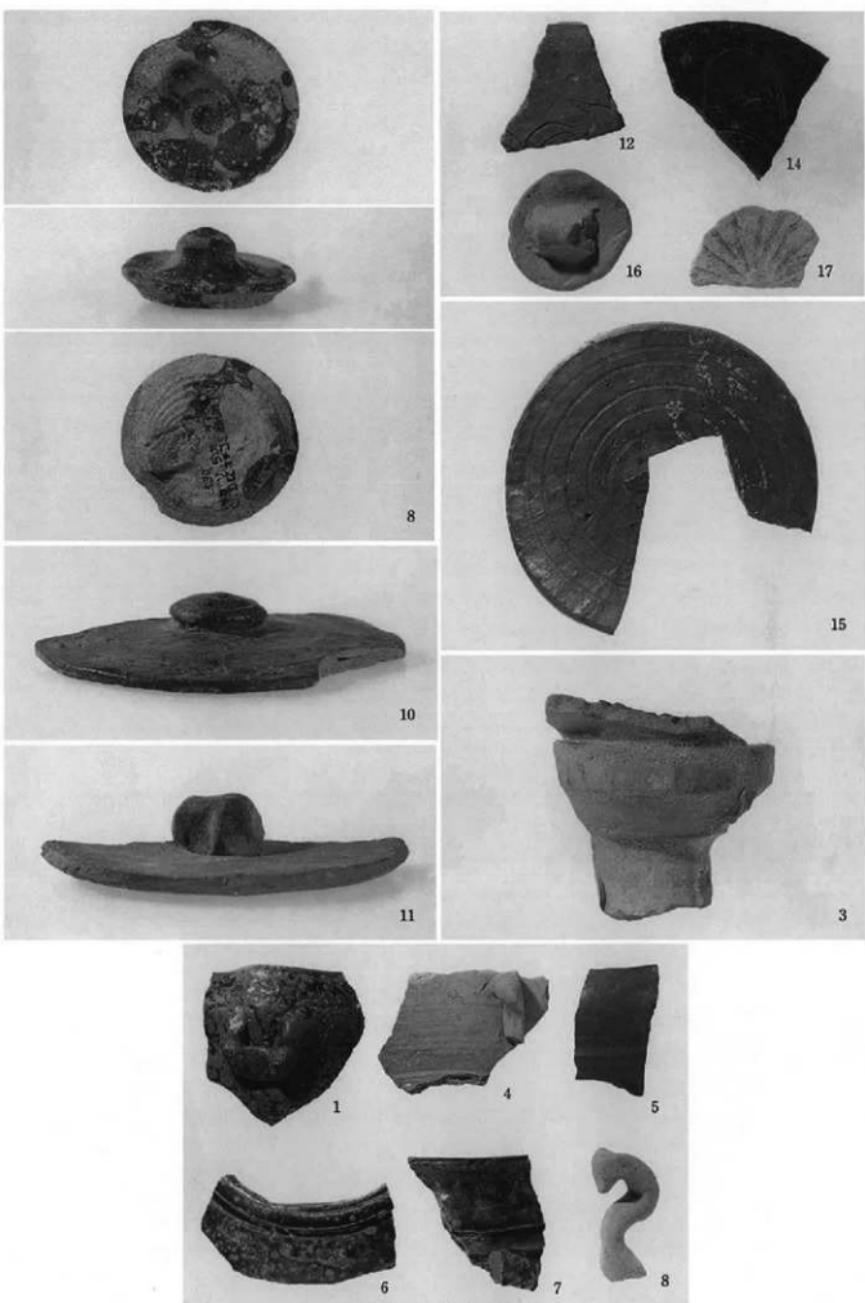
51

50

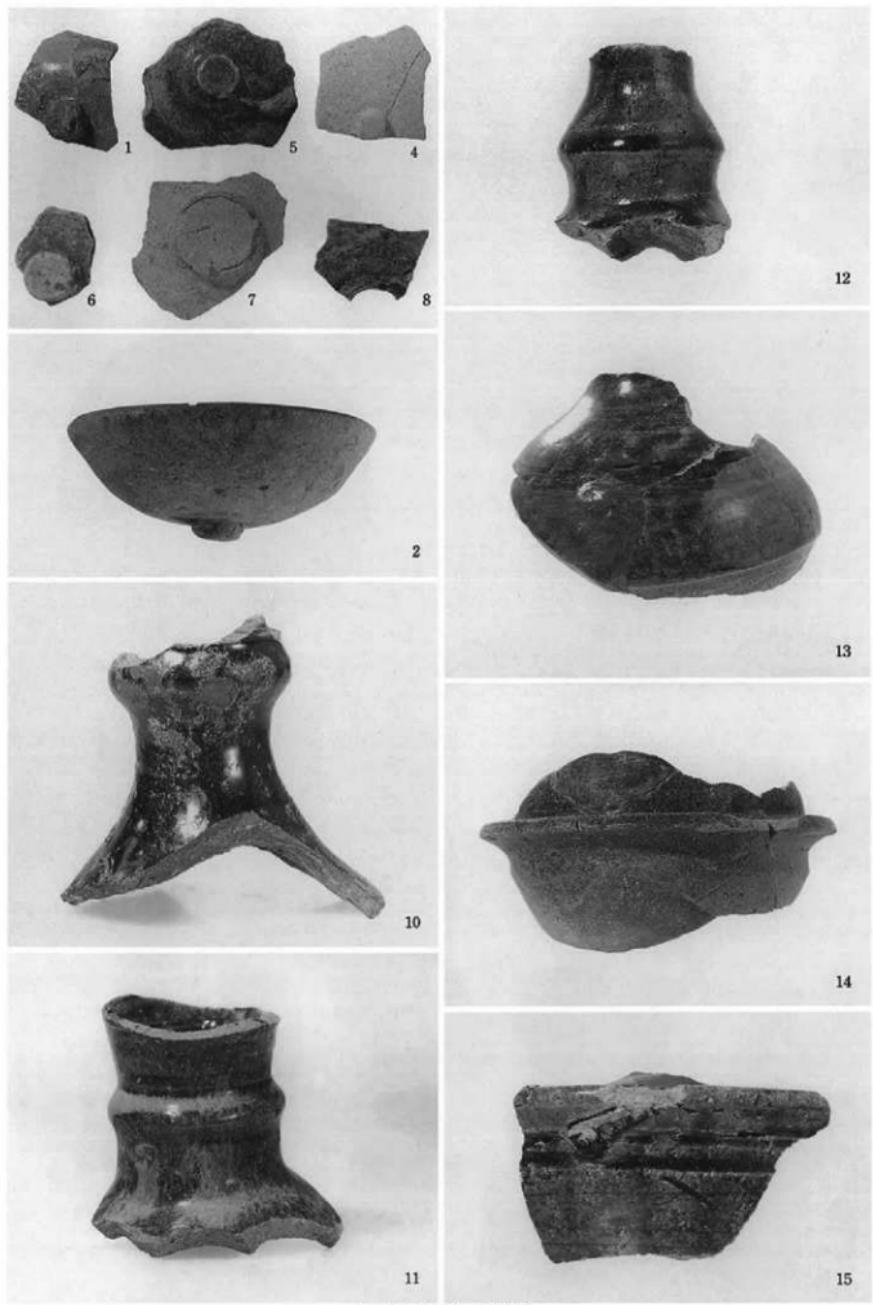
工房部包含層出土遺物②



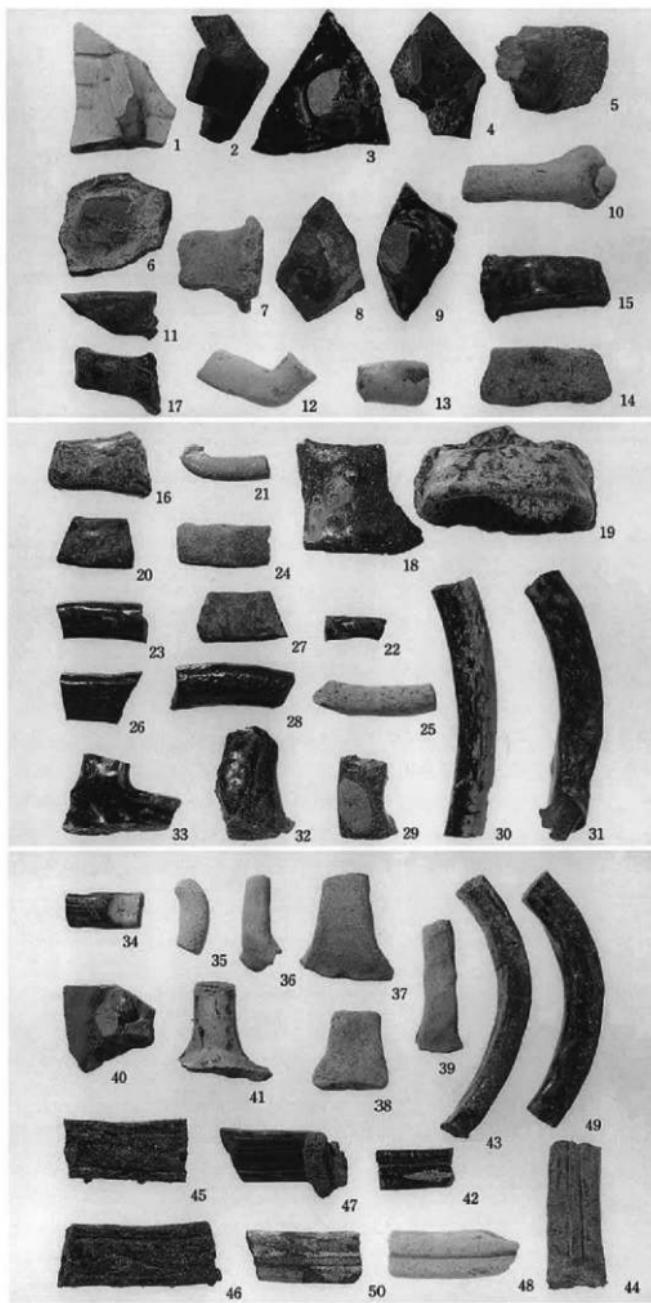
工房部包含层出土遗物③



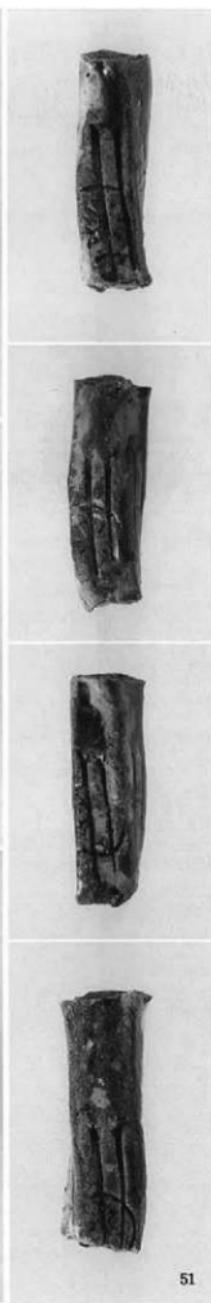
工房部包含層出土遺物④



工房部包含层出土遗物⑤



工房部包含層出土遺物⑥



51



工房部包含層出土遺物⑦



22



23



26



29



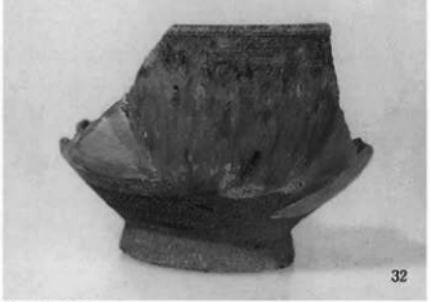
27



30



28



32

工房部包含層出土遺物⑧



35



40



36



41



38



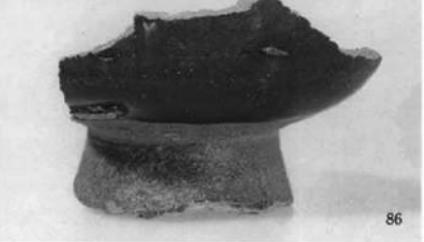
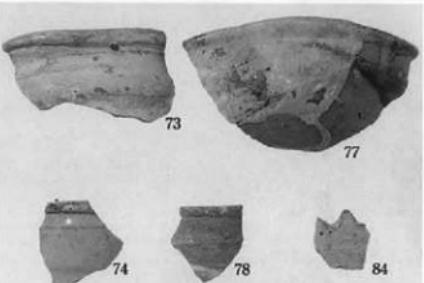
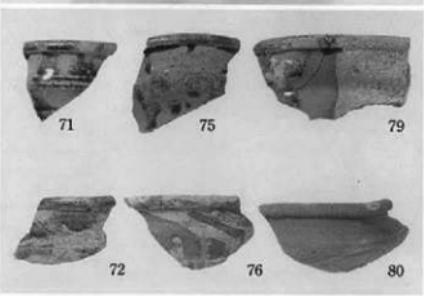
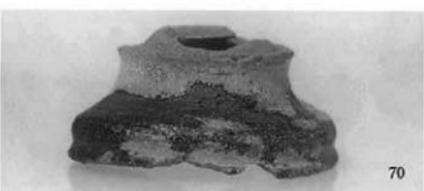
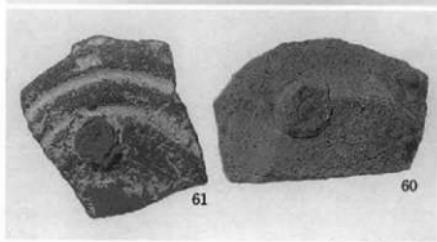
44



39



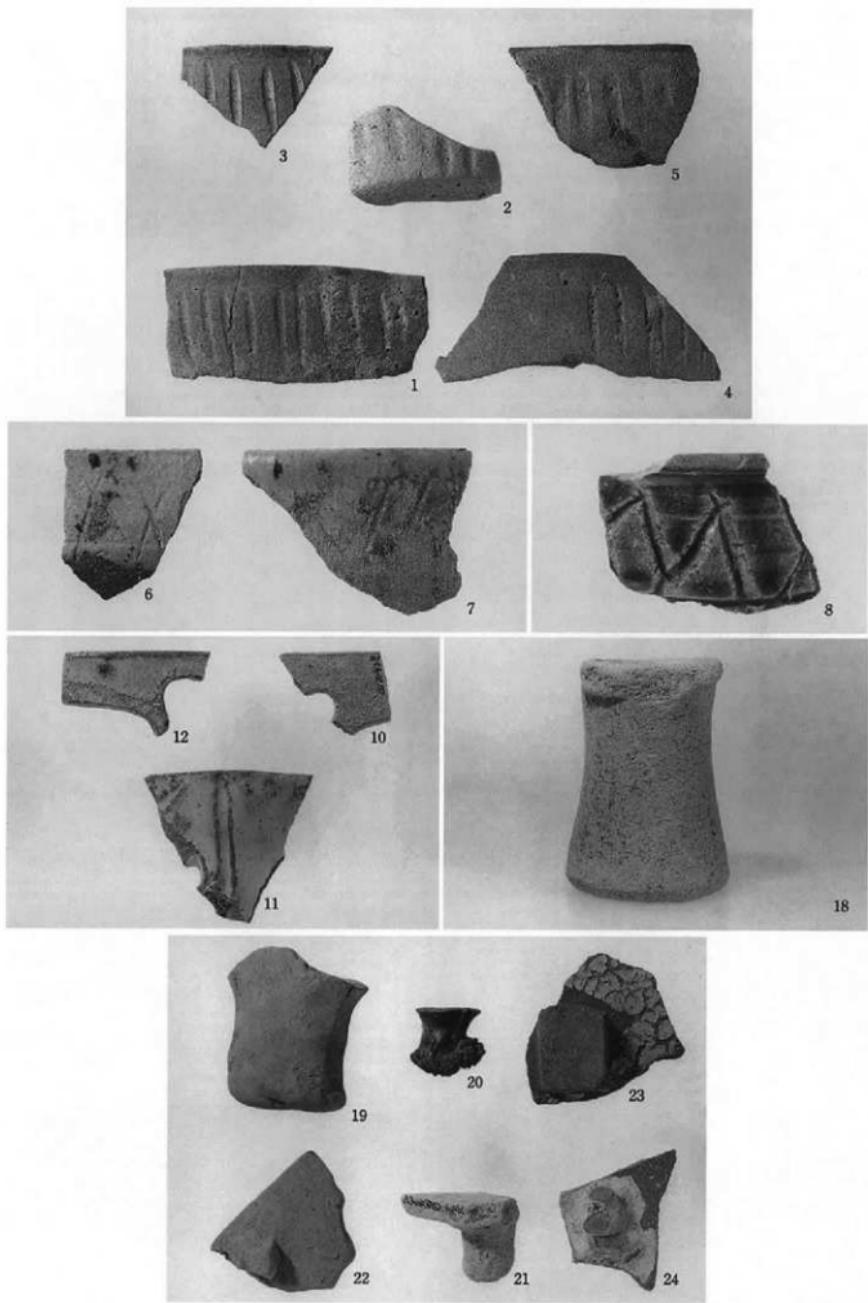
48



工房部包含層出土遺物①



工房部包含層出土遺物⑪



工房部包含層出土遺物⑫



4



5



7



1



2



3



7



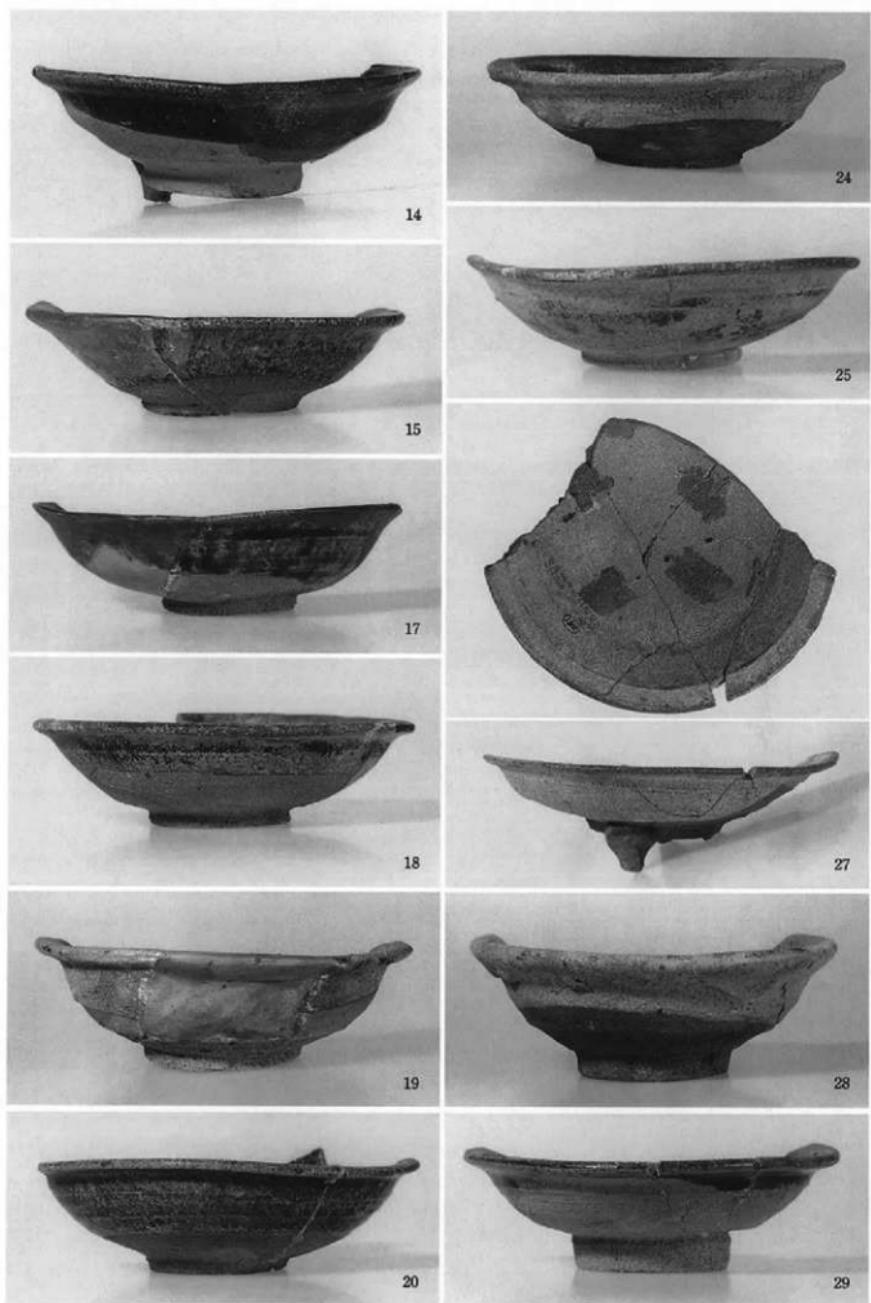
9



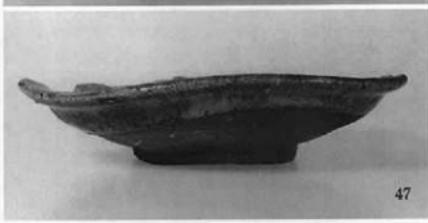
10

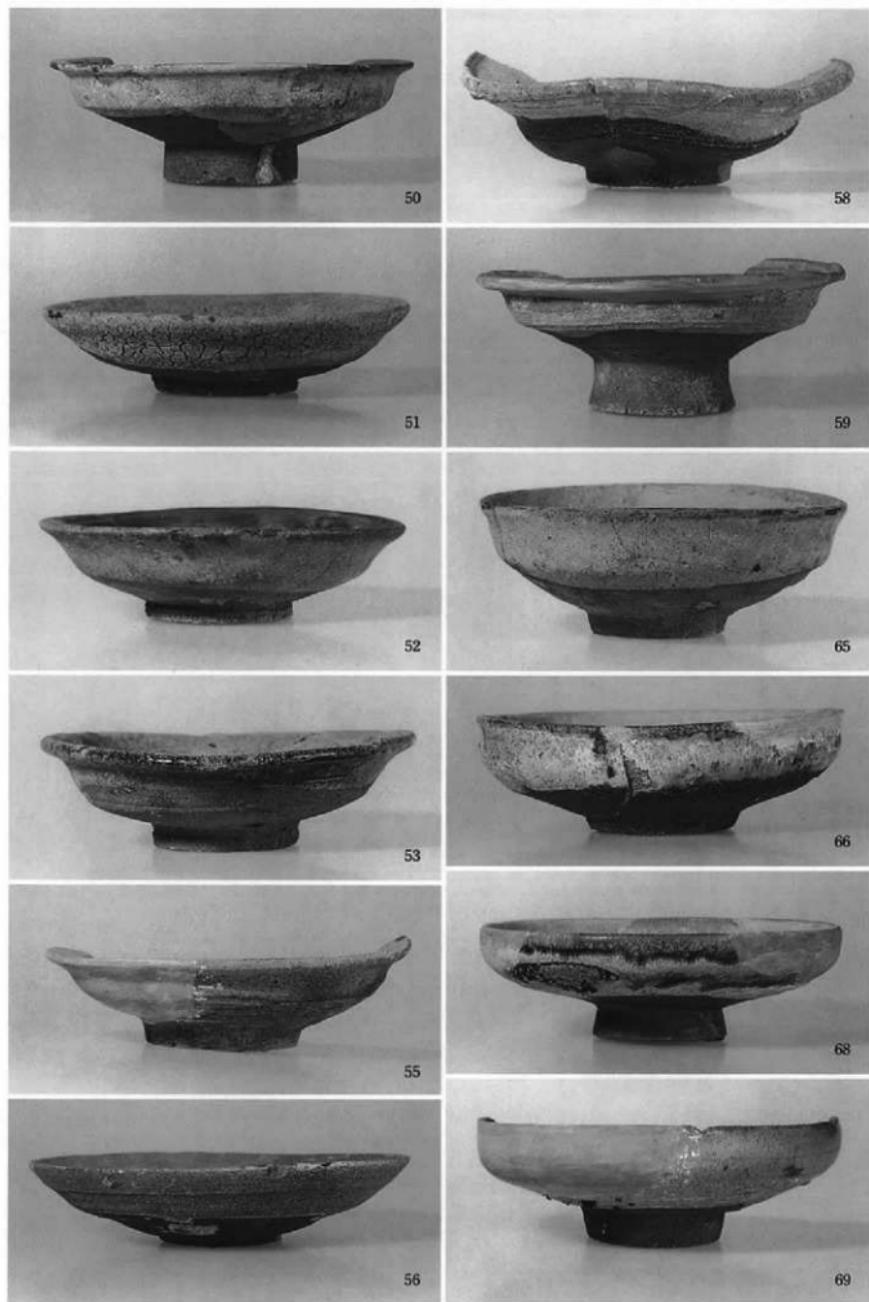


12



工房部包含層出土遺物⑩



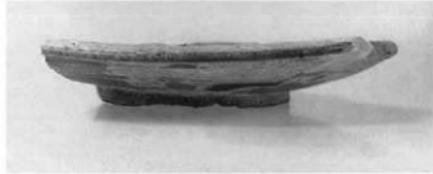




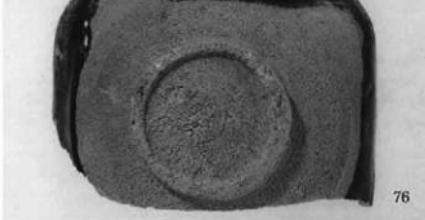
70



75



74



76



84



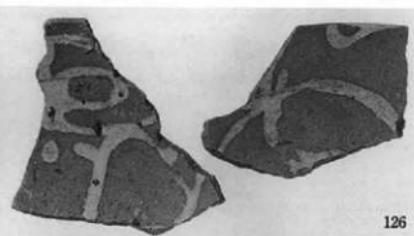
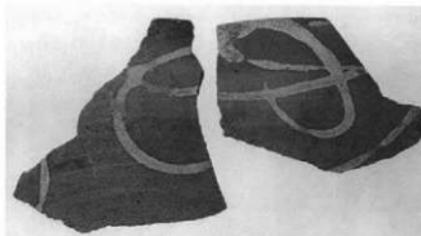
81



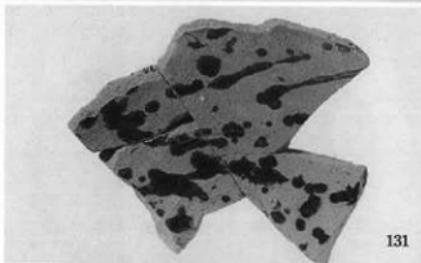
85



工房部包含層出土遺物⑩



126



131



132



133



134

工房部包含層出土遺物⑬

(Continued from previous page)

Figure 72, Plate 135: A large, round, black pottery vessel with a textured surface.

135

Figure 72, Plate 136: A large, round, black pottery vessel with a textured surface.

126

Figure 72, Plate 137: A large, round, black pottery vessel with a textured surface.

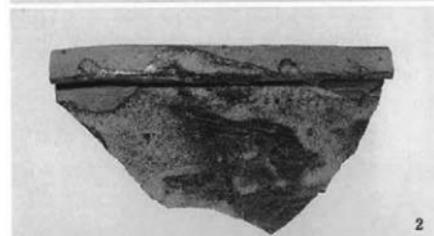
137

Figure 72, Plate 138: A large, round, black pottery vessel with a textured surface.

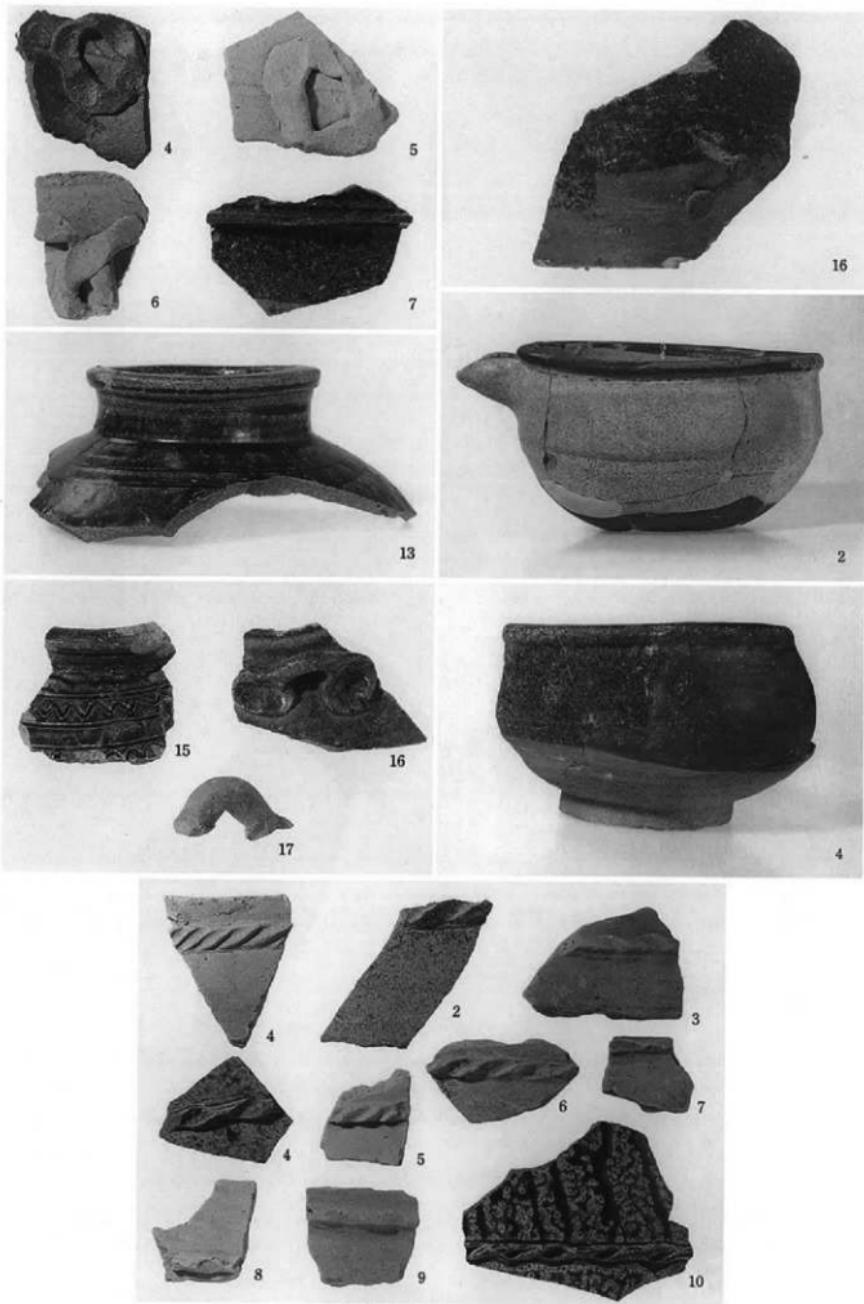
138

Figure 72, Plate 139: A large, round, black pottery vessel with a textured surface.

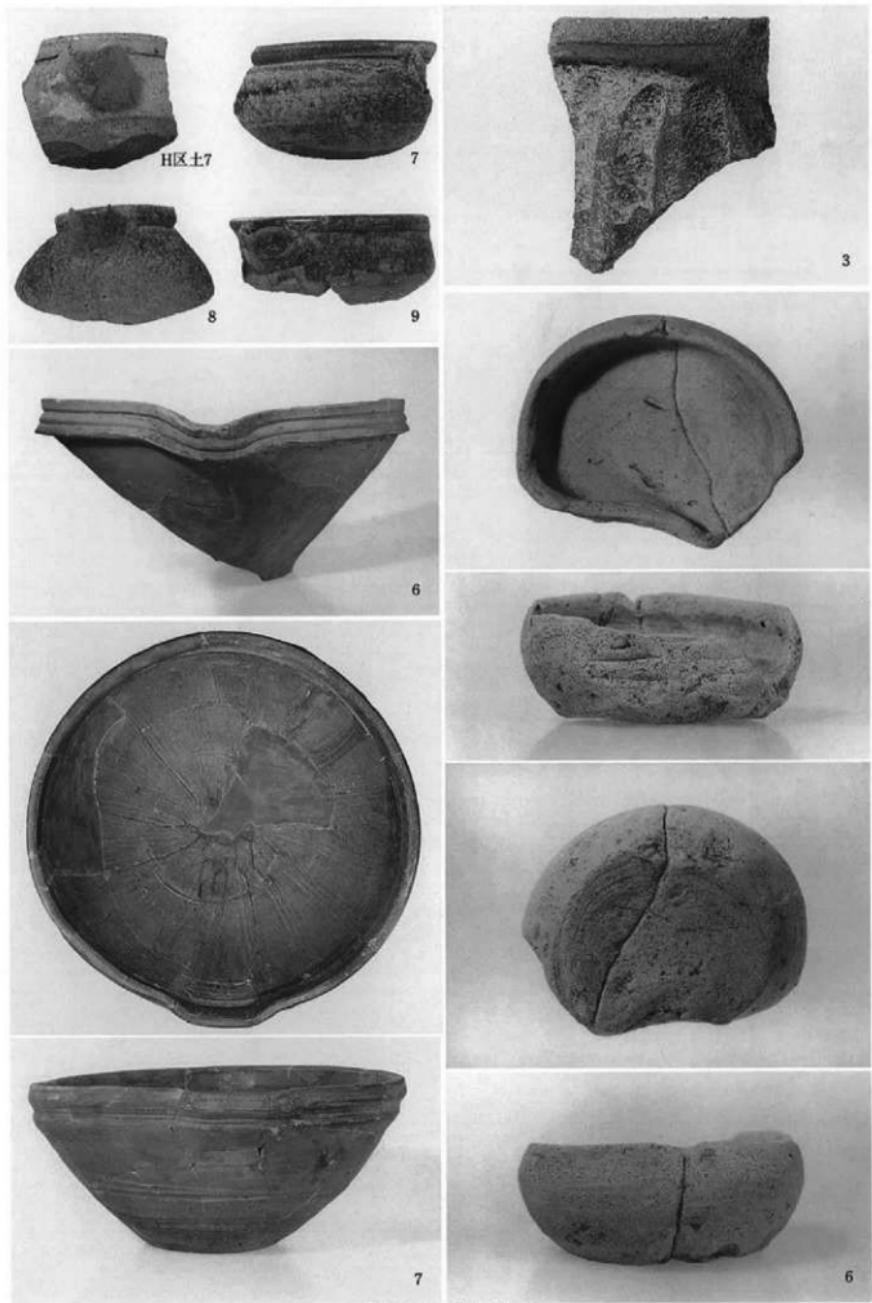
139



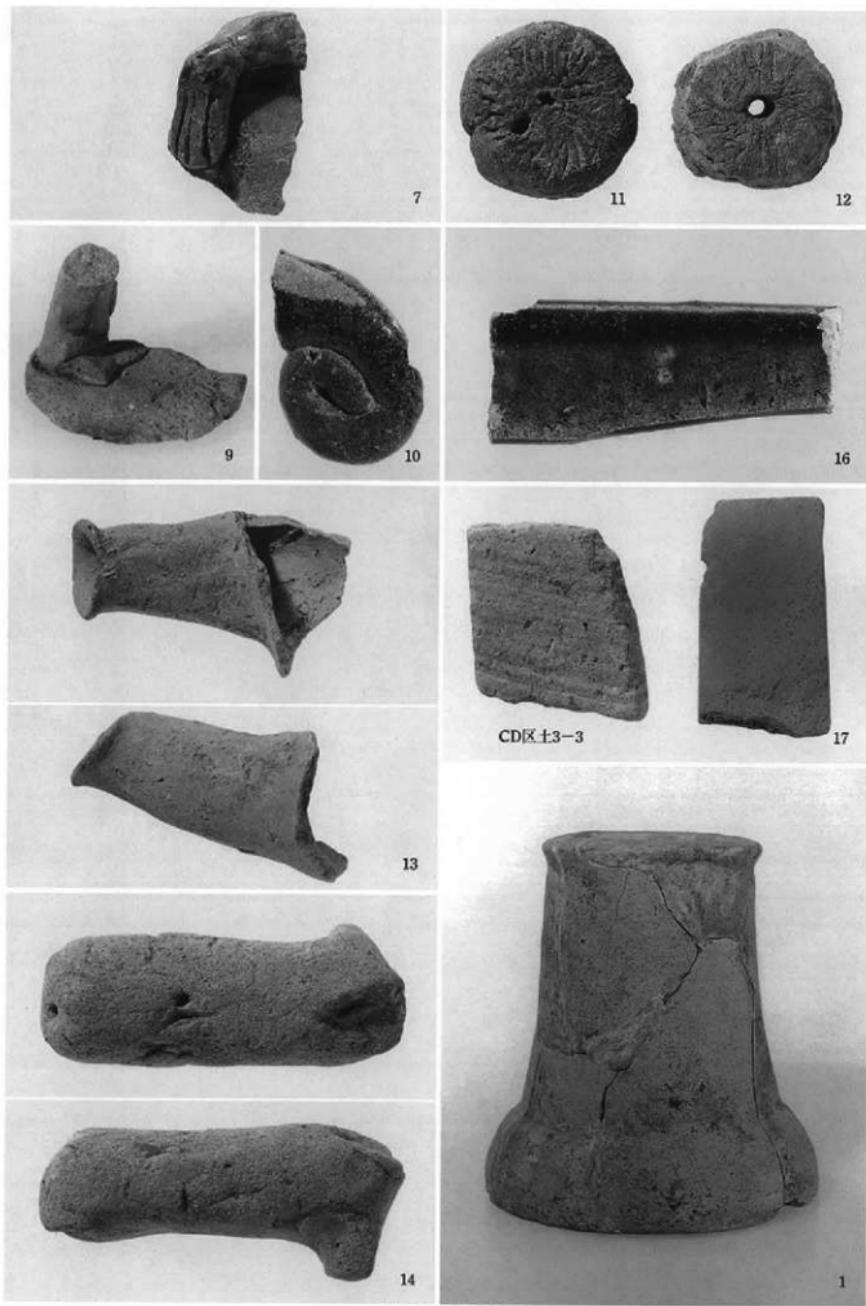
工房部包含層出土遺物②



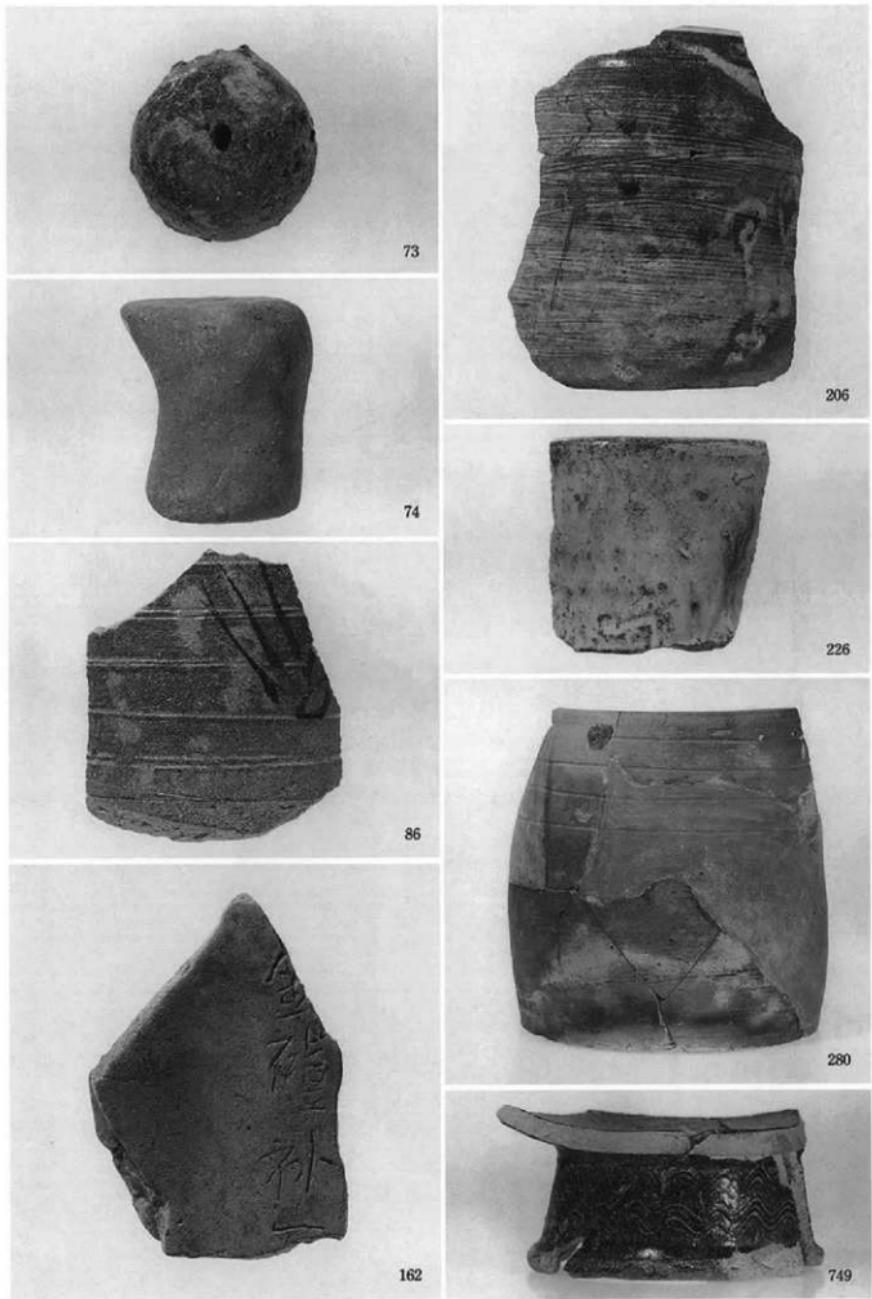
工房部包含層出土遺物②



工房部包含層出土遺物②



工房部包含層出土遺物③



工房部土壤・包含層出土遺物（「内ヶ磯窯跡1」掲載分補遺）①



685



704



703



705



1252

工房部包含層出土遺物（「内ヶ磯窯跡1」掲載分補遺）②

報告書抄録

ふりがな	うちがそかまあと2							
書名	内ヶ磯窯跡2							
副書名	福智山ダム建設に伴う福岡県直方市大字頬野所在近世窯跡の調査							
巻次								
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第170集							
編著者名	岸本圭・大庭孝夫							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡市博多区東公園7番7号							
発行年月日	西暦2002年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
内ヶ磯窯跡	福岡県直方市 大字頬野 字二ノ瀬・ 字下久保・ 字白斐瀬	402044	50118	33°45'10"	130°47'8"	1998.5.12 1999.3.19	3,000	福智山 ダム建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
内ヶ磯窯跡	窯跡	江戸時代	土壤14基	陶器	古高取窯跡			

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2 1 1 4 1 0 7
登録年度 13	登録番号 8

内ヶ磯窯跡2

福岡県文化財調査報告書 第170集

平成14年3月29日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 (株)西日本新聞印刷
福岡市中央区天神1丁目4番1号